大宰府史跡

平成6年度発掘調査概報

平成7年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

平成6年度発掘調査概報

平成7年3月

九州歴史資料館

(1) 第160次調査SK4141出土海獣葡萄鏡

(2) 同　　丹塗土器

序

大宰府史跡発掘調査の第５次５ヶ年計画では、特別史跡水城跡の諸施設の解明を大きな目標としているが、第３年度を終了した今日まで水城跡の発掘調査の進捗状況は当初の計画より大幅に遅れている。

この原因は、大宰府政庁前面官衙域での調査に手をとられたことが大きい。

大宰府政庁前面の官衙域の発掘調査を実施している地区は、太宰府市が実施した観世音寺地区土地区画整理事業地内であり、区画整理事業の終了とともに新しい町並みとして景観が整いつつある地区である。この地区に特別史跡大宰府関連の遺構の所在が過去の発掘調査によって確認されている以上、この地区の発掘調査を今実施することが必要であり、やむを得ない状況がある。

特別史跡水城跡の発掘調査を第５次５ヶ年計画の残り2ヶ年でどこまで実施できるかは問題であるが、水城跡の指定域の拡張計画もあり、当初に目標として掲げた調査を一つでも多く実現する意気込みでこれにあたりたい。

大宰府政庁前面域の発掘調査では、第160次調査として実施した蔵司西地区で、銅鏡や鋳造関係の遺構・遺物が発見されて注意をひいた。平地の発掘調査での銅鏡の出土は珍しいことである。この付近には「匠司（たくみのつかさ）」と呼んでいたという地名伝承もあり、これとの関係も予想させる。今後に、この発掘調査地区周辺での調査成果が期待される。

本年度の発掘調査の全般にわたって、大宰府史跡調査研究指導委員、文化庁の関係者各位には様々な御指導と御援助を頂いた。水城跡の調査については、佐賀大学教授林重徳氏を中心とする研究室各位などの御支援があった。また、第160次調査の鋳造遺物については、九州造形短大講師遠藤喜代志氏に現地調査を頂き、御教示を得た。さらに、太宰府市教育委員会をはじめ地元住民の方々には種々の御協力を頂いた。ここに深甚の謝意を表する次第である。

平成７年３月31日

九州歴史資料館長　吉久　勝美

例　言

1．本書は平成６年度に福岡県が国庫補助を受けて、九州歴史資料館が発掘調査を実施した大宰府史跡発掘調査の概要報告であり、大宰府史跡第153次・154次・156次・157次・159次・160次・162次の調査を掲載した。

なお、第158・161・168次調査については、顕著な遺構が検出されなかったので報告を割愛した。また、第163・164・165・166・167次調査については現在整理中であり、報告については次年度に譲る。さらに、水城跡第26次調査は現在調査継続中であり、次年度の報告とする。

2．遺構実測図は、国土調査法第II座標系をもとに基準点を設け作成した（昭和51年度発掘調査概報参照）。

3．検出遺構及び出土遺物については、大宰府史跡調査研究指導委員の御指導と御教示を得た。

4．第160次調査で出土した鋳造関係の遺構・遺物については、九州造形短大講師遠藤喜代志氏に現地調査と出土遺物の調査を頂き示唆を得た。

5．本文中の挿図は土器・陶磁器類を３分の１、瓦塼類は４分の1の縮尺を原則としている。

6．本書掲載の写真は学芸第一課石丸洋の撮影による。

7．本書の執筆・編集は調査課栗原和彦・横田賢次郎・小田和利・吉村靖徳・小川泰樹による。掲載図面の製図には、小田美和・今井涼子の助力を得た。また、遺物の復元整理作業は大宰府史跡坂本発掘調査事務所において行い、田崎道子・大田千賀子・中田千枝子・市川千香枝の協力を得た。

目　次

I　はじめに ……1
　1　調査計画 ……1
　2　調査経過 ……2
II　発掘調査 ……7
　1　第153次調査 ……7
　　検出遺構 ……7
　　出土遺物……10
　　小　結……23
　2　第154次調査 ……25
　　検出遺構……25
　　出土遺物……26
　　小　結……32
　3　第156次調査……33
　　検出遺構……33
　　出土遺物……34
　　小　結……39
　4　第157次調査 ……40
　　検出遺構……40
　　出土遺物……41
　　小　結……45
　5　第159次調査 ……46
　　検出遺構……46
　　出土遺物……47
　　小　結……50
　6　第160次調査 ……51
　　検出遺構……51
　　出土遺物……55
　　小　結……81
　7　第162次調査 ……85
　　検出遺構……85
　　出土遺物……86
　　小　結……87

挿　図　目　次

第１図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込
第２図　水城跡発掘調査地域図……折込
第３図　第153次調査遺構配置図……8
第４図　SB4080・4085柱掘形断面図……9
第５図　SB2240、SA4085、SD2284・4081、SK4082・4084出土土器実測図……11
第６図　SX4087・4092・4093出土土器・陶磁器・土製品実測図……13
第７図　暗褐色土層・灰褐色土層・茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図……14
第８図　軒丸・軒平瓦拓影実測図……15
第９図　文字瓦拓影実測図……16
第10図　丸瓦拓影実測図（1）……18
第11図　丸瓦拓影実測図（2）……20
第12図　丸瓦拓影実測図（3）……21
第13図　丸瓦拓影実測図（4）……22
第14図　日吉地区官衙主要遺構配置図……24
第15図　第154次調査遺構配置図……25
第16図　SD3300出土土器実測図（1）……27
第17図　SD3300出土土器・陶磁器実測図（2）……28
第18図　SK4098、SX4099、暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図……29
第19図　軒丸瓦拓影実測図……30
第20図　出土銅銭・石製品・土製品実測図……31
第21図　第156次調査遺構配置図……折込
第22図　SK4111、SX4115、黄色土層出土土器・陶磁器実測図……34
第23図　軒丸瓦拓影実測図……35
第24図　軒平瓦拓影実測図……37
第25図　第157次調査遺構配置図……折込
第26図　SD4118・4123、SK4120・4129、SX4122、黄褐色土層、床土出土土器・陶磁器実測図……42
第27図　軒丸瓦・丸瓦・平瓦拓影実測図……44
第28図　第159次調査遺構配置図……46
第29図　SB4135柱掘形断面図……47
第30図　SB4135、SK4132・4138、SX4133・4137・4140、黄茶色土層、黄色土層出土土器・陶磁器・石製品実測図……48

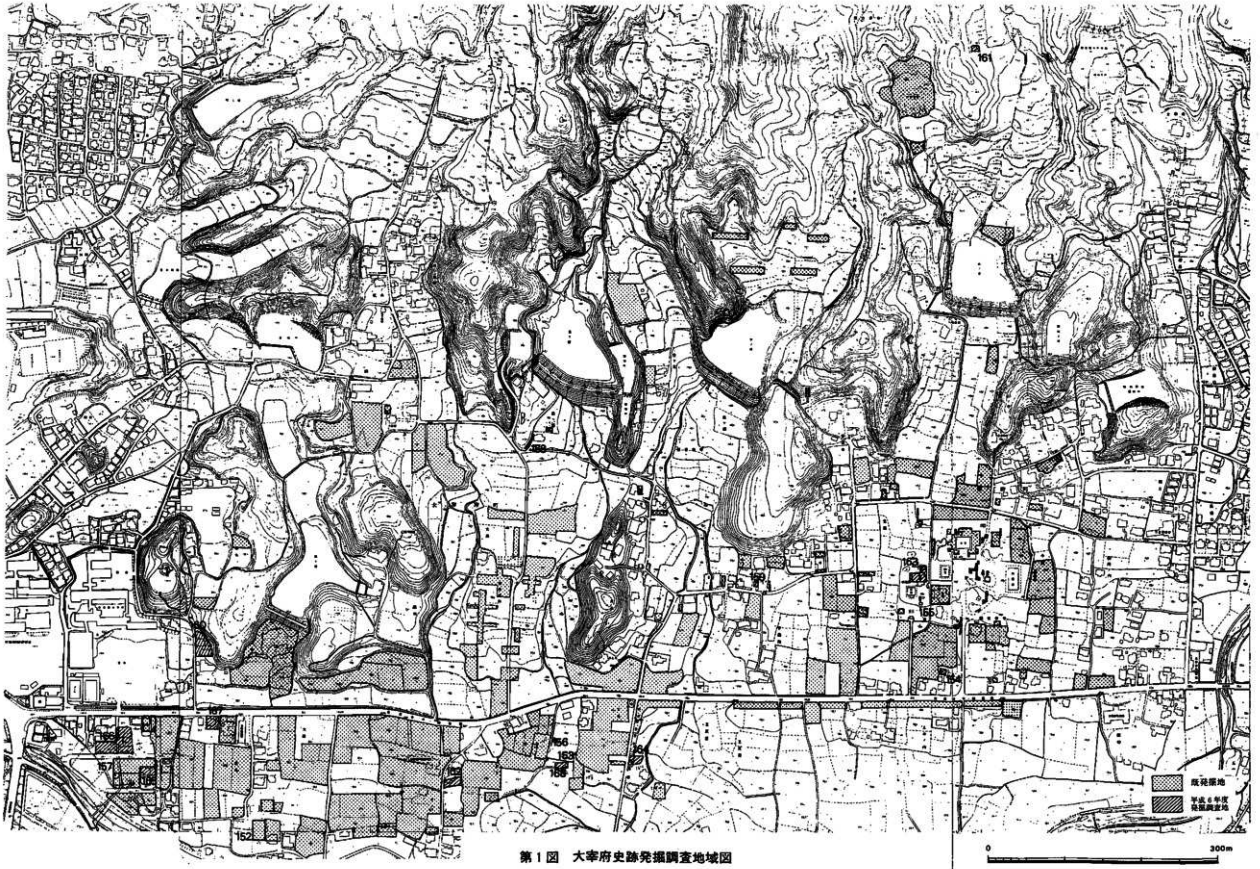
第31図　文字瓦拓影実測図……50
第32図　第160次調査遺構配置図 ……折込
第33図　SB4150・4155・4160・4165柱掘形断面図 ……52
第34図　SX4142・4145実測図、土層断面図 ……54
第35図　SX4152鋳造関係遺物出土状況 ……55
第36図　SB4160、SK4156・4157出土土器実測図……56
第37図　SK4141出土土器実測図（1）……58
第38図　SK4141出土土器実測図（2）……59
第39図　SK4141出土土器実測図（3）……60
第40図　SK4141出土土器実測図（4）……62
第41図　SK4141出土土器実測図（5）……63
第42図　SK4141出土土器実測図（6）……64
第43図　SK4141出土土器実測図（7）……66
第44図　SK4141出土土器実測図（8）……67
第45図　SK4141出土土器実測図（9）……68
第46図　SK4141出土土器実測図（10）……69
第47図　SX4142・4145・4158・4159出土土器実測図 ……71
第48図　茶褐色土層出土土器実測図（1）……72
第49図　茶褐色土層出土土器実測図（2）……73
第50図　丸瓦・平瓦拓影実測図……75
第51図　SK4141出土金属製品実測図 ……77
第52図　鋳造関係遺物実測図（1）……79
第53図　鋳造関係遺物実測図（2）……80
第54図　第160次遺構変遷模式図 ……82
第55図　第162次調査遺構配置図 ……85
第56図　SK4167、灰褐色土層出土土器・陶磁器実測図 ……86
第57図　軒丸瓦拓影実測図……87
第58図　第81・86次調査主要遺構配置図……88

図　版　目　次

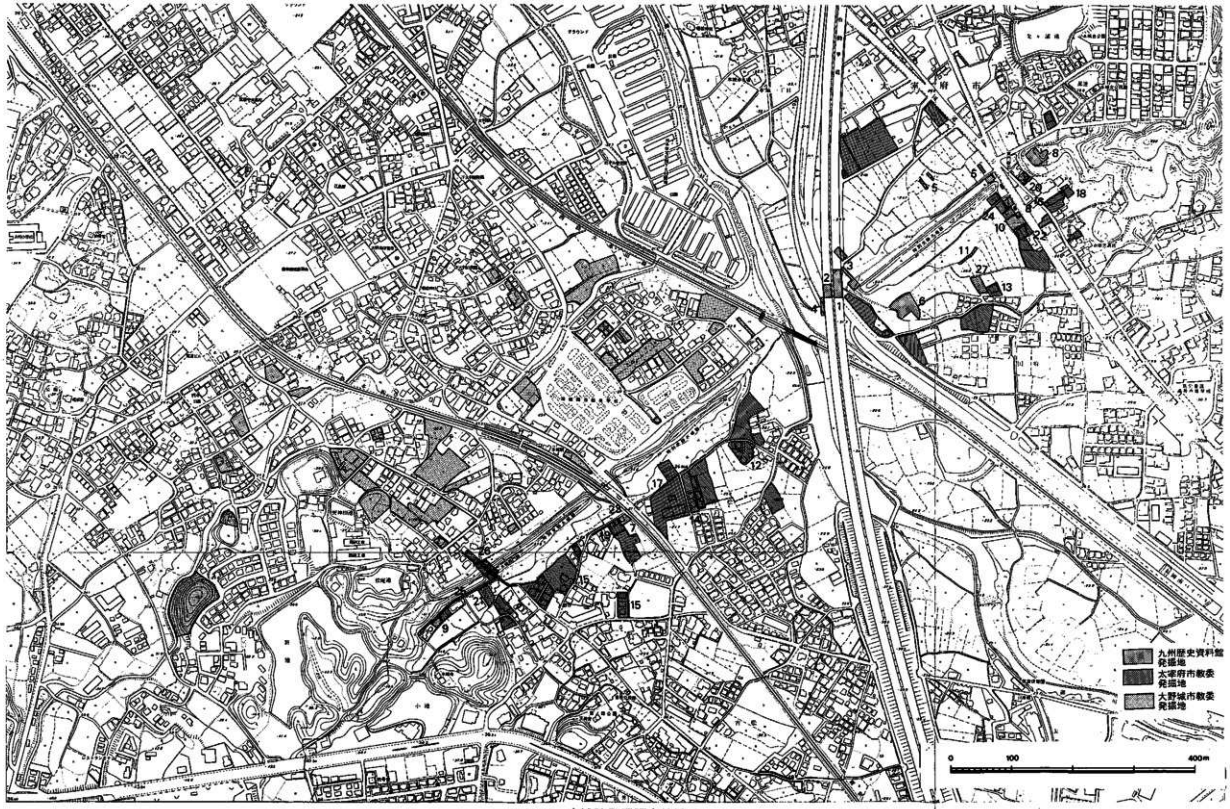
巻頭図版　（上）　第160次調査SK4141出土海獣葡萄鏡
　　（下）　同丹塗土器

図版 1　（上）　第153次調査区全景（空中写真・右が北）
（下）　第153次調査主要遺構（空中写真）
図版 2　（上）　第153次調査区全景（南から）
（下）　第153次調査区全景（北から）
図版 3　（上）　掘立柱建物SB4080、柵SA4085（北から）、溝SD4081（北から）
（下）　掘立柱建物SB4080柱掘形
図版 4　（上）　柵SA4085柱掘形
（中）　土壙SK4082、土壙SK4083（南から）
（下）　粘土採掘壙SX4087
図版 5　（上）　第154次調査区全景（東から）
（下）　第154次調査区全景（南から）
図版 6　（上）　第156次調査区全景（南から）
（下）　粘土採掘壙SX4115全景（北から）
図版 7　（上）　土壙SK4111（北から）
（中）　粘土採掘壙SX4115部分（南から）
（下）　粘土採掘壙SX4115部分（南から）
図版 8　（上）　第157次調査区全景（西から）
（下）　第157次調査区全景（東から）
図版 9　（上）　小土壙SK4120土器出土状況（南から）
（下）　暗渠施設SX4122（北から）
図版10　（上）　第159次調査区全景（東から）
（下）　掘立柱建物SB4135柱掘形
図版11　　第160次調査区全景（空中写真）
図版12　（上）　第160次調査区全景（北から）
（下）　第160次調査区全景（下層遺構完掘後、北から）
図版13　（上）　第160次調査区全景（下層遺構完掘後、南から）
（下）　掘立柱建物SB4150（北から）
図版14　　掘立柱建物SB4150（空中写真）
図版15　　掘立柱建物SB4150・4155・4160柱掘形
図版16　（上）　掘立柱建物SB4155・4160・4161（北から）
（下）　土壙SK4141（北から）
図版17　（上）　竪穴状遺構SX4145（南から）
（下）　竪穴状遺構SX4145と掘立柱建物SB4155・4160（北から）

図版18　（上）　炉跡状遺構SX4142（南から）
　　（下）　トリベ廃棄遺構SX4152
図版19　（上）　第162次調査区全景（西から）
　　（下）　掘立柱建物SB2490（南から）
図版20　　第153次調査SB4085、SD2284、SK4082・4084・4087、SX4092・4093、茶褐色土層出土土器・土製品・鋳造関係遺物
図版21　　第153次調査出土軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦
図版22　　第153次調査出土文字瓦・丸瓦
図版23　　第154次調査SD3300出土土器
図版24　　第154次調査SD3300出土陶磁器
図版25　　第154次調査出土軒瓦、その他の遺構・層位出土遺物
図版26　　第156次調査出土鋳造関係遺物・軒丸瓦・軒平瓦
図版27　　第156次調査出土軒平瓦
図版28　　第157次調査SD4118・4123出土土器・陶磁器
図版29　　第157次調査SK4129、SX4122、黄褐色土層出土土器・陶磁器
図版30　　第157次調査出土軒丸瓦・平瓦
図版31　　第157次調査出土丸瓦
図版32　　第159次調査SK4132、SX4133・4140、黄茶色土層出土土器・陶磁器・文字瓦・石製品
図版33　　第160次調査SB4160、SK4142・4156出土土器
図版34　　第160次調査SK4141出土土器
図版35　　第160次調査SK4141出土土器
図版36　　第160次調査SK4141出土土器
図版37　　第160次調査SK4141出土土器
図版38　　第160次調査SK4141出土土器
図版39　　第160次調査SK4141、SX4142出土土器
図版40　　第160次調査茶褐色土層出土土器・土製品
図版41　　第160次調査出土丸瓦
図版42　　第160次調査出土平瓦
図版43　　第160次調査出土金属製品・鋳造関係遺物
図版44　　第160次調査鋳造関係遺物



第1図　大宰府史跡発掘調査地域図



第 2 図　水城跡発掘調査地域図

Ⅰ　はじめに

1．調査計画

本年度は早くも第5次5ヶ年計画の第3年次を迎えた。特別史跡水城跡の諸施設の解明という大きな目標を立案したものの、その発掘調査の進展状況は過去2年思うにまかせない状況である。

大宰府政庁跡南側官衙域の緊急調査件数や現状変更申請の必要処理件数の状況などを考慮に入れれば、今年度予定されている調査件数や調査面積も決して少なくはない。今年度以降、大宰府政庁跡南側官衙域での発掘調査件数や面積が極端に減少することは現時点では考えにくい状況である。

大宰府政庁跡南側官衙域の調査に取り組むようになった理由は、未指定地ではあっても大宰府官衙の一部であること、現時点で家屋の増改築に対処しなければ、将来調査が必要と考えた時点では恐らく不可能に近い状況が予想されることなどである。このことを踏まえれば、大宰府政庁跡南側官衙域の発掘調査は、今後も継続して実施する必要があることは言うまでもない。しかしながら、大宰府政庁跡南側官衙域の調査を継続すれば、水城跡など史跡指定地内での計画調査の実施は、第5次5ヶ年計画の当初計画よりも限定した範囲に見直す必要が生じる。

これらのことから、現状の予算・人員配置をもとに第5次5ヶ年計画後半の実施可能な計画を考えれば、水城跡など史跡指定地内の調査は一年一ヶ所程度である。このため、後半3ヶ年の計画調査を水城跡では、西門跡とその周辺及び水城土塁本体の断ち割り調査を行うこと。また、大宰府政庁正殿跡の発掘調査を行うことなどが最も強く調査を要求されているものであり、計画調査として取り組める可能な範囲であろうと考えた。しかし、この場合には結果として当初計画に組んでいた水城跡太宰府側基底部や内濠、博多側の外濠の調査や大宰府政庁北門外側や西側回廊の調査などを計画から除かなければならなくなる。

このように多くの問題を含むものの、当初計画の一部変更が調査実現の可能性の高いものとすべきと考え、第5次5ヶ年計画後半の調査計画の変更を行った。この計画変更については、5月20日に開催した大宰府史跡調査研究指導委員会に諮ったところである。委員会の意向は、太宰府市教育委員会が中心となって指定域の拡張を進めているなかで、水城跡の発掘調査成果をより大きなものとして拡張交渉の一助となりうるように最大限の努力を払って欲しいということであった。しかしながら、現状での調査計画の変更についてはやむを得ないものとして御了承を頂いたものと思う。

当初計画の見直しによって、第5次5ヶ年計画の達成目標は大きく後退せざるを得ないが、

視点を変えれば大宰府政庁跡南側官衙域については、その実態解明が進展することでもある。指定地内の計画調査については、今後に多くの課題を残すこととなるが、水城跡土塁本体の構造解明など佐賀大学低平地防災研究センター林重徳教授をはじめ関係方面の協力を得ることによって多くの成果をあげたいと考えているところである。

	区　分	場　所	面積(㎡)	地　番	備　考
1	水城跡	西門跡	300	大野城市下大利4丁目705－5他	計画調査
2		西門跡付近太宰府側基底部	1,000	太宰府市大字吉松字土居180他	〃
3	政庁前面	広丸地区	875	太宰府市観世音寺字広丸355－1他	緊急調査
4	官衙域他	学校院地区	583	〃　〃　字学業214	現状変更
5		蔵司地区	573	〃　〃　字蔵司439－2	緊急調査
6		不丁地区	300	〃　〃　字不丁248－2	〃
7		広丸地区	1,000	〃　〃　字広丸478	〃
8		蔵司地区	2,000	〃　〃　字蔵司431－1	〃
9		不丁地区	1,100	〃　〃　字不丁301－2	〃
10		不丁地区	360	〃　〃　字不丁287－4	〃
11		観世音寺戒壇院	2,000	〃　〃　字堂畑り7189－8他	現状変更

2．調査経過

（1）特別史跡水城跡

大宰府史跡第157次調査に引き続いて4月に水城跡第26次調査（水城西門跡）に着手した。調査計画では、外濠推定部分大野城市側の調査、市道東西両側での門建物の調査、太宰府市側基底部（市道の東側）の調査などを対象範囲とした。

発掘調査開始直後に、まず市道両側の土層観察から西門跡は（水城跡第25次調査でほぼ明らかにされていたことではあるが）地山の高い部分を選んでいることを再確認した。地山の頂部は、大野城市側市道（濠推定部分）との比高で－0.9m、太宰府市側市道（テラスの南側）で＋0.3mほどの高低差が認められている。土塁の積土は、この地山の上に盛られている。土塁中央付近市道西側のテラス状部分で西門に関する遺構を求めて調査を進めたが、削平が著しく直接門に関連すると思われる遺構は認められなかった。しかし、唯一の遺構として数条の礫敷きの溝状遺構を検出した。この段階で、5月19・20日の指導委員会を迎えた。指導委員会の先生方による現地視察及び協議では、恐らく西門本体に関係する遺構は削平されたであろうという点で、調査担当の私達とほぼ同じ意見であった。

しかし、さらに西門跡に関する知見を得るため徹底した調査を実施するようにとの助言があり、調査範囲を市道の東側および土塁の前面部に拡張した。

大野城市・太宰府市との行政境界は、西門跡付近では土塁本体中央部にあるが、太宰府市では道路側溝の改良工事を市道部分で実施することが決まっていたので、併せてこの部分の調査

も実施した。側溝改良部分の土層の状況調査と、市道中央部でも一部アスファルトを除去して平面調査を実施した。

土塁の前面（大野城市側）では、門跡に向かって左側前面テラス部分と土塁本体の基部で花崗岩の石組を検出した。そして、この石組にほぼ直交する基壇状の側石の一部を確認した。この反対側では、土塁本体の基部付近から北に延びる道路の側溝かと思われる溝一条を検出した。

調査はこの時点で写真撮影・実測を行い、盆の休暇に入った。9月からは大宰府政庁跡前面の調査のために西門跡については中断した。調査を再開したのは、平成7年3月に入ってからである。

水城跡第26次調査中に、太宰府市が進めている指定拡張予定地で共同住宅の建築計画が持ちあがり、地主・太宰府市教委・九歴の三者で協議した結果、指定に同意してもらうことを前提に九州歴史資料館が水城跡第27次調査として実施することとなった。東土塁（御笠川より東側の土塁）の南東部中央である。この調査では、国分方面から御笠川に西流する溝遺構の存在を確認することができた。水城跡第26・27次の二つの調査結果については、水城跡第26次調査の終了を俟って平成7年度の概要報告書に掲載する予定である。

7月に佐賀大学林重徳教授から水城土塁の構造解明調査の一環として、ボーリング調査実施計画の相談があり、現地踏査の結果、西土塁（御笠川より西側の土塁）で調査機材等の搬入に便利なＪＲ線の東側の場所を調査地に選定した。調査は日本地建株式会社が担当し、現在、佐賀大学で抽出資料の分析を実施中である。また、水城土塁本体の土質と土塁本体に積んだであろう周辺部の地山土壌との土質の比較のため太宰府市大字大佐野地区の地山土を選定し、これについても分析調査を実施中である。これらの資料の分析の結果については、林教授の了解を得て、今後概要報告に収録したいと考えている。

水城跡土塁周辺部の調査については、これまで太宰府市・大野城市両教育委員会によって精力的に進められてきたが、調査条件に制約がある場合が多く、今日までいくつかの調査成果を上げ得ているものの、水城跡外濠や内部施設の実態については未解明の部分も多い。今後、三者協力して水城跡の実態解明に努めたい。

（2）特別史跡大宰府跡等

学業院中学校と県道を挟んで南側の地点を第157次調査として3月下旬に開始した。当調査地は、昨年8月に実施した予備調査により、旧地形は南から北に流れる御笠川側へゆるく傾斜しており、その西半部には大宰府跡関連の遺構は存在しないものと判断された。そのため、東半の遺構の残っている部分のみを調査した。検出した遺構は溝（SD4118・4121・4123）や土壙（SK4120・4123・4124・4125・4129）等で、平安時代のものである。なお、この下層遺構として自然の流路が検出されている。4月中旬に検出を終了した。

第157次調査終了後、水城跡第26次調査（西門跡）に入った。この調査中の５月上旬、大宰府政庁跡北側で宅地の法面工事・車庫の無届工事がなされていた。地主に現状変更申請書の提出を要請するとともに、この場所が大宰府政庁第Ⅱ期後半からⅢ期の瓦窯「都府楼北瓦窯跡」にあたることから、法面の調査を行った。調査の結果、瓦片は採集されたものの窯跡の痕跡は確認されていない。第158次調査である。

続いて、学校院跡の北辺部を第159次調査として発掘調査を実施した。個人住宅の増築計画に起因するもので、文化庁から発掘調査を実施するよう指示のあったものである。３×８ｍのトレンチを設定し２棟の建物を検出したが、調査区南側の第37次調査区（1975年調査）や、北側の第112次調査区（1988年調査）との間に未調査地があり、建物の規模や性格、既調査区の遺構との関係は明らかになし得ていない。なお、改築計画の変更により工事計画に合わせて再度調査をする予定である。調査は６月上旬で終了している。

第160次調査は学業院中学校の東側、市道との隣接地である。個人の集合住宅建築計画に起因するものである。太宰府市教育委員会による予備調査により、大宰府跡関連の遺構が確認されていた。６月下旬に調査を開始し、ほぼ調査区全体の遺構の状況がつかめた７月上旬、土壙（SK4141）から海獣葡萄鏡一面が出土した。調査区内では竪穴状遺構（SX4145）や鋳造関係の遺物が見つかっている。鋳造関係の遺物が隣接する北側の丘陵端部の第19次調査区（1972年調査）でも出土していることや、蔵司丘陵の南西裾部の水田がかつて「たくみのつかさ」と呼ばれていたことなどを考慮すれば、調査区一帯が「匠司」に関係する工房の一部ではないかとの推測も可能である。

調査区西側の水田は平成７年度には学校用地として改変されることが決まっており、太宰府市教育委員会が発掘調査（大宰府史跡第170次調査）を予定していること、さらに第19次調査区北側の畑地の調査（大宰府史跡第169次調査）も九州歴史資料館が予定しているので、この調査結果に最終的な結論は俟ちたい。なお、遺構・遺物が鋳造関連のものであるため、九州造形短大講師遠藤喜代志氏に現地指導をお願いし、教示を受けた。調査は10月中旬に終了した。

第161次調査は観世団地内の調査である。個人住宅建設計画に基づく現状変更申請に対し発掘調査の指示が文化庁からあったもので、バックフォーを用いて７月下旬に実施した。調査地点は、大宰府崇福寺の伽藍推定地内にあたる。「太宰府横岳山諸伽藍図」によると伽藍西側の長岳僧東辺部である。調査では、現地表下2.4mまで下げたが、遺構の存在はうすいものと判断し、調査を打切った。これについては、本書の概要報告からは削除している。

第160次調査終了の見通しがついた10月上旬、不丁官衙地区の東側で個人住宅の改築場所の調査を実施した。第162次調査である。地主の都合により敷地の全面的な調査は実施できなかったが、第86次調査区（1983年調査）で検出された建物（SB2490）の北側柱通り２間分を検出できた。現地表から1.4m下で遺構面となるが、改築にあたって基礎の深さを遺構に届かない範囲で

施工することで地権者の了解を得ている。

第163次調査は観世音寺戒壇院庫裡建設地の調査である。文化庁の指示による発掘調査で、10月中旬に開始した。表土を除去すると、改築直前の建物の基礎を含めて、江戸時代まで5時期分の礎石・石列・石組が検出された。古代・中世の遺構は江戸時代の建築工事によって大半が削平されたものと考えられた。遺物については調査区北側の土壙から墨書木札を含む多量の木製品（江戸時代）が出土しており、遺構の整理についても、今後、古図・絵図・記録類との照合が必要である。調査は12月上旬に一応終了はしたが、これ等の整理時間を必要とするため平成7年度の概要報告に収録することとした。なお、庫裡の建設工事は文化庁の許可を待って1月下旬に着手されたが、検出された遺構については盛土して保存することとなった。また、着工と同時に、浄化槽埋設部分の調査が未了であったため第163-2次調査として実施している。この調査は2月上旬に終了した。

第164次調査は日吉官衙域の南東部にあたる。第32次調査区（1973年調査）の東側である。12月中旬にバックフォーを用いて遺構検出を行ったが、安ノ浦池方面から月山官衙域と学業院地区の間を南流する河川によって形成された谷部の堆積土で、遺構は残っていないことが判明した。このことから日吉官衙の遺構の残っている部分は、第32･80次調査区と第164次調査区の間の市道より西側部分であることが明らかになり、第164次調査区の南辺あたりから谷は西に折れ、第153次調査区以北の部分に限られることとなった。

観世音寺戒壇院庫裡の調査終了後の12月に、大字広丸地区で3ヶ所の調査を行った。第165次～第167次調査である。第165次調査は第157次調査区東南部隣接地である。個人住宅の改築の事前調査である。第157次調査で土壙や溝遺構が検出されているので、この調査区にも同様な遺構が拡がっているものと期待したが、自然流路状の遺構が検出された程度である。

第166次調査は第157次調査区の北側にあたる。調査区西側はトレンチ調査の結果、第157次調査区と同様、御笠川に向かってゆるく傾斜していて遺構は検出されていない。東半部で建物跡1棟と4条の溝遺構が検出されているが、遺構の密度は希薄である。さらに、調査区の南側第157次調査の西半部の状況、その南側第148次調査区（1992年調査）・第132次調査区（1991年調査）の調査結果と合わせて判断すると、大宰府政庁が存在した当時の遺構は、第166次東半部から第96次調査区（1985年調査）の南側（未調査）を結ぶ線あたりまでに絞られてきたようだ。

大字広丸地区、県道南側で第167次調査を1月中旬から実施した。第137次調査区（1991年調査）の西側隣接地である。第137次調査区西辺ではSB3940･3945･3950が重複して検出されているから、或いはこの建物と一連の建物が検出されるのではとの予測をしていたが、それに反して3棟の建物の西側は空き地であり、調査区の西南隅で竈を持つ8世紀前半代の竪穴住居跡が検出された。興味あるのは竪穴住居跡の存在とそれを取り囲む様な柵列がみつかっていることである。周囲の状況については、今後の調査をまつしかないが、8世紀代の竪穴式住居跡の発

見は大宰府史跡の調査では初めてのことである。

3月に入って、大字日吉地区で観世音寺土地区画整理地の調査を実施した。第153次調査の南東にあたる。ここでは、現地表下2.4m下までバックフォーで下げたが遺構はなく、第164次調査区で検出した谷の流れがこの付近まで入っていることが判った。

以上が本年度の大宰府史跡の発掘調査経過である。なお、9月には福岡県教育庁文化課が特別史跡大野城跡太宰府口城門周辺の環境整備事業の一環として土塁部分の調査を実施したが、この調査結果については別途刊行される予定である。本書では、平成5年度に調査を終了し報告未了となっている第153次（日吉地区官衙）・第154次（観世音寺前面）・第156次（大宰府政庁前面広場）調査と、本年度調査の第157次・第158次・第159次・第160次・第162次の調査結果を報告する。本年度調査のうち、第163次（観世音寺戒壇院庫裡）・第165次・第166次・第167次（広丸地区）の調査については、整理作業中のため平成7年度に報告することとした。昨年度調査を実施した第155次調査（観世音寺戒壇院南面築地跡）については、第163次調査と併せて来年度報告することとした。

調査次数	調査地区	調査面積(㎡)	調査期間	備考	※
157	6AYQ−A−Q	337	940113〜940419	官人居住区推定地	3
158	6ÀYT−A	52	940509〜940512	政庁北部	
159	6ZGK−A	24	940513〜940615	学校院北辺部	4
160	6AYL−A−U	573	940621〜941019	米木丘陵西	5
161	8DSF	10	940728	崇福寺	
162	6AYM−A−T	8	941013〜941019	政庁前面広場	6
163	6KKZ−A−E	192	941012〜950206	観世音寺戒壇院庫裡	11
164	6AYI−B	10	941223	日吉地区官衙東	
165	6AYQ−A	37	941031〜941219	官人居住区推定地	
166	6AYQ−A	528	941031〜940123	〃	9
167	6AYM−A	216	950118〜950206	〃	
168	6AYI	15	950301	日吉地区官衙推定地	

※は前掲表の番号に対応する。

本書では、昨年度文化庁の指示に基づいて発掘調査を実施した現状変更申請地調査を第154次調査報告として収録したが、本年度における現状変更の処理状況は、以下一覧表の通りである。立会調査では調査条件が限られることから充分な調査は望めなかったが、次表21の下水道工事中、観世音寺境内地日吉神社参道で柱根が検出された。東側個人住宅地で浄化槽埋設工事中に柱根が発見されたことから第123次調査（1990年調査）とし、柱根の出た建物をSB3700としたが、今回調査された柱根はこの建物の柱通りの一部とみられる。

平成６年度史跡地内現状変更申請等対応状況

No.	提出月	申請者	目的	地番	申請面積	指定区分	文化庁指示	九歴対応	備考
1	５年10月	個人	住宅改築	太宰府市観世音寺４丁目	583㎡	学校院	発掘調査	第159次調査	平成６年５月発掘調査 地主の計画変更により平成７or８年に再調査
2	〃	〃	〃	〃　〃　５丁目	490	観世音寺	工事許可	立会指示	平成6年4月ベタ基礎指示
3	11月	〃	車庫・ブロック塀	〃　坂本３丁目	100	大宰府跡	〃	第158次調査	申請前着工　　申請書提出要請　　一部調査
4	６年１月	太宰府市長	市民の森整備事業	〃　観世音寺４丁目	14,616	観世音寺	〃	立会指示	平成６年３月立会
5	〃	個人	住宅改築	〃　〃　６丁目	296	観世音寺(観世団地)	〃	〃	平成６年４月立会
6	４月	九州歴史資料館	発掘調査	〃　大字吉松他	1,000	水城跡	調査許可	水城26次調査	平成６年４月～７年３月 現在継続中
7	〃	個人	住宅改築	〃　観世音寺６丁目	352	観世音寺(観世団地)	工事許可	立会指示	平成６年８月立会
8	〃	実行委員会	市民まつり	〃　〃　４丁目		大宰府跡	使用許可	－	太宰府市教委指示
9	５月	太宰府市長	アスファルト舗装 水路改良	〃　〃　４丁目 〃　坂本３丁目	150	〃	工事許可	立会指示	平成７年１月立会
10	〃	〃	水路改良	〃　観世音寺5･6丁目	340	史跡観世音寺および子院	〃	〃	平成６年９月立会 〃　11月立会
11	〃	個人	車庫	〃　〃　４丁目	21	大宰府跡	〃	〃	申請前着工　申請書提出要請
12	〃	〃	住宅改築	〃　〃　６丁目	235	観世音寺(観世団地)	〃	〃	平成６年８月立会
13	６月	〃	住宅新築	〃　〃	275	〃　〃	発掘調査後許可	第161次調査	平成６年７月発掘調査
14	５月	〃	住宅改築	〃　〃	332	〃　〃	工事許可	立会指示	平成６年８月立会
15	６月	〃	住宅増築	〃　〃	366	〃　〃	〃	－	太宰府市教委指示
16	〃	〃	〃	〃　〃　４丁目	99	観世音寺	〃	－	〃
17	４月	宗教法人	庫裡改築	〃　〃　〃	3,137	〃	発掘調査後許可	第163次調査	平成６年10～12月発掘調査
18	８月	〃	仮設物設置	〃　〃　〃		大宰府跡	工事許可	－	太宰府市教委指示
19	〃	太宰府市長	小字銘碑設置	〃　〃 〃　坂本３丁目		大宰府跡・観世音寺	〃	立会指示	
20	〃	佐賀大学	ボーリング調査	〃　吉松	100	水城跡	調査許可	〃	平成６年８月立会
21	〃	太宰府市長	下水道	〃　観世音寺4･5丁目	621	観世音寺	工事許可	〃	平成６年12月～７年３月 立会終了
22	９月	個人	住宅改築	〃　〃　４丁目	568	〃	〃	盛土・立会指示	
23	〃	福岡県教委	発掘調査	〃　岩屋	1,000	大野城跡	調査許可	－	平成6年9月～10月発掘調査
24	11月	太宰府市長	市民の森案内板設置	〃　観世音寺４丁目	27	観世音寺	工事許可	立会指示予定	平成７年３月予定
25	〃	〃	法面復旧	〃　〃	80	大野城跡	〃	〃	〃
26	〃	福岡法務局長	基準点標識設置	〃　国分	1	〃	〃	〃	〃
27	〃	個人	水路改修	〃　観世音寺５丁目	5	観世音寺	〃	〃	〃
28	12月	〃	住宅改築	〃　〃　６丁目	306	観世音寺(観世団地)	〃	－	太宰府市教委指示

No.は、福岡県教育庁指導第二部文化課からの申請文書等の受理の順序である。

II 発 掘 調 査

1．第153次調査

本次調査はアパート建設に伴う事前の発掘調査として行った。調査地番は太宰府市観世音寺94街区13（旧字日吉260番地）で、調査面積は270㎡である。調査地は大宰府政庁の東を限る月山丘陵の120m程南側で、日吉地区に位置する。これまでに日吉地区では、掘立柱建物12棟、柵4条、井戸5基、溝などの遺構を検出しており、政庁中軸線を境として西側の不丁地区官衙と対を成すものと考えられている。

今回の調査区は、昭和57年度に発掘調査を行った第80次調査の南西部とかなり重複しており、同次調査で検出されたSB2240の規模をつかむことを主眼とした。表土置場を調査区の付近に確保できなかったため、表土は重機で剥いで、外部に持ち出した。平成5年11月8日に作業員を投入し、埋め戻しが終了したのは暮れの28日であった。

検出遺構

基本層序は上層から耕作土、床土、灰褐色砂質土、淡黄褐色砂質土、灰白色砂層で、灰褐色砂質土を除去した後に遺構を検出した。調査区の南半分は削平により淡黄褐色砂質土がなくなり、下層の灰白色砂層がみられた。また、調査区の南西部には瓦類を多く含む暗灰色粘質土による整地層がある。

SB2240、SD2284、SK2279は前回の検出であるが、今回の調査ではSB2240と重複する南北棟建物SB4080、柵SA4085、溝SD4081の他に、土壙、ピットなどを検出した。また、黒色粘土を採掘したと考えられる中世期の採土遺構SX4087は整地層の下層で検出した。

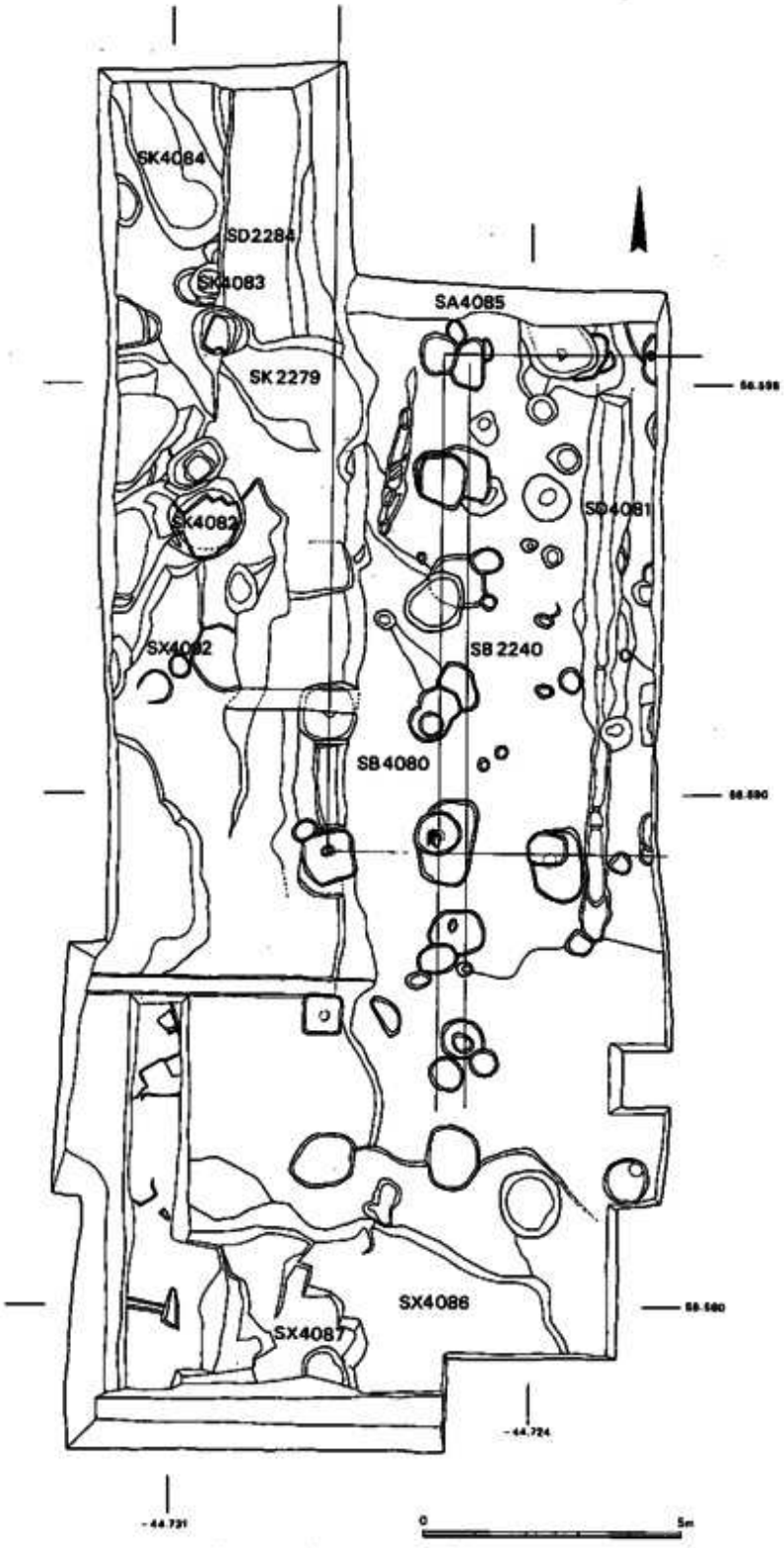
掘立柱建物

SB2240 前回の調査により梁行3間（6.5m）、桁行4間分まで確認していた。今次調査では、桁行6間分（14m）まで確認したが、南半部が削平を受けているため、結局、桁行は確定するにいたらなかった。

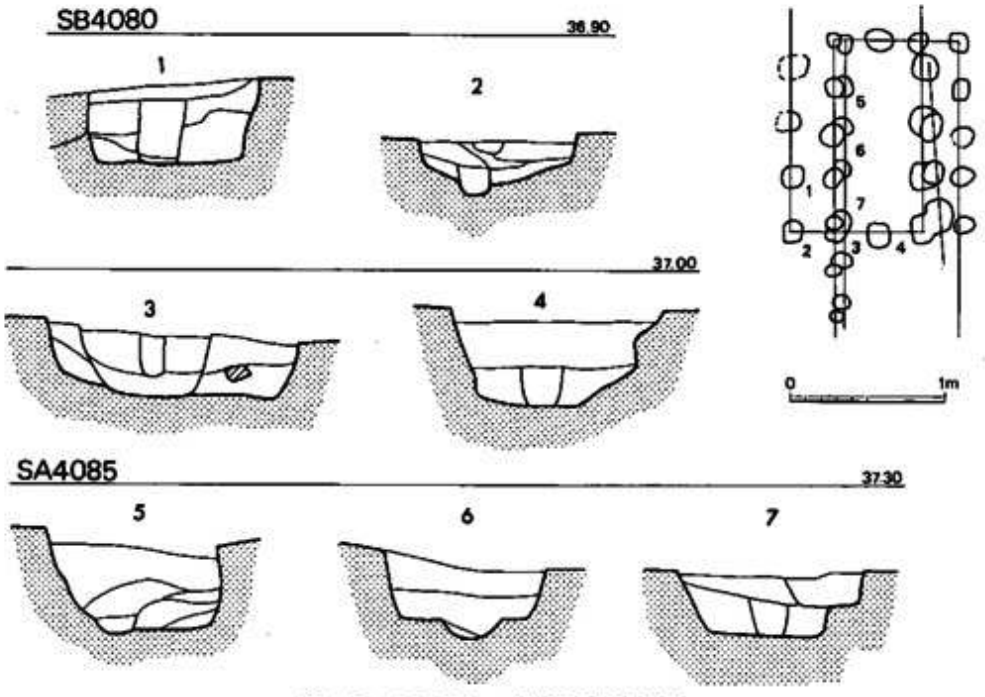
SB4080 調査区の中央部で検出した南北棟建物で、SB2240・SA2245に切られ、SD2284を切っている。今次調査で南側梁行3間（6.6m）、西側桁行2間分を検出した。柱間は2.7mを測る。第80次調査の実測図を改めて検討してみると、調査区の西側に長さ1～1.5m、幅0.8～1m、深さ0.5m程の楕円形の穴が2.5～2.7mの間隔で南北に対を成して存在する。この穴を柱掘形と想定すると桁行9間の建物と推定される。

柵

SA4085 SB2240の西側桁行掘形に切られて重複する。検出当初はSB2240の建て替えと考え



第3図　第153次調査遺構配置図



第4図　SB4080・4085柱掘形断面図

ていたが、対応する柱掘形がみられないことから柵とした。柱穴は6間分確認し、断ち割ってみたが、柱痕跡は確認できなかった。

溝

SD2284　前回の調査で検出していたが、今次調査を含めて長さ17.5mを検出した。南北に走る溝で、調査区の中央付近で2本に分かれるが、分岐箇所にSB4080の柱掘形があるため前後関係はつかめなかった。

SD4081　調査区の東側に位置する南北溝で、前回の調査では連続するピットとして掘られていた。今回は灰褐色砂質土除去後にプランをつかみ、一条の溝として調査した。北側での幅0.98m、深さ0.42mを測り、SD2284とは4.3mの間隔を有する。

土壙

SK4082　調査区の北西側で検出した。1.45×1.4mの隅丸方形を呈し、深さは1.1mを測る。検出当初は井戸と考えて掘り下げていたが、湧水が激しい割には井戸枠はみられなかった。このことと、底面が土取り後の状況を呈していることから採土穴と考えた。

SK4083　調査区の北西側に位置する。SD2284と重複するが、先後関係は不明。1.15×1.12mの楕円形を呈し、深さは1.1mを測る。黒色粘土層まで掘削しており、底面はSK4082と同様、採土後の状況を呈しているが、規模が小さいため採土遺構かは疑問である。

SK4084　調査区の西北端に位置する溝状の遺構。幅1.44m、深さ0.14mで、調査区外に広が

るため詳細は不明。

その他の遺構

SX4086　調査区の南端で検出した段落ち。区画整理前の地形図をみると、この付近で地境になっており、竹・芝を用いた暗渠が埋設してあるので近・現代に掘削されたものと思われる。

SX4087　南西部の整地層を掘り下げると青灰色の砂質土が検出された。遺物を包含していることから調査区の南西側に1.5×7mのトレンチを設け、地山の確認を行った。埋土上層は①暗灰色粘質土で、瓦類を多く含む。下層は②灰色砂と暗灰色粘土ブロックの混合土で、地山の黒色粘土が方柱状に遺存しており、その下位は青灰色シルトになる。これらのことから黒色粘土を採掘した採土遺構と考えた。①・②層は採土後の埋土で、その上に暗灰色土が堆積する。また、採土遺構はSD2284以西に広がるものと思われる。

SX4092　調査区の西側中央に位置する径0.4m程のピット。

出土遺物

SB2240出土土器（第5図）

須恵器

蓋（1）　口縁部を下方に折り曲げ、端部を外方につまみ出す。天井部は外面回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

SB4085出土土器（第5図、図版20）

須恵器

蓋（2）　天井部は低目で、体部との境は明瞭である。口縁部は下方に折曲げ、端部を丸くおさめる。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

SD2284出土土器（第5図、図版20）

須恵器

蓋（3・4）　3は天井部が低く、器壁が厚い。4は口縁部を下方へ薄くひき出す。ともに天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

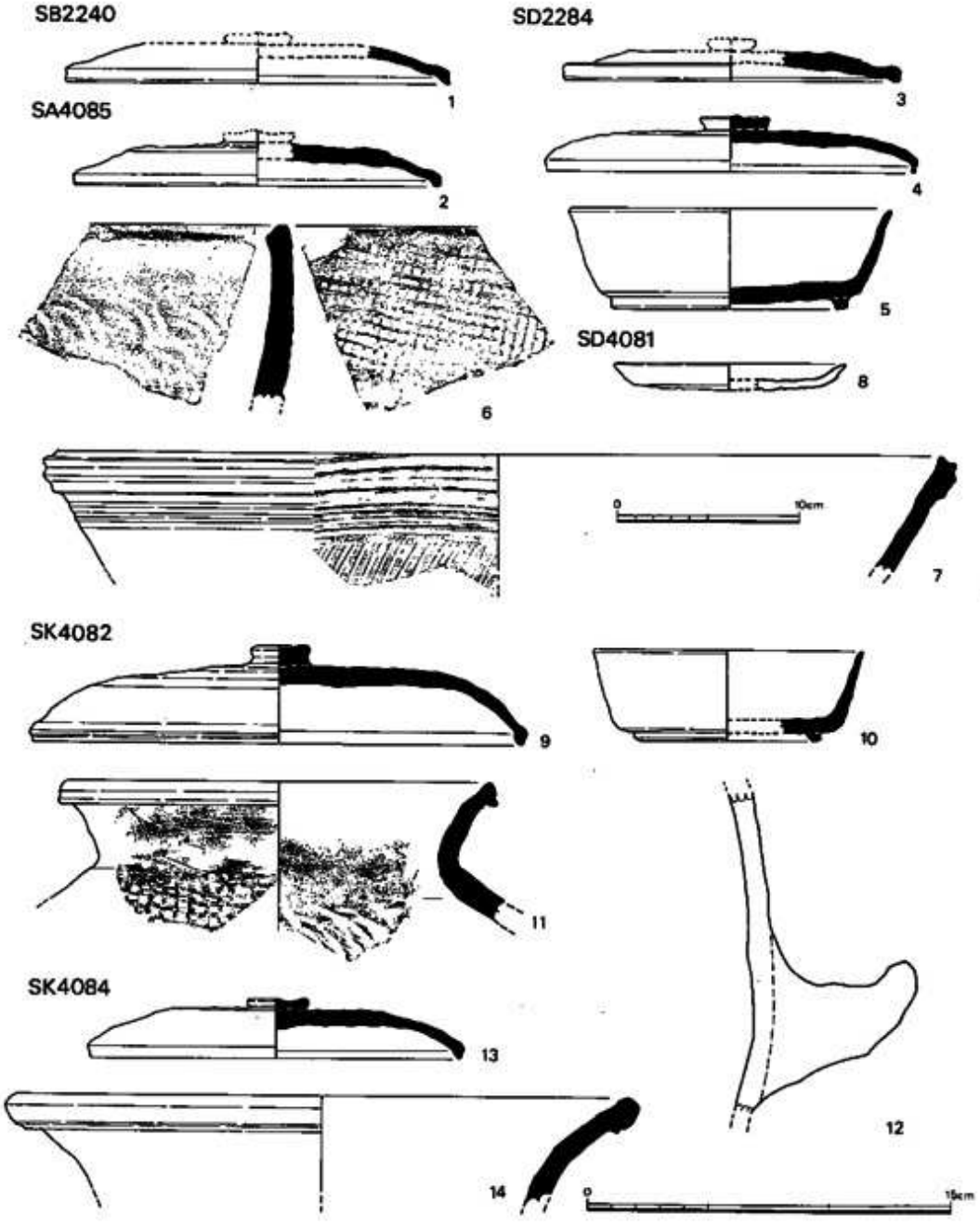
杯（5）　体部と底部の境が明瞭で、口縁部は外反する。高台は断面四角形でしっかりしている。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整。

鉢（6）　内弯気味に立ち上がる鉢の口縁部。外面は格子のタタキ、内面はヨコナデ調整で同心円のアテ具痕が残る。

甕（7）　大形の甕の口縁部片。口縁下に断面山形の突帯をもち、さらにその下部に3条の沈線を巡らす。頸部外面は斜位の櫛描きを施す。

SD4081出土土器（第5図）

土師器



第5図　SB2240、SA4085、SD2284・4081、SK4082・4084出土土器実測図

小皿（8）　口径9.6cm、底径7.8cm、器高1.1cm。底部はヘラ切り。底部内面はナデ。

SK4082出土土器（第5図、図版20）

須恵器

蓋（9）　天井部が高く、丸味をもつもので体部との境が不明瞭である。口縁端部は丸く仕上げる。口径に比してつまみが小さい。天井部外面が回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ。

杯（10）　体部は底部から直線的に立ち上がる。底部内面はナデ調整。

甕（11）　口縁部下に1条の突帯をもつ。体部外面に格子のタタキ、体部内面には同心円のアテ具痕が残る。

土師器

甕（12）　把手は手捏で、指頭圧痕が残る。外面の下部には煤が付着している。

SK4084出土土器（第5図、図版20）

須恵器

蓋（13）　口縁端部は断面三角形を呈する。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整で、使用により器面が平滑になる。胎土は極めて精良である。転用硯と考えられる。

甕（14）　外反する口縁端部は丸く肥厚させる。口縁部下には突帯をもつ。

SX4087出土土器・陶磁器（第6図、図版20）

須恵器

蓋（1～3）　すべて天井部外面が回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ、他はヨコナデ調整。3は焼歪みが著しい。

杯（4）　全体に丸味をもった器形で、口縁部はやや外反する。底部外面には回転ヘラ削り調整を施すが、器壁が非常に厚い。底部内面はナデ調整。

甕（5～7）　いずれも外反する口縁下に断面三角形の突帯状の稜をもつ。すべて体部外面は平行タタキ、体部内面は同心円のアテ具痕が残る。口径は21.2cm、18.0cm、53.4cmを測る。

土師器

杯（8・9）　口径12.6cm・12.8cm、底径8.0cm・8.2cm、器高はともに2.9cmを測る。糸切り。

椀（10）　体部は丸味をもち、断面三角形の高台を貼付する。体部は内外面ともヨコナデ、底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整。

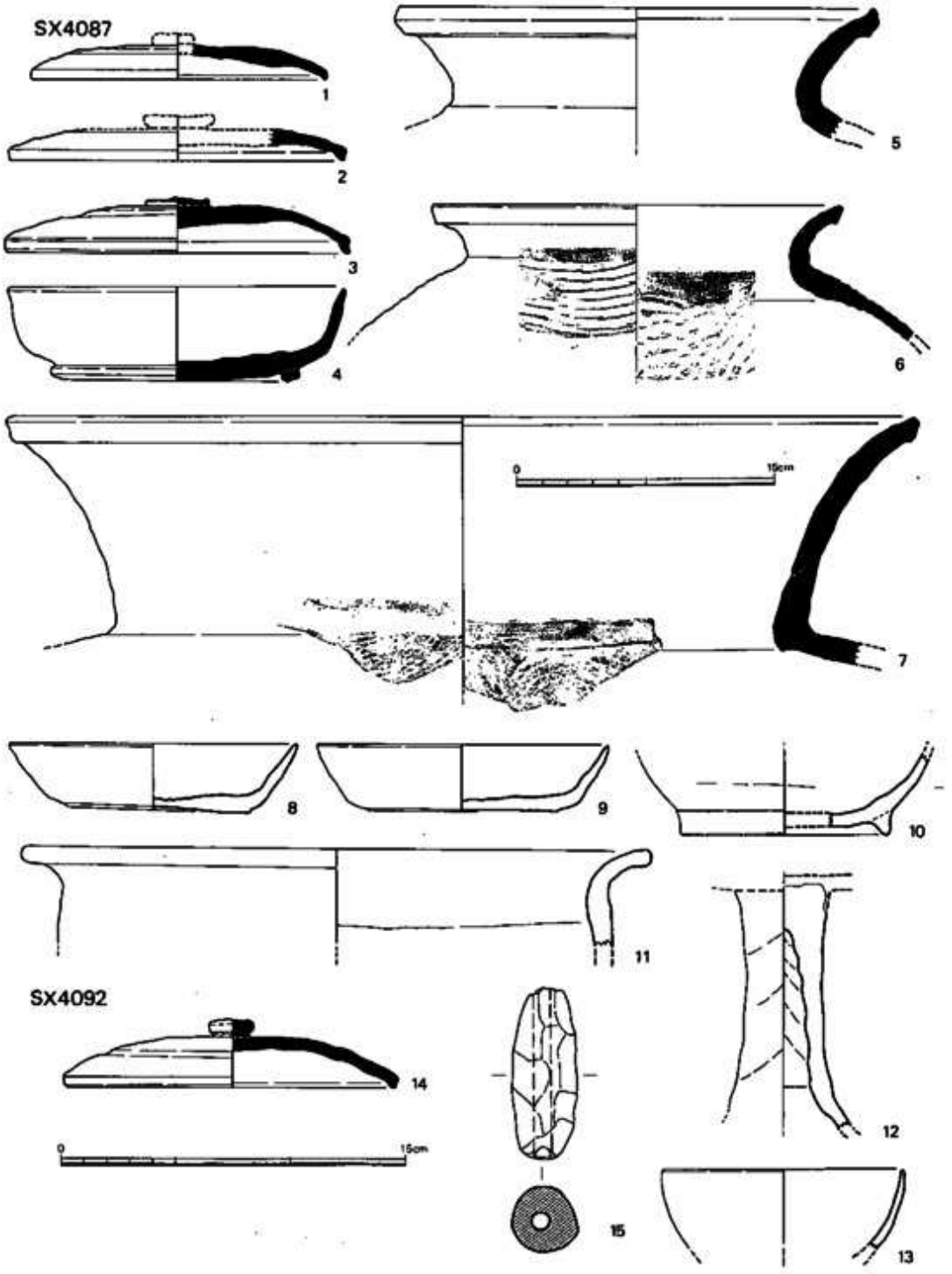
甕（11）　口縁部片で、内面はヘラ削りを行なう。口径27.6cm。

高杯（12）　高杯の脚部で、内外面にしぼり痕が残る。

中国陶磁器

青磁

椀（13）　平底の小椀か。淡緑色の薄い釉を施す。胎は淡灰色で精良。越州窯系。復原口径10.6cm。



第6図　SX4087・4092・4093出土土器・陶磁器・土製品実測図

SX4092出土土器・土製品（第６図、図版20）

須恵器

蓋（14）　丸味をもつ体部に小さなつまみを貼付する。内面の口縁部と体部の境の段は不明瞭である。天井部外面はヘラ切り未調整、天井部内面はナデ調整。

土製品

土錘（15）　長さ7.5cm、最大厚2.8cmの管状土錘。孔径0.7cmを測る。外面には成形時の指頭圧痕が残る。

暗褐色土層出土土器（第７図）

須恵器

蓋（１）　天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

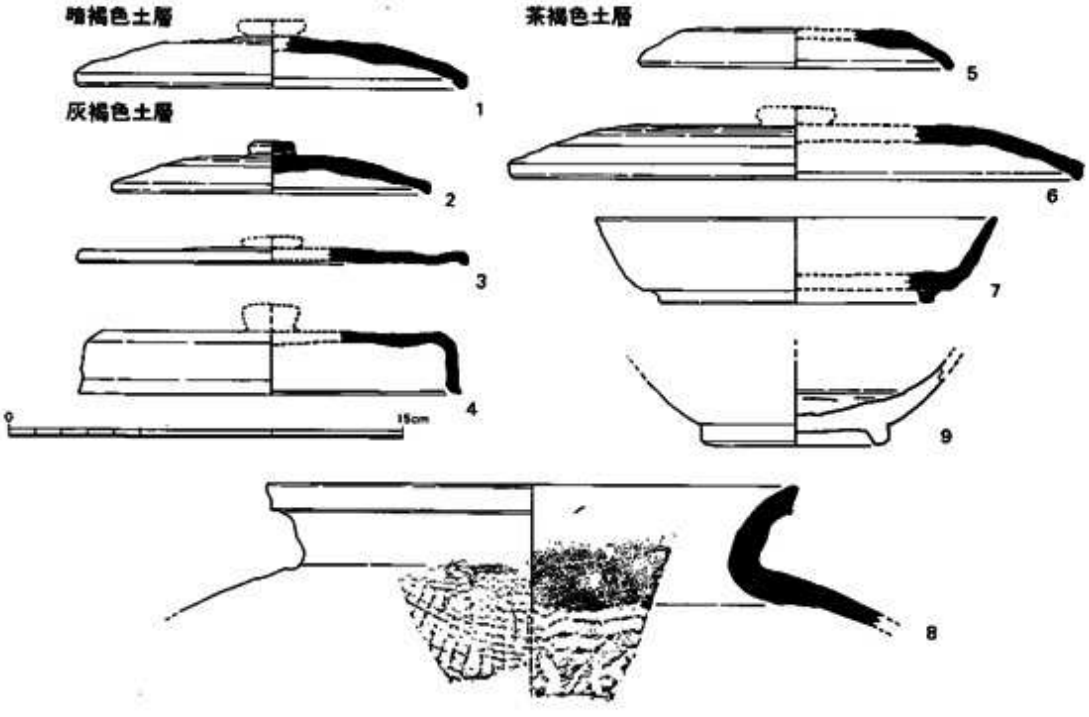
灰褐色土層出土土器（第７図）

須恵器

蓋（２～４）　２は小形の蓋で、口縁端部は丸く仕上げる。３は低平なもの。４は壺蓋で、口縁端部は平坦面をなす。すべて天井部外面はヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

茶褐色土層出土土器（第７図、図版20）

須恵器

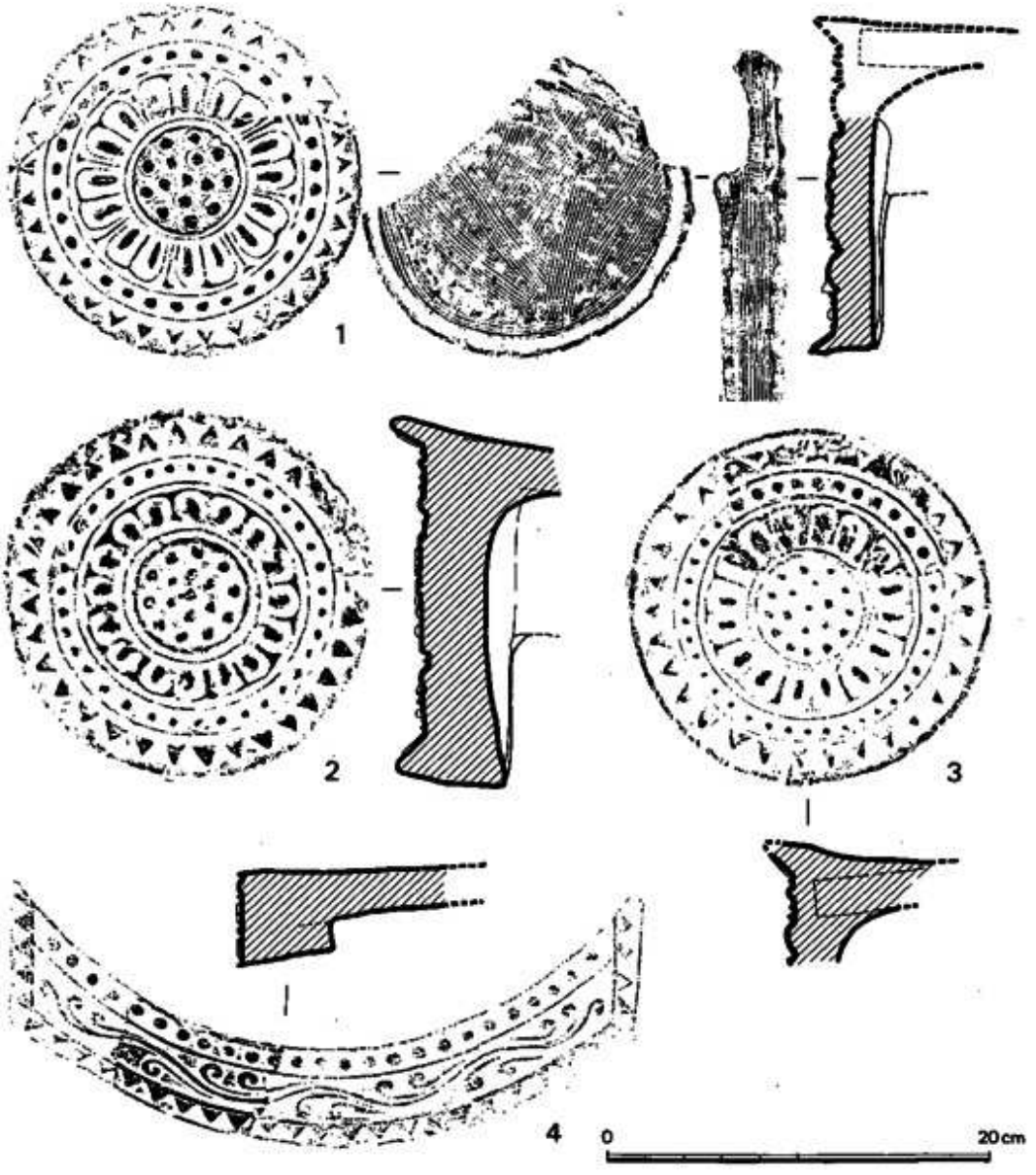


第７図　暗褐色土層・灰褐色土層・茶褐色土層出土土器・陶磁器実測図

蓋（5・6）　5の蓋は口縁端部の内側にわずかな段をもつ。天井部外面はヘラ切り未調整、天井部内面はナデ調整。6は口縁部が断面三角形をなす。天井部外面は回転ヘラ削り、内面はナデ調整。

杯（7）　杯部は浅く、断面四角形のしっかりした高台を貼付する。底部内面はナデ調整。

甕（8）　外反する口縁部下に断面三角形の突帯状の稜をもつ。体部外面は格子タタキ、体部内面には同心円のアテ具痕が残る。



第8図　軒丸・軒平瓦拓影実測図

中国陶磁器

青磁

椀（9）　胎は淡灰色で、淡緑色の薄い釉を全面に施す。底部内面には沈線を巡らせる。底部内面と高台畳付に目跡が残る。越州窯系。

瓦類

軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦・丸瓦・平瓦などが出土している。発掘調査の結果からは、瓦のセット関係や年代観など特に問題とする様な出土状況はない。また、検出された建築遺構との関係を想定し得る状況もなかった。

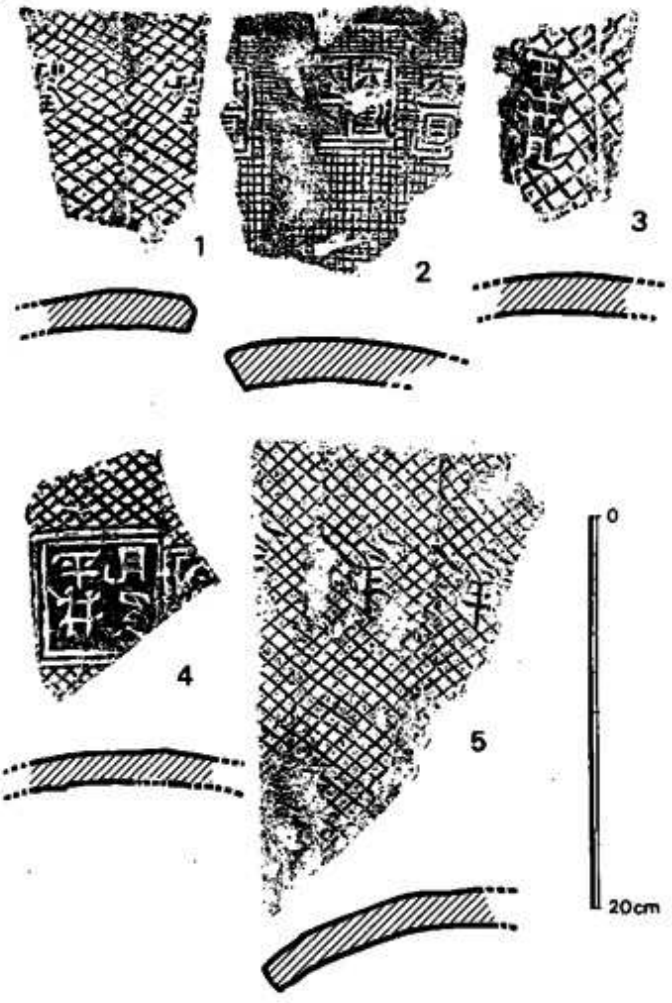
軒丸瓦・軒平瓦（第８図、図版21）

軒丸瓦３種４点、軒平瓦１種３点が出土した。

軒丸瓦１は老司II式と呼ばれているもので、２点が出土している。大宰府政庁及び周辺官衙域から満遍無く出土する軒瓦である。丸瓦の接合位置が瓦当面裏の高い位置にあることや櫛状器具による整形痕が瓦当裏面・側面に残る特徴がある。筑前国分瓦窯からの採集例がある。

２は中房に１＋６＋10の蓮子を配置し、内区の蓮弁は間弁のない複弁八弁蓮華文、外区内縁は蓮子35、外縁は凸鋸歯文32を置く。丸瓦の接合位置は１に比較してやや下位にある。老司式軒丸瓦瓦当裏面下部と同様の突帯状の高まりのある例もあるが本例にはない。１点出土。

３は２と同様の文様であるが、蓮弁が２よりも長いので区別は容易である。文様の細部では、中房には１＋６＋12の蓮子を、外区内



第９図　文字瓦拓影実測図

縁の蓮子数38、外縁の凸鋸歯文数30などそれぞれ2とは差異がある。丸瓦の接合は瓦当面に対しやや斜めに取り付けられる例が多い。この軒瓦にも瓦当裏面下部に突帯状の高まりがあるものがある。1点出土。

1・2は不丁官衙域東側の溝SD2340出土例に同笵例があり、8世紀前半に位置付けられている。3も文様・製作手法などからほぼ同時期に考えている資料である。

4は老司II式軒平瓦で、3点が出土している。1とセットとなる軒平瓦である。

文字瓦（第9・10図、図版21・22）

6種7点が出土している。いずれも叩打具の一部に文字を陽刻ないしは陰刻したものである。

第9図1は叩打具に2文字を陰刻している。平瓦凸面では左右逆の陽刻文字となっている。文字は判読できない。周囲に斜格子を刻んでいる。

2は叩打具に田の字形の区割を陰刻し、「大国」の2文字を併記している。これが平瓦凸面に叩打されて左右逆字となっている。文字の区割の周囲には細かい格子目が文字区割と直角に配置されている。軒平瓦にもこの叩打具痕を残すものがある。

3は「平井瓦」と読めるが、「平」の左側の点が欠落している。叩打具に文字を陽刻したもので、平瓦の文字周辺は高まりとなっている。この周囲はやや粗い斜格子文である。

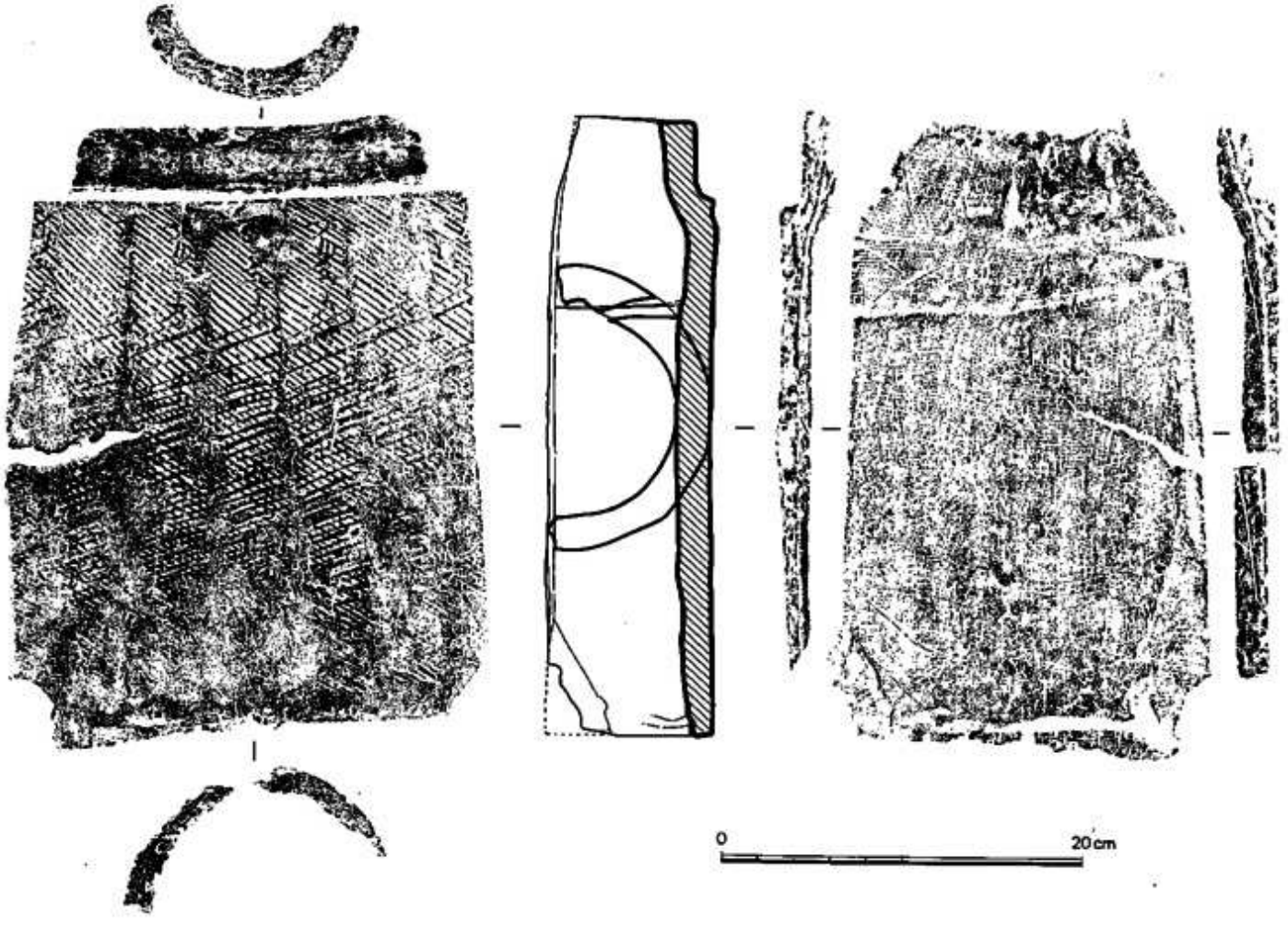
4は叩打具に二重の方形の区割を作り、「平井瓦屋」の4文字を陽刻したもので、平瓦凸面では文字は陰刻の左右逆字となっている。文字区割の外側には斜格子文が配置される。

5は叩打具に斜格子の陰刻に重ねて2字「八年」？が刻まれたもので、平瓦凸面では左右逆字となって表れている。この同笵平瓦例は甘木市堂ヶ尾廃寺に出土例がある。

1～5のうち4は2点出土したが、他はそれぞれ1点ずつの出土である。文字瓦に共通して、胎土に多量の砂粒を混じている。また、第9図では1・2・5の3例ではあるが、分割方法が狭端面から広端面にかけ浅い分割線が入れられ、焼成前に分割される。分割面には広い破面が残るなどの特徴がある。

第10図（1）は完形に近い丸瓦である。長さ34cm、広端弦幅15cmほどの大きさである。この叩打具痕に左右逆字と思われる3～4文字が見えるが判読はできていない。丸瓦凸面で計測できる叩打具の大きさは幅2.5cm以上、長さ27cm以上のものである。叩打具に刻まれた文様も他の叩打具とはやや異なり斜格子文を刻むが、上・下端では平行線文だけとなる。このことから上・下端に平行線文を残す陰刻線が叩打具に先ず刻まれ、斜格子目文を構成するための陰刻線は後から刻まれたものと推定できる。また、丸瓦凸面叩打具痕は玉縁を上にして右から左に重ね打ちされている。この丸瓦凸面では6回半の叩打された痕があるから、丸瓦円筒を一周叩打するのに13回ほど打廻したものと推定できる。

この丸瓦の分割方法も玉縁方向から広端にかけて、先ずナイフを入れ、粘土円筒の乾燥を待って二つに打欠いたものだろう。分割面には截面と破面とが残っている。



第10図　丸瓦拓影実測図（1）

丸瓦（第11～13図、図版22）

この調査では、完形に近い丸瓦数点が出土している。第10図の文字瓦もその一例である。以下、1～2点であるが好資料と思うので紹介したい。

第11図（2）は長さ30cm、広端弦幅15cmほどの玉縁付丸瓦である。凸面広端縁に近い部分は横方向にナデつけられる。このため叩打具痕から測れる叩打具の長さは24cmまでである。幅は6cmほどである。叩打文様に特徴がある。斜格子文の端部付近に渦巻状の文様が施されている。類似例は筑前芦屋町浜口廃寺出土瓦にみられる。凸面だけで玉縁を上にして右から左に7回叩打されている。分割の方法は第10図の丸瓦と同様である。

模骨は玉縁部が丸く撫肩である。布筒は玉縁近くに布をまつった痕跡があり、広端近くでは布端が下まで届かず模骨の地肌がそのまま写し取られた部分が残る。(註1)

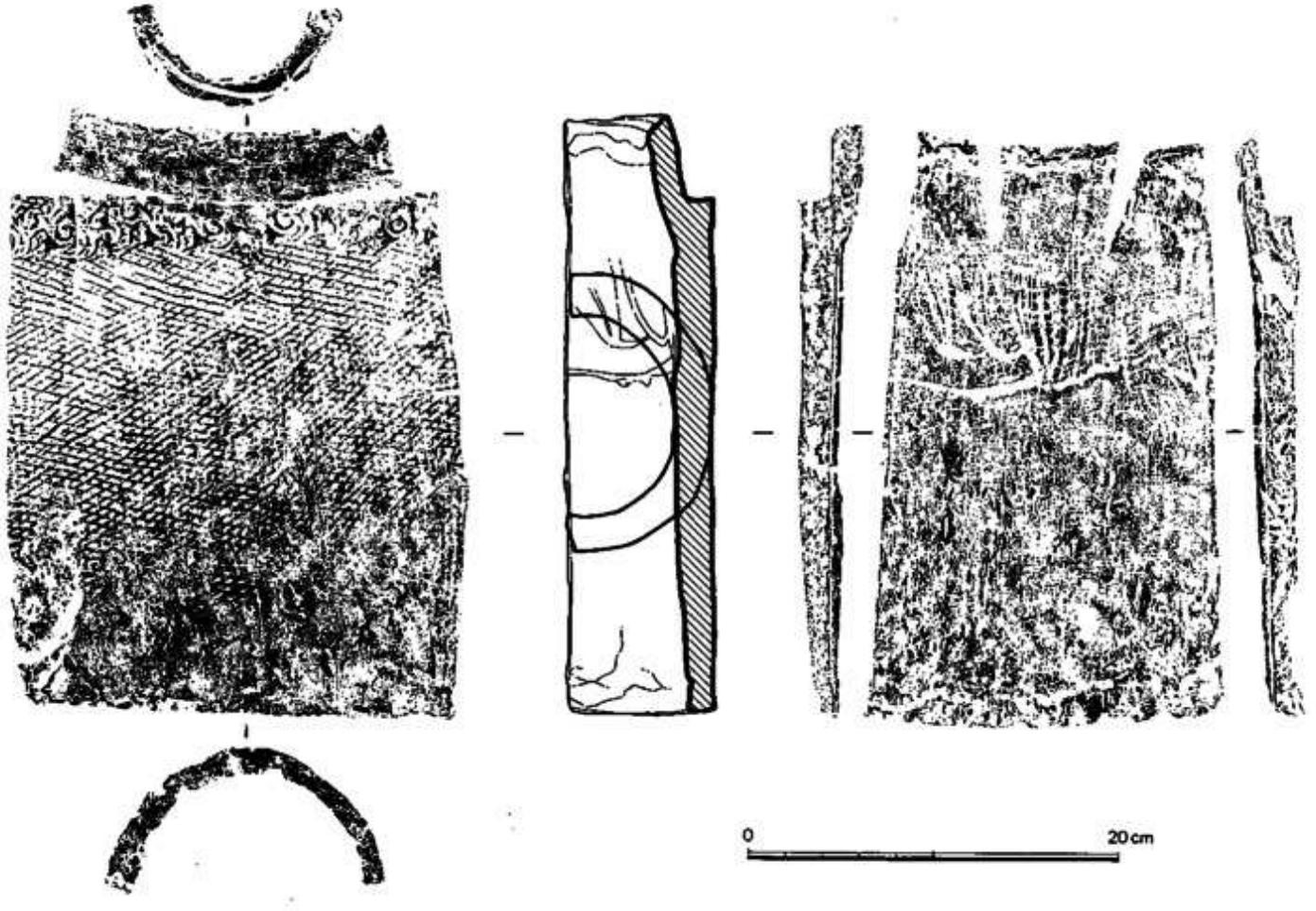
第12図（3）は長さ34.4cm、広端弦幅15cm（推定）ほどの玉縁付丸瓦である。凸面の叩打具痕は正方形に近いが、広端縁付近では平行線文、その上部では斜格子文となる。叩打具は計測可能範囲で長さ28cm、幅5cmほどである。広端縁近くを除いて全面を7回ほど叩廻している。広端縁近くに叩打具の端部痕が連続して見られるから、生瓦が模骨についた状況で上方向からか、または横方向から叩打したものだろう。観察者としては、上方向から叩打した可能性が高いものと思う。

また、玉縁の作り出しにあたっては、肩の部分に粘土を継ぎ足して作っている。丸瓦凹面では、前例と同じ様な形の模骨が使われている。布筒は中央やや右寄りに継目が残る。横方位中央やや上部で横糸が抜けた縦糸だけの部分がある。広端縁近くでは縦糸の痕跡だけが目立つが、布筒は広端縁まで被っていたものと思う。分割方法は前例と同じである。

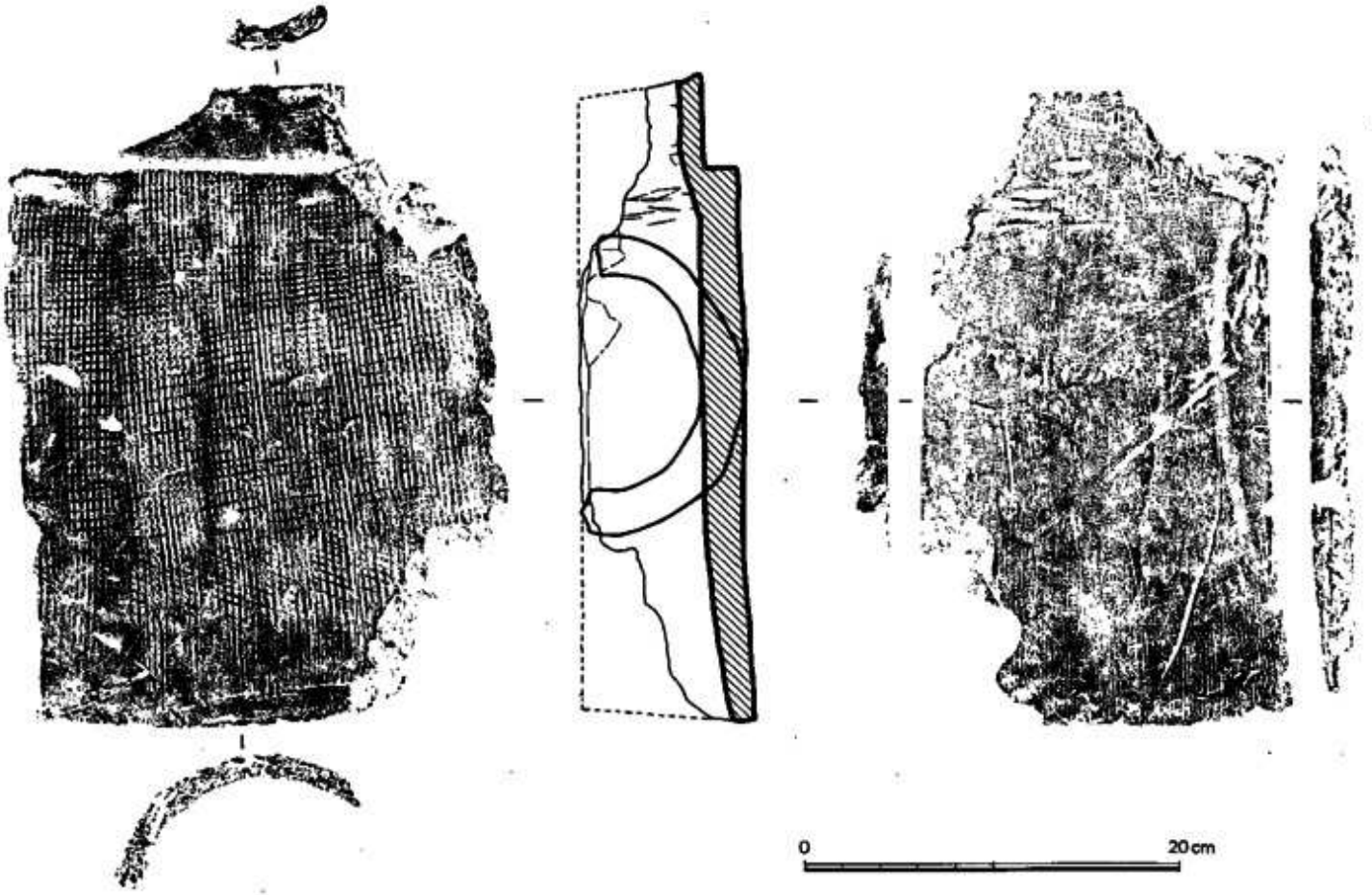
第13図（4）は長さ33cm、広端弦幅15cm（推定）ほどの玉縁付丸瓦である。叩打痕は玉縁の肩の部分・広端近くの叩打痕の重なり合った部分が横方向や縦方向に擦り消されている。6回叩打されている。叩打具は計測可能範囲で長さ24cm、幅5cmほどある。叩打具の斜格子文の中央やや左寄りの部分に斜格子の潰れた箇所があり、右側三つの叩打痕に現れている。広端縁に近い部分の叩打痕では、斜めの平行線だけとなっている。玉縁の肩の部分では肩を作り出すにあたって他の粘土が付加されており、この部分が剥離した痕が認められる。

模骨は肩の部分で撫肩の段を作っている。布筒の縫目は中央左寄りに溝状にあり、これを境に横糸の走る方向が異なる。また、一部に模骨をそのまま写し取った部分がある。分割方法は前者と同じである。

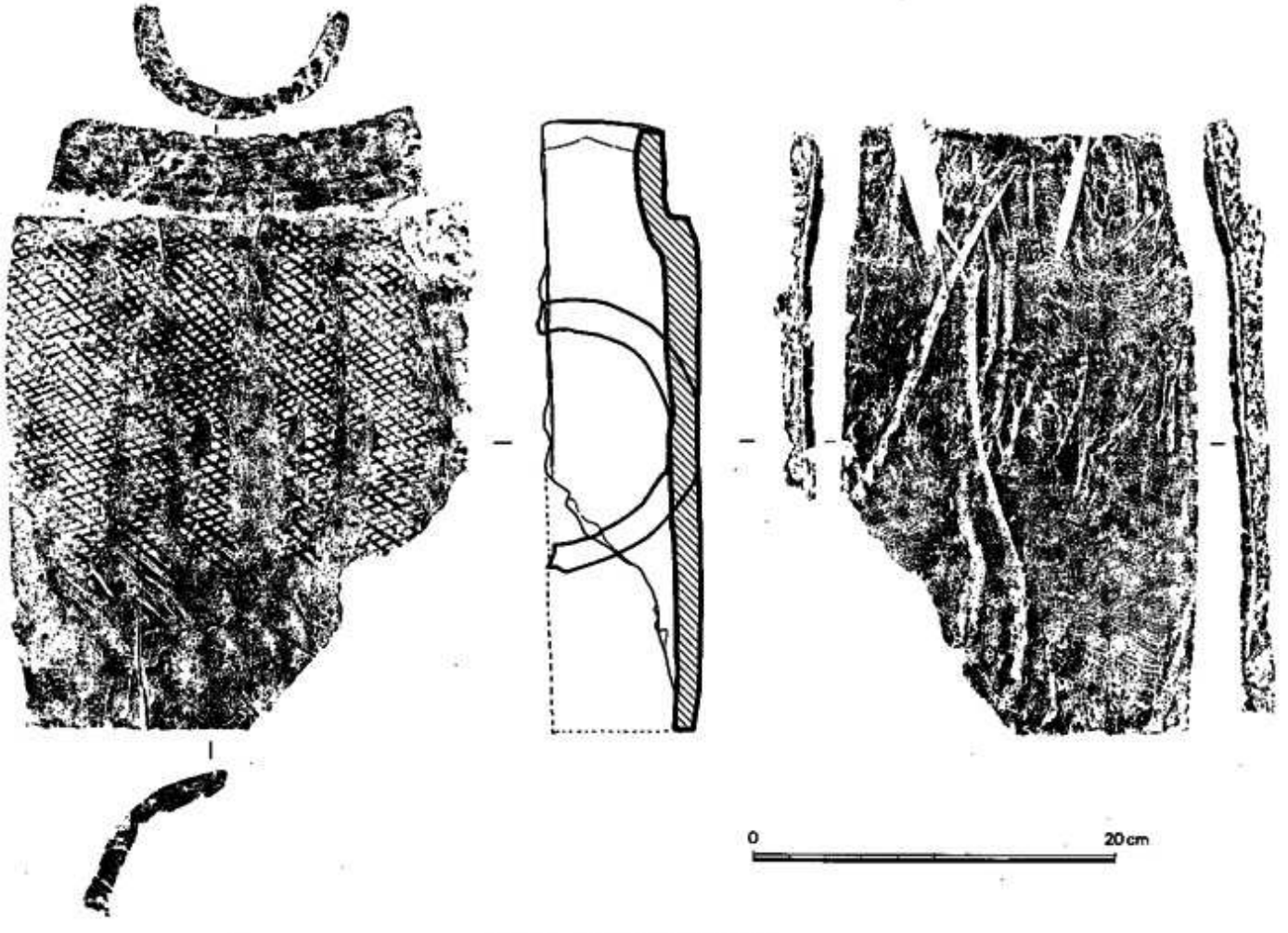
この項で報告した丸瓦に共通した特徴として、模骨は円柱形の上部が截頭円錐形で、玉縁部は撫肩となり分割突起は付いていない。また、使われた布筒は一ヶ所の継ぎ合わせ、玉縁は粘土を付加して形成するCタイプである。また、分割方法も生瓦の段階で玉縁から広端縁にかけてナイフ状の器具で分割截線を入れ、乾燥後分割したものである。



第11図　丸瓦拓影実測図（2）



第12図　丸瓦拓影実測図（3）



第13図　丸瓦拓影実測図（4）

鋳造関係遺物（図版20）

鏃羽口（a）　先端部の破片。SD2284出土。

小　結

今回検出した主な遺構には、掘立柱建物1棟・柵1条・溝1条・採土穴があり、時期的には8世紀前半～14世紀に及ぶ。

これまで日吉地区では、第32・75・79・80・114次の5次に及ぶ調査がなされ、掘立柱建物12棟・柵4条・溝4条・井戸5基・土壙5基・礫敷遺構などが検出された。掘立柱建物は大規模であり、位置的に月山東地区官衙の南側にあたること、政庁中軸線を境として西側の不丁地区官衙と対をなすことから日吉地区の建物群も官衙として性格付けられている。

これらの遺構は、大きくⅠ～Ⅳ期に分けられる。(註2)

Ⅰ期（8C前半～後半）

東西棟建物SB2000と東側柱筋を揃える南北棟建物SB2001で、SB1995・SB2195は後出する。今回検出のSB4080は、Ⅱ期のSB2240に切られることからⅠ期における。

Ⅱ期（8C後半～9C後半）

東西棟建物SB1990と南北棟建物SB2215・SB2220・SB2240がある。第80次調査の小結では、SB2220がSB2215を切るとしているが、SB2215の掘形は小さく、柱間は10尺であることからSB2220に後出すると訂正しておく。

Ⅲ期（9C後半～11C）

南側に廂を有する東西棟建物SB2200と総柱倉庫SB2230がある。Ⅰ・Ⅱ期はコ字形の配置をなすとされるが、Ⅲ期は前時期と異なる配置をなすと考えられている。

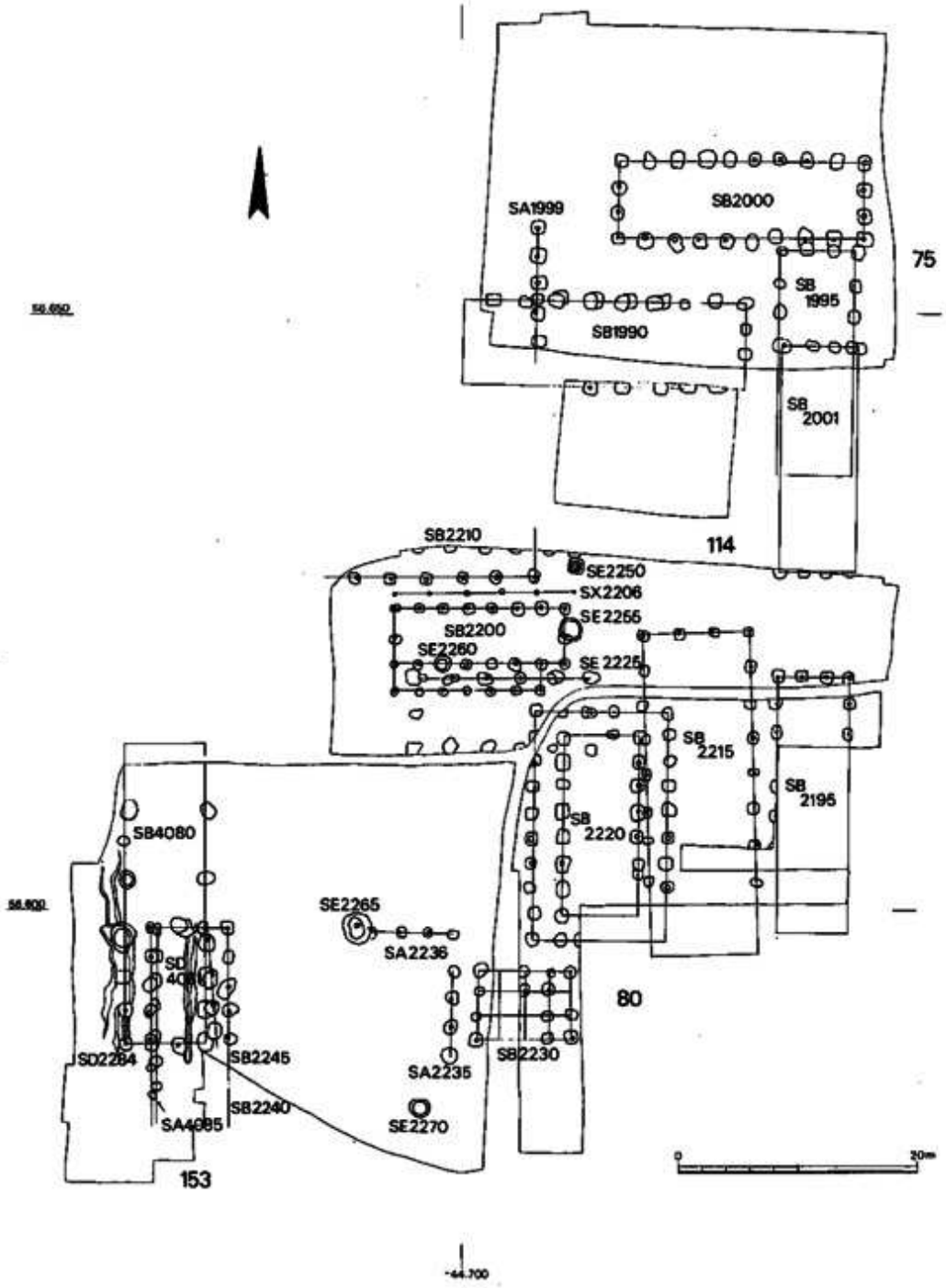
Ⅳ期（11C後半～12C中頃）

SE2250・2255・2260・2265・2270と小ピット群（建物）からなり、官衙的性格を失う。この時期以降に黒色粘土を採掘している。

今次調査は第80次調査と調査区の大半が重複し、いわば第80次の補足調査であったが、新たに掘立柱建物1棟を検出した。また、採土遺構は周辺の調査状況から中世に下るものと考えられる。

註1　大脇潔「研究ノート丸瓦の製作技術」『研究論集IX』奈良国立文化財研究所　1991
　　を参考としている。以下の丸瓦についての記述も同様である。

註2　大宰府史跡　昭和57年度発掘調査概報　1983　九州歴史資料館



第14図　日吉地区官衙主要遺構配置図

2．第154次調査

本次調査は観世音寺南門跡推定地の南南西約55mにあたり、住宅改築のための現状変更申請が提出され、文化庁の指示を受けて発掘調査を実施した。調査区の北側は昭和62・63年度に第109・111次として発掘調査を行っており、掘立柱建物・柵・井戸・土壙・溝・無数のピットなどが重複して検出されたことから、当調査地においても遺構の存在が十分予測された。

申請地には既存家屋があるため庭先に4×5.5m（22m²）の調査区を設定し、人力で掘り下げた。調査は平成6年1月17日から開始し、同月25日に埋め戻しまで終了した。地番は太宰府市観世音寺字堂廻175-1である。

検出遺構

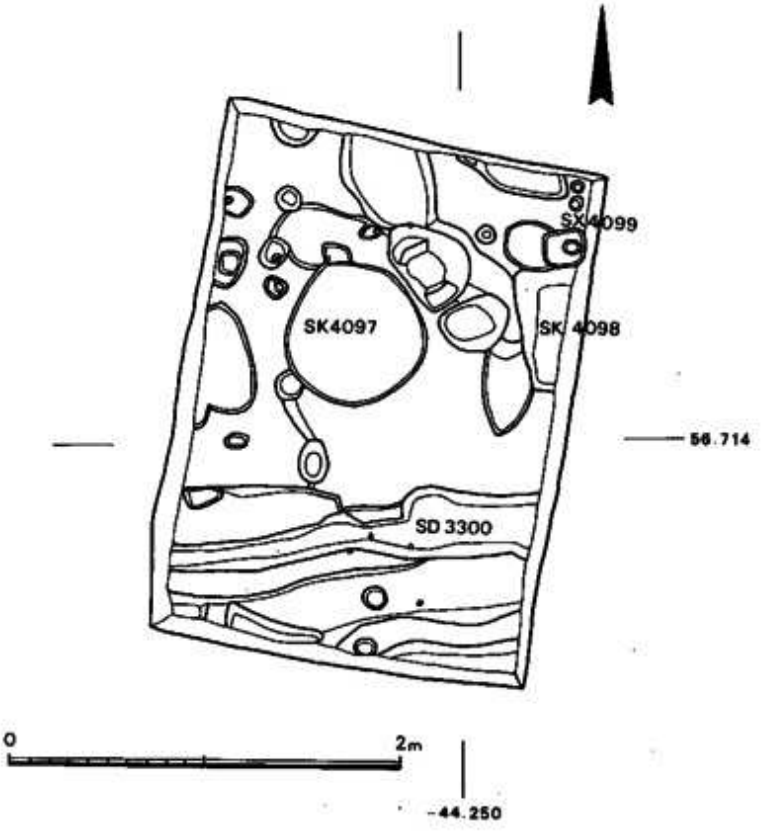
層序は上層より盛土（10cm）、青灰色の旧表土（5cm）、緑褐色砂質土（10～30cm）で、緑褐色砂質土の直下が遺構面となり、溝・ピット（柱痕跡）を検出した。

また、緑褐色土の下層には灰色粘質土・灰黄色砂質土の整地層があり、整地層を除去して土壙を検出した。

溝

SD3300　調査区南端で検出した東西溝で、整地層を切り込んでいる。幅1.7m、深さ0.3mを測る。底面は2本の小溝状を呈するものの、両者の出土遺物に時期差はない。埋土からは14世紀代の遺物が出土しており、第111次検出の溝に接続するものと考えられる。

土壙



第15図　第154次調査遺構配置図

SK4097　調査区の中央に位置し、灰黄色砂質土を除去して検出した。円形を呈し、径1.44mを測る。黒色粘土で埋められており、検出当初は井戸の可能性を考えて掘り下げたが、深さ0.2m程で底面に達した。

SK4098　東壁際北寄りで検出した。南北長1.3m、深さ0.4mを測るものの調査区外に広がるため詳細は不明。

出土遺物

SD3300出土土器・陶磁器（第16・17図、図版23・24）

土師器

皿a（2～13）　口径7.5～9.4cm、底径5.2～6.9cm、器高1.1～2.0cm。4のように深めのものもある。底部は2を除いてすべて糸切り。底部内面はナデ調整。6・9以外の底部外面には板状圧痕が残る。13の内外面には油煙が付着する。

皿b（1）　口径7.2cm、底径4.3cm、器高1.9cm。底部は糸切り。底部内面はナデ調整で、板状圧痕を伴う。

皿c（14）　口径8.4cm、高台径6.6cm、器高2.3cm。底部内面はナデ調整。

杯（15～34）　通有のタイプである15～29・32と、口径に比べ器高が低い30・31・33・34に分かれる。前者は口径11.6～15.0cm、底径7.5～10.6cm、器高2.5～2.9cm、後者は口径15.0～15.3cm、底径10.5～11.4cm、器高2.0～2.4cm。底部はすべて糸切りで、底部内面はナデ。16・17・20～23・26・28・30～34の底部外面には板状圧痕を伴う。17・19には油煙が付着する。

土師質土器

鍋（35）　二重口縁の鍋の小破片である。体部の内面は横方向の刷毛目調整、口縁部はヨコナデ調整。外面には煤が付着する。

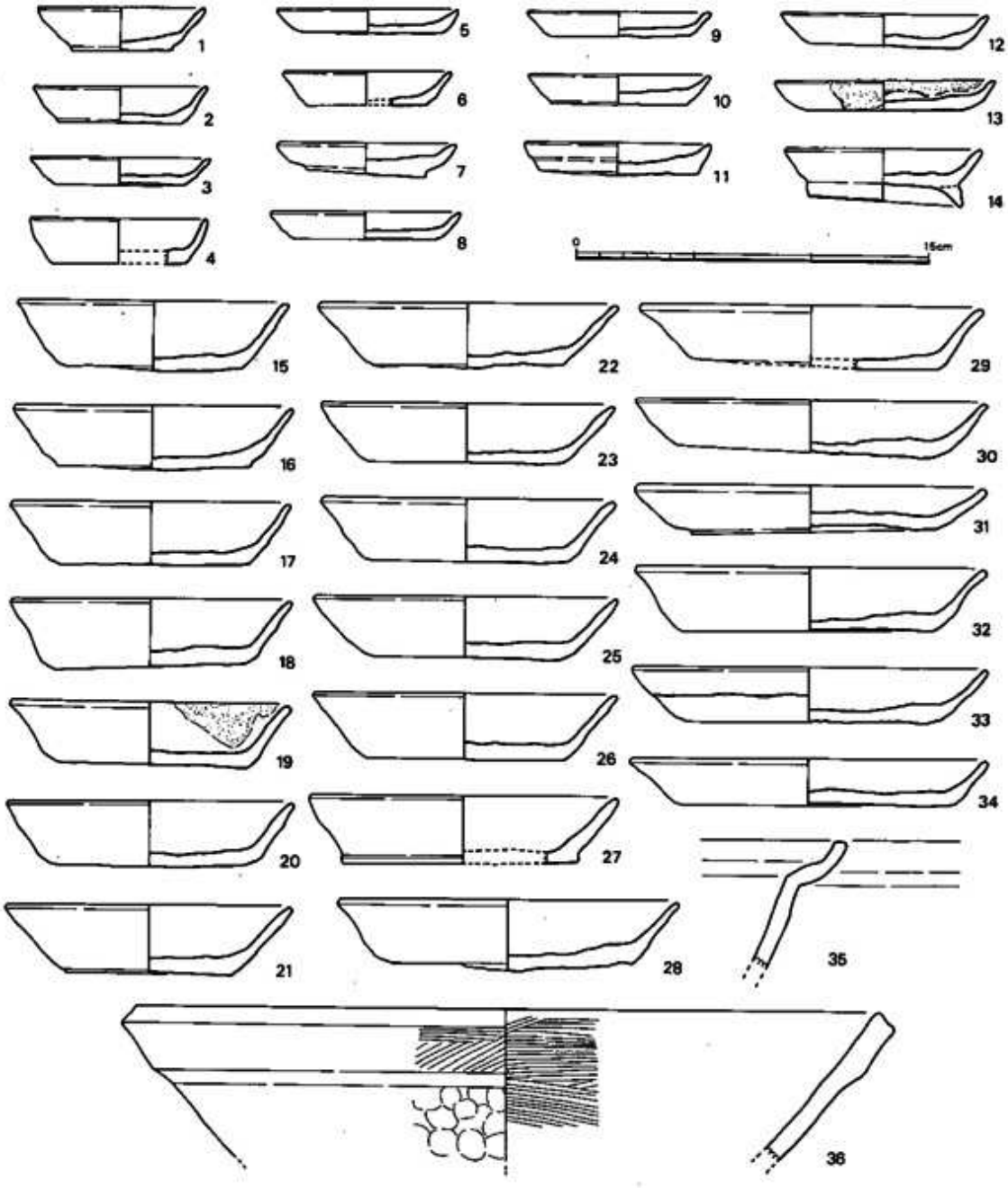
瓦質土器（36）　こね鉢。口縁部は外面に段をもって肥厚する。口縁部外面から内面にかけては横方向の刷毛目調整。体部外面は指オサエによる調整で、指頭圧痕が顕著である。内面の下位は使用により平滑になる。胎土は粗い。復原口径33.0cm。

中国陶磁器

白磁

皿（37）　口縁部の釉を掻き取り露胎とするタイプで、外面の体部下半から底部にかけても露胎である。灰白色の胎に空色味をおびた透明釉をかける。見込みには沈線状の段をもつ。口径9.0cm、器高2.6cm。IX類。

椀（38～40）　38は細く高い高台をもつもの。見込みに沈線状の段をもつ。胎は灰色で、やや茶味をおびた灰色の釉をかける。39・40は見込み部分を輪状に掻き取る。39は白色の胎に灰白色の釉を施す。40の高台は非常に厚い。茶灰色の極めて粗い胎に緑味をおびた灰色釉を施す。



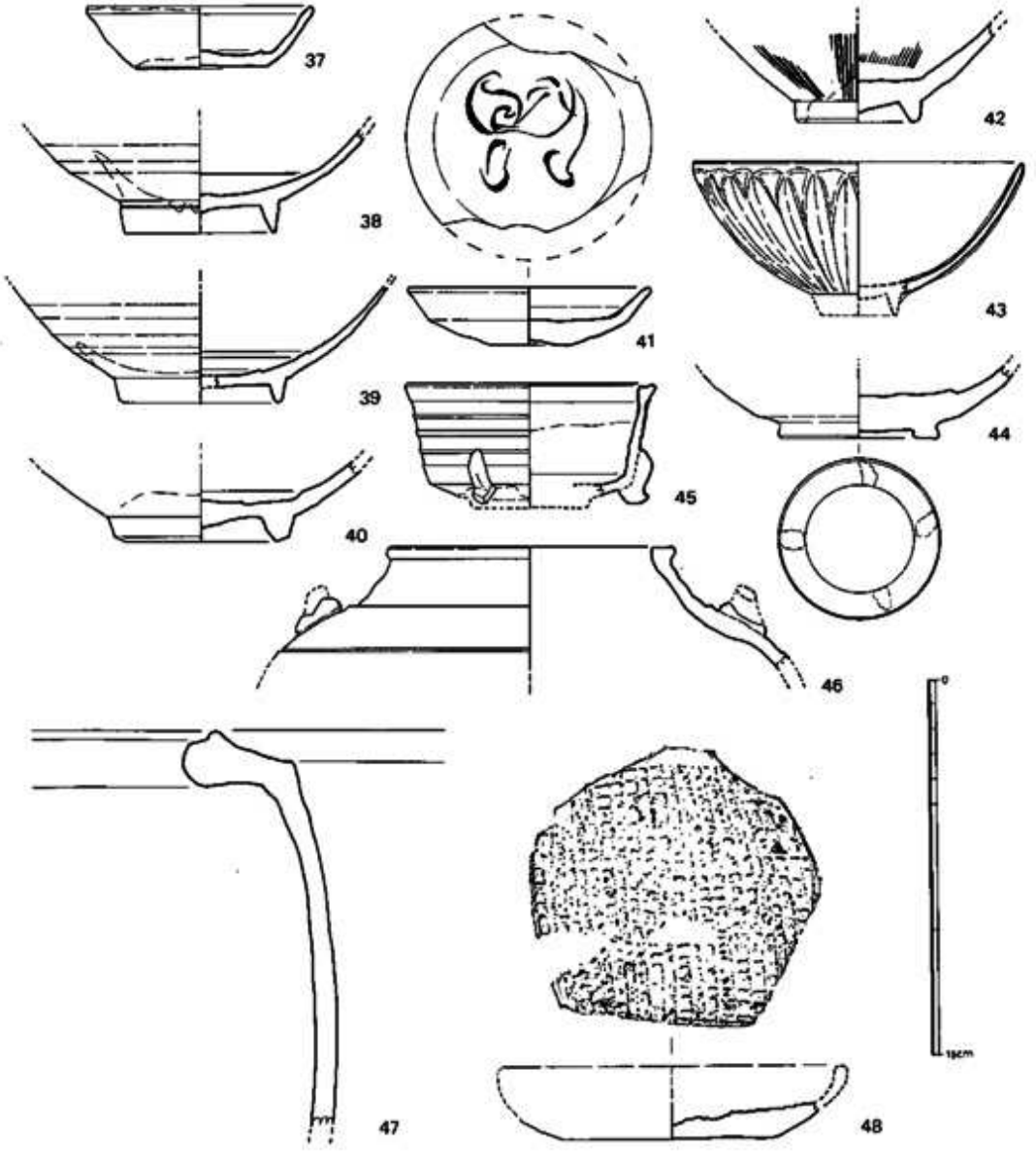
第16図　SD3300出土土器実測図（1）

見込みには重ね焼きによる色調の変化が見られる。Ⅷ類。

青磁

Ⅲ（41）　見込みにヘラ状工具で片彫りの文様を入れる。灰色の胎にやや厚めのくすんだ緑色釉を施す。底部は露胎となる。口径9.7cm、器高2.3cm。龍泉窯系。

椀（42～44）　体部外面と見込みに櫛描を有する。灰色の胎に黄味をおびた緑色の釉を施す。



第17図　SD3300出土土器・陶磁器実測図（2）

底部外面から高台部にかけては露胎となる。同安窯系。43の体部は丸味をおび、外面には蓮華文を配する。淡灰色の胎にくすんだ淡緑色の釉を施す。釉は厚く、内外面ともに貫入が見られる。復原口径13.2cm。44は低平な高台を削り出す。見込みに沈線状の段をもつ。明灰色の胎に緑色釉を施す。また、高台畳付には四ヶ所に目跡が残っている。43・44とも龍泉窯系。

香爐（45）　体部下半から低部に接して獣脚を貼付する。一脚のみしか残存していないが、恐らくは3ヶ所に付くものであろう。底部は欠失するが、諸類例から段がついて凸形になるものと考えられる。体部外面には4条の凸線を廻す。明灰色の胎にややくすんだ緑色釉を施す。外底部と内面の体部下半から底部にかけて露胎となる。復原口径10.0cm。

中国陶器

壺（46）　褐釉壺の口縁部から肩部にかけての小破片。耳は一個しか残存していないが四耳壺になるものと思われる。頸部と肩部との境に明瞭な段をもつ。灰色の胎に緑味をおびた褐色釉を施すが、剥落が著しい。復原口径は12cmほどを測る。

甕（47）　体部の上半は内弯しながら立ち上がり、口縁部は内側に屈曲して端部を丸く仕上げる。胎土は赤茶色で粗い。内外面とも白色の化粧を施している。体部外面はナデ調整、内面はヨコナデ調整。

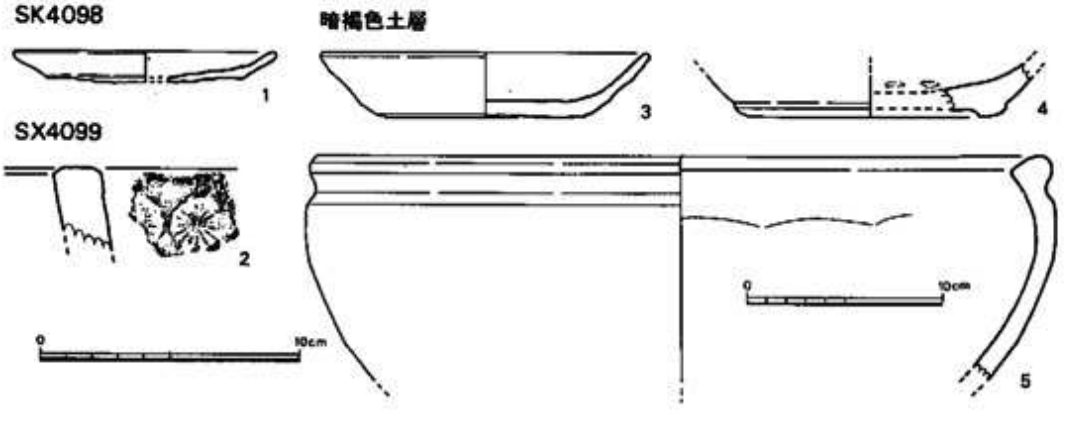
国産陶器

おろし皿（48）　底部内面にヘラでおろし目を刻む。体部外面はヨコナデ調整、底部外面は糸切り後、部分的にヘラ削り調整する。内面には淡黄緑色の釉がかかる。胎土は精良で、黄緑色を呈する。焼成は堅緻で硬質である。瀬戸産。

SK4098出土土器・陶磁器（第18図、図版25）

土師器

皿（1）　口径10.2cm、器高1.2cm。底部外面は糸切り、底部内面はナデ調整で、板状圧痕を



第18図　SK4098、SX4099、暗褐色土層出土土器・陶磁器実測図

伴う。

SX4099出土土器（第18図、図版25）

瓦質土器

鉢（2）　口縁部外面に菊花のスタンプを押印する。内外面ともミガキ調整。

暗褐色土層出土土器（第18図、図版25）

土師器

杯（3）　口径12.6cm、底径7.6cm、器高2.5cm。底部内面はナデ調整。糸切り。

中国陶磁器

青磁

椀（4）　茶灰色の緻密な胎に、濃緑色の薄い釉を全面に施す。見込みと高台畳付に目跡が残る。

中国陶器

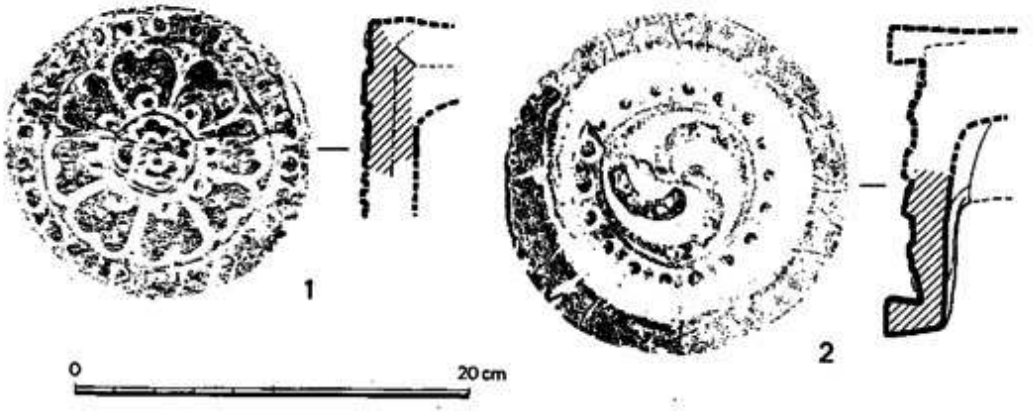
鉢（5）　体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部は玉縁状に肥厚する。体部外面は斜位の細かい平行タタキ、体部内面はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整。内面の口縁部下には弧状のアテ具痕が残る。胎土は赤茶色で粗く、内面には緑味をおびた黄緑色の釉がかかる。口径38.0cm。

瓦類

軒丸瓦と丸・平瓦片などが出土している。丸・平瓦片については破片資料であり、遺構との関係からも特別に問題として取り扱うような資料ではない。ここでは、軒丸瓦2点の報告に留めておく。

軒丸瓦（第19図、図版25）

1は安楽寺（太宰府天満宮）の創建期の瓦である。観世音寺境内での調査では、奈良・平安時代の軒丸瓦出土量の3％近くを占め、比較的よく出土している軒丸瓦である。このうち隣接する、第111次調査区（1988年調査）では11点と最も多かった。今回の調査では、第111次調査で検出し



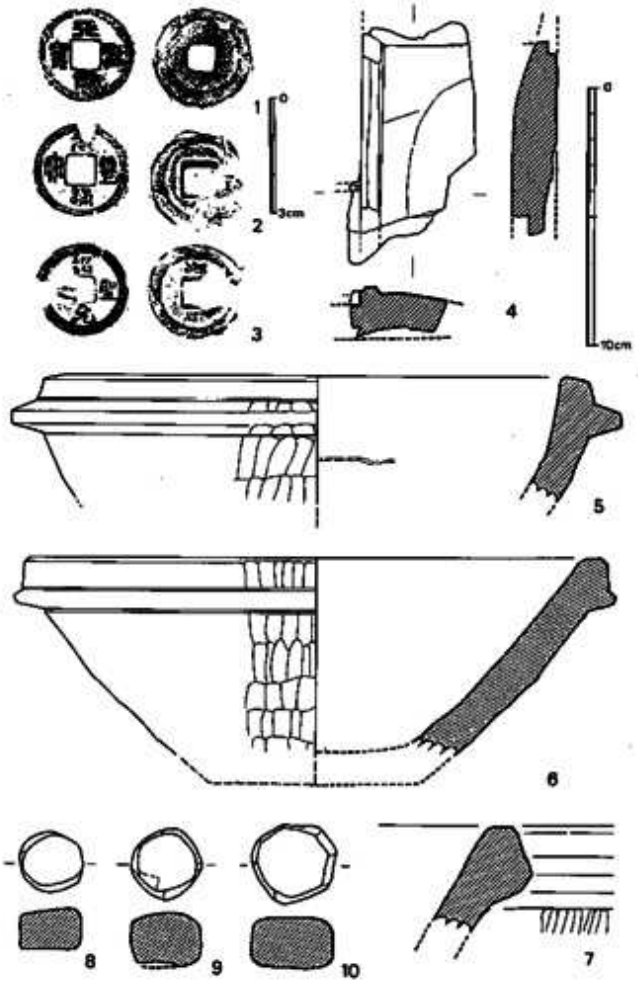
第19図　軒丸瓦拓影実測図

ている東西溝SD3300の延長部分の上層から見つかっている。

瓦当文様は中房に１＋４の蓮子を配し、蓮子の外側に子葉状に花弁を作る。中房の花弁には花弁に対応する突起を内側に作り出している。内区の花弁は単弁八葉蓮華文であるが、三重に表現される点、重弁と理解すべきかもしれない。内外区を区画する界線にも中房の界線と同様、内側を向く突起が配置されている。外区には珠文と凹レンズ状の文様とが交互に配置される。瓦当笵型は側面に見られないから外区までのものであったろう。枷型などを使っている様子もない。瓦当笵に粘土を２回詰めた痕跡が認められるが、この時に丸瓦の接合位置を溝状に作っている。丸瓦は端部の内外を削り取って（内側だけの例もある）差し込むようにし、周囲に粘土を当てて接合している。このため、丸瓦接合位置の周辺が高まりとなっている例が多い。胎土に砂粒を含むが、良質の粘土で焼きもよい。

２は右廻りの巴文軒丸瓦である。巴の尾は長く、三つの尾が珠文帯との界線を形成する。珠文は大粒で、18子前後が配置されたものだろう。素文縁は高く、幅も比較的狭い。瓦当笵への粘土の詰め方を見ると、素文縁に先ず最初の粘土を詰めているため笵の外側に固定し得る枷型などの存在を考えるべきかもしれない。丸瓦は珠文帯と0.2cm程の所に先端が認められ、接合のために予め設定された溝の様な痕跡はない。粘土に雲母粒を含む砂粒が多量に混ぜられている。灰褐色で、焼きはやや悪い。東西溝SD3300上層から出土した。

平成３年度概報で報告した第126次調査区（観世音寺講堂跡）の調査では、巴文Ｉ類（天正14年以前）に入れ得る資料であるが、第111次調査及び今回の調査からみる共伴資料では、この巴文軒丸瓦も14世紀頃のものとして矛盾はない。



第20図　出土銅銭・石製品・土製品実測図

銅製品（第20図、図版20）

銅銭（1～3）　1は「天聖元寶」、2は「元宝通寶」、3は「紹聖元寶」。初鋳年代はそれぞれ1023年、1078年、1094年。1は暗褐色土層、2・3はSD3300出土。

石製品（第20図、図版20）

石硯（4）　大半が欠失しているが、破損面から頭部であることが看取できる。陸部と海部の境は不明瞭である。硯面はよく擦れており、やや凹んでいる。外堤部外側の欠損面から見ると、硯部の左側には横方向の仕切りによって上下に区切られたスペースがあったことが判る。筆或いは墨置きであろうか。また、仕切りには段があったものと思われる。輝緑凝灰岩製で、色調は暗赤茶色を呈する。

滑石製石鍋（5～7）　すべて口縁部下位に鍔を廻すもので、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。外面は縦方向の削り、内面はミガキ調整。外面には煤が付着する。復原で5は口径21.0cm、6は22.4cmを測る。SD3300より出土。

土製品（第20図、図版20）

円盤状土製品（8～10）　いずれも瓦の周縁を打ち欠いて磨き、円盤状に整えたもの。10の上面には縄目のタタキが残る。8はSK4097、9・10はSD3300より出土。

小結

今次調査は22㎡と狭小ではあったが、溝・土壙・ピットを検出した。東西溝は第111次調査で検出したSD3300に連続するもので、さらに東側へ延びることが判った。

第109・111次調査では、9世紀から16世紀にかけての掘立柱建物・柵・井戸・溝・土壙・多数のピットなどが上下2層にわたって検出され、Ⅰ～Ⅲ期に分類されている。[註] SD3300はⅢ－2期（14世紀）に比定されているが、Ⅰ（9～10世紀）・Ⅱ（11～13世紀前半）期は一部の遺構を除いてSD3300より北側には存在せず、観世音寺南辺築地とSD3300の間は空閑地であったと推測されている。SD3300の北側に遺構が展開するのはⅢ－1期（13世紀後半）に入ってからで、14世紀には建物・井戸・溝・土壙などの遺構が密集する。これは、参道を挟んで東側の第130次調査でも同様の状況であり、14世紀に入って溝SD3840が掘削される。

この様な、遺構の消長は古代の観世音寺の寺域と密接に関連するものであり、観世音寺本体のみならず周辺部の様相も明らかにしてゆく必要性があろう。

註

大宰府史跡　昭和63年度発掘調査概報　1989　九州歴史資料館

第21図　第156次調査遺構配置図

3．第156次調査

大宰府政庁跡の県道を挟んだ南側の地域では、これまで第58・73・81・82・86・131・134・136・140次の９次に及ぶ調査を行っている。政庁中軸線の延長上には、京の朱雀大路に相当する南北道路の存在が想定されている。しかし、現在までに朱雀大路に関する遺構は確認されておらず、第81・86・140次調査においては掘立柱建物・暗渠施設を、第58・73・134次調査では溝・土壙・採土遺構などを検出してはいるものの政庁南門前面域には空閑地が存在し、広場として機能したものと考えられている。

当該地においては、早急に宅地開発を行うということではなかったが、将来的には住宅を建設したいという土地所有者の意向もあり、政庁南門前面広場に東接する日吉地区官衙域との境界を確認することと採土遺構の時期を明らかにすることを主眼として発掘調査を行った。

地番は太宰府市観世音寺272-1・同272-9で、調査面積は450㎡である。平成６年１月24日から調査を開始し、終了したのは約一ヶ月後の２月21日であった。また、表土剥ぎと埋め戻しは重機を用いて行った。

検出遺構

層序は上層から真砂土、灰色砂質土（旧耕作土）、茶褐色砂質土、黄褐色粘質土（床土）で、その下の緑色粘砂層には瓦片・花崗岩片が多量に含まれ、調査区の東半部に広がる。緑色粘砂層を除去した後に不整形の落ち込みを検出した。また、黒色粘土を採掘したと考えられる採土遺構の上面には、瓦片を包含する緑色粘砂層が広がっていないことから瓦包含層よりも後出すると言える。建物跡・区画溝などは検出していない。

土壙

SK4111　調査区の南壁中央で検出した土壙で、規模を確定するために一部を拡張したが、南辺はつかんでいない。北辺長2.4m、深さ0.3mで、底面中央がやや下がる。隅丸方形を呈するか。壁面は焼けていなかったが、埋土中には焼土・炭化物を多く含んでおり、大型の鋳型片が出土した。鋳造関連の遺構と思われる。また、周囲には0.1m前後と0.3mのピットが存在するが、土壙に伴うものかは判らない。

その他の遺構

SX4110　調査区の北東部で検出した不整形の遺構で、南北長11m、東西長13m、最深部で0.2mを測る。底面は平坦ではなく起伏がみられ、部分的に土壙状を呈する。瓦片を多く含む緑色粘砂で埋められていた。

SX4112　調査区の南西部で検出した不整形の落ち込みで、南北長6.2m、東西長4.4m、中央部での深さ0.16mを測る。東辺側には幅1.5m程の溝状の遺構が伴い南に延びている。

SX4113　SK4111の1m東側で検出したピットで、径0.5m。埋土に炭化物を含んでおり、鋳造遺構SK4111と一連のものか。

SX4114　調査区の南端中央で検出した楕円形の土壙で、長径0.9m、短径0.7m、深さ0.1mを測る。埋土は茶灰色を呈し、炭化物を含んでいた。当土壙も鋳造遺構SK4111と一連のものか。焼塩壺小片が出土している。

SX4115　黒色粘土が分布する調査区の西半部には瓦包含層がみられず、代わって黄白色土ブロックを含む茶灰色の粘質土が広がっていた。黒色粘土の分布と不整形土壙の輪郭が重複しており、瓦片を若干含むため掘り下げたところ、底面は極めて凹凸が著しく、鋤痕も確認されたことから黒色粘土を採掘した採土遺構と考えた。

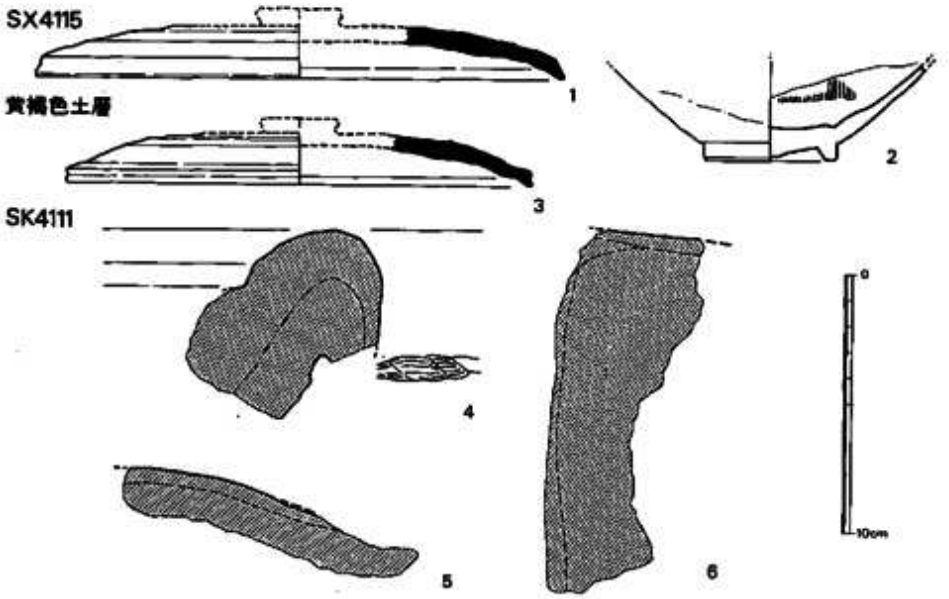
土取りの方法は、粘土をむやみに掘るのではなく、鋤の幅分（15cm程）を方形に区切って採土している様子が、直線を呈する壁面からも窺えた。埋土中から青磁椀が出土しており、採土の時期は12世紀まで下ると考えられる。

出土遺物

SX4115出土土器・陶磁器（第22図）

須恵器

蓋（1）　内面の口縁部と体部の境は不明瞭である。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整を施す。



第22図　SK4111、SX4115、黄褐色土層出土土器・陶磁器実測図

青磁

椀（2）　内面に櫛描きを施し、見込みには沈線状の段をもつ。灰色の胎に透明感のある緑灰色の釉をかける。同安窯系。

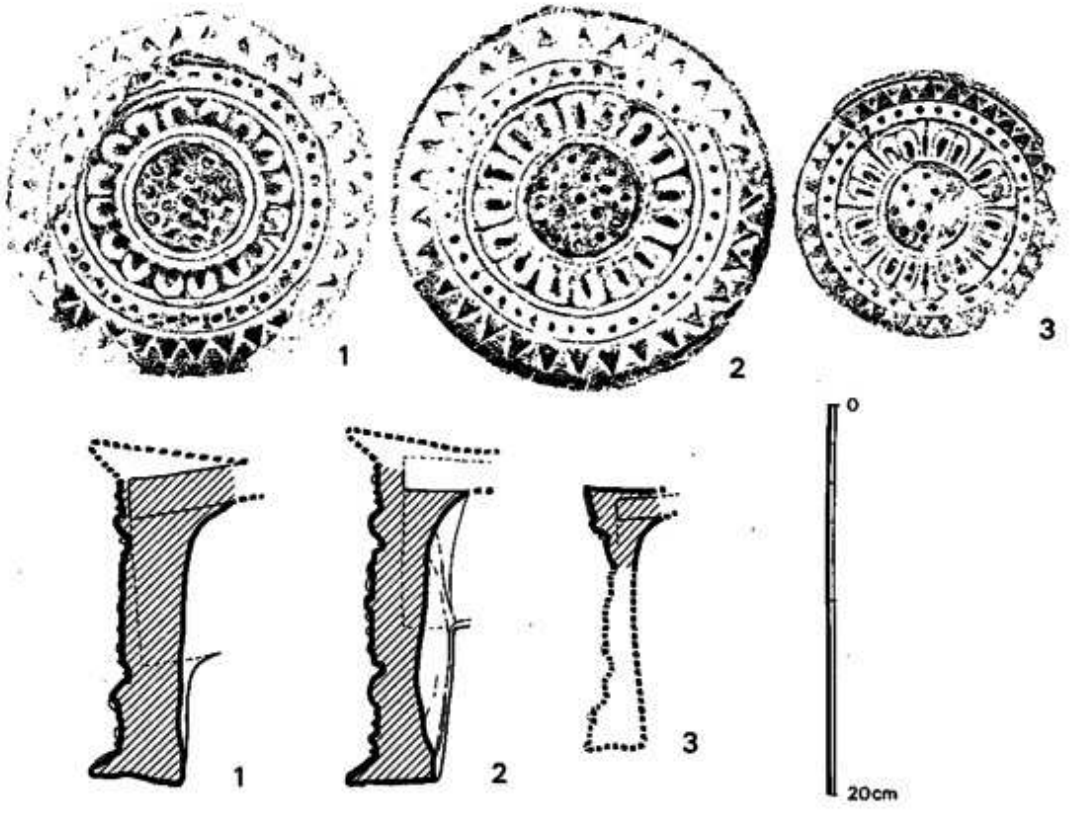
黄褐色土層出土土器（第22図）

須恵器

蓋（3）　天井部は回転ヘラ削り調整。

鋳造関係遺物（第22図、図版26）

鋳型（4～6）　4は外型で内面に段をもつ。厚さ0.2cmほどの仕上げ真土には精良な粘土を用いている。中真土は砂礫を含み、明黄褐色を呈する。粗真土は黒茶色で、スサ・砂礫を混じえている。外面には縄による型の縛結痕が残る。5は精良な粘土を用いた仕上げ真土と、スサ・籾がら・砂礫を多く混じえた粗真土からなる。6は台状を呈する外型と思われる。緩く傾斜する上面には精良な粘土を混じえた仕上げ真土が残る。その下部から側面にかけて砂礫・スサを混じえた中真土様の土を張る。粗真土は黒茶色を呈し、スサ・籾がら・砂礫を多く含む。いずれも小破片のため全形は知り得ない。すべてSK4111より出土。



第23図　軒丸瓦拓影実測図

瓦類

調査区が大宰府政庁前面の広場と想定している場所でもあり遺構として顕著なものがない。ここでは粘土を採掘した遺構などが認められた程度であるのに対し比較的古い瓦が量的にも多く、調査区東辺部で出土している。遺構が上述の状況であるので、遺構と出土瓦との関係や瓦の年代観を考える上で取り上げ得る状況はない。軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の出土があった。

軒丸瓦（第23図、図版26）

軒丸瓦３種28点の出土があった。１は内区の蓮弁が短いのが特徴である。中房に１＋６＋10の蓮子を配置し、内区の蓮弁は複弁八弁の蓮華文で間弁はない。外区内縁は蓮子36、外縁は凸鋸歯文32が配置される。側縁部は丸瓦接合部では縦方向のナデ、下部は瓦当縁に沿って横方向のナデである。丸瓦は瓦当面の珠文帯の0.5cmほどの後に先端が斜め上から取り付く。

瓦当は3.2cmほどと肉厚である。瓦当裏面は指腹によってナデつけされる。下端部には低い突帯状の突起が丸瓦の側面から下端部にかけてあり、上面を指腹でナデつけている。石英粒を胎土に含んでいるが、良質の粘土が用いられる。硬く焼き上げられ、暗青灰色で須恵器の焼き上りに近い。８点が出土している。

２は１と同系統の軒丸瓦である。文様の細部では中房の蓮子数が１＋６＋12となり、複弁八弁蓮華文の蓮弁が１よりも長い。外区内縁の蓮子数38、外縁の凸鋸歯文数は30である。笵型の端部が側縁部瓦当面近くにあり、その外側0.8cmほどの平坦面が形成されているから枷型が使用されたものと思われる。

丸瓦の先端は珠文帯の後ろ1.5cmほどの位置にある。瓦当裏面は丸瓦接合部の粘土を指で押さえた痕が残り下部は指腹によるナデである。下端部には突帯状の突起が形成され、丸瓦側面から指でナデつけられている。小量の砂粒を含むが良質の粘土が用いられる。灰白色に焼き上がる。今回の調査では16点と最も多い出土量であった。

３は外区珠文帯・凸鋸歯文帯が内区よりも一段高くなる複弁八弁蓮華文のやや小型の軒丸瓦である。同じ文様形式の大型の瓦が他にあるが、この軒丸瓦の瓦当径が13.5cmほどであるのに対し、大型のものは3.0cmほど大きい。

中房に１＋４＋８の蓮子を配置し、内区の蓮華は先端が尖り、間弁が一段高い内外区の界線下に取り付いている。外区内縁の蓮子数32、外縁の凸鋸歯文数32と四分割が意識された文様の割付となっている。笵型の端部は側縁にみられず、外区鋸歯文外側の界線の外側が平坦面となり残っているが、平坦面の幅が一定していないから外区外側界線までが瓦当笵であったものか。

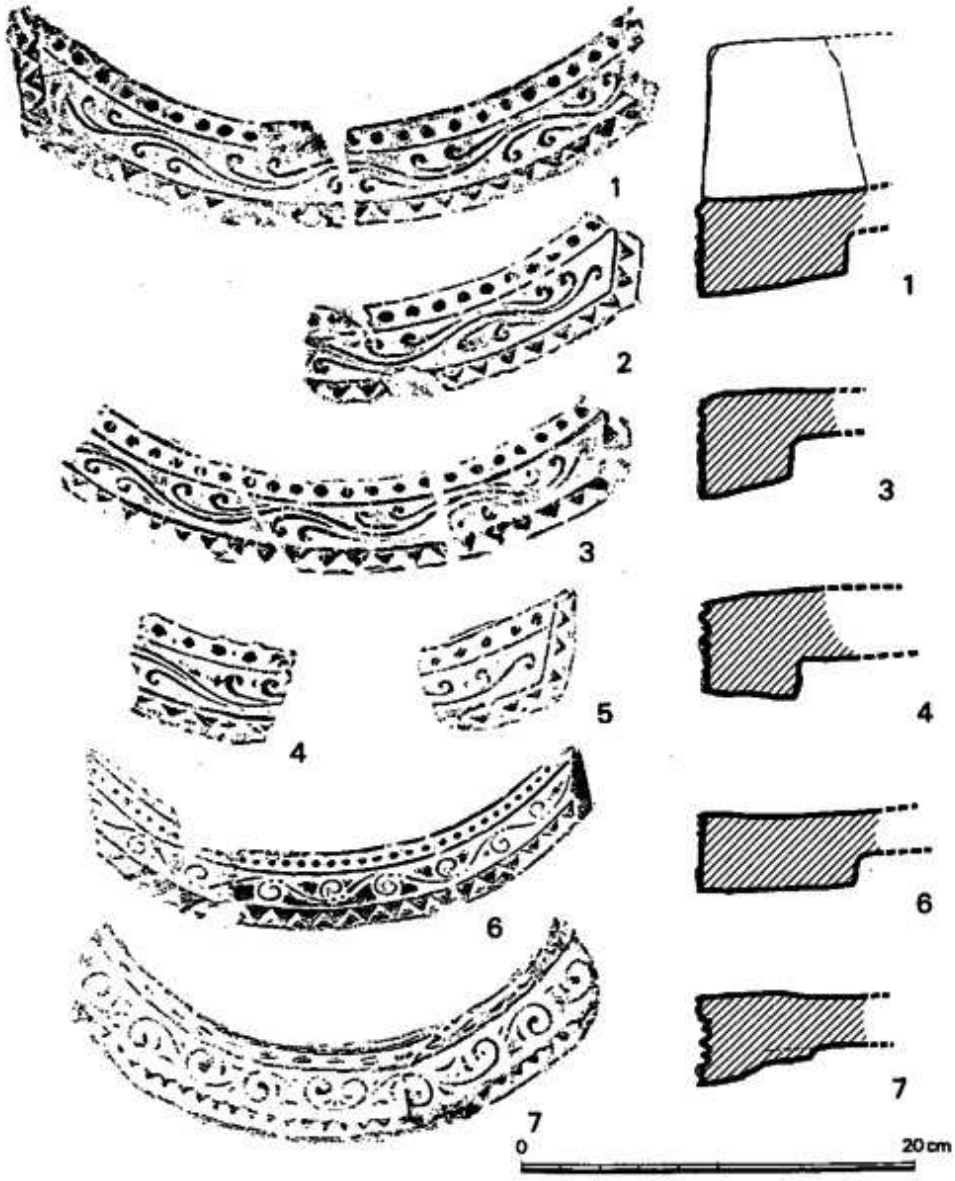
丸瓦の先端は凸鋸歯文帯の後ろ1.5cmほどの位置に残る。瓦当の接合にあたっては、丸瓦広端面にヘラで傷を入れ、瓦当裏面に予め丸瓦接合位置を溝状に窪めた部分に差し込んでいる。少量の砂粒を含むが良質の粘土が選ばれ、暗灰色に硬く焼き上げられている。４点出土。

１は不庁官衙域東側の溝SD2340の出土瓦例に同笵のものがある。２も１と同系統の文様であ

る。3は同形式の文様の大型の軒丸瓦との時期差は考え難く、大型のものがSD2340から出土している。三者とも8世紀前半の軒丸瓦と考えてよい。

軒平瓦（第24図、図版26・27）

4種81点の出土があった。1～3は老司II式軒平瓦である。粘土紐桶巻作りで、平瓦部には縄目の叩打痕を残す。1～3に瓦当文様の上での相違は見出し得ていない。1は左脇区中央の



第24図　軒平瓦拓影実測図

鋸歯文から上帯の左から３番目の蓮子にかけて笵の傷がある。２は上帯右から８番目の蓮子から下帯の右から３番目の鋸歯文にかけて笵の傷が残る。笵の傷はないもの、左隅だけにあるもの、左右両方にあるものとがある。１・２は段顎の長さが長いもの、３は段顎の長さが短いものを図にした。笵の傷は顎の長短とは無関係に両者にある。今回の調査では、老司Ⅱ式軒平瓦66点が出土した。

第130次調査（1991・92年調査）で出土した老司Ⅰ式軒瓦セットでは、精良な胎土で砂粒を含まないもの（ａ類）が軒平瓦では長顎で古式と考えられ、一定の砂粒を含むものが短顎で新式であるとの見通しが得られている。この知見をもとに老司Ⅱ式軒平瓦について顎部の長さに長短があることに着目したが、文様・笵の傷・製作手法・胎土等の点で新旧を認め得るような相違は見い出していない。但し、長い段顎と短い段顎の二種の相違は明瞭であるので、長顎のもの（ａ類）17点と短顎のもの（ｂ類）49点について比較しておこう。

ａ類　１の形状のもの。長さでは最長8.6cm、最短7.2cm、平均値7.74cmとなり、深さでは最深2.6cm、最浅1.6cm、平均値1.91cmである（深さについては15点のみ計測可能）。

ｂ類　３の形状の段顎のもの。長さでは最長5.0cm、最短3.6cm、平均値4.48cm。深さでは最深3.8cm、最浅1.4cm、平均値2.0cmである（深さについては41点のみ計測可能）。

４・５は同一の軒平瓦と思われる。かって、小田富士雄氏が「大宰府系古瓦の展開」の中で扱われたⅠ～Ⅸ式以外のものである。文様構成上、老司Ⅰ・Ⅱ式に最も近いものであるから出土点数は少ないものの大宰府史跡の既往の調査でも出土例があったものと思われる。杉塚廃寺に同笵例が出土している。２点出土。

６は右から左に流れる偏行唐草文で、１本の蔓が９回反転し、反転するたびに子葉が結節点から一つずつ派生している。上帯には35子の連珠文を、下帯には20の凸鋸歯が配置される。興味あるのは、脇区に相当する部分が無文の平坦面となっていることである。この軒平瓦の側縁部は瓦当文様の一部までヘラ削りされている例が多い。比較的長い顎で、顎を作るため粘土を継ぎ足して段としている。顎部にも縦方向の縄目叩打痕を残している。凹面には粘土の糸切り痕が残り、幅2.5～3.0cmほどの模骨が波状となっている部分がある。石英粒を含むものの精良な粘土が選ばれ、硬く須恵質に焼き上げている。12点出土。

７は鴻臚館式軒平瓦で、１点出土している。胎土に石英粒を含み、焼き上がりが悪いため文様が傷んでいる。凹面で幅2.5～3.0cm幅の模骨痕が波状に残るが、瓦当近くはヘラ削り、側面部もヘラ削り。平瓦凸面は平行線の叩打痕が残る。

以上、４種類の軒平瓦のうち４・５の一種類を除けば、不丁官衙域東側溝SD2340に同笵例がみられ、軒丸瓦の年代観に対応する結果となる。４・５の軒平瓦についても老司Ⅰ・Ⅱ式軒平瓦より文様的に後出のものと想定されるが、製作技法などの点では同一であるものと考えられる。従って、大きな時間幅を考える必要はないものと思う。

小結

政庁南門前面域においては、第81次調査で四面廂の南北棟建物SB2300、総柱建物SB2305が検出され、第86次調査では東西棟建物SB2490が検出された。また、第140次調査では四面廂と推定されている南北棟建物SB3990が検出され、当地域においては政庁第II期に4棟の掘立柱建物が存在したことになる。しかし、建物のあり方は日吉地区官衙や不丁地区官衙に比して極めて散漫であるため政庁南門前面域には空閑地が存在し、広場として機能したものと考えられ、SB2300を朝集殿とする見方もある。

この広場の範囲は、御笠川から朱雀門に使用されたとみられる礎石が発見されていることから南限を御笠川とし、西限は不丁地区官衙の東を画する南北溝SD2340までと考えられている。今回、広場の東限を明示する遺構は何等検出されていないが、第153次調査では南北棟建物が検出されており、第153次と第156次調査区との40m間に区画施設が存在するものと推定される。その区間には未調査地が含まれており、今後の調査に期するところである。

黒色粘土を採掘したと考えられる採土遺構は、不丁地区を中心として第58・73・83・84・86・87・131・134次調査及び日吉地区の第153次調査で確認された。時期的には9世紀代を上限として14世紀代に下限がおかれている。今回の調査では埋土中から12世紀前半の青磁椀が出土しており、一つの目安となろう。また、土取りの状況として賽の目状に採土を行ったことが窺えた。8世紀前半に比定される古手の瓦を含む瓦包含層については、主として窪地を瓦片・花崗岩片で埋めていることから、本格的な整地を行う前段階としての基礎作業が考えられる。床土の直下であり、時期は確定的ではないが、採土遺構の上面には広がっていないことから採土遺構よりは後出し、或いは採土時に瓦層を除去したとも考えられる。

また、調査区の南端で検出した鋳造関連遺構は、時期は特定できないものの、第73次調査でも検出しており、周辺には鋳造関連の遺構が広がっているものと考えられる。

4．第157次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の調査である。調査地は太宰府市観世音寺字広丸355-10番地に所在する。調査面積は337㎡である。調査地は大宰府政庁の西約450mの所に位置し、南西側には御笠川が北流する。調査区の北方約50mには来木丘陵があり、そこには瓦窯跡や製銅の工房跡（第19次調査）が発見されており、大宰府組織の「匠司」との関連で注目されている所である。

本調査区の周囲隣接地については、既に第96・132・142・148次調査を実施しているが、第96次調査を除いて顕著な遺構は検出していない。第96次調査では発掘区の北辺部において８～11世紀の建物・井戸・溝などを検出しているが、本調査地に隣接する南辺部においては、弥生時代の溝などを検出しているのみである。

本調査地は区画整理事業により約１mの盛土があり、これについては重機により除去を行った。調査は平成６年３月22日より開始し、３月24日に遺構検出作業を行った。４月13日に写真撮影を行い、14日に遺り方設定・実測作業、19日にはすべての作業を終了した。その後、重機により埋め戻しを行った。

検出遺構

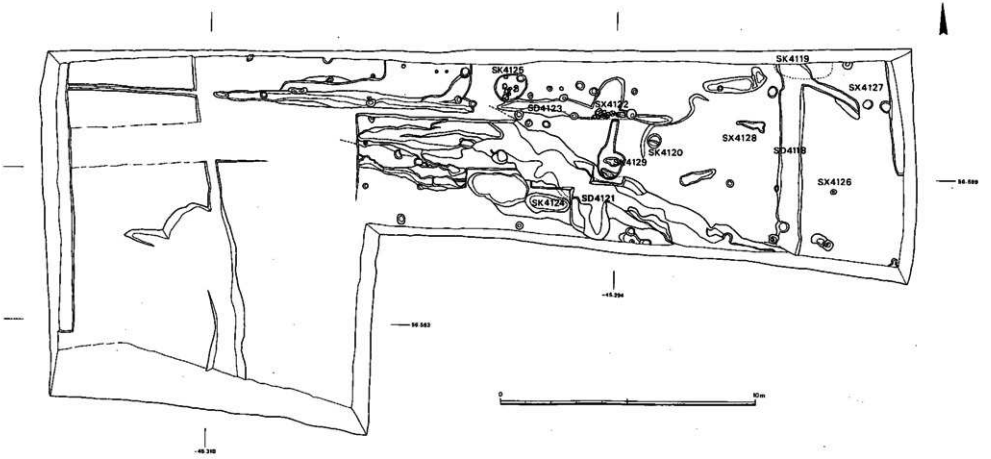
発掘調査の結果、検出した主な遺構は10世紀代の溝２条・古墳時代の自然流路的溝１条・土壙２基などである。調査地には約20cm位の黄褐色土の遺物包含層があり、それを除去すると遺構面となる。発掘区の西半部には遺構らしきものはなく、ただ東西方向の溝SD4123を検出できたのみである。このことは、既に予備調査の段階で判明していたことであったが、発掘区の西半部では遺構らしきものは確認できなかったため、今回の調査も東半部を重点的に実施することで発掘区を設定した。

溝

SD4118　発掘区の東端部近くで検出した南北方向の溝である。溝幅は１m前後、深さ0.15m前後で、ほぼ南北に走る。埋土中から若干の土器が出土しているが、流れを示すような砂の堆積はみられない。

SD4121　発掘区を斜めに過ぎる自然流路的な溝である。埋土は上層に茶色の粘質土が厚く堆積し、下層には砂が溜まり、著しい流れの跡を示していた。溝の壁面及び底面は流れにより抉られている。埋土中には極めて少量の土器片がみられ、これらは年代的に古墳時代を下限とするものである。これが人為的なものか自然のものか明確ではないが、平面的に蛇行し、幾筋もの流路となること、遺物が極めて少ないことを考えると自然流路と考えた方が妥当であろう。以上の判断と上層遺構を壊さないとの理由から一部を発掘したのみである。

SD4123　発掘区の北辺部を東西に走る溝である。東側ではその痕跡が部分的で明確ではない



第23図　第157次調査遺構配置図

が、南北方向の溝SD4118までは延びるものと考えられる。この溝がSD4118と接続するものであるか否かについては確認できないが、出土した土器からみるとほぼ同時期と考えて差し支えないようである。溝の幅は残存状況の良いところで0.7m、深さ0.1mであり、西側では削平を受けたためか細く浅くなる。この溝の東側寄りに丸瓦による暗渠施設SX4122がある。

土壙

SK4119　溝SD4118の北端に位置し、この溝より新期の遺構である。大部分は北側の発掘区外へ広がっており、全体の規模は不明である。浅い窪み状のもので、明瞭なプランはない。ここからは、土器の細片が炭化物とともに出土した。

SK4120　直径0.5m、深さ7cmの小土壙で、完形を含む土師器杯片10数点が出土した。土師器の年代は10世紀の中頃に考えられるもので、SD4123・SK4129などと同時期のものである。

SK4129　SK4120の南側で検出した不整円形の小土壙である。長径0.6m、短径0.35m、深さ0.25m。土師器の杯片数点が出土した。

暗渠遺構

SX4122　溝SD4123の東端部近くで検出した丸瓦5個を使用した暗渠である。暗渠は壊されて当初の構造は不明であるが、状況からみてほぼ原位置を移動していないとみられる。暗渠が設けられた理由については、遺構の上からは判断できない。

出土遺物

SD4118出土土器・石製品（第26図、図版28）

土師器

高台皿（1～3・a）　口径12.6～12.8cm、高台径7.1～7.4cm、器高1.6～1.7cm。aは底部外面に文字様の墨書があるが、判読できない。

石製品

容器（4）　滑石製の小形の容器。内外面とも縦方向に削って仕上げる。底部は頻繁な使用によるためか、磨滅して外面とつながっている。紅皿か。口径3.3cm、器高1.3cm。

SD4123出土土器（第26図、図版28）

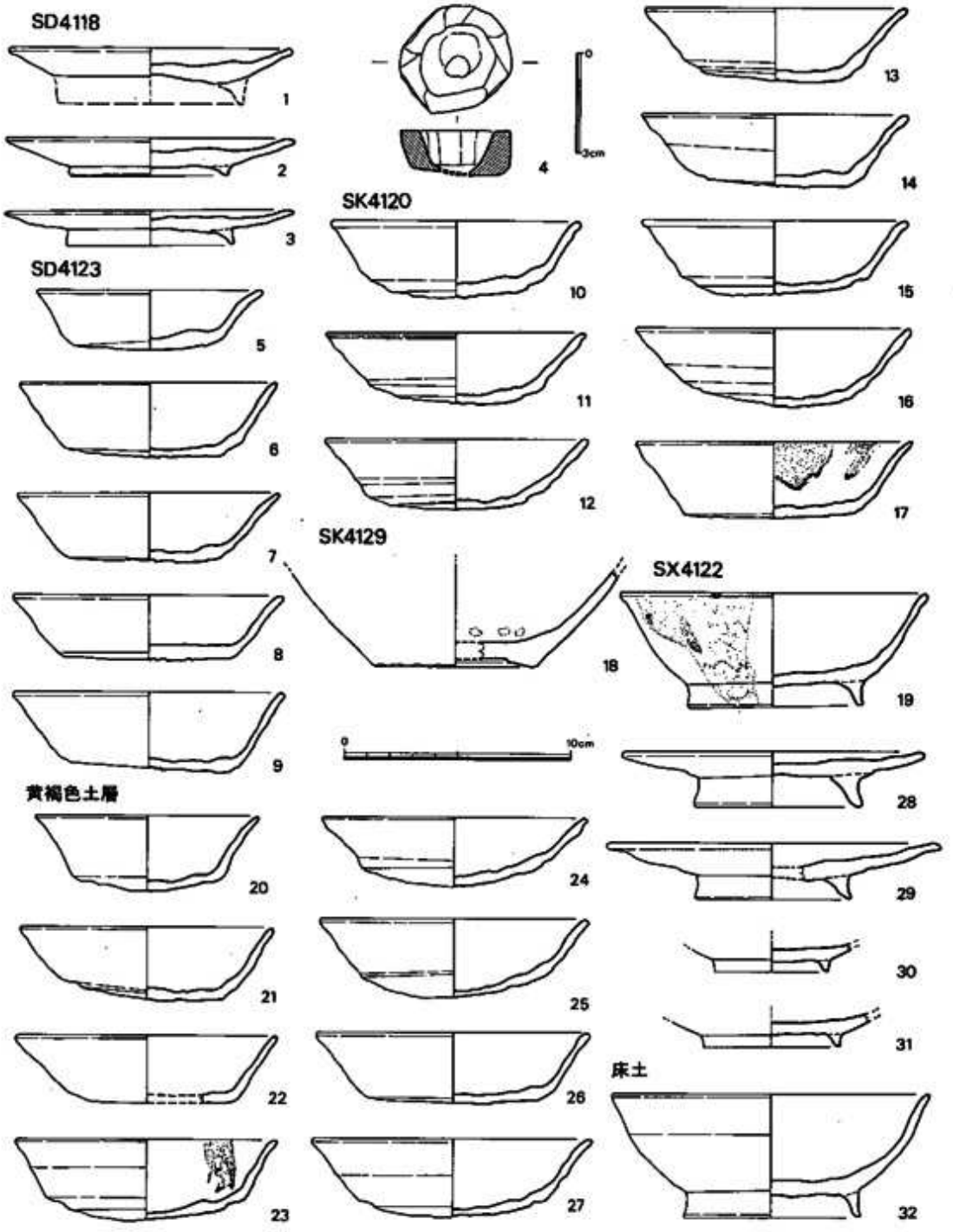
土師器

杯（5～9）　すべてヘラ切り未調整。底部内面はナデ調整で、6～9は板状圧痕を伴う。7は油煙が付着する。口径10.0～12.1cm、底径6.9～7.5cm、器高2.5～3.4cm。

SK4120出土土器（第26図、図版28）

杯（10～17）外底部はヘラ切り未調整。底部内面はナデ調整で、11～14・17は板状圧痕を伴う。17は油煙が付着する。口径10～12cm、底径6.9～7.5cm、器高2.5～3.4cm。

SK4129出土陶磁器（第26図、図版29）



第26図　SD4118・4123、SK4120・4129、SX4122、黄褐色土層、床土出土土器・陶磁器実測図

中国陶磁器

青磁

椀（18）　底部は蛇の目風で幅広の高台を削り出す。胎は淡茶灰色。釉は淡緑色で全面に施され、高台畳付は拭き取っている。内面の見込みと高台畳付に目跡が残る。目跡は残存する部分から12ヶ所に復原される。越州窯系。

SX4122出土土器（第26図、図版29）

土師器

椀（19）　体部は内弯気味で、口縁部はやや外反する。底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整を施す。油煙が付着する。

黄褐色土層出土土器（第26図、図版29）

土師器

杯（20～27）　底部外面はすべてヘラ切り未調整で、底部内面はナデ調整。22・25・26の底部外面には板状圧痕を伴う。23には油煙が付着する。口径10.0～12.2cm、器高3.0～3.6cm。

高台付皿（28・29）　口径13.4・14.8cm、高台径8.0・8.9cm、器高はともに2.5cm。

緑釉陶器

皿（30・31）　細身の輪状高台を貼付したもの。黄味を帯びた薄い緑色釉を全面に施す。胎は黄白色を呈し、軟質である。防長産か。この他に高台をもつ大形の緑釉陶器片が出土している。高台部の径は16cmほどに復原される。全面に施釉され、胎土・色調とも上記の皿と同様である。全形は知り得ないが、盤の類とも考えられる。

床土出土土器（第26図）

土師器

椀（32）　体部は丸味をおび、口縁部は外反する。

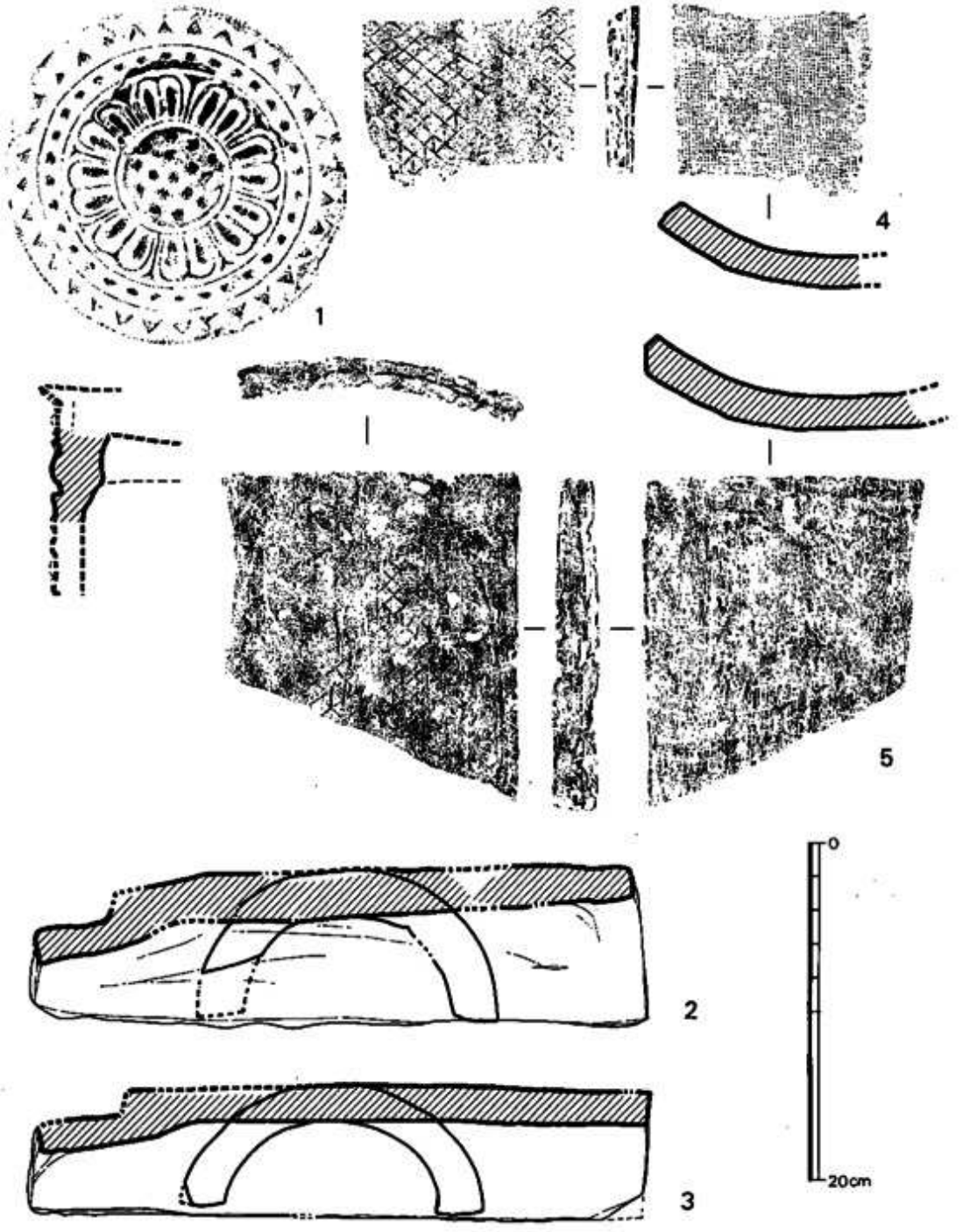
瓦類

遺構は、調査区の東半に集中して検出されている。瓦類の出土は整地土層・遺構などで、平安時代の土師器などと共伴している。瓦類の出土傾向として8世紀代のものはごく少なく、9～10世紀代のものが圧倒的に多い。

軒丸瓦（第27図、図版30）

老司II式軒丸瓦の破片1点が東西溝SD4123から出土している。外区・中房半ばから下の部分がない。丸瓦は外区珠文帯の後ろ0.6cmほどの位置に先端部圧痕がある。瓦当裏面で丸瓦を挿入するための溝が付けられ、丸瓦挿入後指腹で丸瓦凹面を押さえた痕が残る。この指痕が粘土の剥離面となっているから、さらにもう一重粘土を継ぎ足して接合部を強化していることが判る。胎土に少量の砂粒を混じるが、精良の粘土が選ばれており、焼き上がりも良い。

丸瓦（第27図、図版31）



第27図　軒丸瓦・丸瓦・平瓦拓影実測図

東西溝SD4123の一部で溝に被せる状態で東方向に3本の丸瓦が組合わされていた。この遺構をSX4122と呼んでいる。2・3は破片が接合できた資料である。2は長さ35.0cm、広端弦幅16.0cmほどの大きさで、胎土に多量の砂が混じり、焼成は良くない。瓦の凸面では部分的に斜格子文が認められるが、表面が剥離した部分が目立つ。凹面でも布目を認める部分は僅かであるが、布筒の布の皺が目立つ。模骨は撫肩であったものの様で、丸瓦の断面形状が3に良く似ている。側面の分割痕跡は幅0.2cmほどの截面と幅2.0cm以上の破面とが残る。

3は長さ35.5cm、広端弦幅18.5cmほどの大きさの丸瓦である。既に焼成前に全体に捻れが生じたものと思われ、やや偏平であるうえに左右にも歪みがある。凸面では広端から中頃まで叩打痕を擦り消し、玉縁よりに2と同一文様の斜格子の叩打痕が残る。凹面では広端縁近くでは、横方向のナデによって布目が擦り消されている。布目は粗い。分割面の状況も2に似る。この丸瓦ではヘラ切りされた玉縁の端面に砂粒が付着しているから生瓦の乾燥時に玉縁を下にしていたものと思われる。多量の砂粒を含んでいるが、暗灰色に硬く焼き上がっている。

平瓦（第27図、図版30）

4は東西溝SD4123から出土している。凸面には斜格子の叩打痕が残る。叩打文に特徴があり、斜格子目の一部に縦方向の分割線が入る。叩打痕からみると打具の幅が6.0cm近くある。凹面は粗い布目が全面に残り、糸切り痕跡や模骨の骨の痕などはない。側面に残る分割の痕は、幅0.6cmほどのナイフによる截面と幅1.4cmほどの破面である。大粒の砂を多量に混ぜている。焼成は良い。

5は小土壙SK4125から出土した。凸面は全面擦り消されている。僅かに残る叩打痕は4の文様と同一である。図の左半には離れ砂かと思われる砂粒が付着する。凹面では大部分布目は擦り消されている。布目の粗さは4と同様である。側面は2面の面取りがヘラ削りで作られている。狭端縁もヘラ削りである。砂粒を多量に含むが、焼き上がりは良い。

小結

今回の調査で検出した主な遺構は、東西方向の小溝SD4123と南北溝SD4118である。SD4123（約1′45″東偏する）はほぼ東西方向のもので、南北溝SD4118と直交する形となる。何らかの区画をする溝であろうが、今回の調査ではそれを示唆するような遺構はみられない。ただ、隣接地の調査として過去に第96・142次調査を実施しているが、その時の調査では8～11世紀の建物などを検出しており、これらの遺構との関係が考えられる。

しかしながら、建物などが検出されたのは、今回検出した溝とは距離的にかなり隔たっており、直接の関係を考えるにはやや疑問もある。現段階では今回の調査地の北側隣接地が未調査であり、今後の調査をまって検討してみたい。

5．第159次調査

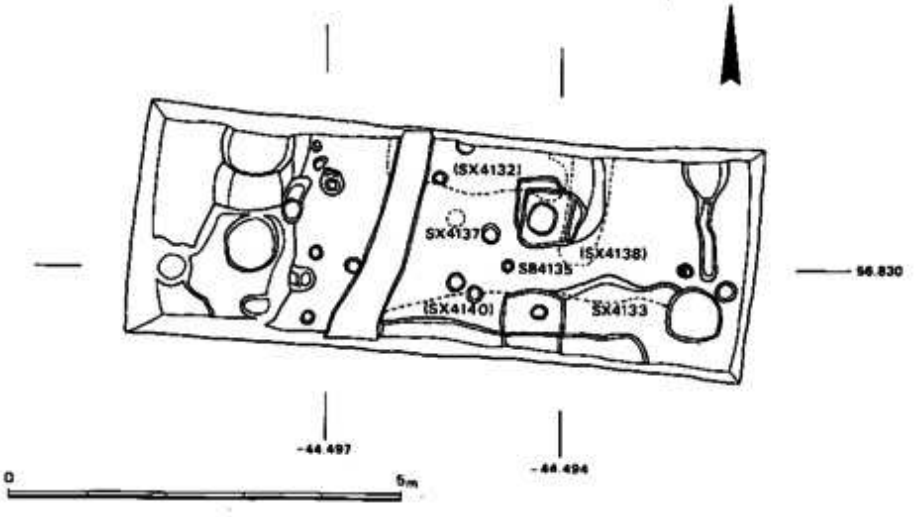
本次調査は史跡大宰府学校院跡の中央北側部分にあたり、住宅建築のための現状変更申請が提出され、文化庁の指示を受けて発掘調査を実施した。調査地番は太宰府市観世音寺字学業214番地で、調査面積は24㎡。申請地には既存建物があるため空いている庭先に３×８ｍのトレンチを設定し、人力で掘り下げた。調査は平成６年５月13日に開始し、途中中断したものの６月14日には埋め戻しを行い調査を終了した。

検出遺構

基本層序は上層から表土（客土）、黄色土、黒褐色土、黄茶色土、黄白色粘質土（地山）の順である。このうち、表土を除く各層の上面でピット・溝などの遺構を検出し、奈良時代から近現代までの遺物が出土した。現在の地表から0.8mほど下にある最下層の黄白色粘質土の上面で、土壙・ピット群の他に柱掘形２個を検出した。

掘立柱建物

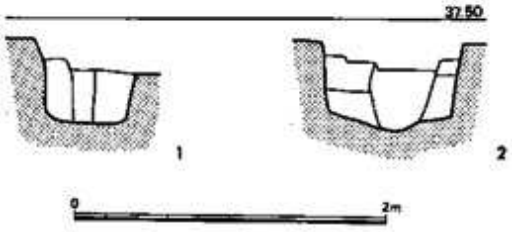
SB4135　２個の柱掘形は南北方向に並ぶ。北側の柱掘形（２）は平面形が一辺0.8～0.9mの方形で、南側（１）も同じく方形であるが、一辺0.55mと小振りである。断ち割り調査の結果、両者とも深さが0.55mであり、底面のレベルが揃っている。また、南側柱掘形の中央部で柱痕跡を検出しており、それによると柱の直径は15cmとなる。北側柱掘形でも土層を観察すると中央部分に埋土とは異なる灰色粘質土が入っており、柱痕跡は明瞭ではないが、この部分が柱の位



第28図　第159次調査遺構配置図

置を示すものと考えられる。

２個の柱掘形はほぼ南北方向に並ぶものの両者の間隔は1.2mと狭く、柱掘形の大きさが異なることも考え併せると、同一建物の柱掘形であった可能性は低く、時期の異なる２棟の建物が存在したものと思われる。



第29図　SB4135柱掘形断面図

その他の遺構

SX4132　調査区の中央部北寄りで検出した浅い落ち込み状の遺構。黒褐色土を切り込む。

SX4133　最下層の遺構面上で検出した。落ち込み状を呈し、調査区南端部にあり、調査区外の南側に延びる。東西方向で17m分を確認した。

SX4137　調査区中央部で検出したピット。径0.2m程で、黄茶色土を切り込む。

SX4138　黄茶色土を切り込む溝状の遺構。

SX4140　黒褐色土の上面で検出した。SX4133とは層位の異なる別遺構であるが、ほぼ同位置にある落込み状の遺構であり、やはり南側調査区外に延びる。

出土遺物

SB4135出土土器（第30図）

須恵器

杯（１）　体部は内弯気味で、高台は内側が接地する。底部内面はナデ調整で、板状圧痕を伴う。柱穴中から出土。

SX4132出土土器（第30図、図版32）

土師器

皿（２）　底部外面はヘラ切り未調整。底部内面はナデ調整で、板状圧痕を伴う。口径10.8cm、器高1.1cm。

SX4138出土土器（第30図）

土師器

椀（３）　深目の丸底杯に、ふんばった高台を付したもの。杯部は内外面ともミガキ調整を施す。高台部はヨコナデ調整。

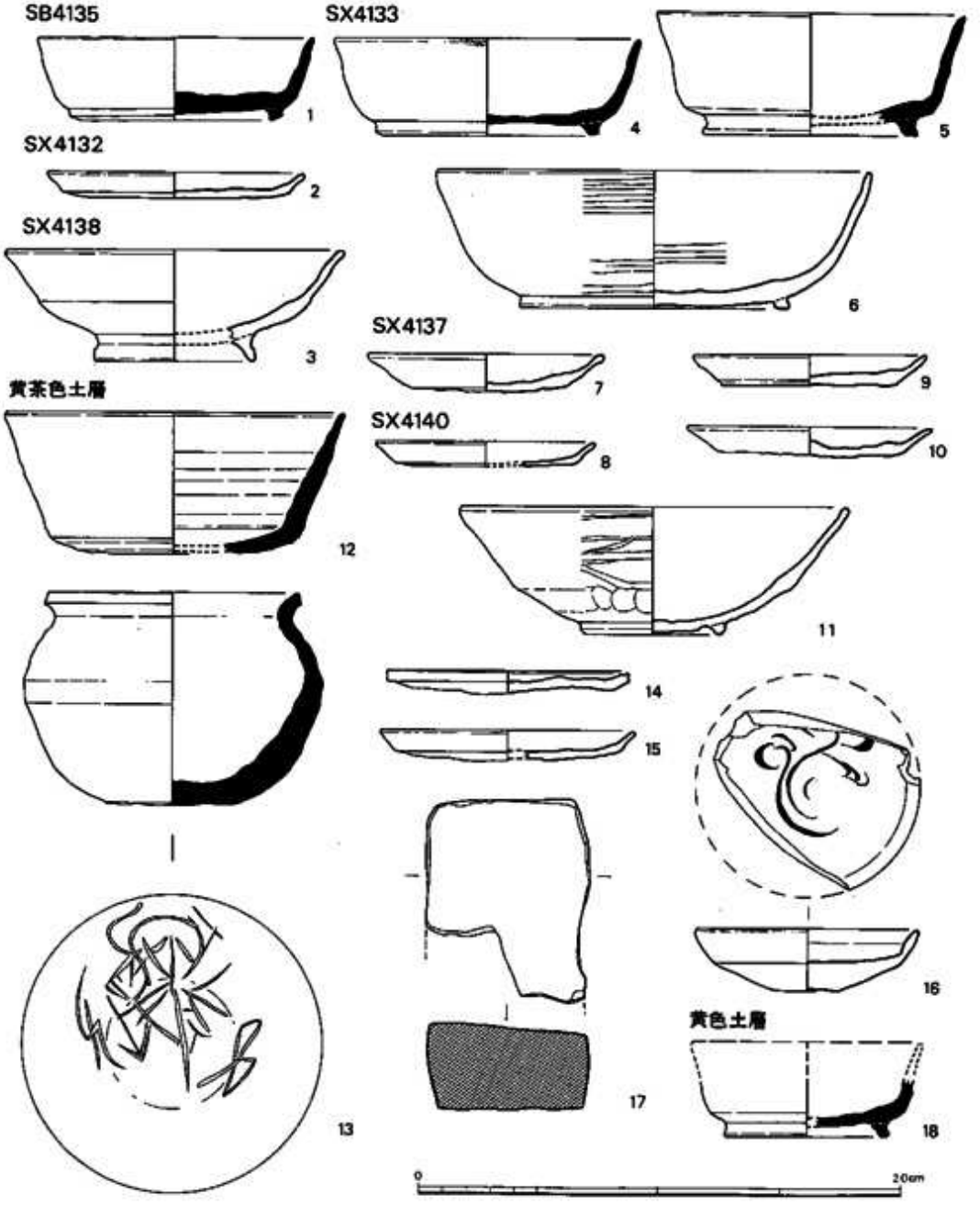
SX4133出土土器（第30図、図版32）

須恵器

杯（４・５）　４の底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整で、板状圧痕を伴う。口縁端部に油煙が付着する。５は深目の杯部に「ハ」の字に開いた高台を貼付する。

土師器

椀（6）　体部は丸味をもつ。底部外面は回転ヘラ削り調整、体部は内外面とも回転ヘラミ



第30図　SB4135、SK4132・4138、SX4133・4137・4140、黄茶色土層、黄色土層出土土器・陶磁器・石製品実測図

ガキ調整。風化が著しい。

SX4137出土土器（第30図）

土師器

皿（7～10）　口径9.9～10.2cm、器高1.2～1.6cm。すべてヘラ切り調整で、底部内面はナデ調整、7・9は板状圧痕を伴う。

瓦器

椀（11）　断面三角形の高台を貼付するもので、口縁端部は内弯する。内面はミガキ調整、体部外面は上半部が横方向の粗いヘラミガキ、下半部には指頭圧痕が残る。復原口径16.4cm、高台径6.2cm、器高5.4cmを測る。口縁部外面から内面は黒化する。

黄茶色土層出土土器（第30図、図版32）

須恵器

椀（12）　底部外面は回転ヘラ削り調整、他はヨコナデ調整。内面はヨコナデによる凹凸が著しい。胎土は精良。

壺（13）　体部は球形で、外反する短い口縁をもつ短頸壺。底部は平底となる。外面の体部下半はナデ調整で、一部格子のタタキが残る。底部内面はナデ調整、底部外面は手持ちヘラ削り調整か。他はヨコナデ調整。底部から体部の下半にかけてヘラ状工具による線刻が認められる。線刻はマスクを被った人物像とみられ、右手には槍状のものを持っている。外面には自然釉がかかる。復原口径10.8cm、器高9.0cm。

土師器

皿（14・15）　14は口縁端部内面に沈線状の段をもつ。口径10.2・10.8cm、器高0.9・1.3cm。底部外面はヘラ切りで、底部内面はナデ。ともに板状圧痕を伴う。

中国陶磁器

青磁

皿（16）　灰色の胎に灰色味を帯びた緑色釉を施す。見込みにはヘラ状工具による片彫りで花文を描く。

黄色土層出土土器（第30図）

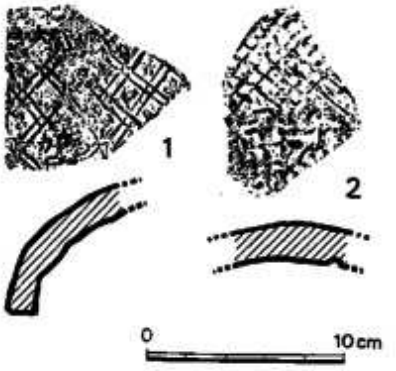
須恵器

杯（18）　やや開き気味の高台をもつ。底部内面はナデ調整。

瓦類（第31図、図版32）

瓦類の出土は比較的少なく、破片資料ばかりである。僅かに調査区東南で検出された土壙状の落込みSX4133から文字瓦他の出土があった。ここでは、出土文字瓦2点の紹介に留めたい。第31図1は丸瓦凸面の叩打具痕に「賀」の字が見える。叩打具痕に「賀」の字が残る文字瓦（左右逆字を除く）は「賀茂瓦」2種、「賀茂」5種がある。出土丸瓦は「賀茂瓦」2種のうちの一

つと特定できる。胎土に砂粒を含むが、暗灰色で硬く焼き上がる。「賀」・「賀茂」・「賀茂瓦」の文字銘の叩打具痕を残す丸・平瓦は都府楼北瓦窯(第158次調査区、1958～59年にかけて登窯2基が発見されている)で採集された瓦の中に4種類が見つかっている。これはその中の一種と同一の叩打具痕を残している。



第31図　文字瓦拓影実測図

2は「平井」の叩打具痕を残す平瓦片である。胎土に砂粒を含むが、暗灰色に硬く焼き上がる。大宰府では「平井」13種、「平井瓦」2種、「平井瓦屋」1種と叩打具痕に「平井」銘の残る丸・平瓦は最も多い。2の文字銘は周囲の斜格子文と文字の特徴から「平井」銘の叩打具痕を残す瓦の一種に特定できる。

石製品

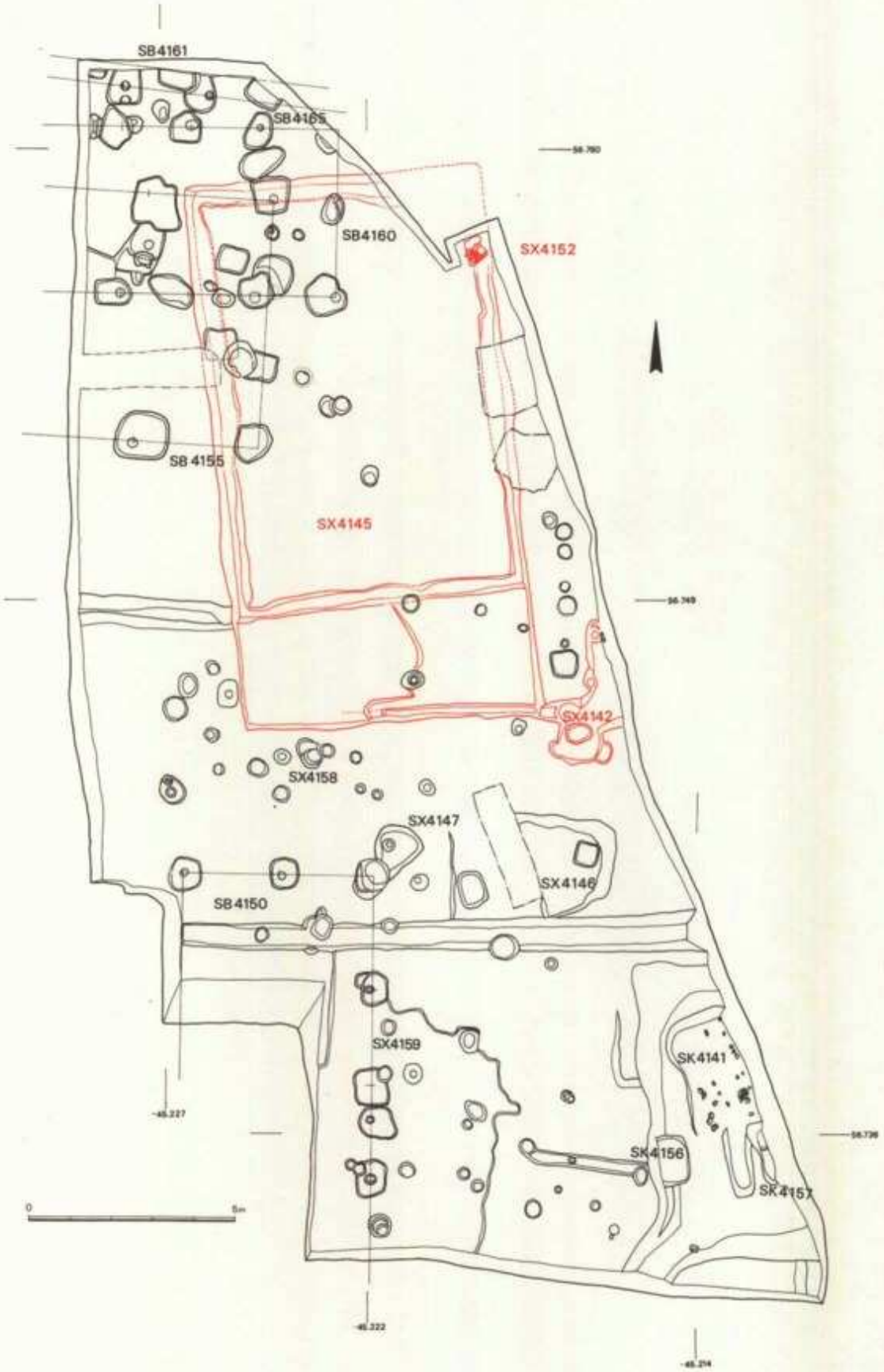
砥石 (17)　下半部を欠失しているが、残りの5面は使用により平滑になる。所々に鋭利な刃物による擦過痕が残る。仕上げ砥。

小結

今回の調査区は学校院跡に推定されている地区の中央北側部分に位置する。この周辺ではこれまでに、第18・37・112次として3回の調査を実施している。今回の調査区の北東側にあたる第18次調査では井戸SE400を検出しており、これから出土した土器は9世紀前半代の大宰府出土土器編年の標識資料となっている。北西側の第112次調査では梁行・桁行とも2間以上の総柱建物1棟と一辺3mほどの竪穴式の建物1棟を検出しており、出土土器から8世紀後半代と考えられる。この2回の調査によって、北側の丘陵裾部まで建物群が広がっていることが判明していた。さらに、第159次調査区の南に位置する第37次調査では、平安時代に考えられている4棟の掘立柱建物と柵などを検出している。

これら3ヶ所の調査区に囲まれた位置にある第159次調査では、当初から建物の存在が予想されていた。調査の結果、2個の柱掘形を検出し、この場所にも建物が存在したことが判明した。北側柱掘形出土の土器と南側柱掘形に先行する落ち込み状遺構SX4133出土の土器から、建物は8世紀前半から下っても8世紀半ばの時期に比定できる。しかしながら、狭い範囲での調査であったため、建物の規模などは不明である。

今回の調査も合わせて4回の調査によって、この地区における建物群の広がりは徐々に解明されつつあるが、それぞれの調査が何れも小規模であるため、建物相互の配置などについてはなお判然としない。今後の更なる調査が必要な地区である。



第32図　第160次調査遺構配置図

6．第160次調査

本次調査は住宅建設に伴う事前の調査である。調査地番は太宰府市観世音寺字蔵司439-2番地で、調査面積は573㎡である。調査地は大宰府政庁西方の約400mの所に位置し、来木丘陵の先端部の西側裾部にあたる。

調査区の北方約15mの所は、昭和47年度に大宰府史跡第19次調査として実施した箇所で、奈良時代の製銅関係の工房跡を検出している。また、第19次調査地の向かいの斜面では、過去に瓦窯跡10基が検出されており、以前よりこの一帯には工房関連の遺構が集中して存在しているのではないかと予測されていた地区でもある。本調査の目的も周辺の遺構の状況からして、これら工房に関する知見を得ることを主眼として調査を実施した。

当調査区は宅地であったため、最上層には盛土整地がなされており、その下層に茶褐色土の遺物包含層がある。それを除去すると遺構面になる。

調査は平成６年６月21日に開始し、盛土整地の除去作業を行い、７月11日から作業員による遺構調査を開始する。７月14日には発掘区北辺部で掘立柱の掘形を検出するなどし、８月２日には遺構の検出をほぼ終えた。８月４日に写真撮影、10日には遣り方を設定し、12日には実測を終了した。この段階で夏期休暇に入り一時作業を中断し、作業を再開したのは９月12日である。柱の断ち割り及び竪穴状遺構（SX4145）の発掘作業を行い、10月６日に写真撮影、10月11日に空中写真撮影を行い調査を終了した。その後、重機による埋め戻しを行った。

検出遺構

発掘調査の結果、検出した主な遺構は掘立柱建物５棟・土壙１基・竪穴状遺構・炉跡・ピット群などである。これらの遺構の年代は、７世紀後半～８世紀中頃のかなり短期間の幅で考えることができる。

遺構面を覆う茶褐色土層には遺物が混入しているが、この層は東・北側では厚さ約0.2mであるが、西・南側に向かって0.3～0.4mと厚くなる。即ち、遺構面は緩やかな傾斜をもって南・西方に下がる。整地層中には弥生・古墳時代の土器片が混入しており、このことからみると周辺にこの時期の遺構が存在していたと考えられる。

掘立柱建物

SB4150　発掘区の南西隅部で検出した２×３間以上の南北棟建物である。桁行３間分を確認したが、更に南側の発掘区外に延びている。また、西側柱列については発掘区外であるため確認していない。柱痕跡の残存する１・２・４・６から柱間寸法を計測すると梁間は2.4m（８尺）等間、桁行は北方から2.7m（９尺）・2.4m（８尺）・2.4m（８尺）の柱間である。柱掘形は0.6～0.8mの隅丸方形で、柱痕跡から柱の径を測ると0.2mである。建物の方位は約１°東偏する。

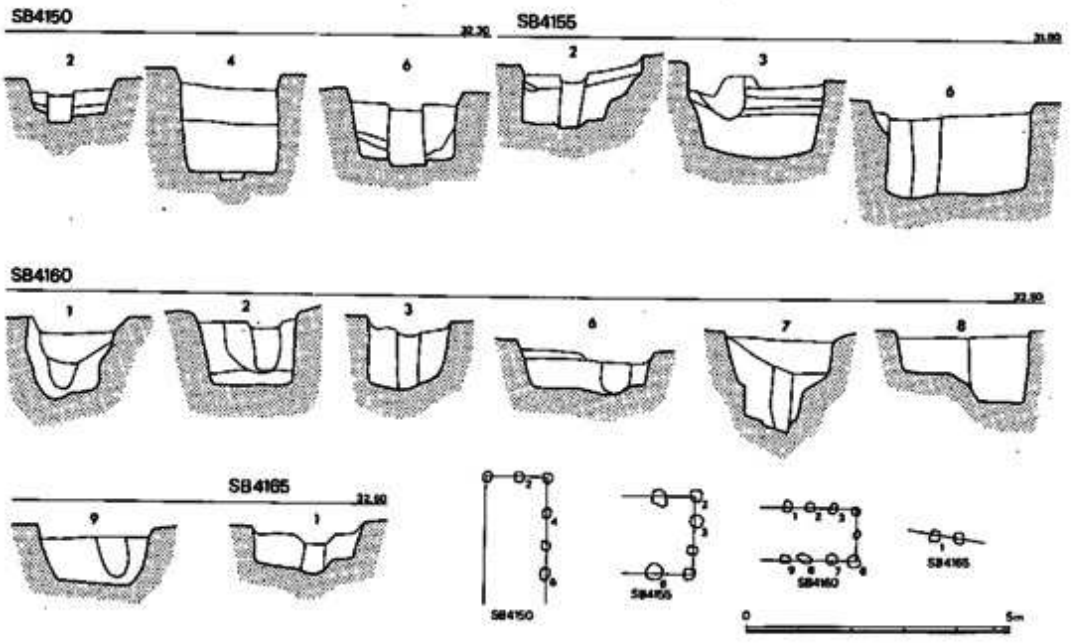
SB4155　発掘区の北辺部で検出した３×２間以上の東西棟建物である。この建物はSB4160と重複関係にあり、柱掘形の切合い関係からみてSB4160が新しく、SB4155が古期に属する。２と６の２ヶ所しか柱痕跡がなく、柱間は確実ではないが、梁行で中央間2.1m（７尺）、両端間が1.95m（6.5尺）と考えられ、桁行で10尺の柱間とみられる。

柱掘形の形状は不整形で、大きいものは1.2×1.3m、深さ0.75mである。今回検出の柱掘形では最も大きい。柱の径はその痕跡からすると約0.25mである。建物の方位は約3°35′東偏する。

SB4160　SB4155と重複する２×４間以上の東西棟建物である。柱痕跡は残存状況も良好で、２・３・６・７・９の５ヶ所に残っており、柱位置を確認することができる。SB4155より新期に属する。柱間は梁行で７尺等間と考えられる。桁行は東より６尺・４尺・４尺である。桁行の端間が広いのは先述のSB4150と類似しており、建物の方位も約１°と同一である。建物の方位を重視すれば、このSB4160とSB4150は同時に存在していた可能性が考えられる。柱の掘形は極めて不整形で、一定していない。柱の径は0.25～0.3mである。

SB4161　発掘区の北端部で検出した東西方向の柱列３個である。掘形の大部分は発掘区外であるため、これが柱穴かどうかは明確でない。また、建物か柵になるかについても全く不明であり、ここでは建物の柱列として考えた。

SB4165　SB4161の南側に位置し、それと重複関係にある。柱の切合いからSB4165が古期に



第33図　SB4150・4155・4160・4165柱掘形断面図

なる。検出した柱掘形は２個であるが、柱痕跡を残している。柱の径は0.2mで、柱間寸法は2.1m（７尺）である。先述のSB4161と同様に規模などは全く不明であるが、ここでは建物の柱穴として記した。

土壙

SK4141　発掘区の南東隅部で検出した長方形の土壙である。土壙の北東部隅は発掘区外に広がっているため未検出である。掘形の上端部は直線ではなく、緩やかなカーブをもっているが、北側で1.8m、西側で7.0m、南側で3.0m、深さ0.95mである。南西隅部には土壙に接続して溝状の遺構が南西方向に延びている。土壙の底部はほぼ平らであるが、中央部分は約0.2mほど半円状に窪んでいる。窪みの中には僅かではあるが、小石が散在している。

埋土の状況は炭化物の混入した比較的軟らかい土であり、長時間かかって埋没したのではなく、一気に埋められたものと考えられる。ここからは、８世紀前半代の土器が多量に出土しており、土壙を埋めると同時にこれらの土器も投棄されたと考えられる。また、顕著な遺物として「海獣葡萄鏡」１面が出土している。

SK4156　SK4141を切る隅丸長方形の土壙である。長径1.2m、短径0.8m、深さ0.75mを測る。SK4141の中央よりやや南側の位置にあり、西側側壁に接して掘られている。

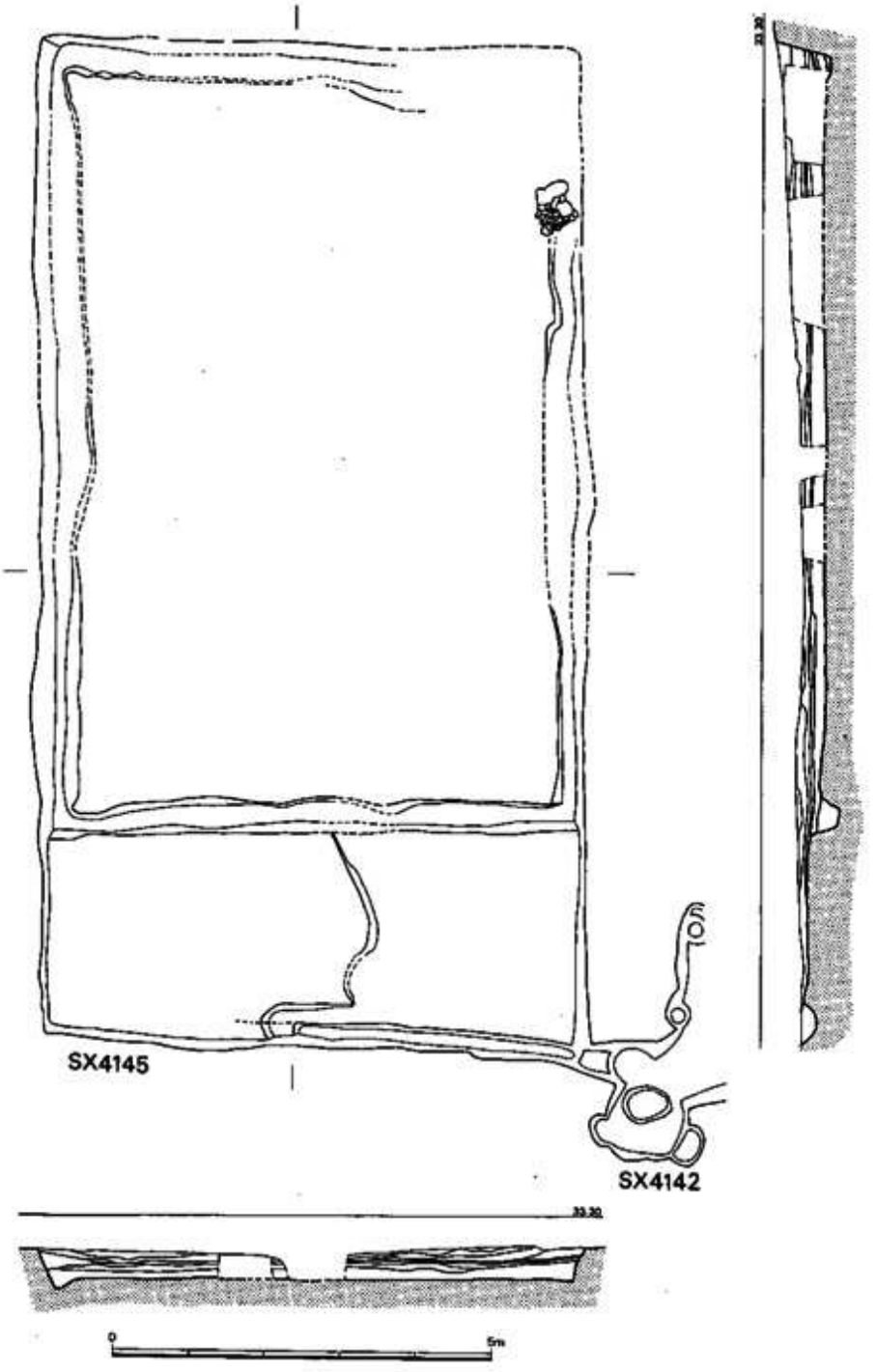
SK4157　SK4156と東側の対称の位置にある。掘形の大部分は発掘区外の東側に広がる。掘形の全形は不明であるが、検出できた分では径約1.9m、深さ約1.55mである。大部分が発掘区外であるため、遺構の性格については不明であるが、断面の観察だけからすると井戸のようでもあるが明らかではない。

竪穴状遺構

SX4145　発掘区北半部の大部分の範囲を占める長方形を呈する竪穴状の遺構である。規模は南北13.25m、東西7.5mである。掘り込みは上下二段になっており、南側１/３が浅く、残り２/３の北側が深くなる。上・下段とも床面は水平であるが、約0.5mの段差がある。下段には周囲に幅0.45～0.65m、深さ0.2m前後の溝が掘られている。

床面は大部分が地山（花崗岩バイラン土）を平担に削り水平にしているが、南側では一部整地を行っている。床面には柱穴や炉などの生活の痕跡を残すものは全くみられず、使用された様子もない。上段の床面は茶褐色粘質土の地山であるが、ほぼ水平に成形している。下段と同じく床面には使用された痕跡はない。溝は南壁に沿って幅約0.3m、深さ0.13mのものが半分ほど残るだけである。また、南東隅部では土壙SK4142と連続する。

この竪穴状遺構は埋められ整地されるが、埋土の状況をみると単純に埋めただけではなく、白色粘土を間に挟み版築状に突き固めている。この理由として、竪穴状遺構の廃棄後、掘立柱建物を築造するために地盤強化を目的としてなされた整地事業が考えられる。



第34図　SX4142・4145実測図、土層断面図

炉跡状遺構

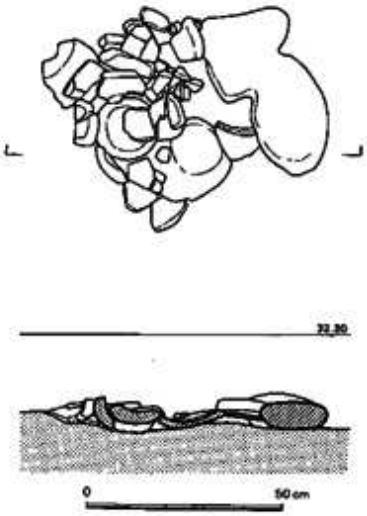
SX4142　竪穴状遺構SX4145の南東隅部に連続する平面形が逆L字状を呈するもので、東側の大部分は発掘区外に広がるため全体の形状は不明である。南側には方形の張出しがあり、その中心部は楕円状に窪み、深さ0.57mで最も深くなる。この場所からは大形の鞴の羽口や坩堝（第34図、図版18）が破棄された状態で出土した。

北側先端部付近の側壁は、加熱を受け赤化している部分があり、また埋土中にも焼土が混入している。この様な状況をみると、この掘り込みは炉の設置と何らかの関係を有するものと考えて差し支えなかろう。先に記した様に、SX4145とは南側の側溝と繋がっている。

坩堝の一括投棄遺構

SX4152　発掘区の北東隅部で坩堝が一括投棄されていた。一部は粘土化しているものもあるが、数個体がまとまってある（第35図、図版18）。

出土した層は床面より約0.2m上位の埋土中であり、直接的に遺構とは結び付かないが、全体的に埋土中には遺物が少量しか混入していない状況なので特に注意される。この付近に製銅ないし製鉄に関連する炉が存在した可能性が考えられる。



第35図　SX4152鋳造関係遺物出土状況

その他の遺構

SX4158　竪穴状遺構SX4145の南西隅部の外側で検出したピット群の一つである。不整円形で、二段の掘り込みになっている。径は0.6m、深さは上段が0.2m、下段が0.53mであり、周囲のピット群の中では最も古い。比較的密集しているが、建物の柱穴としてはまとまらない。

SX4159　掘立柱建物SB4150の南北方向の柱列の北から２番目と３番目の間で検出したピットである。径0.4m、深さ0.2mである。

出土遺物

SB4160出土土器（第36図、図版33）

須恵器

壺（1）　見受けの返りをもつものである。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。天井部外面に「Ⅲ」のヘラ記号がある。胎土中に砂粒が多く混入する。

SK4156出土土器（第36図、図版33）

須恵器

蓋（2・3）　ともに口縁端部が断面三角形状を呈する。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

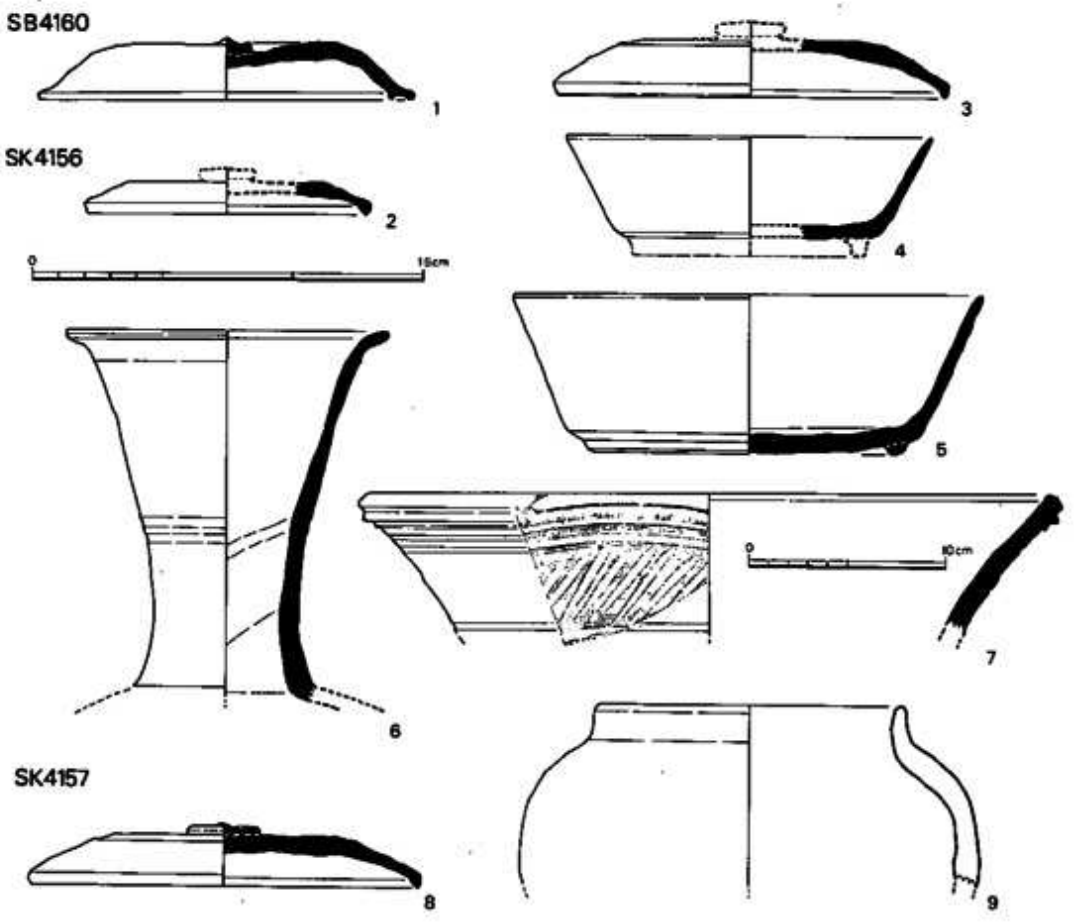
杯（4・5）　4は底部外面が回転ヘラ削り調整。高台を欠く。4・5ともに高台は底部端寄りに貼付される。

壺（6）　長頸壺の頸部破片で、口縁部は外反する。頸部の中央に2条の沈線を巡らす。内面にはシボリ痕が残る。

甕（7）　口縁部外面に3条の稜を削り出し、その下部には3条の沈線を巡らす。頸部外面はカキ目調整の後、斜め方向の櫛描きを施す。

SK4157出土土器（第36図）

須恵器



第36図　SB4160、SK4156・4157出土土器実測図

蓋（8）　口縁端部が断面三角形状を呈する。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

土師器

壺（9）　頸部は短く直立し、端部を丸くおさめる。須恵器の模倣形態と考えられる。磨滅が著しく調整不明。

SK4141出土土器（第37～46図、図版33～39）

須恵器

蓋（1～48）　身との対応関係から口径は9.8～11.6cm、12.9～14.9cm、15.0～18.6cmに分けられそうであるが、中・大形については明確に分離できない。小形品で天井部まで残存する例にはつまみを有しない。つまみは概して低平なものが多い。口縁端部の形態は12・37・38のように下方に長く伸びるものと断面三角形状を呈するものがあり、30・43・45のように丸くおさめるものも見受けられる。

天井部外面は4・6・32を除いてすべて回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整による。4・6の天井部外面は切り離しのままではなく、ナデ様の再調整を行なっているようであるが、痕跡は明瞭に残らない。6・8・15・16・27・31・46の天井部内面は擦れて平滑になっており、転用硯として使用されたものと考えられる。29の天井部内面と32・33・41・46の天井部外面にはヘラ記号がある。

杯（49～84）　高台を付すものと付さないものとがある。高台付杯は口径から8.8～11.3cmと12.0～14.0cmで杯部が深いものが多数を占める。これとは別に口径13.3～17.4cmで杯部が浅くなる一群が少数みられる。

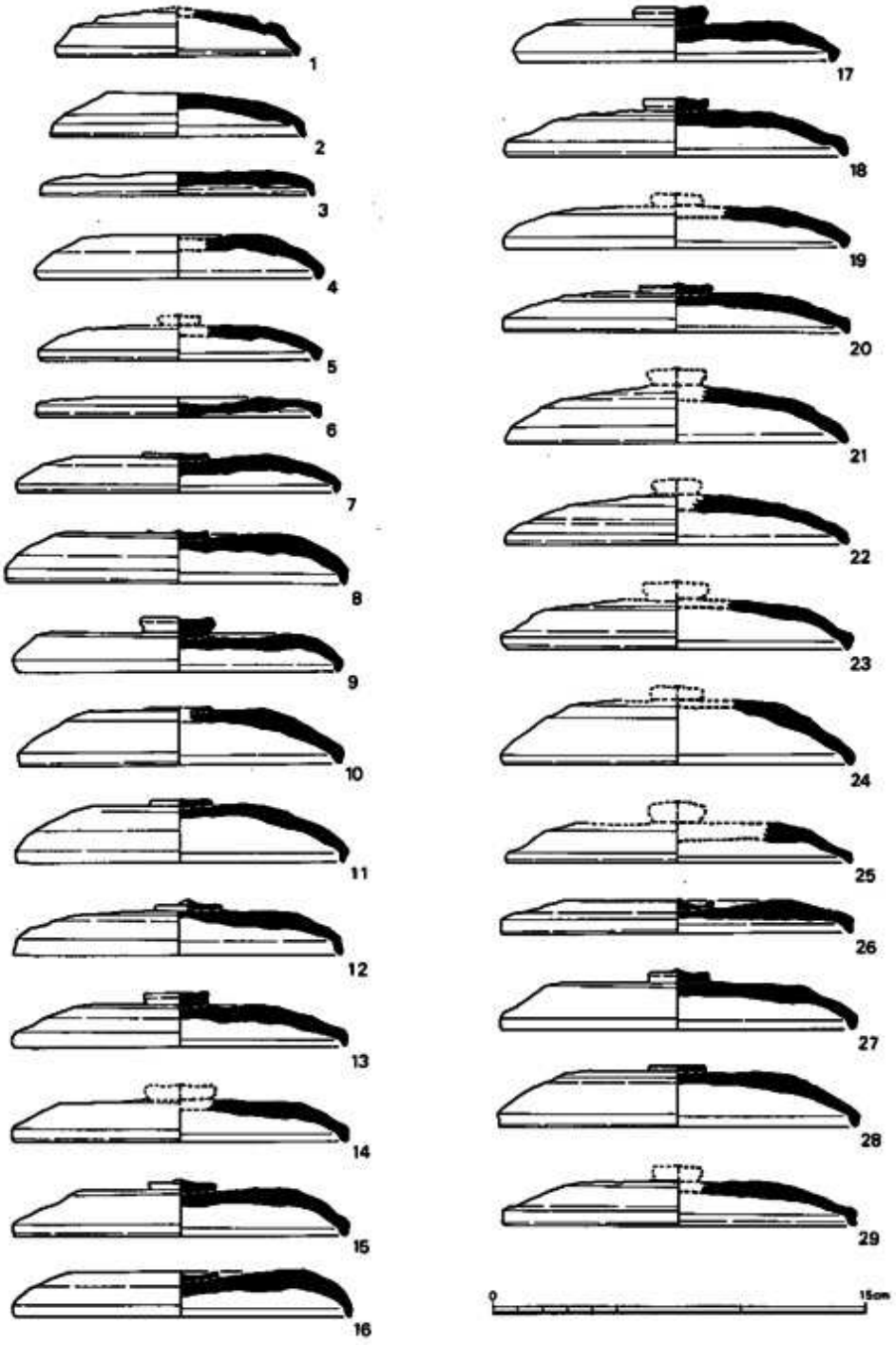
有高台で小形のものは、外面の体部と底部の境が明瞭な50～53・56と、底部から丸味をもって立ち上がる49・54・55・57がある。口縁部から体部にかけては直線的なものが多く、54・57のようにやや外反するものもある。57は胎土が精良で、器壁も薄く仕上げられている。

中形・大形のものは68・72のように外面の体部と底部の境が明瞭な例もあるが、不明瞭なものが多い。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反する。65・72は直線的である。高台の形状は端部が外方にのびるもの、断面四角形となるものがある。底部外面は50・51・54・59が中央部を残して回転ヘラ削り調整、78はその後にナデ調整する。67は未調整で、他はヘラ切り離しの後ナデ調整する。底部内面はすべてナデ調整で、76には板状圧痕を伴う。68の底部外面にはヘラ記号が刻まれる。

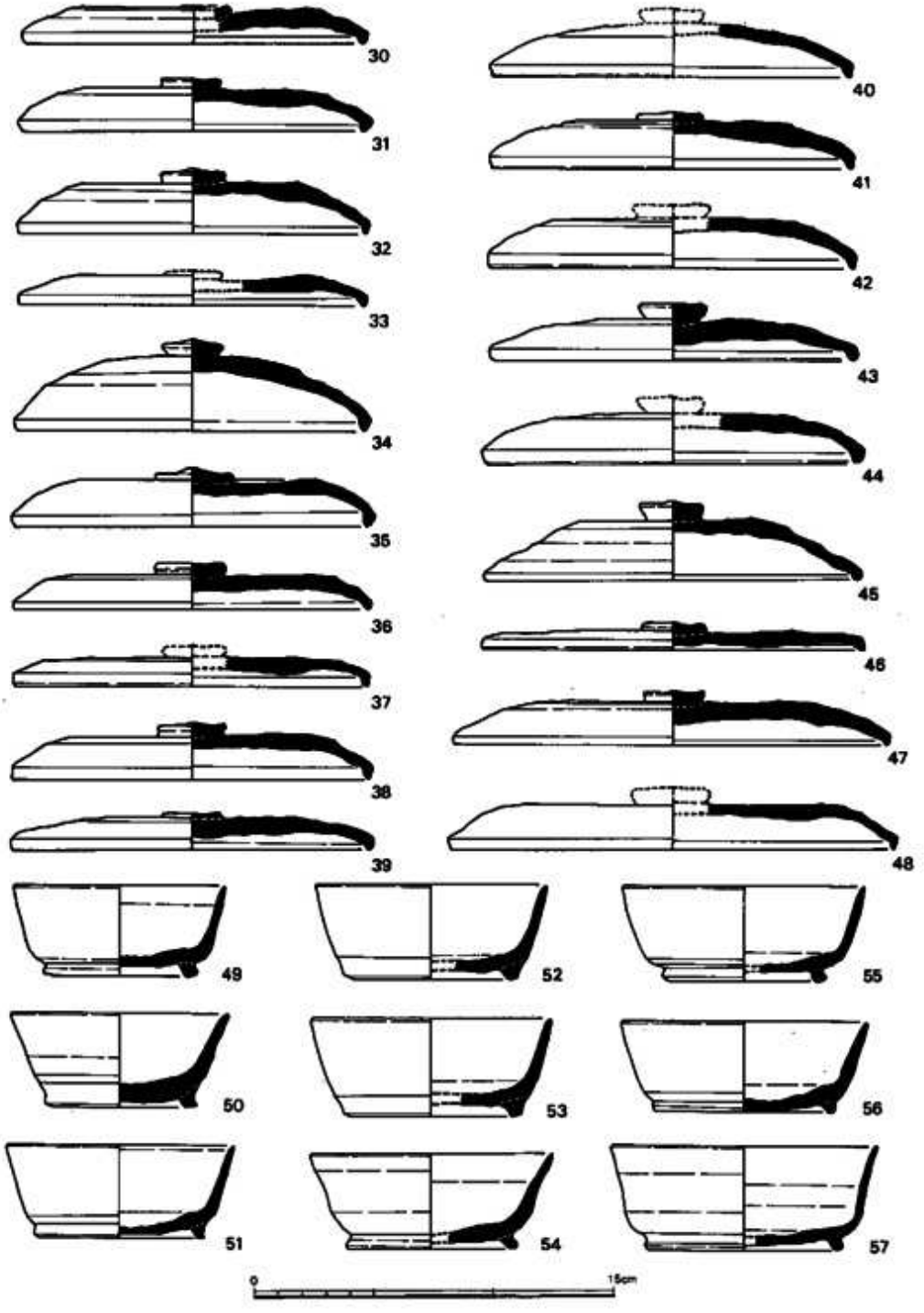
81～84は無高台の杯。81の底部外面は回転ヘラ削り調整、他はヘラ切り未調整。底部内面はナデ調整。

皿（85）　底部はやや丸味をもつ。底部外面がヘラ削り調整、底部内面はナデ調整。

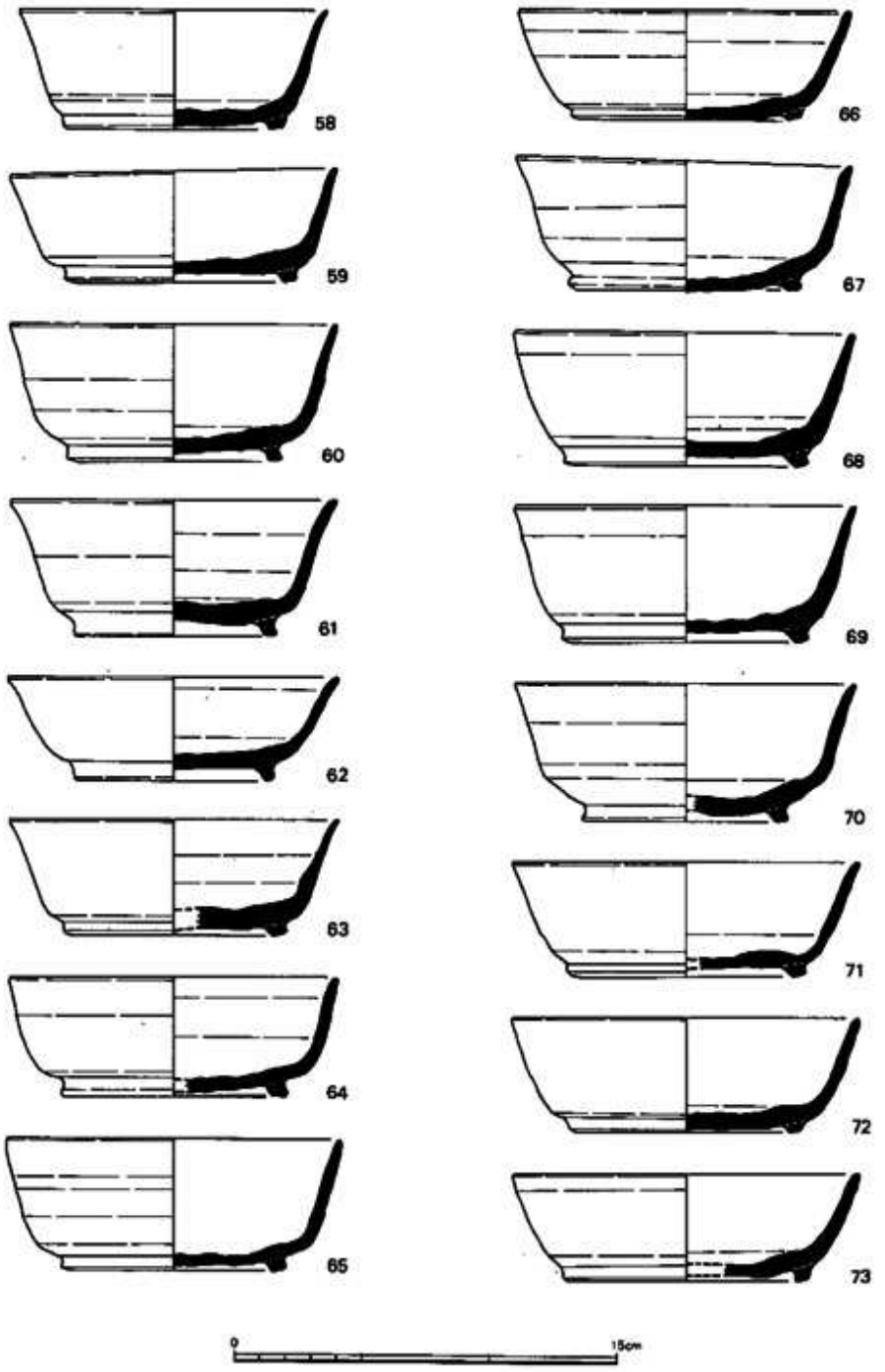
平瓶（86）　頸部の破片。口縁端部近くでやや内弯する。口縁端部は内傾する面をなす。



第37図　SK4141出土土器実測図（1）



第38図　SK4141出土土器実測図（２）



第39図　SK4141出土土器実測図（3）

壺（87～93）　87は球形の体部に細い頸をもつもの。外面の体部下半は回転ヘラ削り調整、体部上半はナデ調整で削り様の工具痕が顕著である。内面はヨコナデ調整。器壁が厚い。88は球形の体部をもつ甕の底部である。内面には同心円のアテ具痕が残る。

89～92は長頸壺。89は外面の底部から体部にかけて回転ヘラ削り調整、内面はヨコナデ調整。90は口縁部と肩部を一部欠損する。肩部の稜は明瞭である。口縁部は外反し、端部はそのまま丸くおさめる。体部上半に4条の沈線を巡らせる。外面の底部から体部下半にかけて回転ヘラ削り調整を施す。口縁部内面から体部にかけて緑灰色の自然釉がかかる。また、頸部外面は凹凸が著しく、粘土紐の継目が線状に残っている。口径9.9cm、最大径13.7cm、底径6.2cm、器高19.2cmを測る。

91は細く高い高台を貼付するもの。体部は丸く、肩部との境が明瞭でない。外面の体部下半は回転ヘラ削り調整、底部の内外面はナデ調整、他はヨコナデ調整。92は体部を欠失する。頸部と肩部の境は明瞭である。口縁部は外反し、端部はさらに屈曲して外方に伸びる。頸部の中位には沈線を巡らす。いずれも胎土中に砂粒を含む。

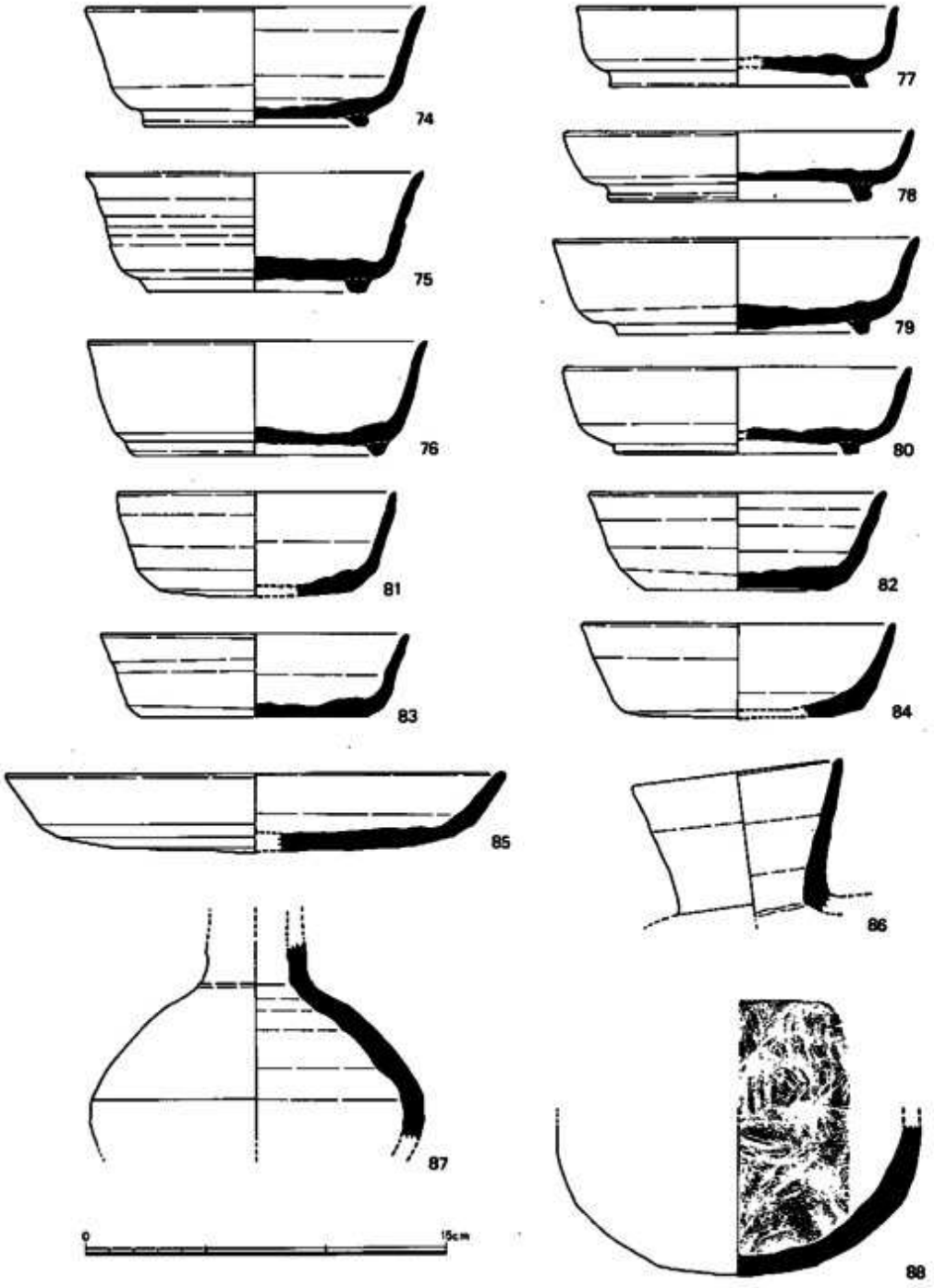
93は短頸壺。半分近くを欠くが、図上で完形に復原できる。体部は平底気味の底部から丸味をもって立ち上がる。体部と肩部との境は不明瞭である。口縁部はほぼ直に立ち、端部は平坦面をつくる。高台はしっかりしており、外方に開く。体部の下位に沈線を巡らす。調整は底部外面がヘラ切り離し後ナデ、底部外面は指オサエ。体部外面は回転ヘラ削り調整。沈線以上は回転ヘラ削り後、ミガキ様のナデ調整、その他の部位はヨコナデ調整を施す。把手は手捏で、指頭圧痕が残る。色調は明青灰色～暗青灰色。胎土は精良で、砂粒を少量混じえる。口径14.7cm、体部最大径28.8cm、高台径14.0cm、器高21.9cmを測る。

甕（94～96）　94は口縁部が外反しながら、95は直線的に開く。95は体部外面が平行叩き、内面には同心円のアテ具痕が残る。96の体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。体部の上位には手捏で環状に作った把手を横位に貼付する。調整は体部外面が細かい格子の叩き、内面には同心円のアテ具痕が残る。甕としたが、平底の鉢の可能性もある。口径は38.6cmに復原した。

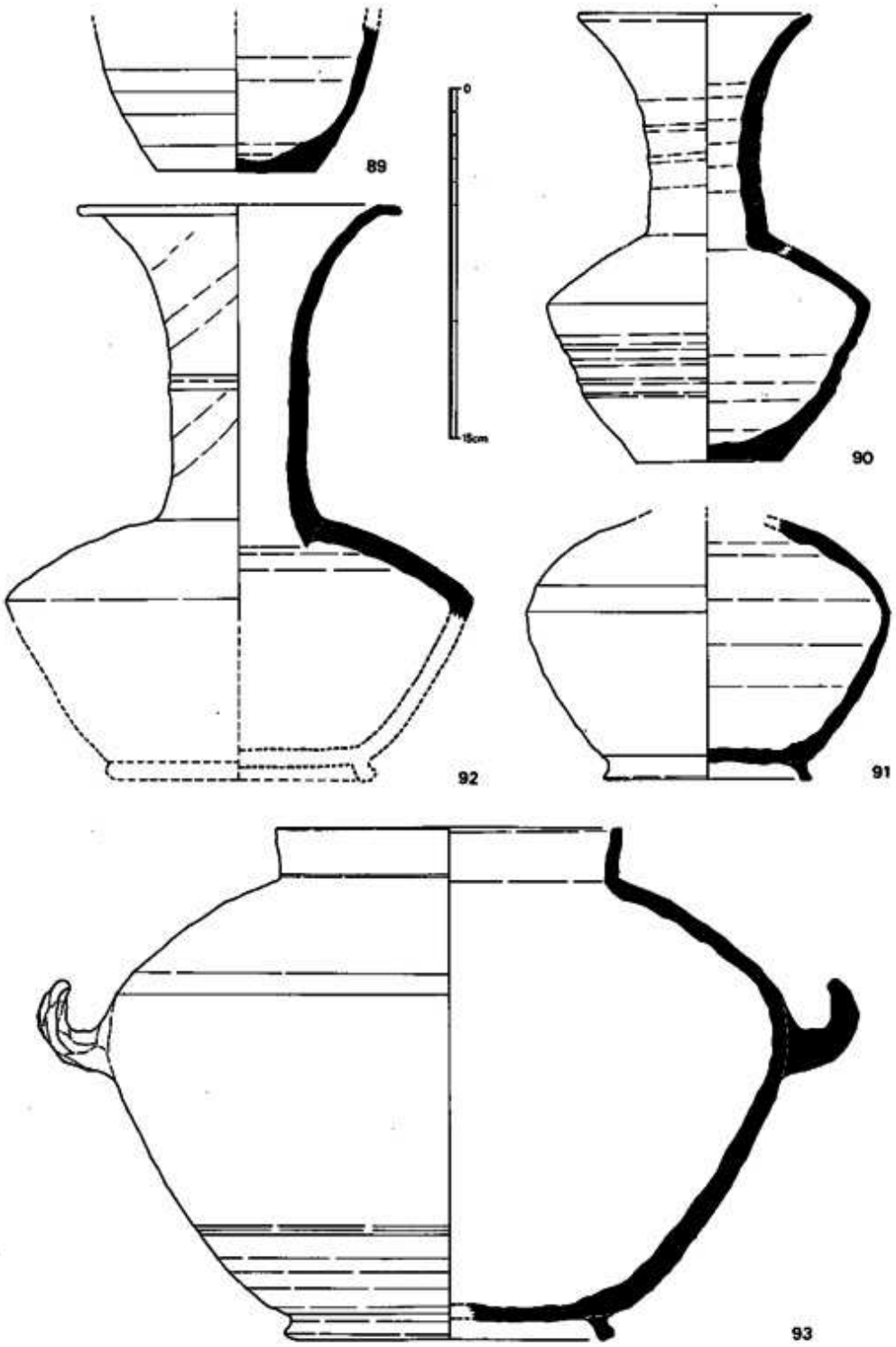
鉢（97）　97は平底鉢の口縁部片。内外面ともヨコナデ調整。復原口径25.8cm。

硯（98・99）　98は踏脚硯で、圏台部下半は欠失する。脚は4ヶ所に残るが10脚程度に復原できる。硯面と外堤部の高さはほぼ同一で、陸部と海部の境には明瞭な段がつく。頻繁に使用されたようで、硯面は平滑になっている。色調は暗灰色を呈する。

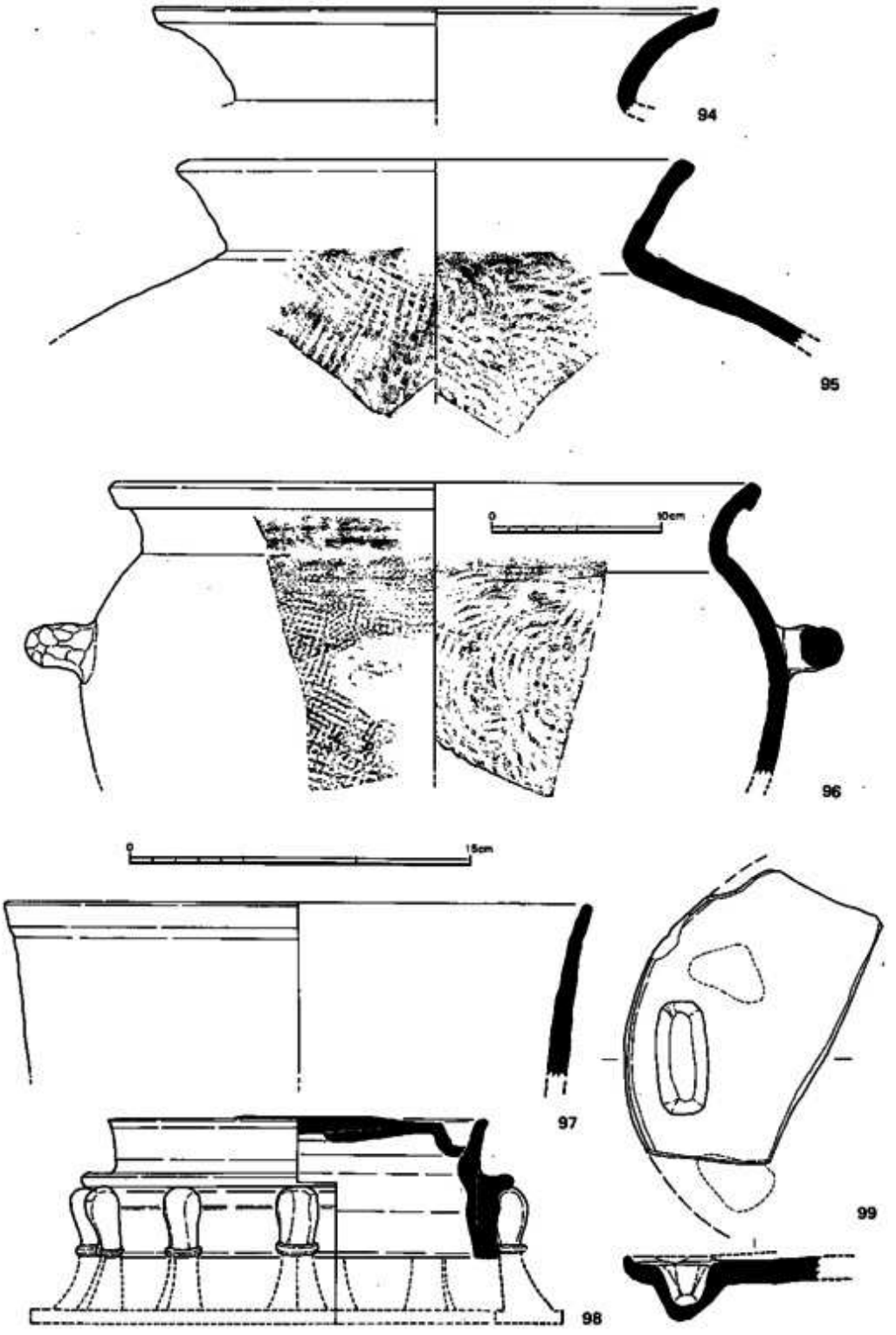
99は皿形を呈する円形の硯。裏面には脚の接合痕跡が2ヶ所に残るが、欠失しているため形状は判らない。硯面の一部を凹ませて削り海部とする。陸部は特に中央部分がよく磨れ、平滑になっている。裏面は手持ちヘラ削り調整を行なう。色調は青灰色を呈する。98・99とも胎土はやや粗く、砂粒を含む。



第40図　SK4141出土土器実測図（4）



第41図　SK4141出土土器実測図（5）



第42図　SK4141出土土器実測図（6）

土師器

蓋（100～116）　口径8.8～11.8cmの小形品（100・101）と、13.6～20.6cmまでの中・大形品に分かれる。天井部と体部の境は不明瞭である。口縁端部の形状は下方にのばすもの（102・111・113）と、断面三角形状ないしは丸くするものがある。天井部外面の調整は、確認できるものについてはすべて回転ヘラ削り調整の後、回転ヘラミガキを行なっている。内面も同様に回転ヘラミガキ調整を施す。色調は橙褐色を呈する。

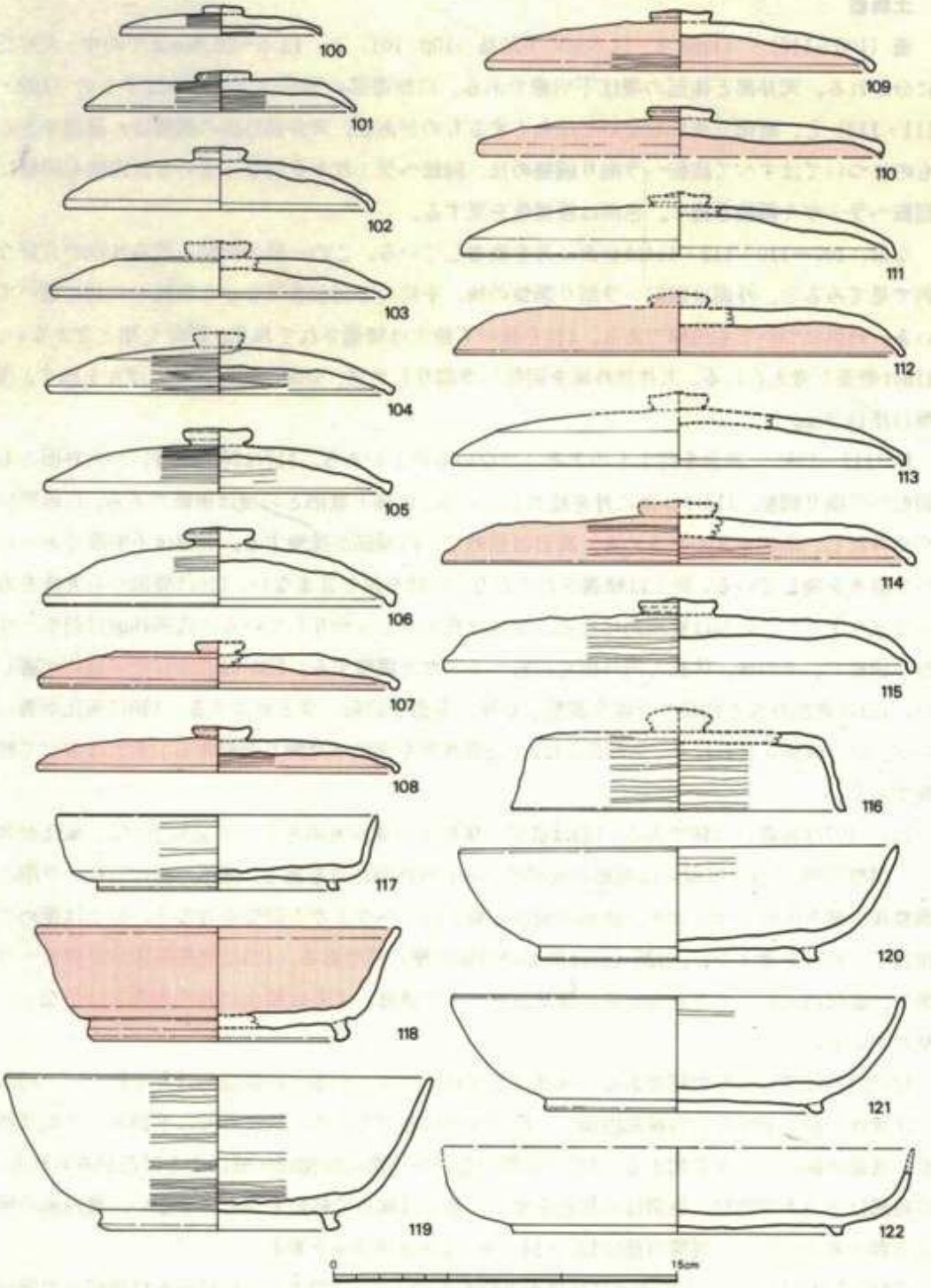
なお、107～110・112・114は全面に丹を塗布している。この一群の調整を残存状況が良好な例で見てみると、外面は回転ヘラ削り調整の後、手持ちで回転させながら蜘蛛の巣状に磨いている。内面についても同様である。114を除いて胎土は精選されており、砂粒を殆ど含まない。116は壺蓋と考えられる。天井部外面を回転ヘラ削りした後、全面に回転ヘラミガキを施す。復原口径14.6cm。

杯（117～128）　高台を付すものとそうでないものとがある。117は杯部が浅い。内外面とも回転ヘラ削り調整。118は全面に丹を塗布している。体部と底部との境は明瞭である。口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめる。高台は長めで、内端部が接地する。調整は不明瞭であるが、ヘラ磨きを施している。胎土は精選されており、砂粒を殆ど含まない。119は底部から丸味をもって立ち上がり、体部は直線的になる。高台は長めでしっかりしている。底部外面は回転ヘラ削り調整で、その後、体部の内外面を回転ヘラミガキ調整する。120～122は器壁の風化が著しい。121は底部外面を回転ヘラ削り調整した後、全面を回転ヘラミガキする。120は風化が著しいが、同じ調整と思われる。完形品。122は底部外面を回転ヘラ削り調整する。胎土はすべて精良である。

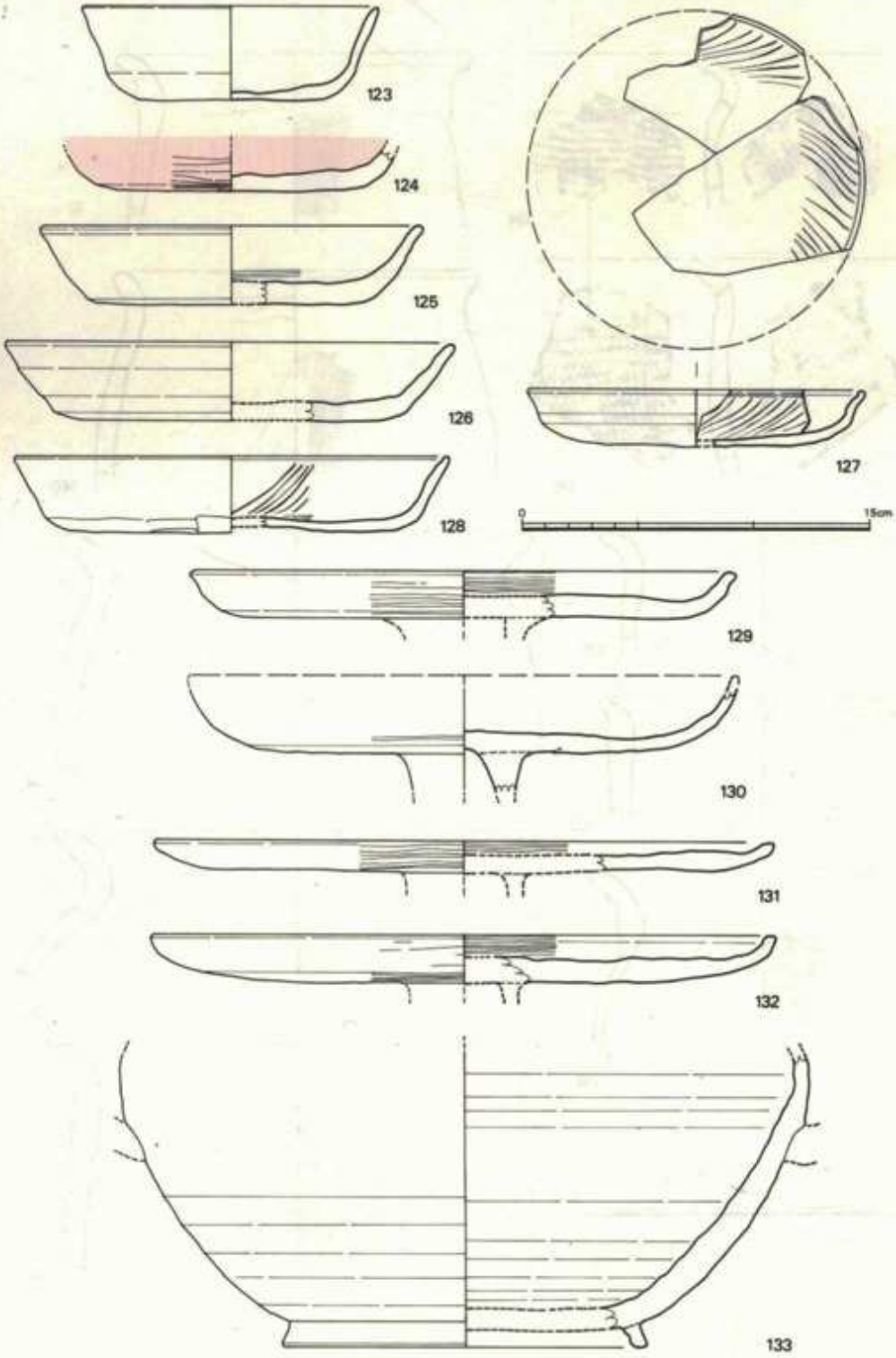
123～127は無高台の杯である。123は底部と体部との境が丸みをもって立ち上がる。風化が著しく調整不明。124は杯或いは椀形の底部である。内外面に丹を塗る。底部外面は回転ヘラ削り調整後、横方向のヘラミガキ、底部内面は不整方向のヘラミガキ調整を行なう。胎土は極めて精良で、砂粒を含まない。125・126は同形の器壁が厚い杯である。125は底部外面が手持ちヘラ削り、底部内面にミガキを加える。体部はヨコナデ調整。ともに胎土に砂粒の混入は少なく、精良である。

127と128は浅い皿形の杯である。体部はS字状に立ち上がる。口縁端部は丸く仕上げ、内面に沈線状の段を有する。口縁部内面に一段の放射状暗文をもつ。底部外面は手持ちヘラ削り調整、底部内面にミガキを加える。127の底部内面の中央部には指頭圧痕による凹凸がみられる。口縁部はヨコナデ調整。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良で砂粒を殆ど含まない。畿内系の搬入土器と考えられる。復原口径は127が14.6cm、128が18.8cmを測る。

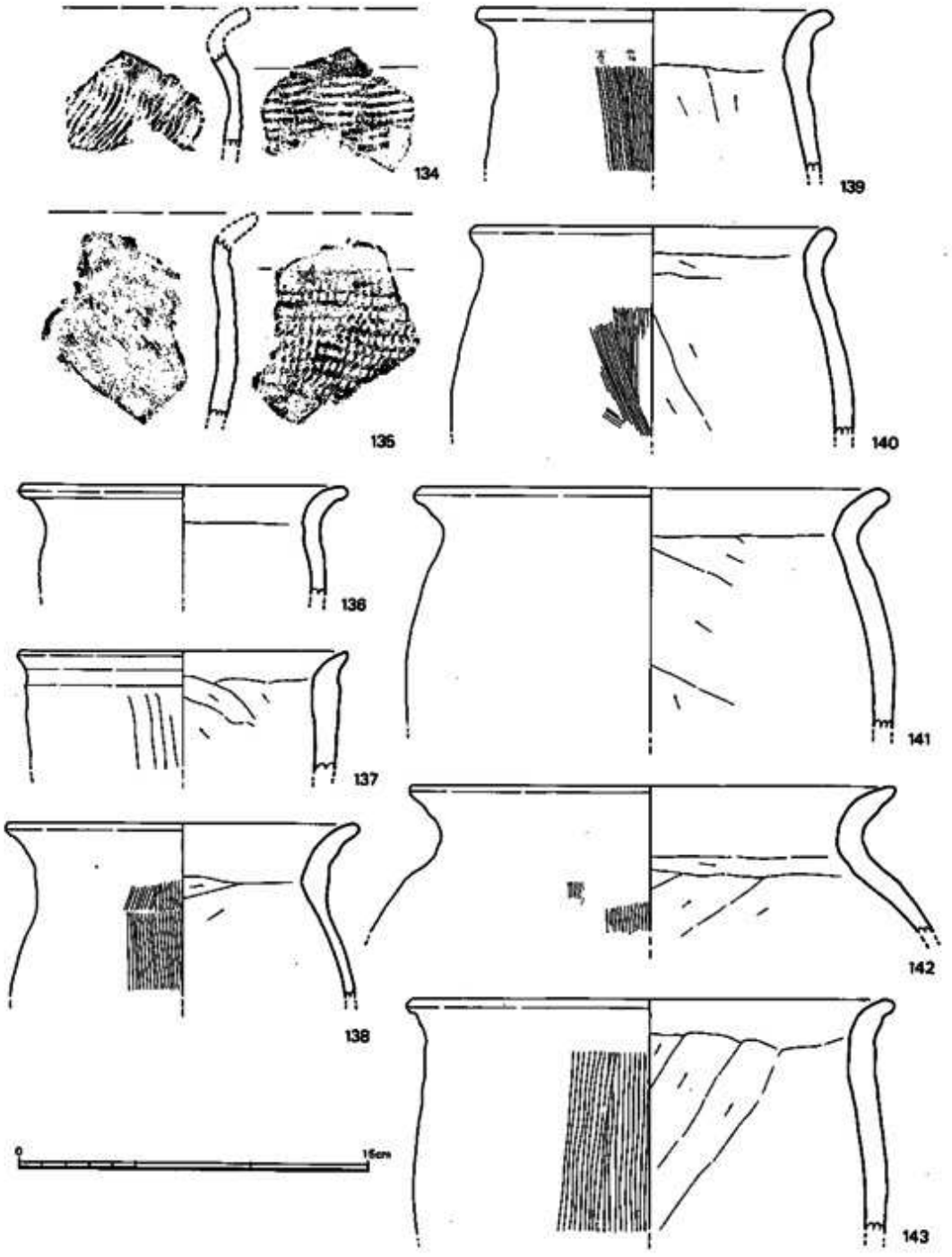
高杯（129～132）　130のように杯部が丸味をもつもの、132のように杯部と口縁部との境が明瞭で口縁端部に平坦面をつくるもの、129・131のようにその中間的なものがある。129・131・



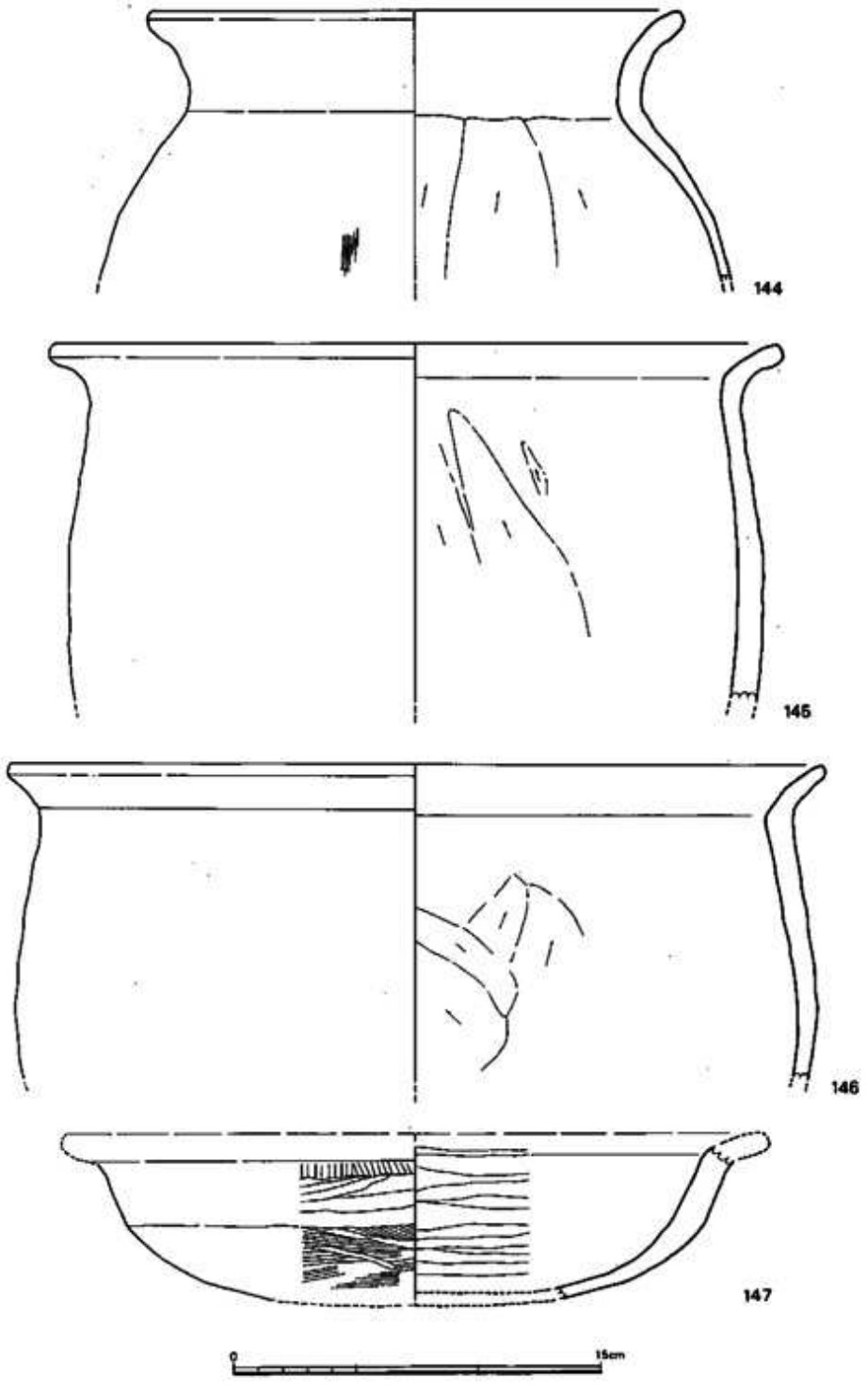
第43図　ＳＫ4141出土土器実測図（７）



第44図　ＳＫ4141出土土器実測図（８）



第45図　SK4141出土土器実測図（9）



第46図　SK4141出土土器実測図（10）

132は杯部外面を回転ヘラ削りした後、全面に回転ヘラミガキ調整を加える。130は風化が著しく調整不明。復原口径23.6～27.0cm。

壺（133）　短頸壺の体部下半から高台部分にかけての破片で、93の須恵器の短頸壺とほぼ同形態となる。外面の体部下半は回転ヘラ削り後回転ヘラミガキ、体部上半は回転ヘラミガキ調整。内面はヨコナデ調整。胎土に砂粒を殆ど含まず、精選されている。

甕（134～146）　134・135は玄界灘式製塩土器である。外面は擬似格子のタタキ、内面には同心円のアテ具痕が残る。色調は134が赤褐色、135は茶褐色を呈する。

136～140は小形の甕で、胴部はそれほど張らない。口縁部は137・140のように短く外反するもの、138のように大きく外反するものがある。外面が縦方向の刷毛目調整、内面はヘラ削り調整。137の刷毛目は粗い。口径14.2～15.8cm。

141～144は中形の甕。142・144は口縁部が強く外反し胴が張る。143は口縁部が短く外反し、胴は張らない。外面が縦方向の刷毛目調整、内面はヘラ削り調整。口径20.4～22.0cm。145・146は口縁部がく字形となるもの。145は口縁部～胴部外面にかけてヨコナデ調整、胴部内面はヨコナデ後、斜位の粗いヘラ削りを行なう。146は胴部外面がナデ調整、口縁部がヨコナデ調整、胴部内面はヘラ削り調整。外面が一部黒化している。口径30.3・33.4cm。

鍋（147）　浅い鉢形を呈するもので、口縁部は外反する。底部外面は横方向のハケ後粗いヘラミガキ調整。体部外面は縦方向の粗い刷毛目調整の後、横方向のヘラミガキ調整。内面はヘラ削りの後、横方向の粗いヘラミガキ調整。外面の底部から体部にかけて煤が付着する。胎土には砂粒を多く含む。

SX4142出土土器（第47図、図版39）

須恵器

椀（1）　丸味をもつ深い身部に、高く細い高台を貼付する。体部から口縁部にかけて非常に薄く仕上げている。底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面はナデ調整。色調は黒灰色を呈し、胎土中に砂粒を多量に含む。器形的に類例の少ないものである。

土師器

甕（2）　口縁部は外反し、器壁はやや厚目である。胴部外面は縦方向の刷毛目調整、内面は縦方向のヘラ削り調整。

SX4145出土土器（第47図）

須恵器

蓋（3・4）　身受けのかえりを持つもの。4は天井部外面が回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

杯（5）　底部外面はヘラ切り未調整、底部内面はナデ調整。

土師器

皿（6）　口縁部と底部の境が不明瞭なもの。器壁が厚い。調整は底部外面が手持ちヘラ削り、口縁部外面が横方向のヘラミガキ。内面はヨコナデの後、一段の放射状の暗文を施す。胎土は精良で、砂粒を殆ど含まない。色調は橙褐色を呈する。復原口径19.8cm。

甕（7）　口縁部がくの字に屈曲するもの。体部外面は縦方向の刷毛目調整、体部内面はヘラ削り調整、口縁部はヨコナデ調整。

SX4158出土土器（第47図）

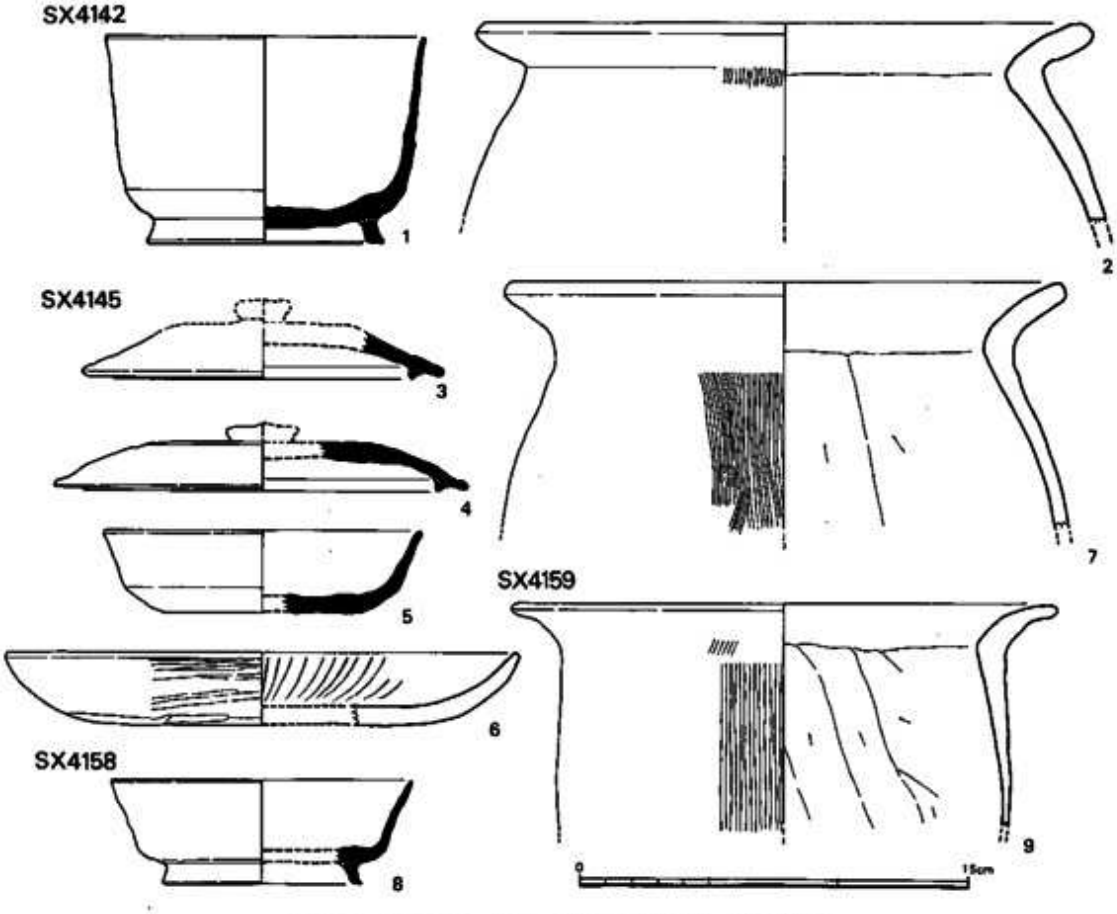
須恵器

杯（8）　高台付の杯で、底部から丸みをもって立ち上がり、体部は外反する。高台は高く、ハの字に開く。底部内面はナデ調整。

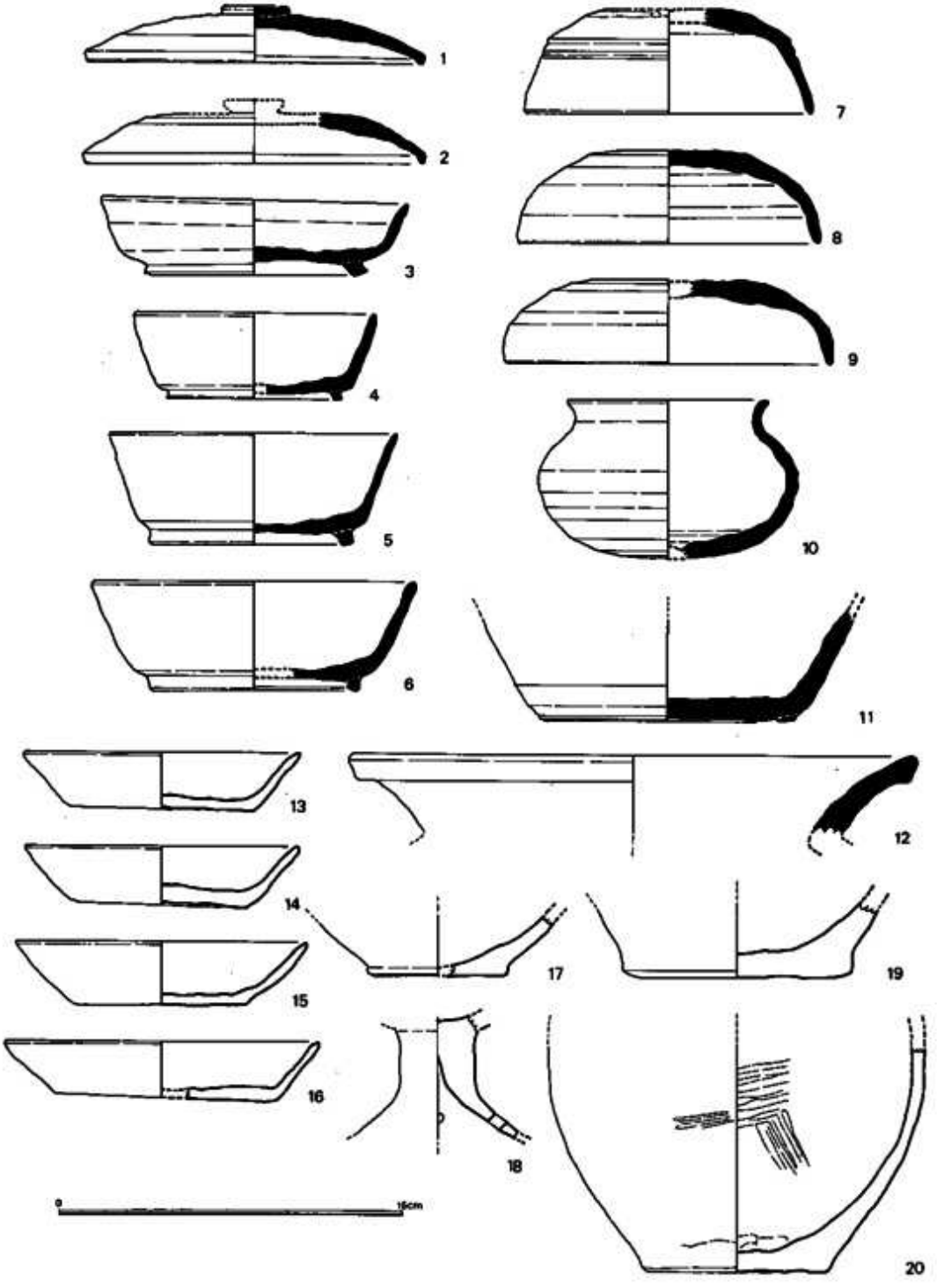
SX4159出土土器（第47図）

土師器

甕（9）　口縁部は外反し、胴は張らない。外面は縦方向の刷毛目、内面はヘラ削り調整。



第47図　SX4142・4145・4158・4159出土土器実測図



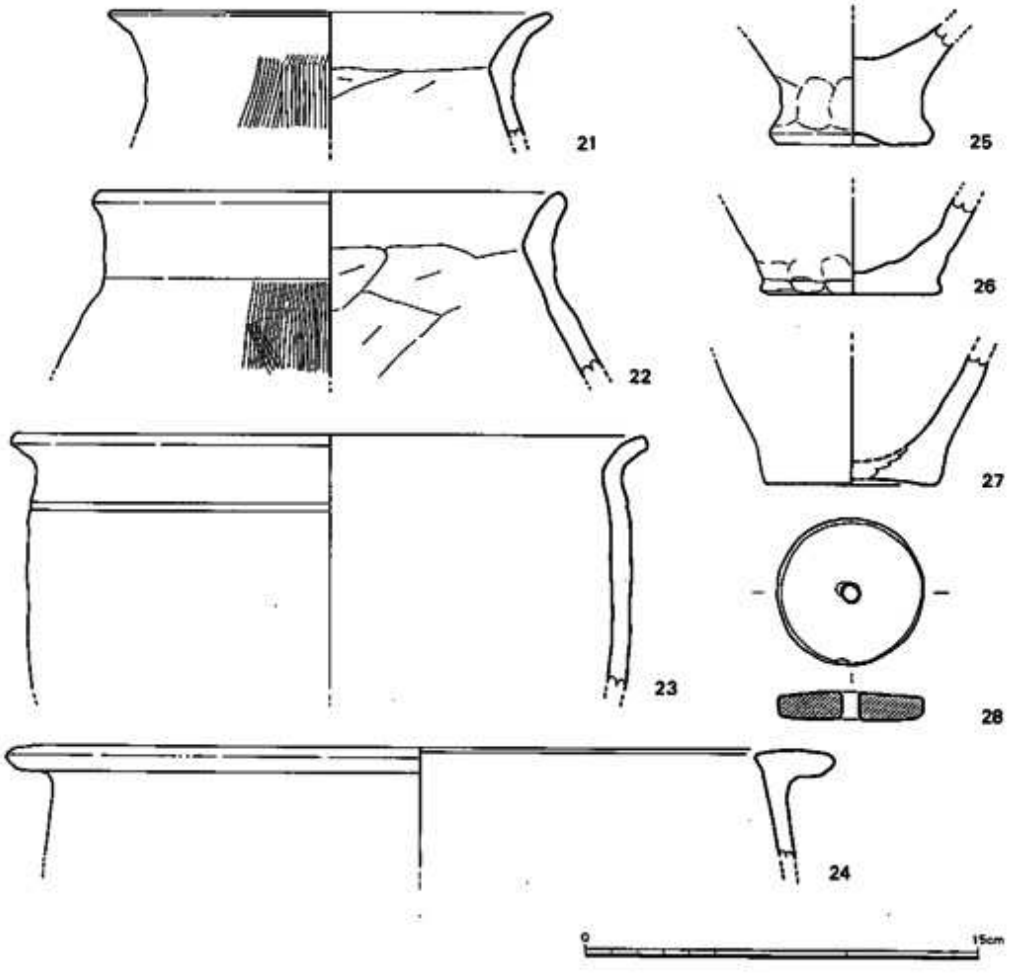
第48図　茶褐色土層出土土器実測図（1）

茶褐色土層出土土器（第48・49図、図版40）

須恵器

蓋（1・2・7～9）　1は口縁端部が断面三角形状、2は下方に長く引き出すもの。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。口径14.6・14.8cm。7は天井部と口縁部の境に稜をもつ。壺蓋か。8・9は天井部と口縁部の境が不明瞭なもの。天井部外面は回転ヘラ削り調整、天井部内面はナデ調整。

杯（3～6）　3は器高が低いもの。底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面はナデ調整。口径13.5cm、高台径9.8cm、器高3.3cm。4～6は底部と体部の境が明瞭なもの。5は断面四角形のしっかりした高台を貼付する。底部外面は4・5が回転ヘラ削り調整、6はヘラ切り未調整。底部内面はいずれもナデ調整。口径10.6～14.1cm、高台径7.6～9.2cm、器高3.8～4.9cm。



第49図　茶褐色土層出土土器実測図（2）

壺（10・11）　10は小形の短頸壺。偏球形の体部に短く外反する口縁部をもつ。外面の体部下半は回転ヘラ削り調整、体部上半から内面にかけてはヨコナデ調整。口径8.8cm、胴部最大径11.2cm、器高6.9cm。11は平底の底部破片。底部端に非常に低い高台を貼付する。底部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面にはタタキによる円弧文が残る。

甕（12）　口縁部破片で復原口径24.8cmを測る。

土師器

杯（13～16）　口径12.1～13.8cm、底径7.4～10.2cm、器高2.5～2.8cmを測る。糸切り。

高杯（18）　高杯の脚部片で、4ヶ所に径0.6cmの孔を外方から穿つ。

甕（21・22）　21は口縁部が外反する小形の甕。22は口縁部が短く外反し、胴が張るもの。ともに胴部外面は縦方向の刷毛目調整、内面はヘラ削り調整。復原口径17.0・18.2cm。

弥生土器

壺（17・19・20）　17は円盤状の底部となるもの。小形の壺。体部外面に斜め方向のミガキ調整、内面はナデ調整を施す。19の外面はヨコナデ調整、内面はナデ調整。20は内外面ともミガキ調整。底部内面には指頭圧痕が残る。

甕（23～27）　23の口縁部は如意形で口縁下に沈線が巡る。復原口径24.6cm。24の口縁部は逆L字形で、内側に僅かに突出する。復原口径31.8cm。25～27は底部破片。25は内窪み、26は平底、27は上底状となる。25・26の外面には指頭圧痕が顕著である。底径6.4・7.0・6.8cm。

土製品

紡錘車（28）　径5.6cm、最大厚1.1cm、孔径0.6～0.7cm。全面ナデ調整。色調は黄褐色で、胎土に砂粒を多く含む。

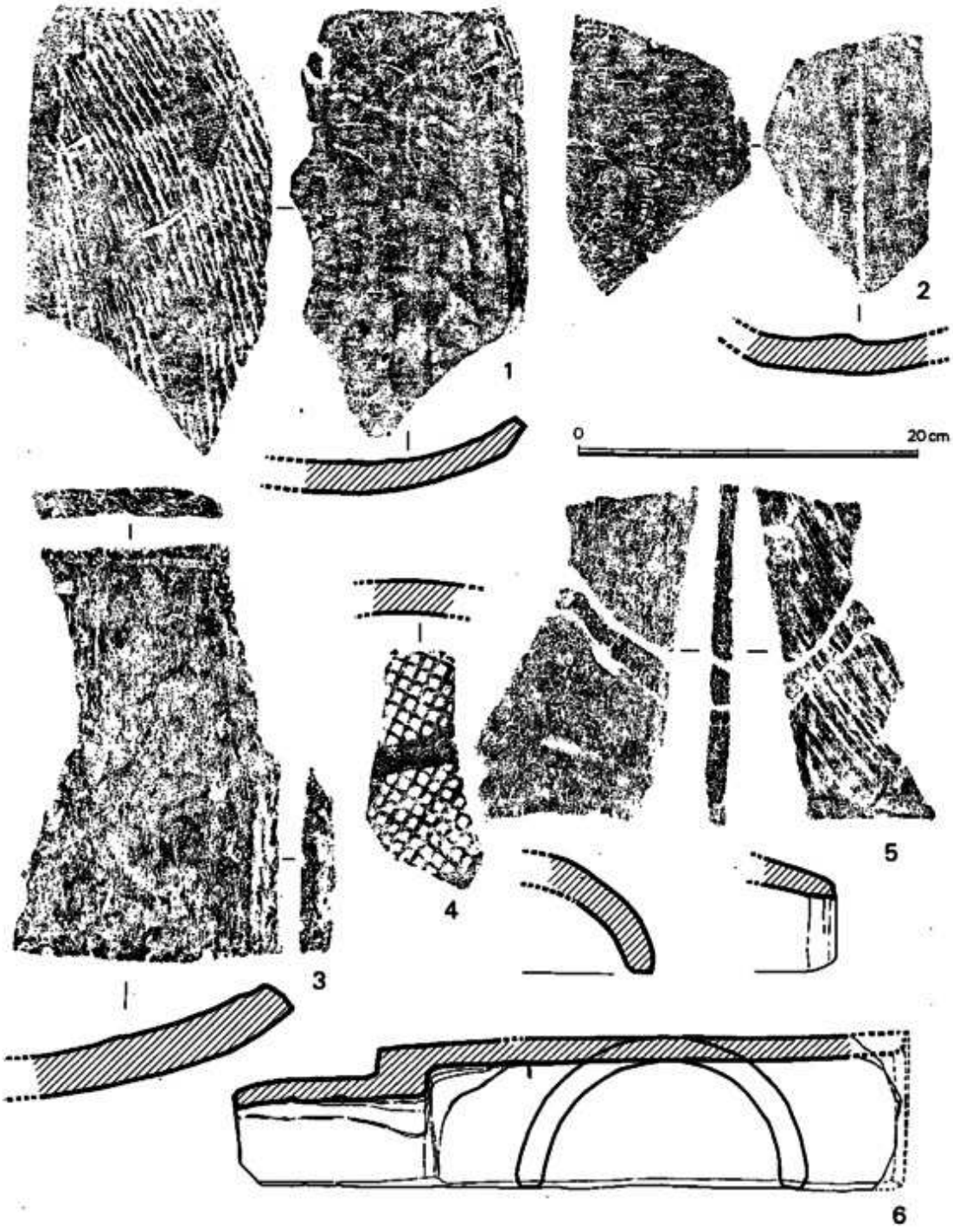
瓦類

瓦類の出土量は多くない。軒瓦類の出土が皆無であるのも大宰府史跡の調査ではごく希なことである。ただ、出土した土器類が古い要素を持つものであり、丸・平瓦片にも古い要素が残っていたことから、土壙SK4141及び竪穴状遺構SX4145出土瓦に代表させて調査区出土瓦の概要を報告する。

丸瓦（第50図、図版41）

5は行基式丸瓦の狭端部の破片で、SX4145から出土した。凸面はナデにより調整されている。凹面には粗い糸切り痕跡が残る。狭端面は未調整のままであるが、凹面側はヘラ削りされている。側面では内側及び外側の一部が面取りされている。胎土には大粒の石英粒を含み、暗茶褐色で焼き上がりは悪い。

行基式丸瓦が大宰府史跡出土の軒瓦に取り付けられた例は極めて限られている。大野城跡出土の単弁軒丸瓦や政庁・観世音寺出土の単弁軒丸瓦、観世音寺出土の偏行忍冬唐草文軒丸瓦など数種である。現在までに第122次調査区（1991年調査、観世音寺南面築地東半部）で検出され



第50図　丸瓦・平瓦拓影実測図

た井戸SE3680からの出土軒丸瓦3種のうち2種が行基式軒丸瓦であったのが最新の例で、8世紀前半に考えられている。

6は広端面近くを破損するが、ほぼ完形の丸瓦である。ひびの入り方などから粘土紐巻上げ手法によって作られたことが判る。凸面の一部に縄目の痕跡かと思われる部分があるが、横方向にナデ消されていて明瞭でない。玉縁の上面には板状器具によるものと思われる横方向の細かい平行線が残る。凹面は肩が段を作って玉縁に続く。玉縁の端縁まで布目が残るから有段の模骨であったことが判る。

布筒は円筒状に作った筒の玉縁付近だけ4ヶ所がまつられたものとみられ、凹面2ヶ所に布を縫った痕が残る。布筒の布目は極めて細かい。側面ではヘラ削りによって三面の面取りがされ、玉縁の両端では角を落としている。胎土に極細かい砂粒が認められるものの良質の粘土が選ばれている。灰白色に焼き上がるが、やや軟質の丸瓦である。老司式軒瓦に伴う丸瓦であろう。SX4145から出土している。

平瓦（第50図、図版42）

1は凸面に縄目の叩打具痕を残す平瓦片である。縄目痕の形状は破片でみる限り「叩き締めの円弧」を描いているように見える。仮にこれを「叩き締めの円弧」とすれば桶巻き作りの平瓦である。さらに、叩打具は板状のものに縄を横方向に巻き付けたものとも考えられる。この様に考えた場合、縄目痕から測り出される叩打具の幅は6.5cmほどである。

凹面には全面に布目痕が残る。また、僅かに模骨痕が波状に残る。側面はヘラ削りにより2面に面取りされる。狭端面では、端面をヘラ削りで揃えた後、凹面を幅3.5cm削り、さらに角を丸く削っている。胎土に少量の砂粒を含むが、良質な粘土で作られている。焼きはやや悪い。

側面や端面を削り面取りして仕上げている点や凸面の縄目痕が「叩き締めの円弧」を描く点など大宰府史跡出土瓦のうちでは古い形式のものに属する。SK4141から出土している。

2の凸面は横方向のナデで仕上げられている。凹面には幅4.5～5.5cmほどの幅の広い模骨痕と布目が残る。模骨の板は中央が左右より窪んでいる。少量の砂粒を含むが、良質の粘土が選ばれている。茶褐色に焼き上がるが、焼成はやや不良である。大宰府史跡出土瓦では波状に模骨痕を残すものは古い形式の瓦の一つの要素である。SX4145出土。

3の凸面では荒れが進んでおり、表面に石英粒が目立っている。僅かに横方向にナデ仕上げされている部分が残る程度である。凹面でも荒れが進み、表面が剥離している部分が広い。狭端面に沿って布端が二重に折られた部分、側面近くで分割突起と思われる窪みの部分に布目が残る。模骨痕も僅かに波状に残っている。

側面は截面と破面とを残す。狭端面はヘラ削りされている。胎土に砂粒を含むが、良質の粘土を選んでいる。暗灰色～淡茶褐色で、焼きはやや悪い。側面の分割方法や狭端面のヘラ削りなど新しい要素と思われる部分もあるが、模骨痕や分割突起を残していることなどは古い要素

と思われる。SX4145出土。

4は凸面の叩打具痕のみを図示した。老司Ⅰ式軒平瓦に残る斜格子の叩打具痕と同一のものである。SK4141出土。

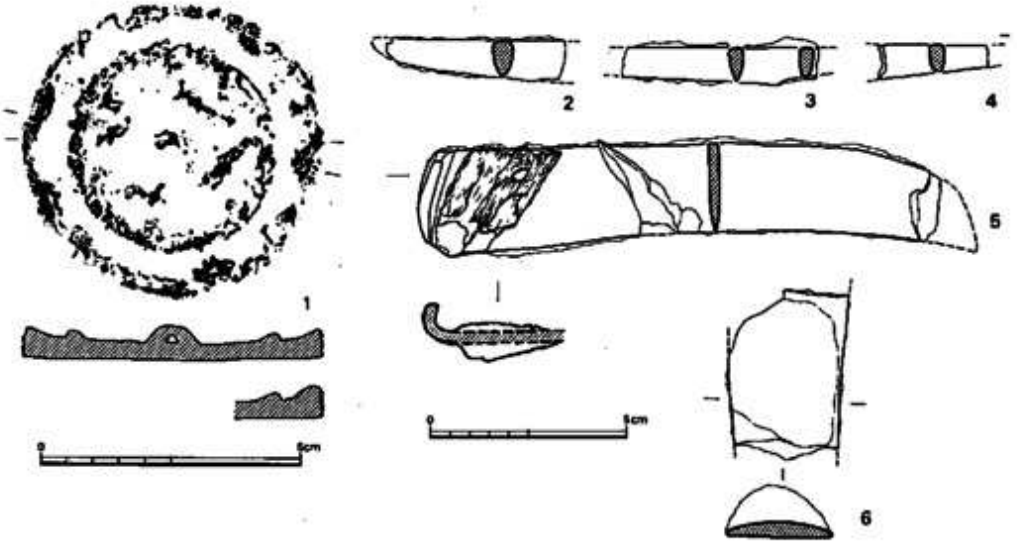
金属製品（第51図、図版43）

青銅鏡（1）　完形に近いものであるが周縁部が剥落しており、また、錆膨れが著しいため復原的に図示した。鈕を一部欠失する。文様は極めて不鮮明であるが、類例から海獣葡萄鏡と考えられる。鏡背文様は界線によって内区と外区に分かれる。縁の断面は斜縁で、外区には縁に接して珠文様の半円形の文様が廻る。内区には4ヶ所に文様状の隆起が認められるが、度重なる踏返しの結果かモチーフの原形を留めていない。面径5.8cm、総高0.6cm。鋳放しのままか、表裏面に錆と砂粒が多く付着している。三重県鳥羽市八代神社伝世鏡・兵庫県宝塚市勅使川窯跡出土例などが本例に最も類似する。小型海獣葡萄鏡については現在27例が知られている。(註1) SK4141から出土。

刀子（2～4）　それぞれ別個体と考えられる鉄製の刀子片である。2は切先で、先端部を欠失する。幅1.0cm、厚さ0.5cm。3は身から茎にかけての破片。刃部幅0.9cm、厚さ0.4cm、茎幅0.4cm、厚さ0.4cmを測る。4は茎部分で、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。SK4141出土。

鉄鎌（5）　刃部が緩く内弯する小形の曲刃鎌である。刃先を欠失する。基部を刃に対して鈍角に折り返し、基部には折り返しとほぼ平行して2cm幅で木質が残っている。中央部付近で幅2.3cm、厚さ0.3cmを測る。残存長13.4cm。SK4141出土。

鉈（6）　鉈の基部付近と考えられる。側辺は僅かに開きながらのびる。中央部付近で幅2.



第51図　SK4141出土金属製品実測図

8cm、厚さ0.45cmを測る。鉄製。茶褐色土層出土。

鋳造関係遺物（第52・53図、図版43・44）

トリベ（1～10）　法量に大・中・小の三種があり、形態的には丸底と平底がある。1・2は小形で丸底となるもの。1/4ほどが残存する。外面には成形時の指頭圧痕が残る。1は復原口径11.2cm、器高3.9cm。胎土は精良で、砂粒を少量混じえる。2は片口をもつ。復原口径11.8cm。胎土に砂粒を多く含む。色調は1・2とも青灰色を呈する。内外面に青緑色の溶解物が付着する。3～6は小形で平底となるもの。3は片口。外面はナデ調整。4は復原口径12.8cm。5は底部と体部の一部を欠失するが、片口を持たないものである。口径15.6cm。6は完形品。口径16.5cm、器高6.5cm。胎土は精良で砂粒を少量含む。

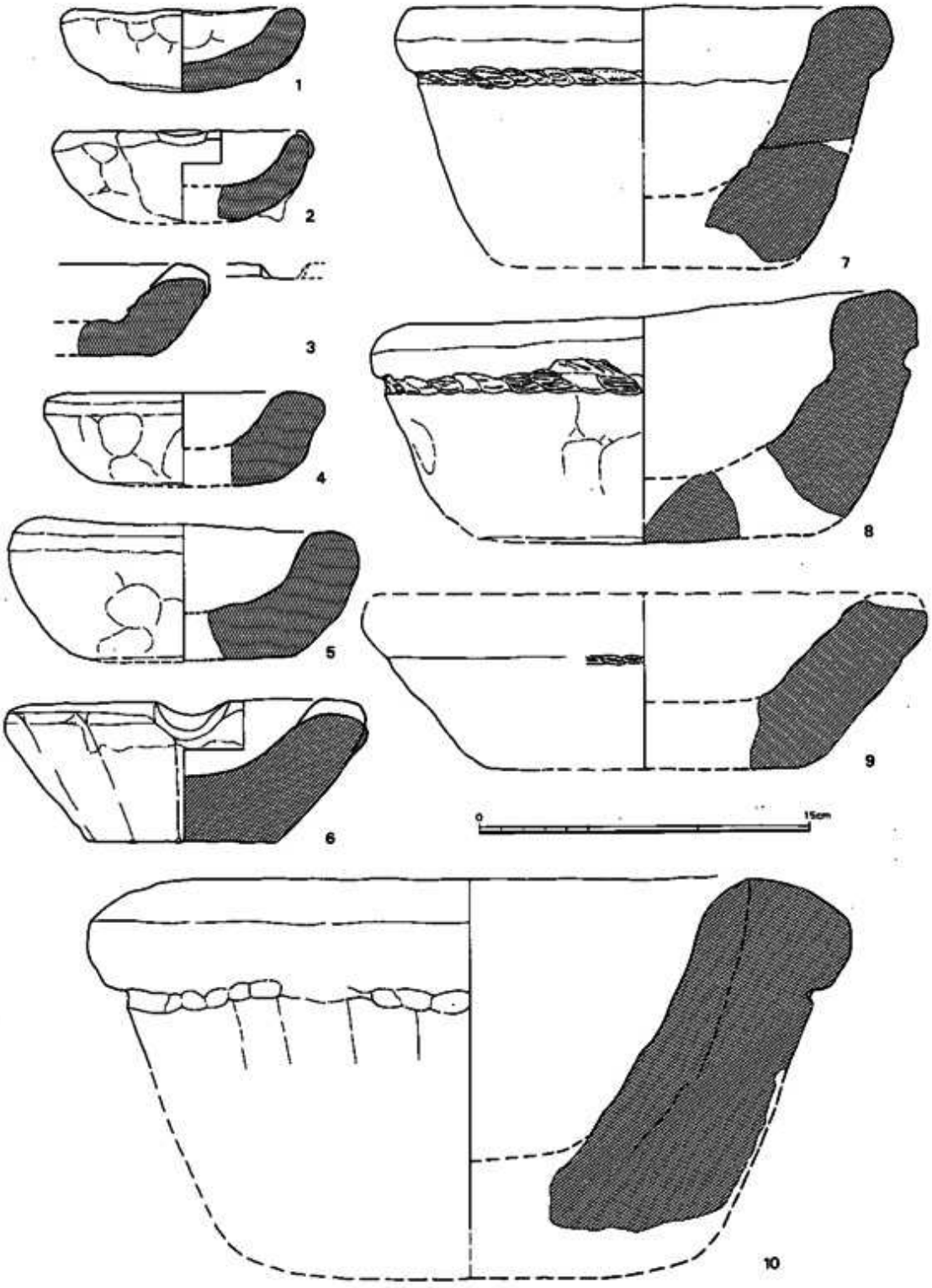
3～5の外面はナデ調整、6はタタキの後ヨコナデ調整。タタキによる凹凸が顕著である。タタキ痕跡から見ると原体は平らではなく、若干弧状の曲面をもっていたことが判る。内面の下半は凹凸が著しく、湯のたぎりにより器面の一部が溶けている。また、この部分の胎土に含まれる石英は溶けてガラス化している。内面の状況や形態から考えると3～6は坩堝とすべきであろうか。

坩堝（7～10）　7～10は平底で、外面の口縁部下を縄状の繊維質で巻いた圧痕が残る。器壁中に深く食い込んでいることから、成形時に型くずれを防ぐ理由で巻かれたものであろう。9は浅いためか縄も細目である。縄が巻かれた部分は黒変している。外面は8がナデ調整、9がヨコナデ調整、10は6と同様のタタキの後ナデ調整する。胎土はいずれも粗く、砂粒・砂礫を多く含んでいる。ただ、8の内面の一部には真土様の精良な粘土を使用した部分が残っている。内面は3～6と同様に使用による凹凸が著しい。口径は7が22.8cm、8が25.0cm、9が25.8cm、10が34.8cmを測る。1はSK4141、2はSX4151、3・7・10はSX4142出土。4～6・8・9はSX4152から一括して出土した。

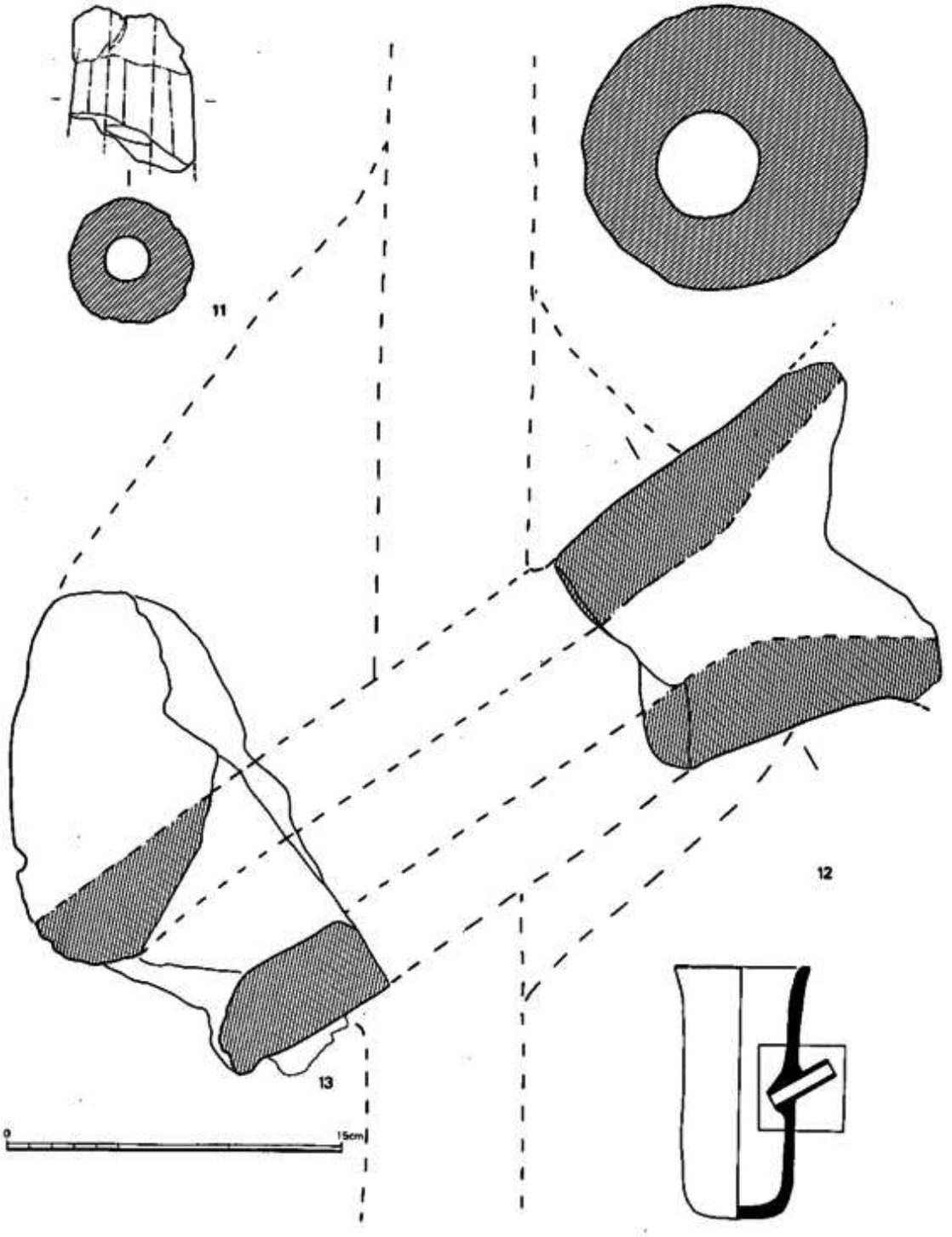
羽口（11～13）　11は先端部の破片で、溶解物が付着している。孔径は2.0cmを測り、外面にはタタキ痕が残る。胎土は精良で、砂粒を少量含む。

12・13は第53図右下のような溶解炉に付属すると考えられる大形の羽口で、一連のものであろう。12は中央部付近で径12.7～12.8cm、孔径4.6～4.7cmで、孔は送風口に向かってハの字に開いている。13は先端部で砂礫と溶解物が大量に融着し、羽口の旧状を留めないほどに膨らんでいる。この部分の色調は青緑色ないしは茶褐色を呈する。

なお、図示し得なかったが、この他にもトリベの細片とともに羽口片が多く出土している。また、SK4141からは炉壁片が出土している。これらの鋳造関係遺物の対象が鉄であるのか青銅であるのかについては、分析の結果を俟ちたい。



第52図　鋳造関係遺物実測図（1）



第53図　鋳造関係遺物実測図（2）

小結

イ）今回検出した掘立柱建物５棟・土壙１・竪穴状遺構１・炉跡１について若干検討する。

掘立柱建物５棟について、柱掘形の切り合い関係から時間の問題を検討するとSB4155とSB4160はSB4155が古期になる。また、SB4165とSB4161ではSB4165が古期に属する。次に方位の点からみると、SB4150とSB4160は約１°東に振っている点同じであり、同時に存在していた可能性が考えられる。また、SB4161とSB4165とは同一方位であり、先のSB4150・SB4155・SB4160とは全く異なる。切り合い関係と方位を考慮して建物の先後関係から古い順番に並べると次の二案が考えられる。

1　SB4155→SB4150・SB4160→SB4165→SB4161

2　SB4165→SB4161→SB4155→SB4150・SB4160

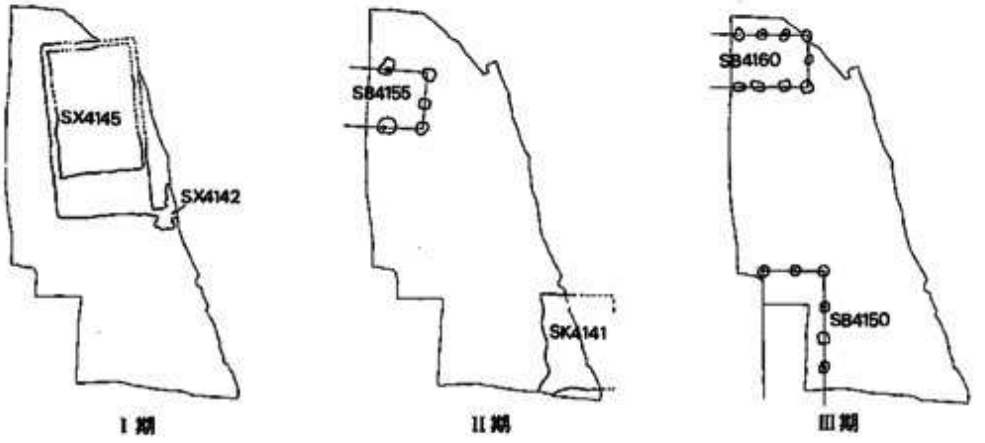
ここで問題となるのは、SB4165、SB4161とSB4155の先後関係である。この両者には直接の切り合い関係はなく、方位が異なるだけである。いずれも東に振っているが、前者が６°50′と振れが大きい。SB4165･SB4161は今回柱列を検出しただけで、これが建物になるのか柵列になるのか明らかではなく、今回の検討からは除外すべきであろうが、柱掘形の大きさや深さなどからみるとSB4155が古期に属すると思われる。以上の理由から、ここでは第１案を採り、SB4155→SB4150・SB4160→（SB4165→SB4161）の時期順を考えたい。

次に竪穴状遺構SX4145と炉跡状遺構SX4142についてみてみよう。両者からは坩堝・鞴の羽口・炉壁片などの製銅・製鉄に関する遺物が出土しており、これが製銅・製鉄に関連する遺構であることは明らかである。しかしながら、先述した様に竪穴状遺構については、どの様な使われ方をしたのか、その性格などについては明らかでない。

土壙SK4141について、今回は発掘範囲の制約もあり、全体の形状など明らかにできなかったが、ここからは多量の土器と鏡（海獣葡萄鏡）１面、鉄製の鎌２点などが出土している。この土壙は土器などを廃棄するために掘ったのではなく、何らかの使用目的のために掘られたものと考えられる。その理由は、土壙の南西隅部に溝が掘られており、排水の必要性を持った施設だったと思われるからである。埋土中には炭化物が著しく混入し、炉壁片も認められる。この様なことから、これが鋳造に関連するものではないかとの推測もあながち否定できない。

最後に遺構の年代とその性格について述べる。出土遺物からみると年代的には７世紀後半～８世紀中頃のものが出土している。このことから遺構の年代は、この年代幅の中で考えることが可能である。各遺構の重複関係をみると次のようになる（第54図参照）。

SX4145・SX4142→SB4155・SK4141→SB4150・SB4160→（SB4165→SB4161）である。建物の規模が明確でないSB4165・4161を除いて、期別に分類すると大きく３期に分けられる。



第54図　第160次遺構変遷模式図

第Ⅰ期　竪穴状遺構SX4145・炉跡状遺構SX4142

第Ⅱ期　掘立柱建物SB4155・土壙SK4141

第Ⅲ期　掘立柱建物SB4150・SB4160

年代についてはSX4145·SX4142から出土した土器は量的には少ないが、7世紀後半代のものであり、これを根拠にすると第Ⅰ期はこの時期が考えられる。第Ⅱ期についてはSK4141から8世紀の前半代。第Ⅲ期は8世紀前半～中頃の年代が設定できよう。

7世紀後半にこの場所で製鉄もしくは製銅の工房が営まれたことは、第Ⅰ期政庁と密接な関係があったと考えられる。今回、工房の全貌は明らかにすることはできなかったが、東側台地の西斜面を含む範囲を考えることができる。

8世紀前半代に入ると掘立柱建物が建てられ、官衙的な様相をおびてくる。第Ⅱ期の政庁は8世紀の第Ⅰ四半期に築造され、朝堂院形式に建て替えられる。律令体制の整備に伴い、大宰府も名実ともに整備拡充されたようである。大宰府組織の「匠司」は工房を備え、生産部門を司った官衙の一つである。この官衙の場所については、かって鏡山氏が蔵司の丘陵先端部が「たくみのつかさ」と呼ばれていることから、ここをその地に比定していた。今回検出した工房を備える掘立柱建物が、それに当たる可能性がでてきた。

第Ⅲ期とした8世紀前半～中頃では、第Ⅱ期を踏襲する形で建物も拡充されるようである。この時期を最後に出土遺物はない。

今回の調査はこの地域のほんの一部であり、遺構は周辺部に広がっている。来年度に西辺部と北辺部の調査が計画されており、その結果をまって検討したい。

なお、「海獣葡萄鏡」については、当館の元学芸第一課長西村強三氏と学芸第二課の横田義章氏に御教示頂いた。

ロ）今回、発掘区の東南隅部で検出した土壙SK4141からは多量の土器が出土した。この土壙出土の土器群は、前述のように短期間に埋め戻された一括資料と考えられることから、器種構成と年代観について若干ふれておきたい。

表は蓋・鉢・壺・甕・平瓶について口縁部片、高杯は脚部破片、その他については底部破片について数えたものである。須恵器と土師器の割合は6.5：3.5で須恵器が圧倒的に多い。両者の割合を用途別にみると食器が73.0%・27.0%、貯蔵具が87.0%・13.0%、煮沸具が0%・100%となる。食器では須恵器が主流となり、貯蔵具では須恵器、煮沸具では土師器というようにそれぞれが機能分担していることがわかる。一方、食器・貯蔵具・煮沸具について蓋と杯の総数の二分の一を減じて構成比を求めるとほぼ7：1：2となる。現在、大宰府の土器編年の指標となっている不丁官衙の東を限る溝SD2340の組成とくらべると、食器の割合が10%減じた分、煮沸具が増加している。また、この他に円面硯・特殊円面硯が一点ずつ出土しており、須恵器の杯・蓋の中には転用硯が十数点ほど含まれている。なお、SK4141出土の土器群は、土壙の東半部が発掘区外に広がっているため、完掘をしていない状況での検討であることを付け加えておく。

次に形態的特徴と調整についてふれる。須恵器の蓋は見受けの返りを有するものが7点あるが、他はすべて返りを持たない。後者のうち、小形品には天井部の調整がヘラ切り未調整のものが例外的に見られるものの、他はすべて回転ヘラ削り調整である。杯は口径に比べて器高が高く、深い形態のものがほとんどを占める。また、内面の体部と底部との境が不明瞭で丸みをもって立ち上がるものが多い。ただ、外面については高台貼付時のヨコナデ調整による稜線が残るものが多く認められ、今回出土した土器群の一つの特徴とすることができる。このような形態は、太宰府市宮の本遺跡9号窯出土資料中に類例を見ることができる。(註2) 以上にみてきた須恵器杯の形態的特徴は7世紀後半代から追えるものであり、高台も端部内側が接地して外側が外方へ跳ね上げ気味になるものを多く含む。また、これとは別に口径に比べ器高が低い一群がある。これはSD2340出土土器群の中では主流を占めている。前者が形態的により古い特徴を示すため時期差と考えておきたい。調整については底部外面の中央部を残して回転ヘラ削り調整を行うものが数例あるが、他はヘラ切り離し後、ナデ等の再調整を施している。長頸壺・短頸壺についてはともに、それぞれ大宰府政庁跡中門跡・南門跡出土のものに非常に類似し、それと近い時期に考えられる。

一方、土師器は基本的には須恵器と同様の形態であり、模倣は短頸壺にまで及んでいる。蓋の天井部の調整は、確認できるものについてはすべて回転ヘラ削り調整で、その後に回転ヘラ磨き調整を行なっている。今回、丹塗りの蓋・杯が10点ほど出土したが、これらの最終調整は手持ちヘラ磨きであり、通常の場合と異なっている。丹塗り土師器の出土は大宰府では極めて希である。これらの土器は搬入品である可能性もあながち否定できないため、手法・胎土分析等

を含めて、生産地の検討を行なう必要があろう。

以上の組成・形態・調整等から見て、SK4141出土土器群はどのくらいの時期に位置づけられようか。時期が明らかなSD2340出土土器と比較するとまず、須恵器と土師器の比率はSD2340の7：3に比べると、須恵器の占める割合がわずかに減じている。また、器種組成も若干の違いが認められるもののそれ程大きな差は認められず、これに近い時期と言えよう。器形的には須恵器の高台杯では、前述のように7世紀後半代からの流れの中で追えるような深めの杯の一群が多数を占める。そしてそれらはSD2340出土の高台杯の断面形状が四角形が多数を占めるのに対して、SK4141では開き気味でふんばったものが多い。また、須恵器短頸壺や土師器甕についても形態等はSD2340よりも古い要素が多い。このようなことから天平6(734)年と天平8(736)年の木簡を共伴し、8世紀前半～中頃とされるSD2340よりも若干古く位置づけられよう。畿内からの搬入品と考えられる杯2点は、平城京III期頃と考えられ矛盾はない。ただ、返りをもつ蓋の割合が極めて低いことは、8世紀の第I四半期の早い時期までは遡れないことを示しているように思われる。

出土土器点数表

		須恵器	土師器	比率（%）
食器	蓋A	339	59	82.8
	蓋B	7	0	
	杯A	121	84	
	杯B	4	17	
	椀	1	1	
	皿	1	4	
	盤	1	2	
	鉢	1	0	
	高杯	0	9	
	小計	475	176	
	比率（%）	73.0	27.0	
貯蔵具	壺蓋	2	0	5.8
	小壺	2	0	
	壺	8	4	
	甕	27	0	
	平瓶	1	0	
	小計	40	6	
	比率（%）	87.0	13.0	
煮沸具	甕	0	86	11.1
	鍋	0	1	
	小計	0	87	
	比率（%）	0	100	
	硯	2	0	0.3
	計	517	269	786
	比率（%）	65.8	34.2	

（蓋A：返りなし、蓋B：返りあり、杯A：有高台、杯B：無高台）

註1　片山昭悟『奈良時代の鏡―千二百年前にあこがれた紋様―』1994

註2　太宰府市教育委員会『太宰府・佐野地区遺跡群』1991

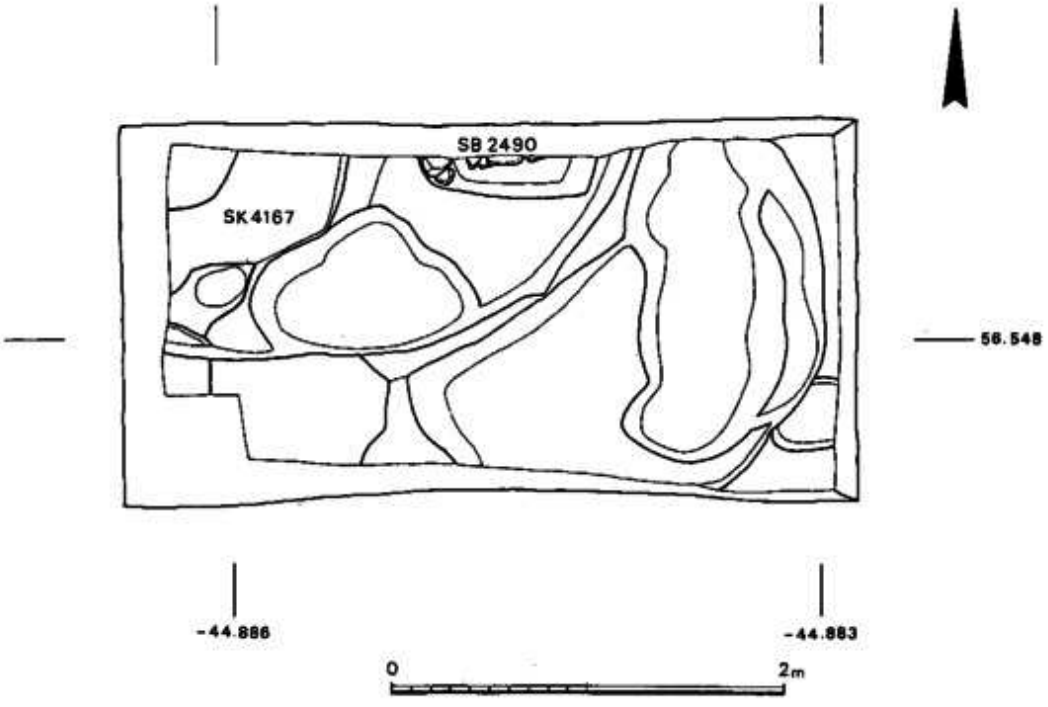
7．第162次調査

本次調査は個人の住宅改築に伴う事前の発掘調査として行った。調査地番は太宰府市観世音寺字不丁248-2番地である。調査区の東隣では、第86次調査として東西棟建物SB2490を検出しており、今回は同建物の規模を確認することを調査の主目的とした。

しかしながら、調査区内には既存家屋があり、予算・期限の制約上、トレンチ調査とならざるを得なかった。庭先に2×3.8mのトレンチを設定し、人力で掘り下げた。平成6年10月13日に調査を開始したが、遺構面まで1.5mと深く、写真撮影・実測を終え埋め戻しを完了したのは10月19日であった。

検出遺構

層序は上層から黒色土（表土）、埋め土（厚さ60cm）、紫灰色砂質土（旧表土）、灰褐色土、橙褐色砂質土（床土）で、旧表土から1m程地上げされていた。床土の下が厚さ10～15cm程の緑色土層、緑褐色土層（厚さ10～20cm）で、土師器・瓦片を含む。その包含層を除去した後で、SB2490の柱掘形と土壙を検出した。



第55図　第162次調査遺構配置図

掘立柱建物

SB2498　第86次調査で検出していた東西棟の掘立柱建物で、梁行は２間(4.9m)である。今回検出した柱掘形は北側桁行の２間目の柱掘形にあたる。掘形の南端部を辛うじて検出した程度であり、土層断面に柱痕跡はかかっていない。底面には幅17cmの石を敷いて礎盤としている。南辺長0.8mで、検出面からの深さは0.6mであった。

土壙

SK4167　トレンチ北西コーナーで検出した土壙で、平面形・規模など詳細は不明。埋土は柱掘形と同様で、底面は隅部に向かって深くなっている。

出土遺物

SK4167出土土器（第56図）

須恵器

鉢（１）　鉄鉢形の小破片で、外面の体部下半は回転ヘラ削り調整、内面の下半はナデ調整、他はヨコナデ調整を施す。

灰褐色土層出土土器・陶磁器（第56図）

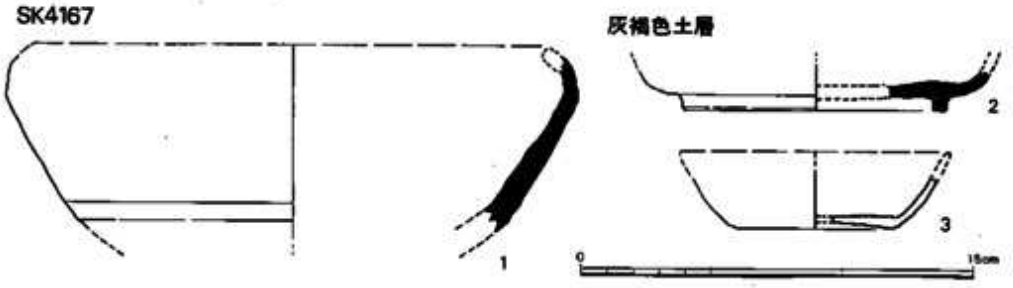
須恵器

杯（２）　断面四角形の高台を貼付する。底部内面はナデ調整。

中国陶磁器

白磁

皿（３）　見込みに沈線状の段を廻す。胎は白色で、灰色味を帯びた白色釉を施す。



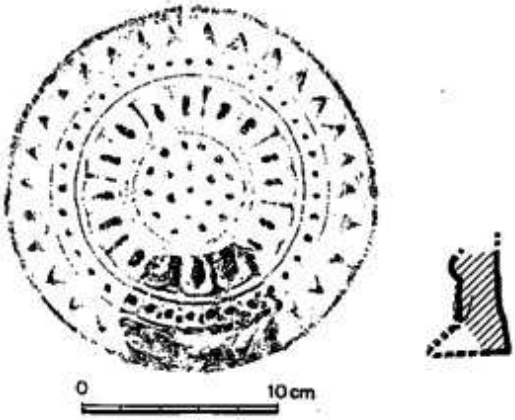
第56図　SK4167、灰褐色土層出土土器・陶磁器実測図

瓦類

軒丸瓦の小破片１点・丸瓦片・平瓦片などが出土している。丸・平瓦の出土傾向としては、他の政庁前面広場での調査区（例えば第156次調査）同様、８世紀代のものと推定し得るものが多かった。ここでは、軒丸瓦片について報告する。遺構面の直上からの出土である。

軒丸瓦（第57図）

内区の蓮弁から外区内縁の珠文帯までの文様が残る。この軒丸瓦は、中房に１＋６＋12の蓮子を配置し、間弁のない複弁８弁の蓮華を内区に、外区内縁は珠文帯・外縁には凸鋸歯文を配置する。この軒丸瓦では、他調査出土例よりも約1.0cmほど薄く作られている。



第57図　軒丸瓦拓影実測図

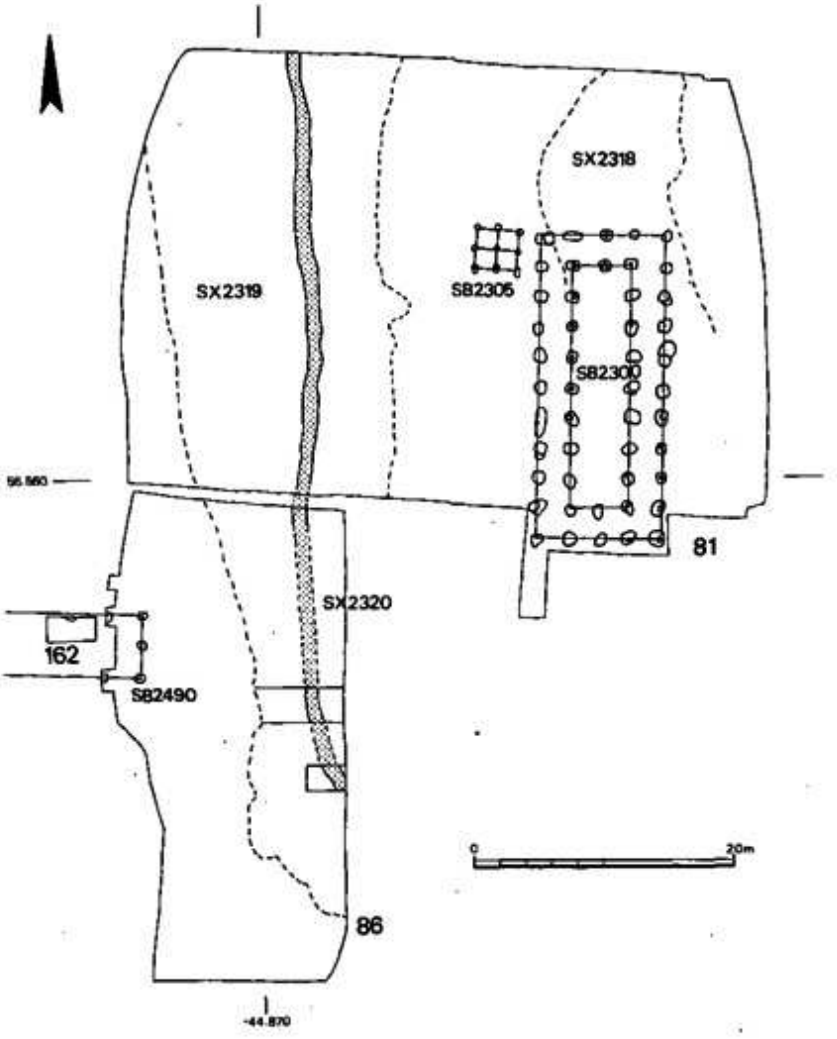
興味を引くのは、笵型に詰め込まれる粘土の順序が剥離面などから想像できることである。先ず最初に、凸鋸歯文帯に粘土を挿入し（中房部分にも同時に挿入しているかも知れない）、後に内区に厚さ0.6cm程の粘土を入れている。瓦当裏面までの粘土を後に加えるから、少なくとも３回に分けて粘土が押し込まれて瓦当が作られている様子が判る。

瓦当文様や製作手法の比較から調査区の西側（第84次）で調査されている南北溝SD2340出土の軒丸瓦に類似し、８世紀前半頃の軒丸瓦と考えている。胎土に砂粒を含むものの良質の粘土が選ばれていて、焼き上がりも良い。

小結

今次調査は小規模なトレンチ調査であったが、SB2490の柱掘形を検出するという当初の目的は一応果たした。

当調査区が含まれる政庁南門前面域には空閑地が存在し、広場として機能したと考えられている。しかし、第81・86・140次調査で４棟の掘立柱建物が検出されるに及び、朝集殿的建物と性格付けされたSB2300の再検討を含め当地域の見直しをする必要がでてきた。ただ、建物のあり方としては、不丁地区官衙や日吉地区官衙に比して極めて散漫であることには変わりない。



第58図　第81・86次調査主要遺構配置図

別　表

器種		挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
SB2240（第153次調査）										
須恵器	蓋	5	1	(16.0)						
SA4085										
須恵器	蓋	5	2	(15.2)						
SD2284										
須恵器	蓋	5	3	(14.0)						
		〃	4	(15.2)		2.3				
	杯	〃	5	13.4	9.8	4.2	○		○	
	甕	〃	7	(48.8)						
SD4081										
土師器	皿	5	8	(9.6)	(7.8)	1.1				
SK4082										
須恵器	蓋	5	9	(10.2)		4.2				
	杯	〃	10	10.0		4.0				
	甕	〃	11	(17.8)						
SK4084										
須恵器	蓋	5	13	15.4		2.5				
	甕	〃	14	(26.2)						
SK4087										
須恵器	蓋	6	1	(13.0)						
		〃	2	(14.6)						
		〃	3	15.0		2.4				
	杯	〃	4	14.8	10.9	4.1			○	
	甕	〃	5	(10.8)						
		〃	6	18.0						
		〃	7	(53.4)						
土師器	杯	〃	8	12.6	8.0	2.9		○	○	○
		〃	9	(12.8)	8.2	2.9		○	○	
	椀	〃	10		(9.2)				○	
	甕	〃	11	(28.6)						
青磁	椀	〃	13	(10.6)						
SX4092										
須恵器	蓋	6	14	14.2		3.0	○			
暗褐色土層										
須恵器	蓋	7	1	(15.0)						
灰褐色土層										
須恵器	蓋	7	2	(12.2)		2.0				
		〃	3	(15.0)						
	蓋	〃	4	(14.6)						

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
茶褐色土層									
須恵器 蓋	7	5	11.8		1.5				
	〃	6	(24.0)						
須恵器 杯	〃	7	(15.1)		3.3				
甕	〃	9	(20.4)						
青磁 椀	〃	8		6.7					
SD3300（第154次調査）									
土師器 皿b	16	1	7.2	4.3	1.9		○	○	○
土師器 皿a	〃	2	7.5	5.2	1.6		○		○
	〃	3	7.7	5.2	1.2		○	○	○
	〃	4	7.6	5.6	2.0		○	○	○
	〃	5	7.8	6.0	1.1		○	○	
	〃	6	(7.2)	5.2	1.5		○	○	
	〃	7	7.7	5.2	1.4		○	○	○
	〃	8	(8.1)	5.8	1.2		○	○	○
	〃	9	(7.8)	(6.0)	1.1		○	○	
	〃	10	(7.8)	(4.8)	1.3		○	○	○
	〃	11	8.0	6.9	1.4		○	○	○
	〃	12	8.9	6.5	1.4		○	○	○
	〃	13	(9.4)	6.6	1.3		○	○	○
皿c	〃	14	8.4	6.6	2.3			○	
杯a	〃	15	11.6	7.5	3.0		○	○	○
	〃	16	(12.0)	8.4	2.7		○	○	○
	〃	17	12.0	8.0	2.7		○	○	○
	〃	18	12.0	8.0	2.9		○	○	
	〃	19	12.0	8.0	2.7		○	○	
	〃	20	(12.2)	7.8	2.8		○	○	○
	〃	21	12.2	7.0	3.0		○	○	○
	〃	22	12.8	8.0	2.8		○	○	○
	〃	23	12.6	(8.0)	2.5		○	○	○
	〃	24	12.6	(8.6)	2.7		○	○	
	〃	25	13.0	8.0	2.6		○	○	
	〃	26	(13.0)	(8.2)	2.8		○	○	○
	〃	27	13.2	10.1	2.9		○	○	
	〃	28	14.6	10.4	3.0		○	○	○
	〃	29	14.6	10.5	2.5		○	○	
	〃	30	(15.0)	10.8	2.2		○	○	○
	〃	31	15.0	10.5	2.0		○	○	○
	〃	32	15.0	10.6	2.8		○	○	○
	〃	33	(15.2)	10.5	2.4		○	○	○
土師器 杯	〃	34	15.3	11.4	2.0		○	○	○
瓦質土器 鉢	〃	36	(31.8)						
白磁 皿	17	37	8.8	5.1	2.5				
椀	〃	38		(6.1)					
	〃	40		5.8					
青磁 皿	〃	41	9.5	2.3					
椀	〃	42		4.7					

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
青磁 椀	〃	43	(13.0)						
	〃	44		6.2					
瀬戸 おろし皿	〃	48		8.6					
石鍋	20	6	(22.4)						
暗褐色土層									
土師器 杯	18	3	12.6	7.6	2.5		○	○	
中国陶器 鉢	〃	5	(37.0)						
SK4098									
土師器 皿	18	1	10.2		1.2		○	○	○
SX4115（第156次調査）									
青磁	22	2		(5.0)					
SD4118（第157次調査）									
土師器 高台皿	26	1	(12.6)						
	〃	2	12.8	7.1	1.7			○	
	〃	3	(12.8)	7.4	1.6				
石製品 紅皿	〃	4	3.3		1.3				
SK4123									
土師器 杯	26	5	(10.0)	6.8	(2.7)	○		○	○
	〃	6	(11.4)	7.7	3.4	○		○	○
	〃	7	11.5	5.8	3.0	○		○	○
	〃	8	(12.0)	(7.8)	2.5	○		○	○
	〃	9	12.1		3.4	○		○	○
SD4120									
土師器 杯	26	10	(10.9)		3.4	○			○
	〃	11	11.4		3.1	○		○	○
	〃	12	11.6		3.1	○		○	○
	〃	13	11.6		3.3	○		○	○
	〃	14	11.8		3.2	○		○	○
	〃	15	11.9	6.9	3.3	○		○	○
	〃	16	12.1		3.4	○		○	
	〃	17	12.1		3.4	○		○	○
SX4122									
土師器 椀	26	19	13.6	8.8	5.1	○		○	
黄褐色土層									
土師器 杯	26	20	(10.0)		3.4	○		○	○
	〃	21	11.2		3.3	○		○	○
	〃	22	11.6		3.0	○		○	○
	〃	23	(11.6)	5.8	3.6	○			
	〃	24	11.7		3.0	○		○	
	〃	25	11.9		3.5	○		○	○
	〃	26	12.1		3.1	○		○	○

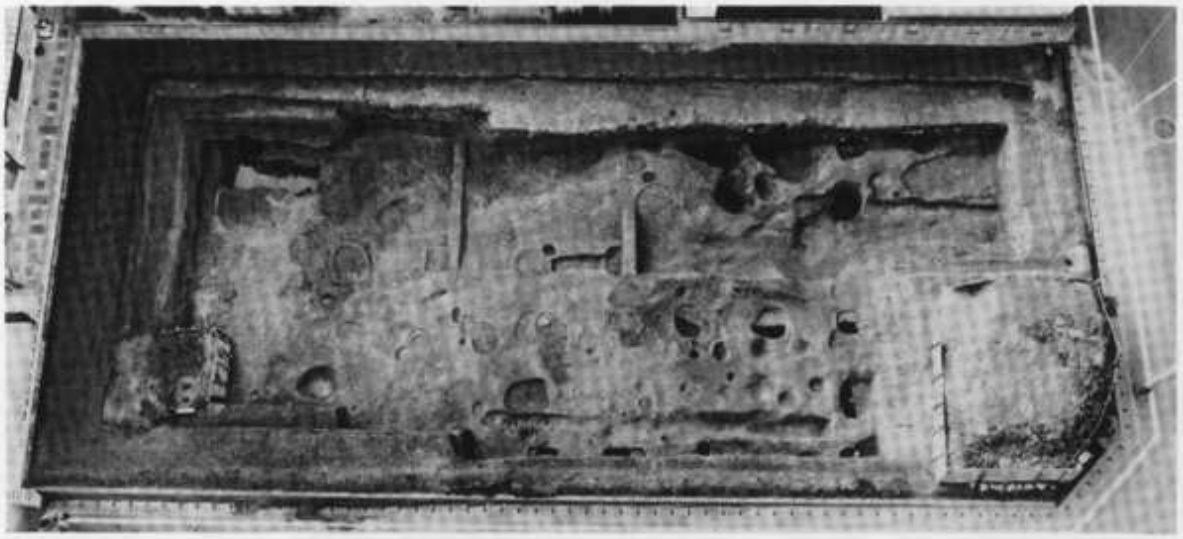
器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部のナデの有無	板状圧痕の有無
土師器 杯	26	27	12.2	6.4	3.4	○		○	○
高台皿	〃	28	(13.4)	(8.0)	2.5				
	〃	29	14.8	8.9	2.5				
緑釉 陶器	〃	30		5.1					
床土									
土師器 椀	26	32	(14.2)		(5.5)				
SB4135（第159次調査）									
須恵器 杯	30	1	(11.6)	9.0	3.6	○		○	○
SK4132									
土師器 皿	30	2	(10.8)		1.1	○		○	○
SK4138									
土師器 椀	30	3	(14.2)	(6.8)	4.7				
SX4133									
須恵器 杯	30	4	(12.8)	(9.4)	4.1	○		○	○
	〃	5	12.9	9.0	5.1			○	
土師器 杯	〃	6	(18.2)	10.2	5.8				
SX4137									
土師器 皿	30	7	9.9		1.6	○		○	○
SX4140									
土師器 皿	30	8	(9.2)					○	
	〃	9	(9.8)	7.4	1.3		○	○	○
	〃	10	10.2		1.7	○		○	
黄茶色土層									
須恵器 杯	30	12	(14.2)						
短頸壺	〃	13	(10.4)		8.9				
土師器 皿	〃	14	10.2		0.9	○		○	○
	〃	15	(10.8)		(1.3)	○		○	○
青磁	〃	16	(9.4)		(2.6)				

器　種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
SB4160（第160次調査）					
須恵器　蓋	36	1	14.3		2.4
	37	1	9.8		1.9
	〃	2	10.4		1.7
	〃	3	11.1		1.0
	〃	4	11.4		
	〃	5	11.4		
	〃	6	11.6		1.8
	〃	7	12.9		1.6
	〃	8	13.1		2.1
	〃	9	13.2		2.2
	〃	10	13.2		2.4
	〃	11	13.3		2.5
	〃	12	13.4		2.3
	〃	13	13.5		2.3
	〃	14	(13.6)		
	〃	15	13.6		2.3
	〃	16	13.6		1.9
	〃	17	13.7		2.2
	〃	18	(13.8)		
	〃	19	(13.8)		
	〃	20	13.8		2.0
	〃	21	(13.8)		
	〃	22	13.8		
	〃	23	(13.9)		
	〃	24	(14.0)		(2.5)
	〃	25	(14.0)		
	〃	26	(14.2)		(1.4)
	〃	27	14.2		2.4
	〃	28	14.3		2.5
	〃	29	14.3		1.8
	38	30	14.3		1.5
	〃	31	14.3～14.5		2.2
	〃	32	14.6		2.6
	〃	33	14.6		
	〃	34	14.7		3.8
	〃	35	14.7		2.5
	〃	36	14.8		1.9
	〃	37	14.8		
	〃	38	14.9		2.4
	〃	39	(15.0)		
	〃	40	15.0		
	〃	41	15.2		2.4
	〃	42	(15.3)		
	〃	43	(15.4)		2.4
	〃	44	15.6		
	〃	45	15.7		3.2
	〃	46	16.0		1.2
須恵器　蓋	〃	47	18.1		2.25
	〃	48	(18.6)		
杯	〃	49	8.8	5.6	3.85
	〃	50	9.2	6.3	4.9
	〃	51	9.5	7.2	3.9
	〃	52	9.8	6.5	4.0
	〃	53	10.0	6.6	4.1
	〃	54	10.2	7.0	4.0
	〃	55	10.3	(6.1)	4.1
	〃	56	10.4	7.5	3.8
	〃	57	11.3	(8.0)	4.4
	39	58	12.0	(8.5)	4.7
	〃	59	12.8	8.0	4.4
	〃	60	12.8	7.5	5.4
	〃	61	12.8	7.7	5.4
	〃	62	13.0	7.6	5.4
	〃	63	13.0	8.0	4.6
	〃	64	13.0	8.6	4.7
	〃	65	13.0	7.8	5.2
	〃	66	(13.0)	(8.0)	4.3
	〃	67	13.2	8.7	5.1
	〃	68	13.4	8.5	5.1
	〃	69	13.4	8.7	5.4
	〃	70	13.5	7.9	5.5
	〃	71	13.6	(8.2)	4.5
	〃	72	(13.6)	(8.3)	4.6
	〃	73	(13.6)	(8.4)	4.2
	40	74	14.0	9.1	5.0
	〃	75	(14.0)	8.9	5.0
	〃	76	(14.0)	(10.1)	4.8
	〃	77	13.3	(10.6)	3.3
	〃	78	(14.6)	(10.7)	2.9
	〃	79	15.2	10.3	4.0
	〃	80	(17.4)		3.65
	〃	81	(11.6)		4.4
	〃	82	12.4	7.6	4.1
	〃	83	12.8	9.6	3.4
	〃	84	13.0		3.9
高杯	〃	85	(19.8)		3.2
横瓶	〃	86	8.7		
壺	50	89	6.7		
長頸壺	〃	90	9.6	6.0	(19.2)
	〃	91		(8.8)	
	〃	92	13.8		
短頸壺	〃	93	14.7	(7.0)	21.9
甕	42	94	(25.0)		
	〃	95	(22.8)		
	〃	96	(38.6)		
鉢	〃	97	(25.8)		

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
土師器 蓋	43	100	8.8		1.3
	〃	101	11.9		2.7
	〃	102	(13.6)		2.7
	〃	103	(14.5)		
	〃	104	15.0		
	〃	105	15.2~15.4		2.8
	〃	106	(15.2)		3.4
	〃	107	15.4		
	〃	108	(15.7)		2.0
	〃	109	(16.8)		2.6
	〃	110	17.6		
	〃	111	18.8		
	〃	112	(19.8)		2.7
	〃	113	(19.8)		
	〃	114	(20.4)		
	〃	115	(20.6)		3.2
壺蓋	〃	116	(14.6)		
杯	〃	117	14.0	10.6	3.3
	〃	118	(16.0)		5.0
	〃	120	19.2	12.2	4.9
	〃	121	19.8	12.2	5.0
	〃	122		14.4	
	〃	123	12.8	(8.0)	4.0
	〃	124		9.7	
	〃	125	(16.6)	(11.4)	3.5
	〃	126	19.4	(12.9)	3.4
	〃	127	(14.6)		2.5
	〃	128	(18.8)		3.3
椀	〃	119	18.8	9.5	6.7
高杯	44	129	(23.6)		
	〃	131	(26.8)		
	〃	132	(27.0)		
甕	45	136	(14.2)		
	〃	137	(14.2)		
	〃	138	(15.2)		
	〃	139	(15.4)		
	〃	140	(15.8)		
	〃	141	(20.4)		
	〃	142	(20.8)		
	〃	143	(21.0)		
	〃	144	(22.0)		
	〃	145	(30.0)		
	〃	146	(33.4)		
SK4142					
須恵器 椀	47	1	(12.4)	9.8	8.0
土師器 甕	〃	2	(22.9)		
SK4156					

器種	挿図番号	番号	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)
須恵器 蓋	36	2	(10.8)		
	〃	3	14.8		
杯	〃	4	(14.0)		
	〃	5	18.0	12.1	6.1
長頸壺	〃	6	12.4		
甕	〃	7	(36.0)		
SK4157					
須恵器 壺	36	8	(14.7)		(2.4)
SX4145					
須恵器 蓋	47	3	(14.0)		
	〃	4	(16.0)		
杯	〃	5	(12.4)	(7.6)	3.2
土師器 甕	〃	7	(21.6)		
SX4158					
須恵器 杯	47	8	(11.6)	(7.7)	4.0
SX4159					
土師器 甕	47	9	(21.0)		
茶褐色土層					
須恵器 蓋	48	1	(14.6)		2.5
	〃	2	(14.8)		
	〃	7	(12.2)		
	〃	8	(13.2)		4.2
	〃	9	(14.4)		3.7
杯	〃	3	13.5	8.6	3.3
	〃	4	(10.6)	(7.6)	3.8
	〃	5	12.6	8.9	4.9
	〃	6	14.1)	9.0	4.8
壺	〃	10	8.7		6.9
	〃	11		(10.1)	
甕	〃	12	(24.8)		
土師器 杯	〃	13	12.1	7.9	2.5
	〃	14	12.0	7.8	2.6
	〃	15	12.8	7.4	2.8
	〃	16	13.8	7.6	2.5
甕	49	21	(17.0)		
	〃	22	17.4		

図　　版



第153次調査区全景（空中写真・右が北）

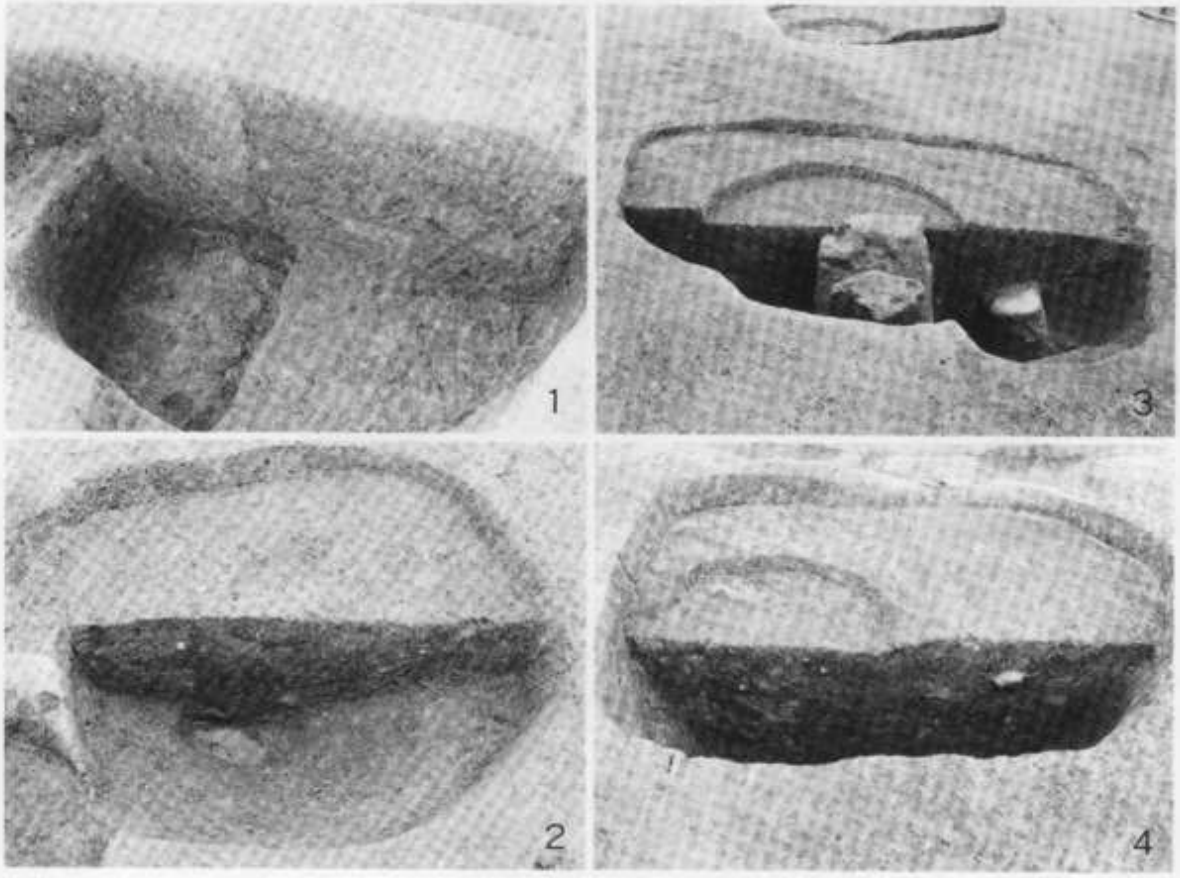
第153次調査主要遺構（空中写真）

第153次調査区全景（南から）

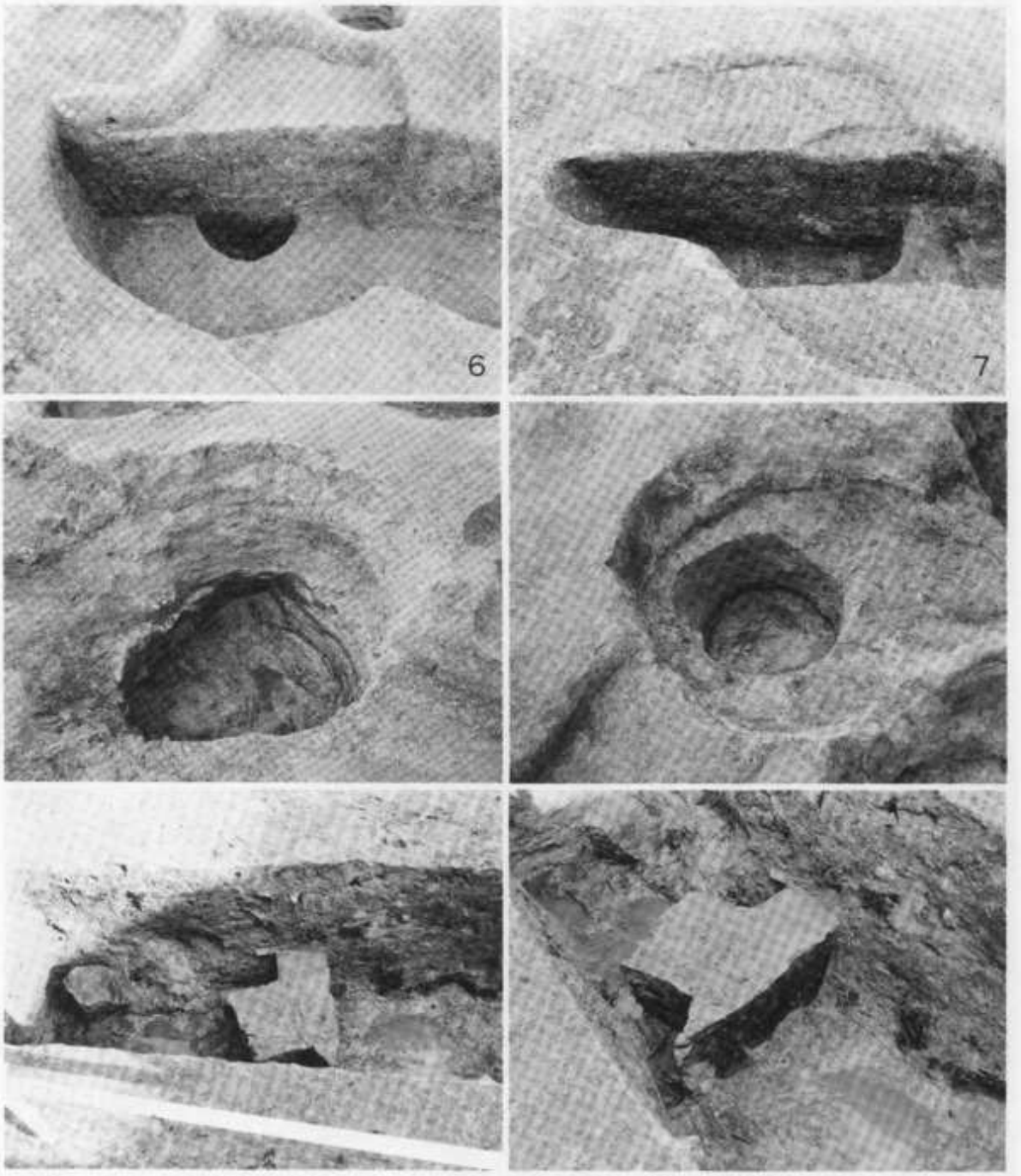
第153次調査区全景（北から）

掘立柱建物SB4080、柵SA4085（北から）

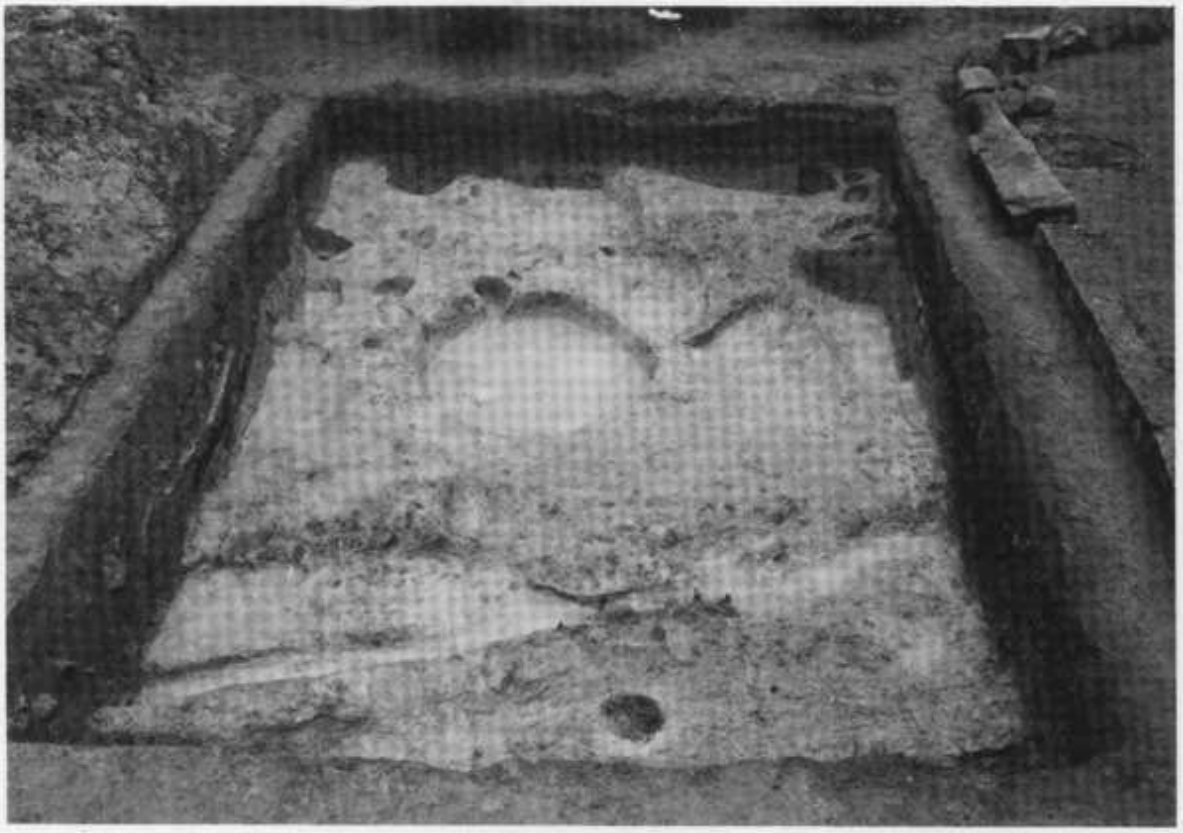
溝SD4081（北から）



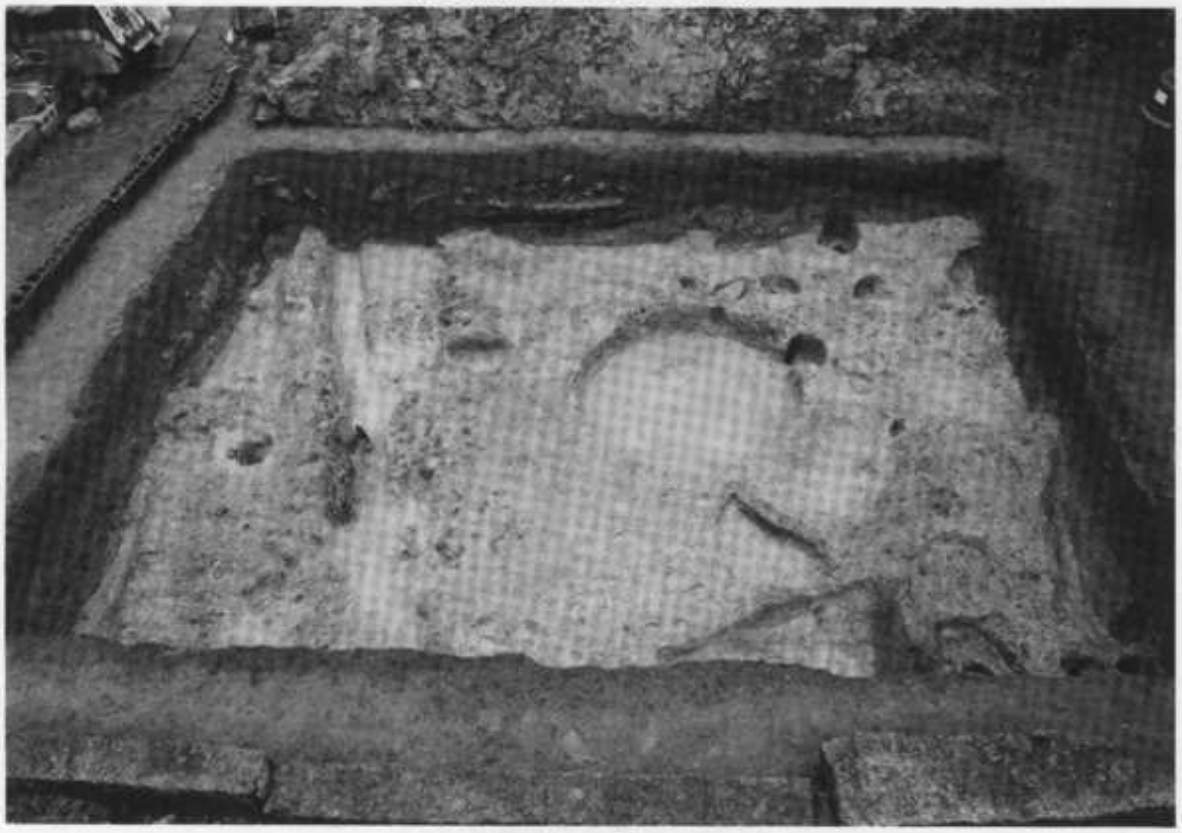
掘建柱建物SB4080柱掘形



（上）柵SA4085柱掘形（中）土壙SK4082、土壙SK4083（南から）（下）粘土採掘壙SX4087



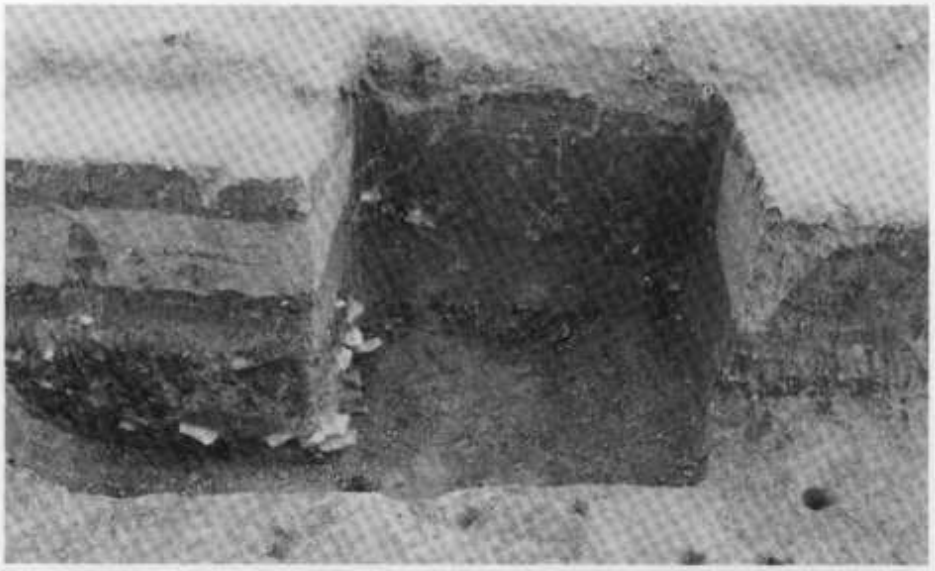
第154次調査区全景（東から）



第154次調査区全景（南から）

第156次調査区全景（南から）

粘土採掘壙SX4115全景（北から）

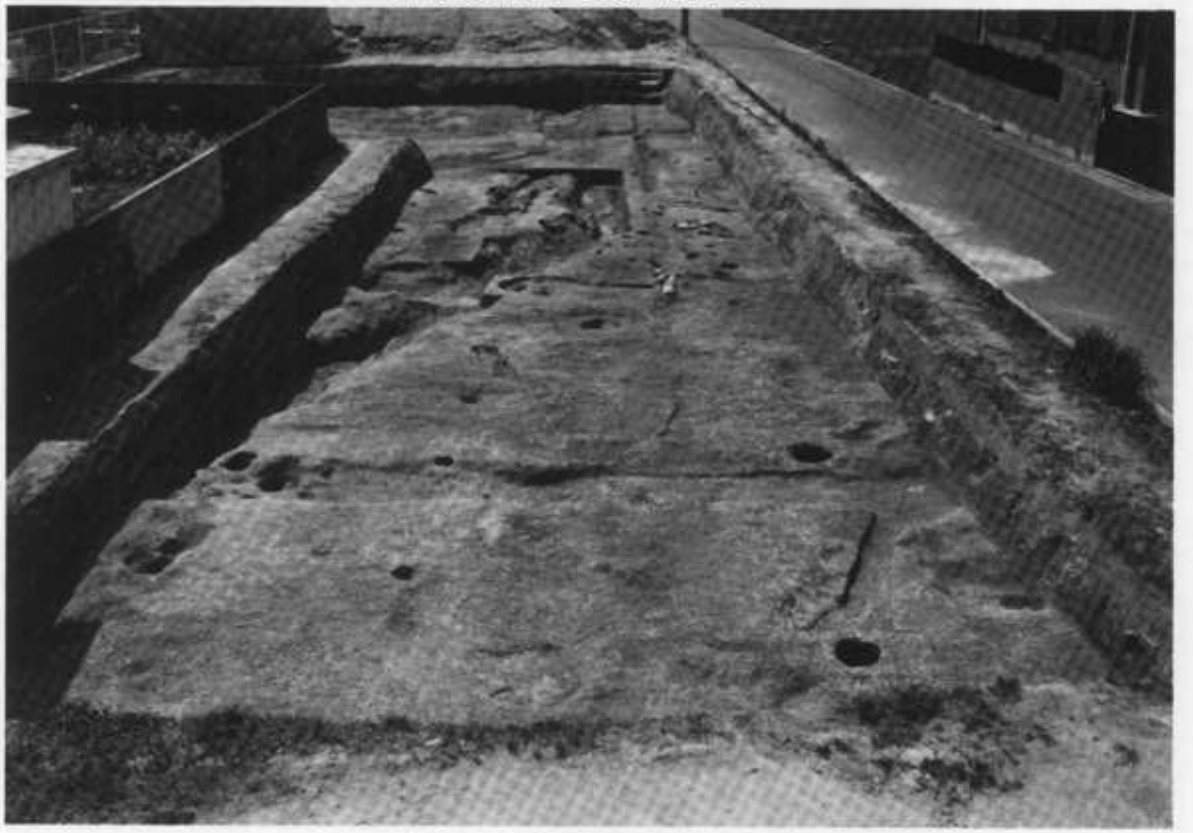


土壙
SK4111
（北から）

粘土採掘壙
SX4115部分
（南から）

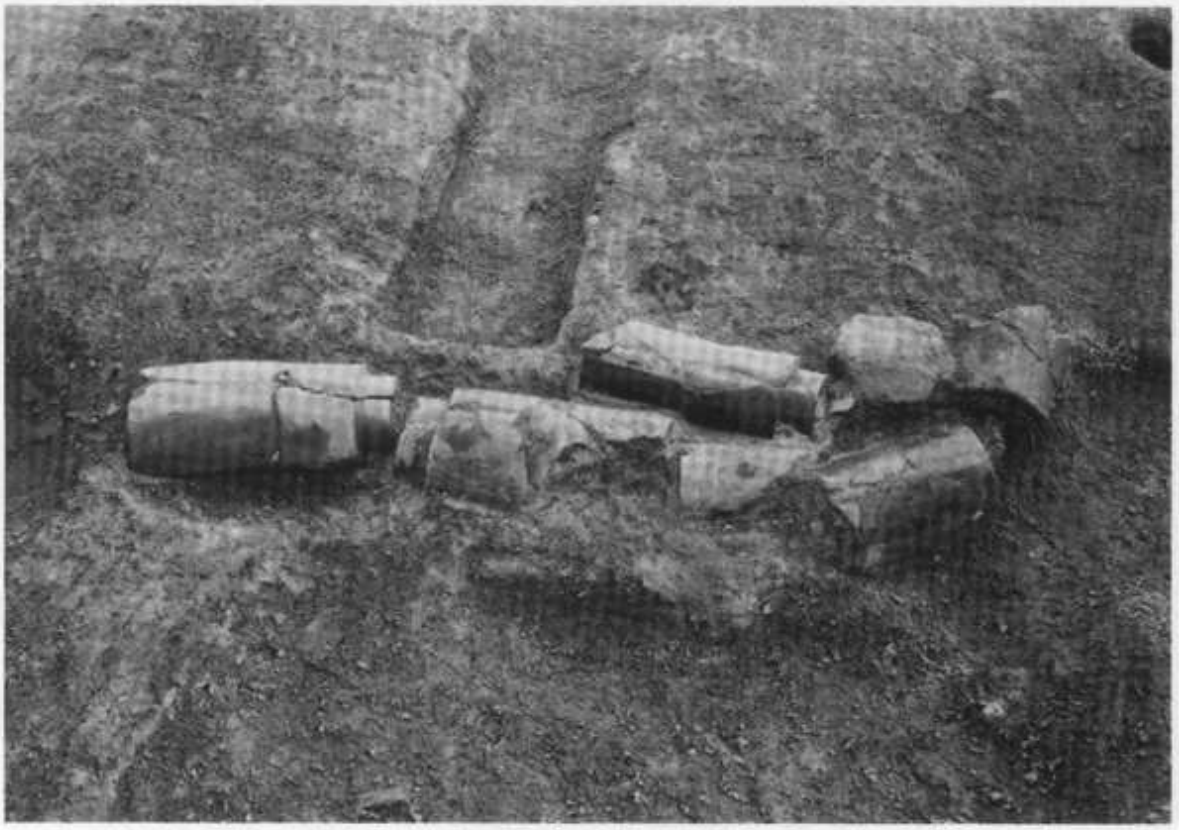
粘土採掘壙
SX4115部分
（南から）

第157次調査区全景（西から）



第157次調査区全景（東から）

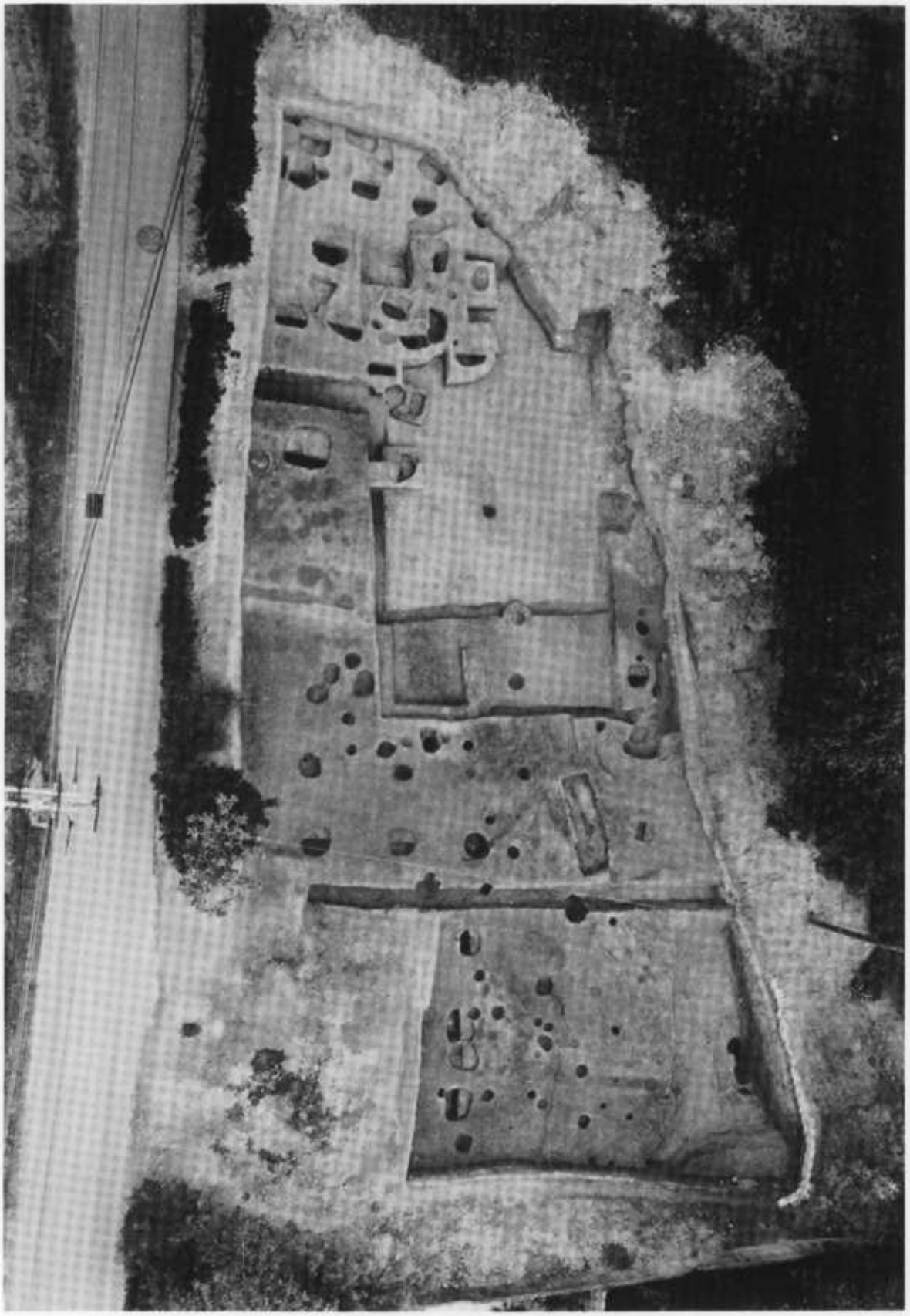
小土壙SK4120土器出土状況（南から）



暗渠施設SX4122（北から）

第159次調査区全景（東から）

掘立柱建物ＳＢ4135柱掘形

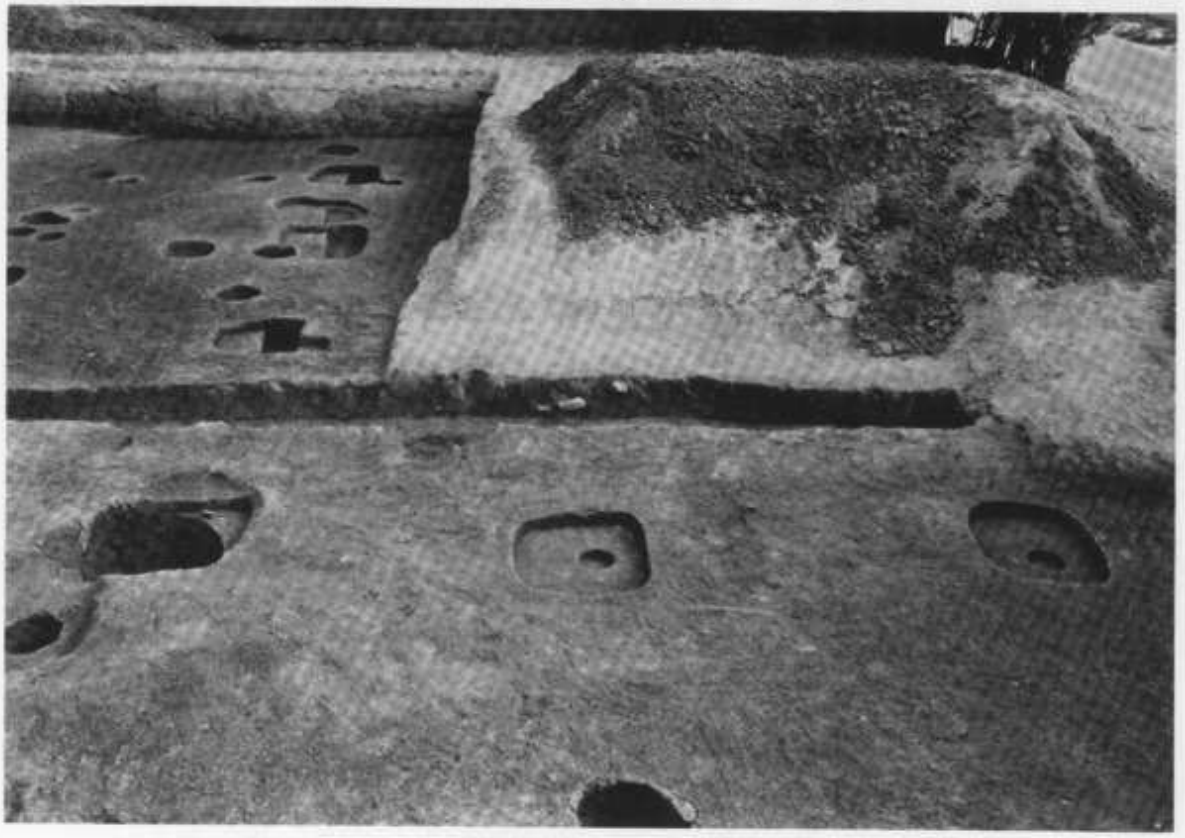


第160次調査区全景（空中写真）

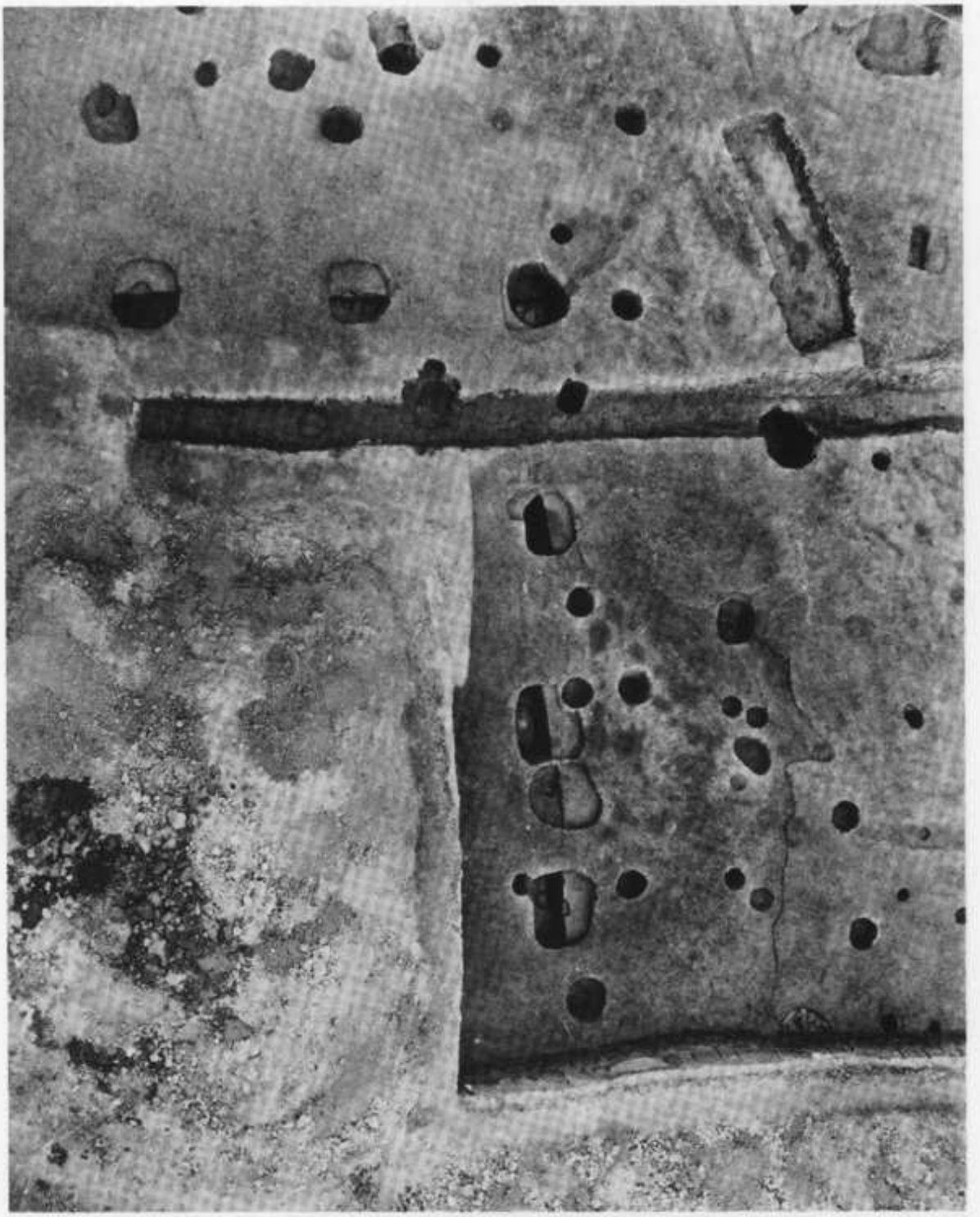
第160次調査区全景（北から）

第160次調査区全景（下層遺構完掘後、北から）

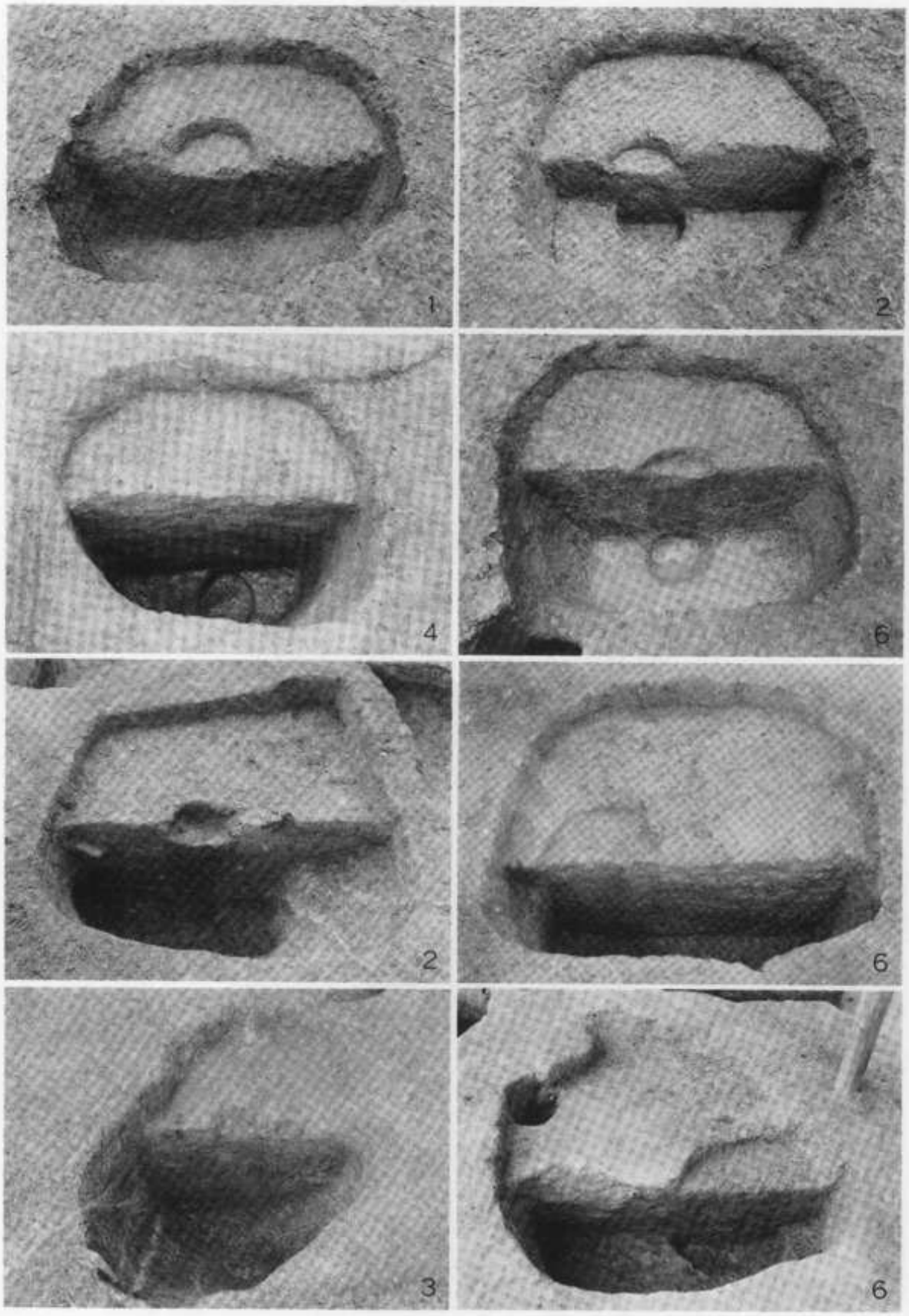
第160次調査区全景（下層遺構完掘後、南から）



掘立柱建物SB4150（北から）

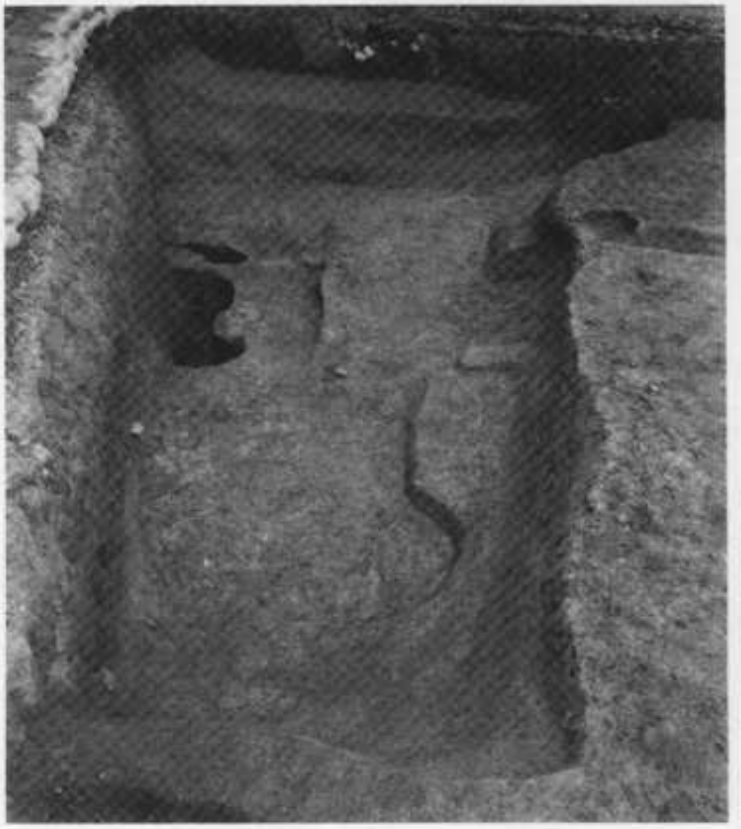


掘立柱建物SB4150（空中写真）



掘立柱建物SB4150・4155・4160柱掘形

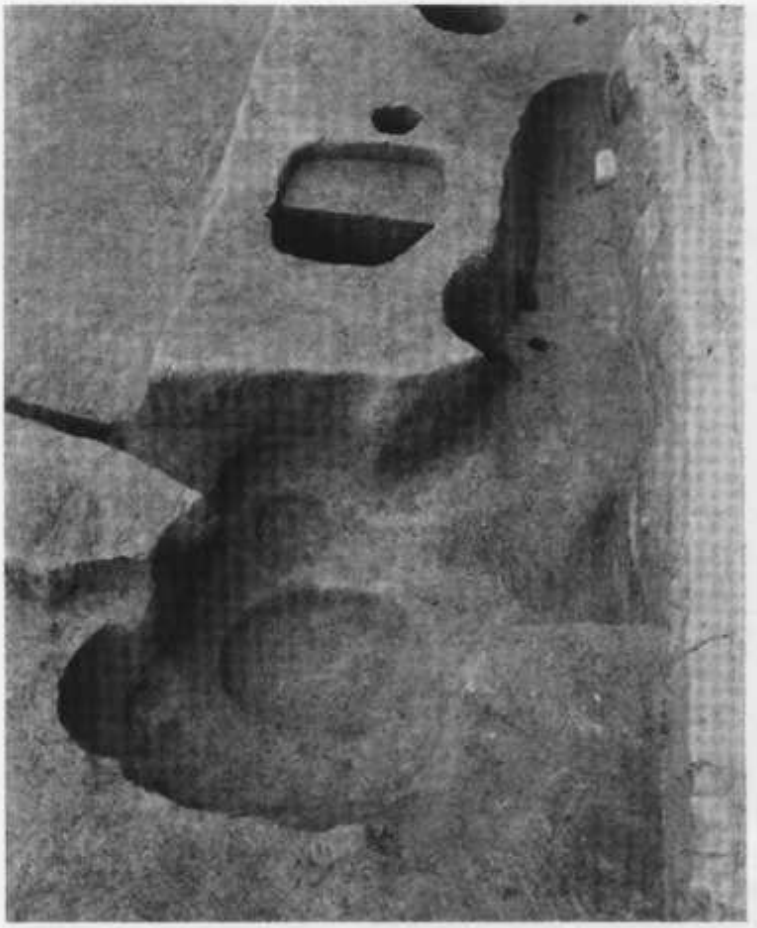
掘立柱建物SB4155・4160・4161（北から）



土壙SK4141（北から）

竪穴状遺構SX4145（南から）

竪穴状遺構SX4145と掘立柱建物SB4155・4160（北から）

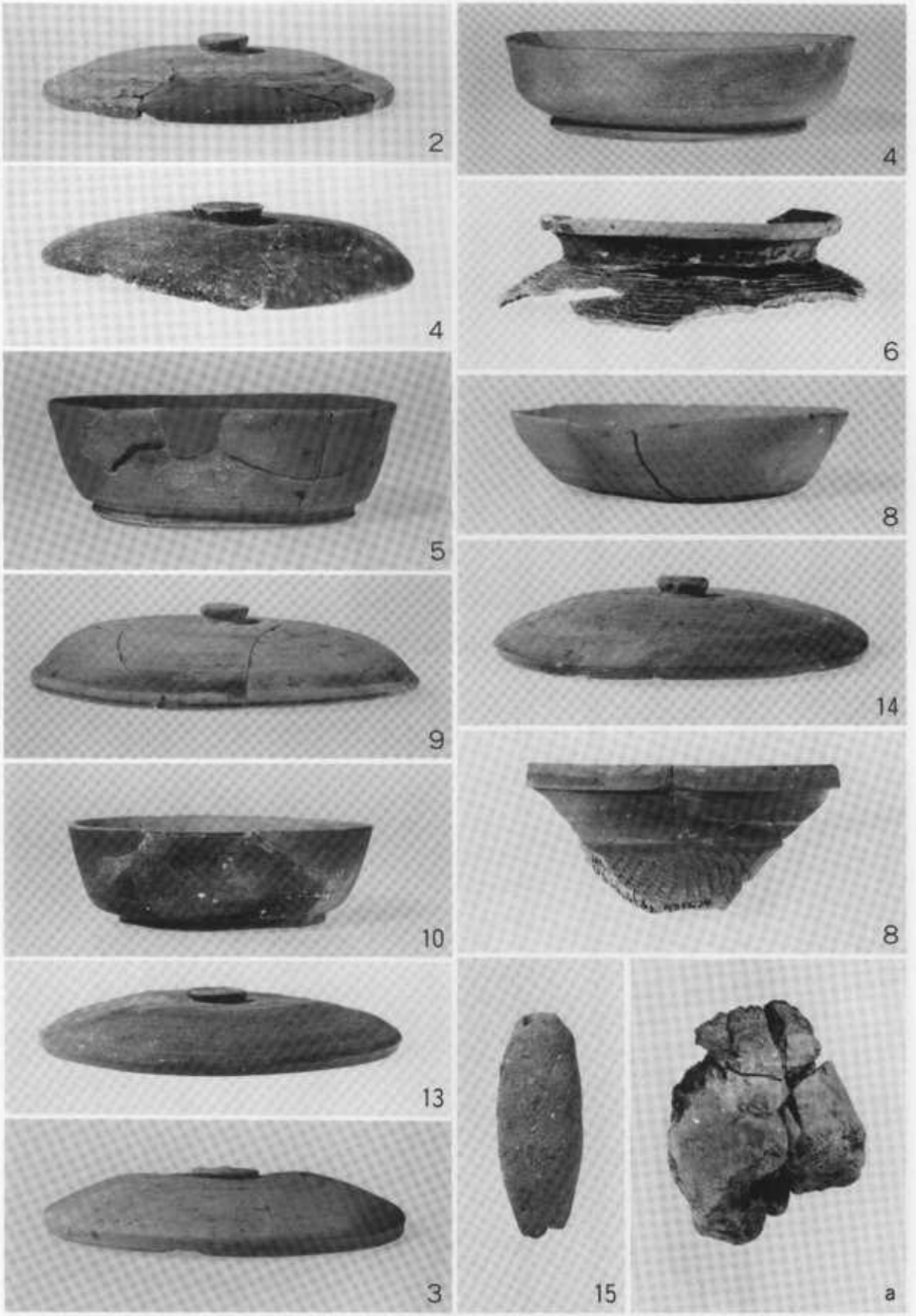


炉跡状遺構SX4142（南から）

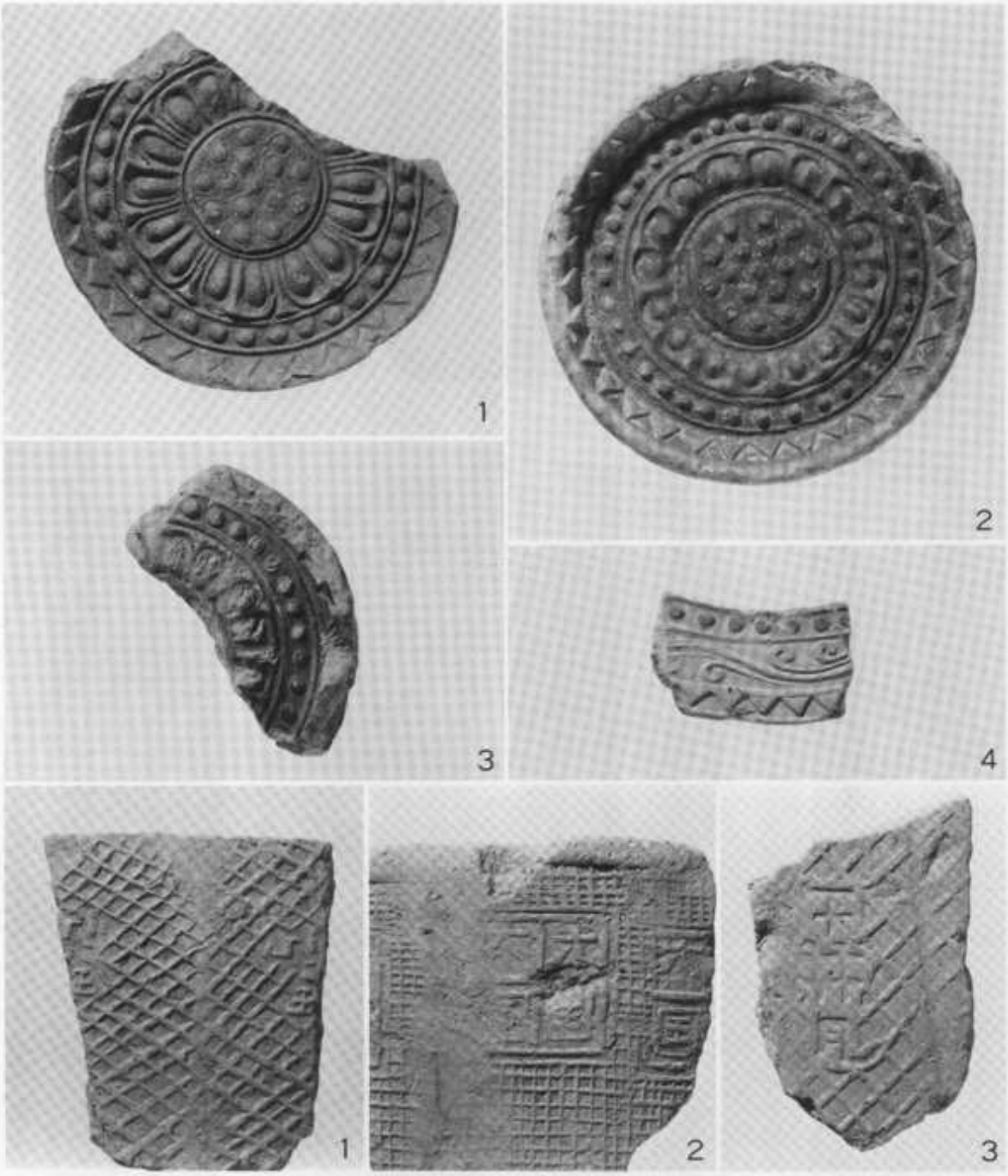
トリベ廃棄遺構SX4152

第162次調査区全景（西から）

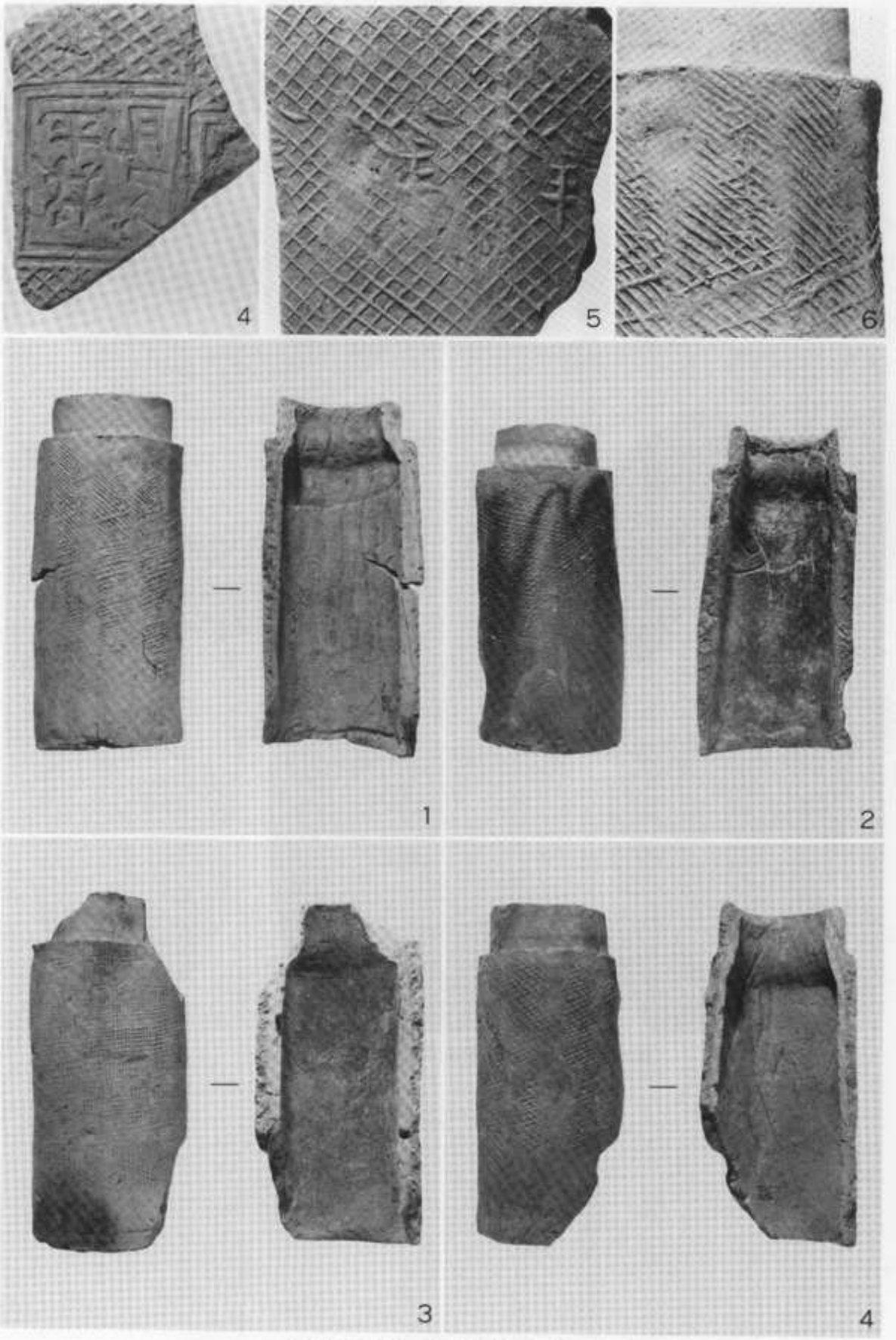
掘立柱建物SB2490（南から）



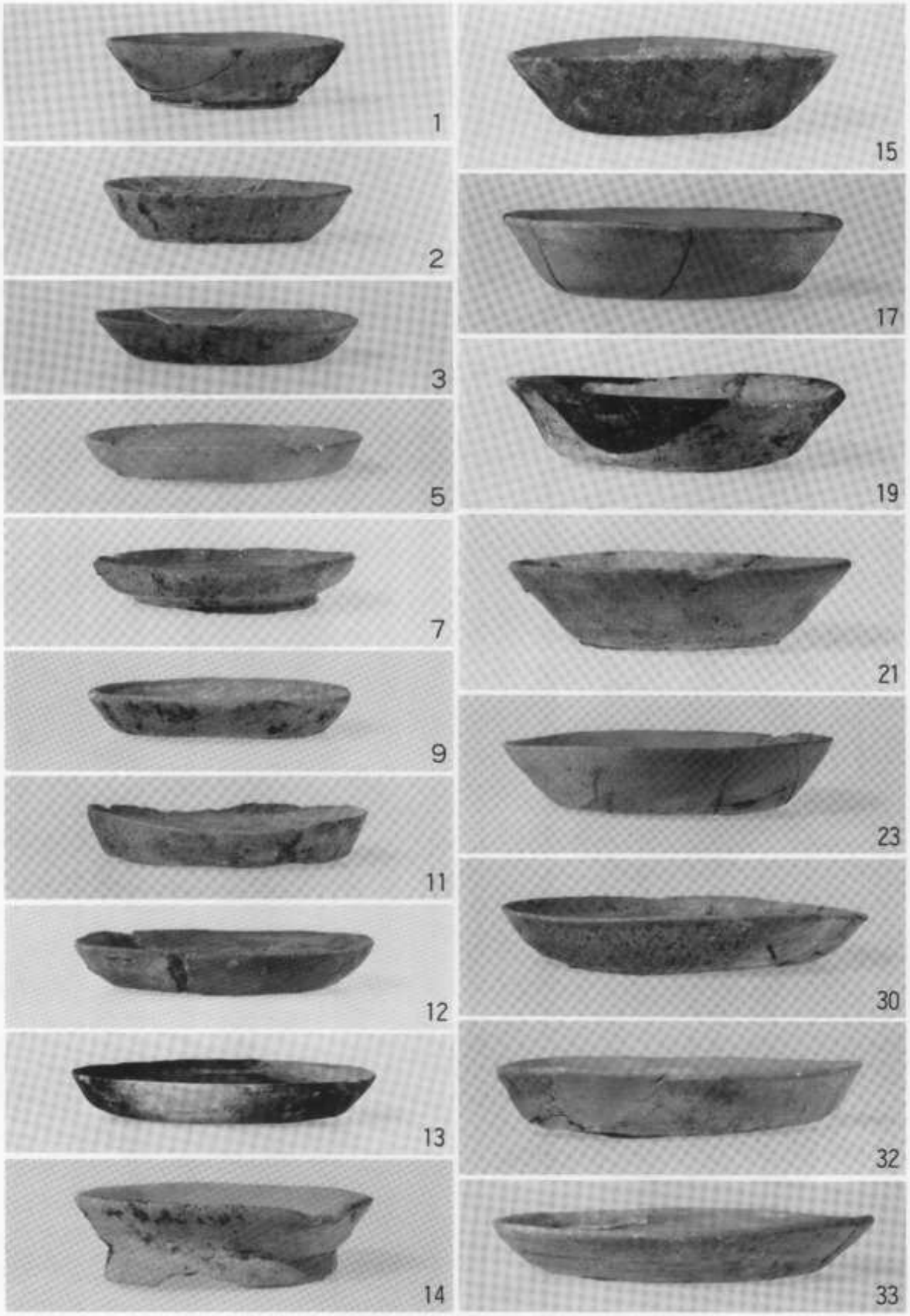
第153次調査　SB4085、SD2284、SK4082・4084・4087、SX4092・4093、茶褐色土層出土土器・土製品・鋳造関係遺物



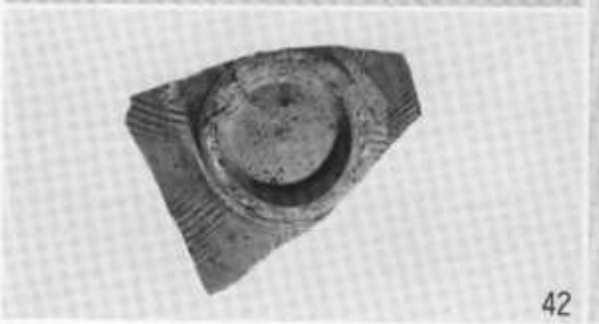
第153次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦

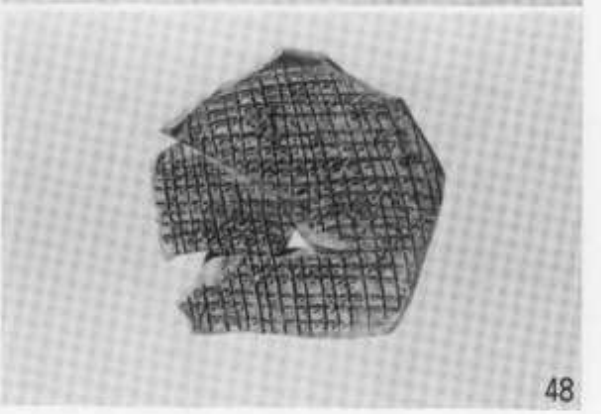


第153次調査　出土文字瓦・丸瓦

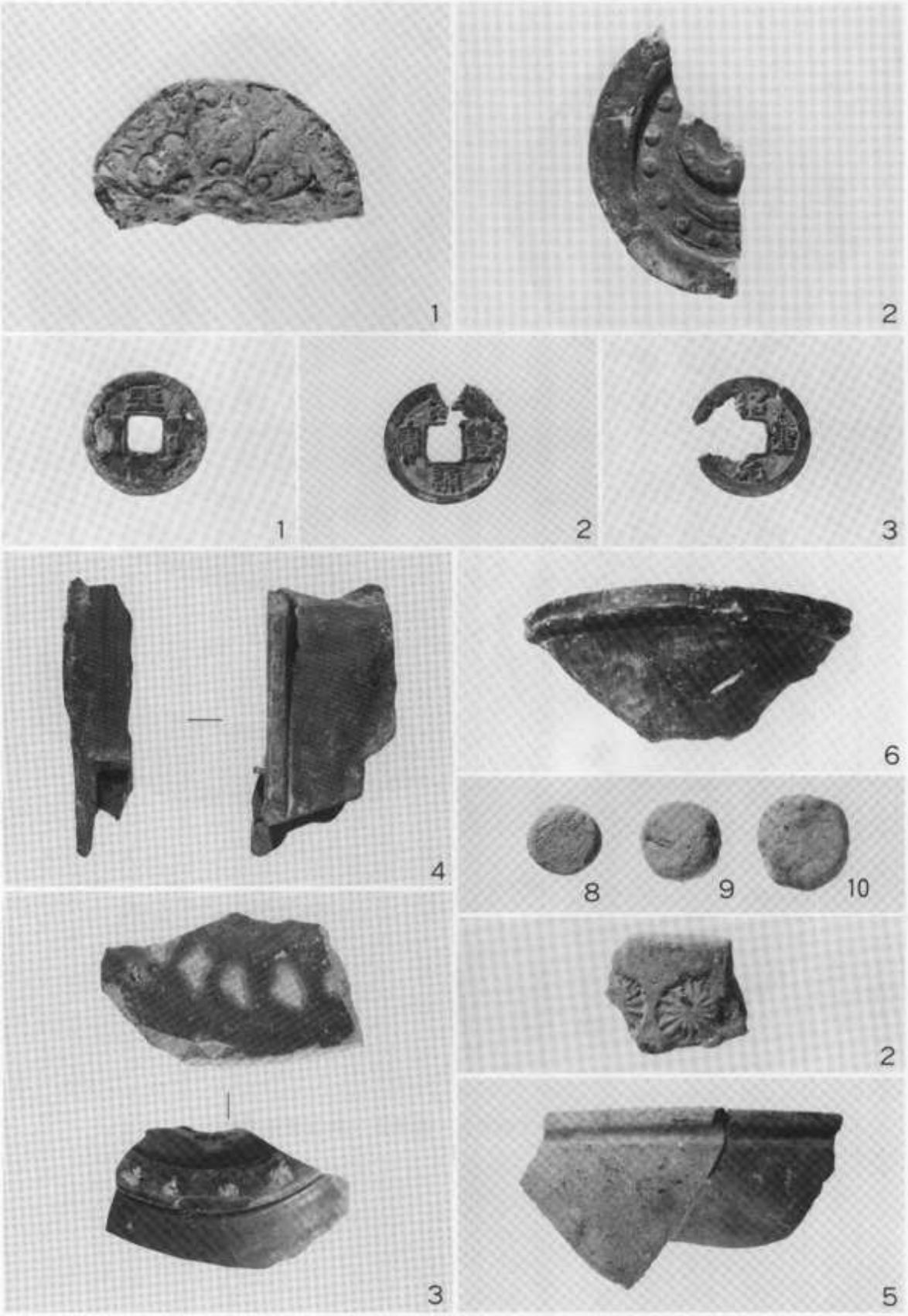


第154次調査　SD3300出土土器

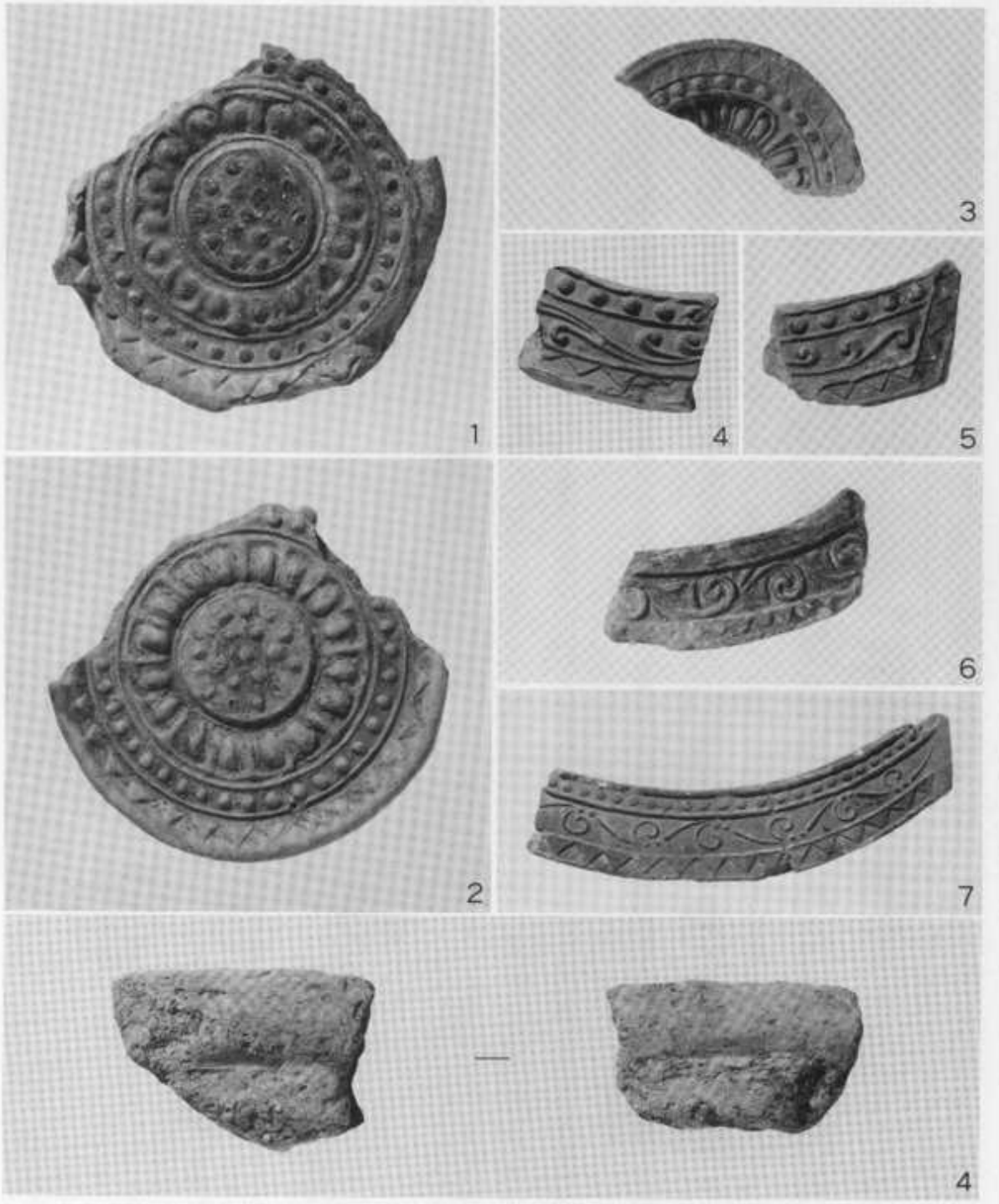




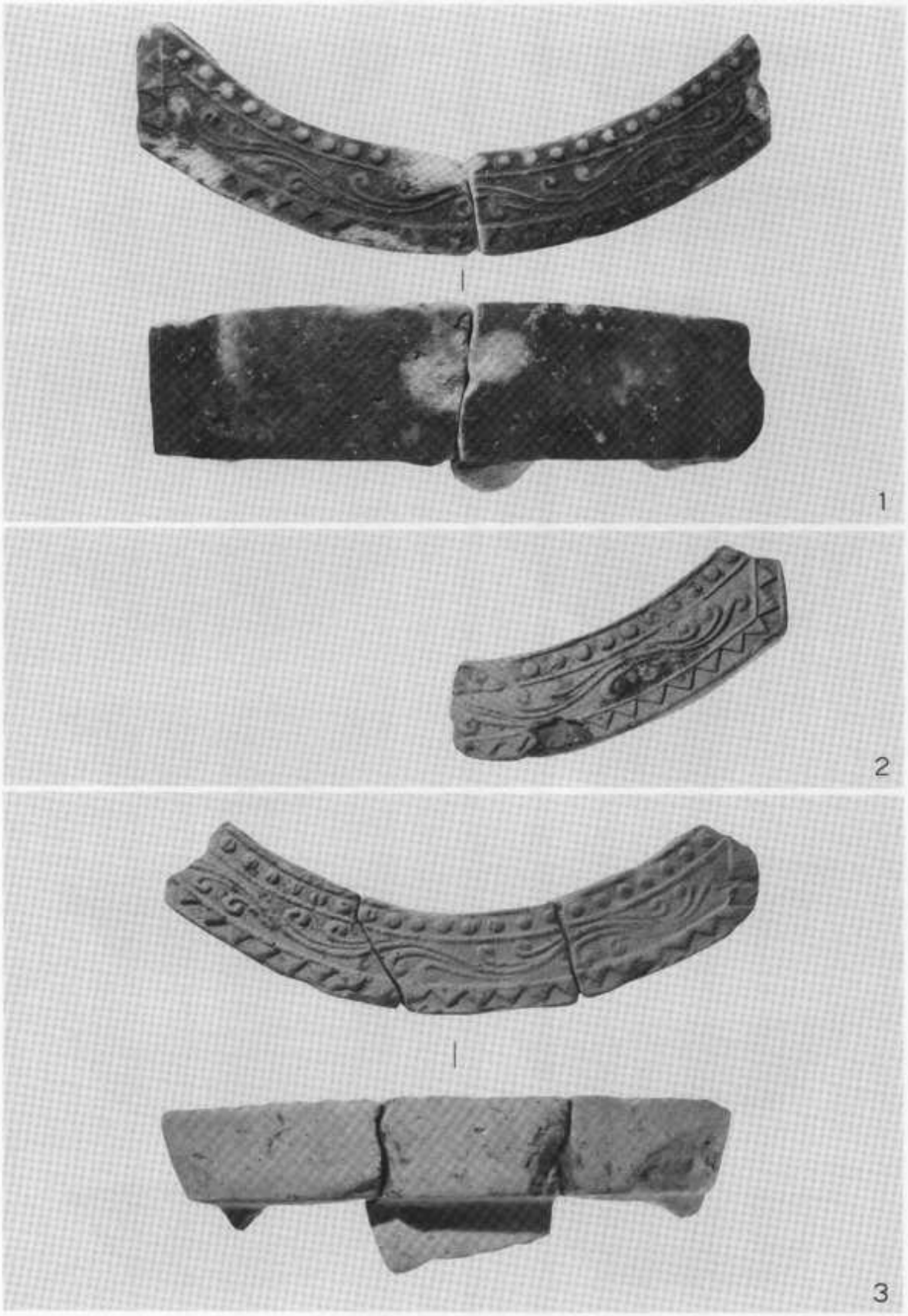
第154次調査　SD3300出土陶磁器



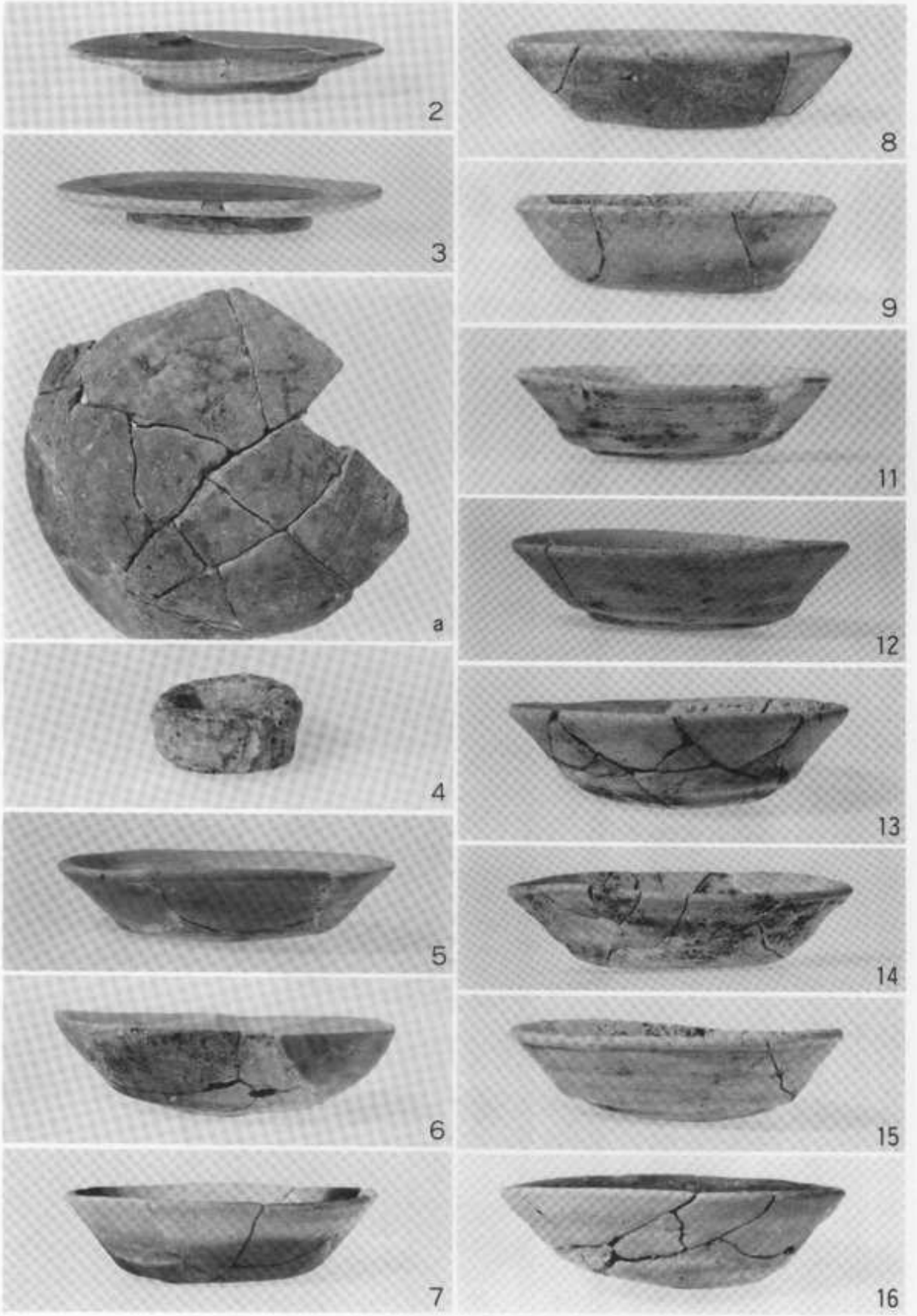
第154次調査　出土軒瓦、その他の遺構・層位出土遺物



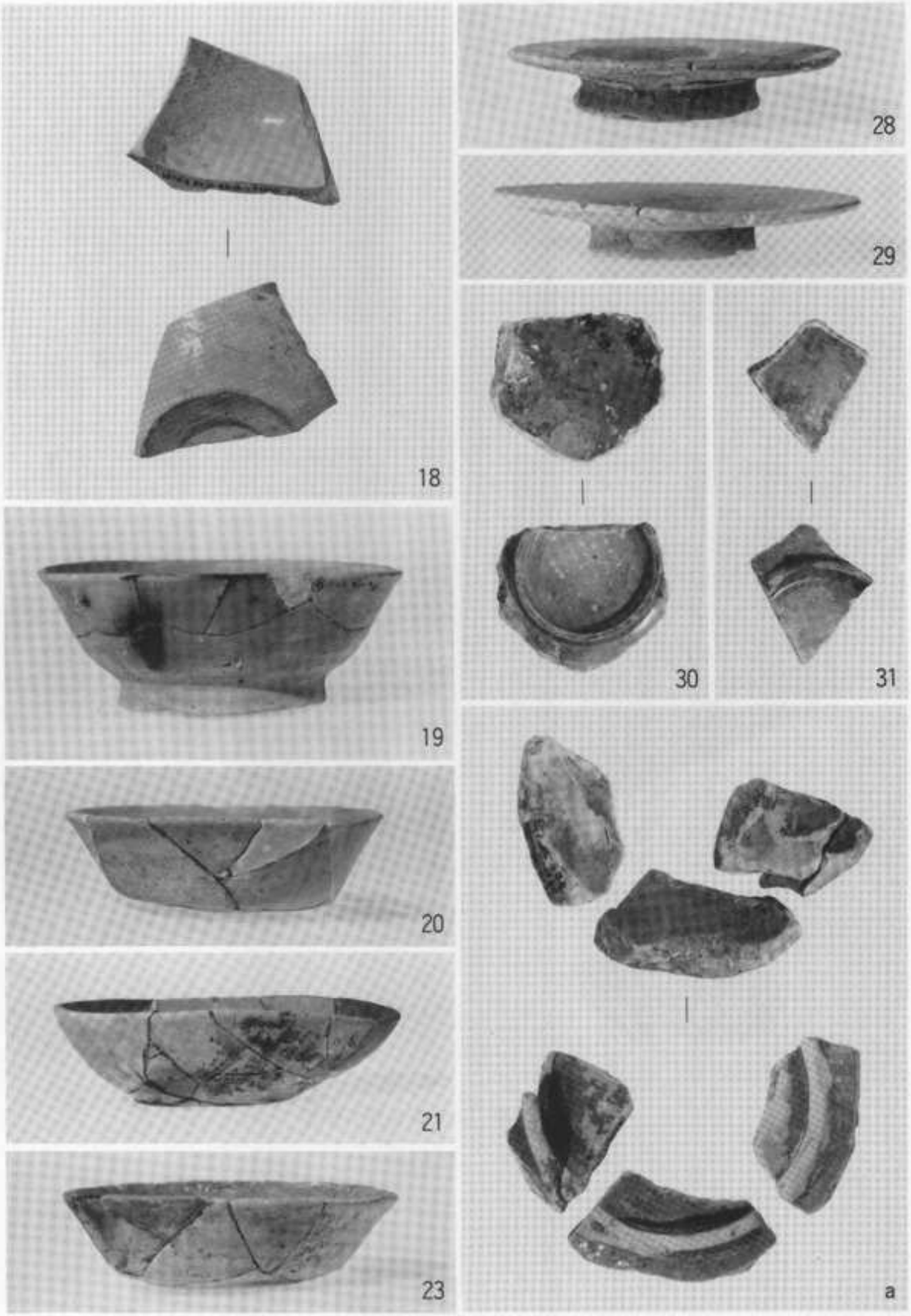
第156次調査　出土軒丸瓦・軒平瓦・鋳造関係遺物



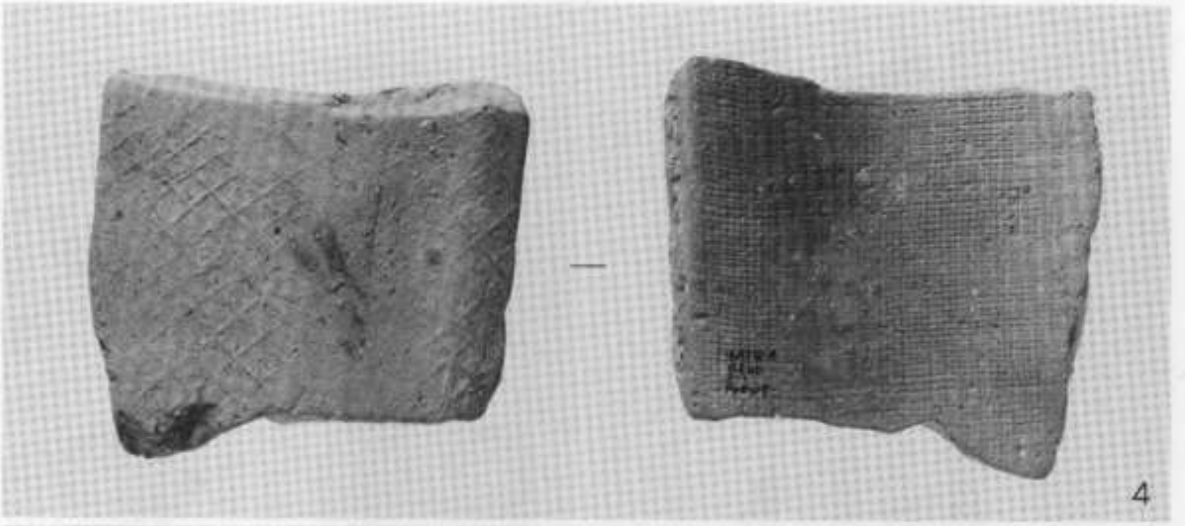
第156次調査　出土軒平瓦

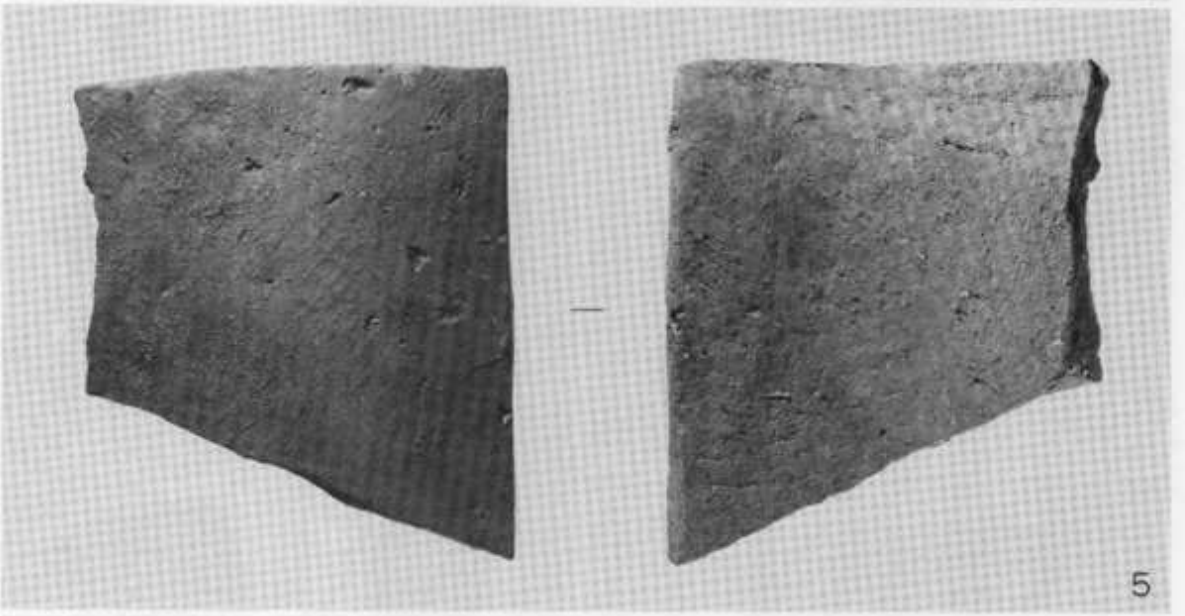


第157次調査　SD4118・4123出土土器・陶磁器

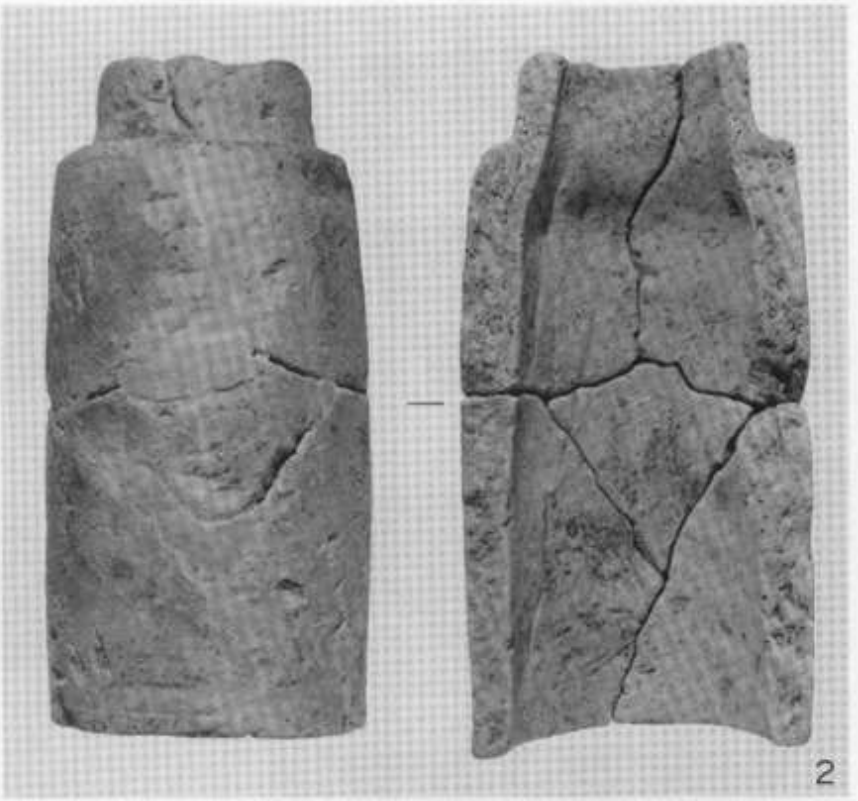


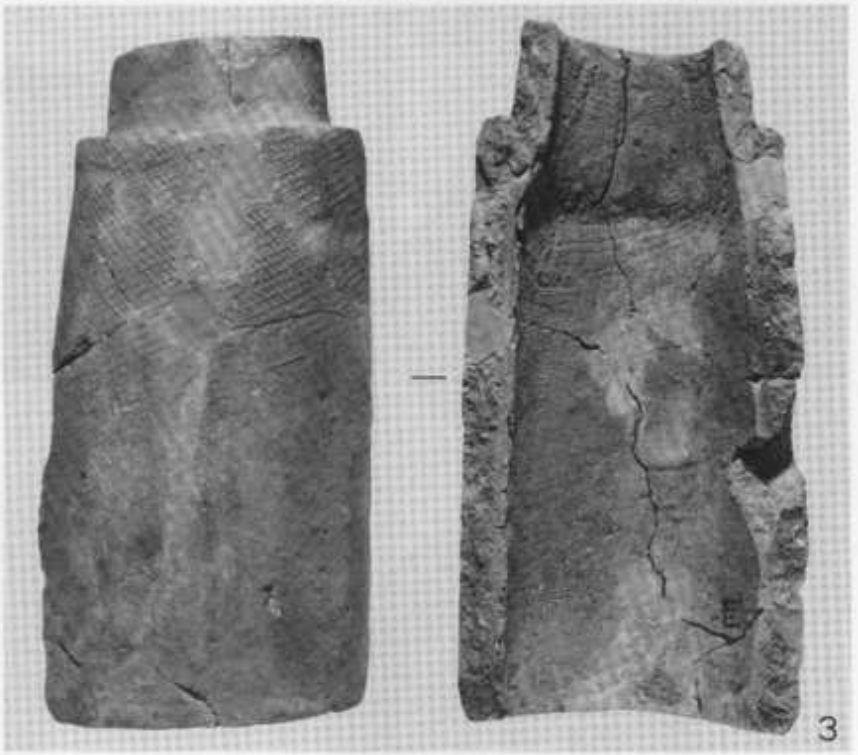
第157次調査　SK4129、SK4122、黄褐色土層出土土器・陶磁器



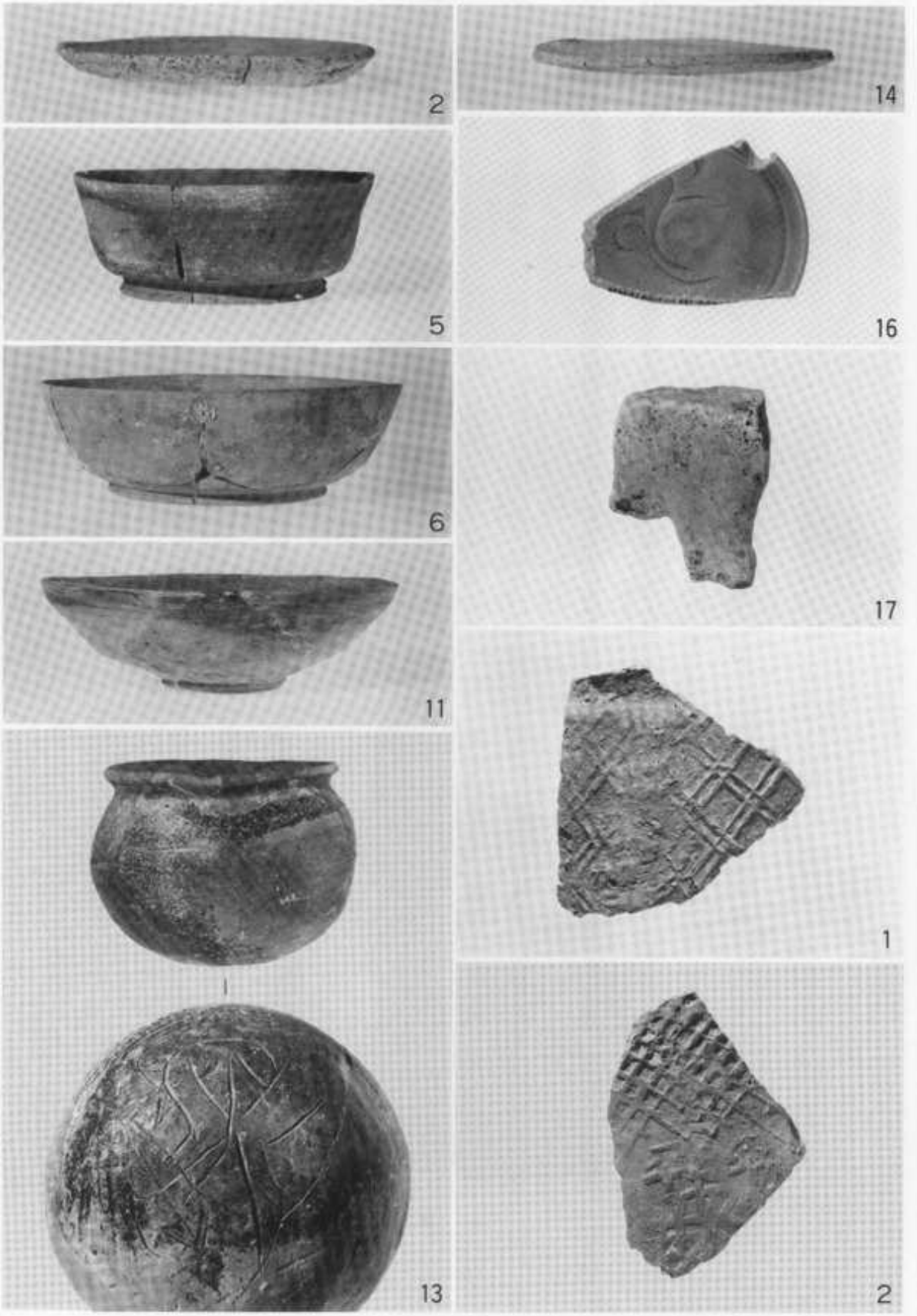


第157次調査　出土軒丸瓦・平瓦

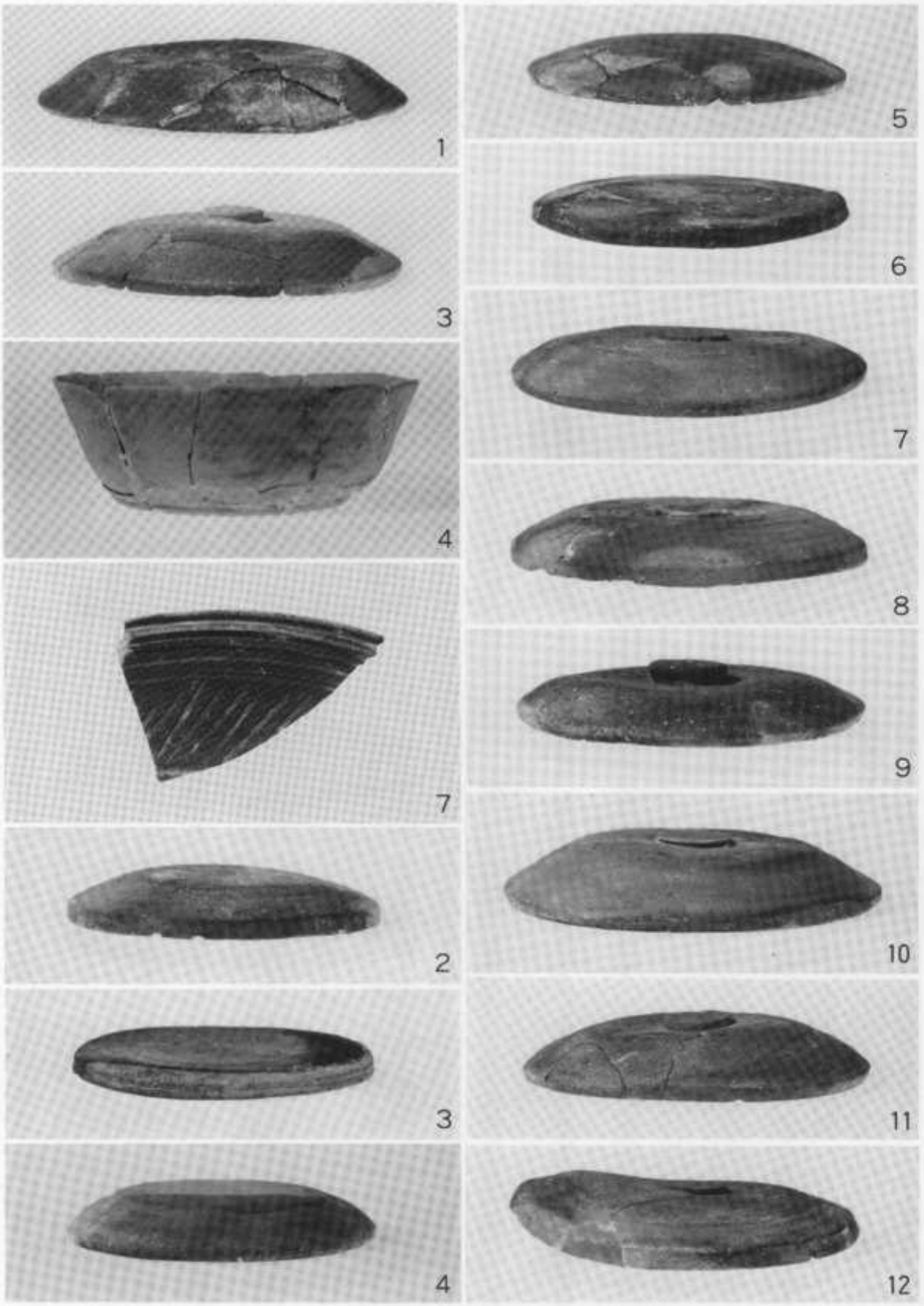




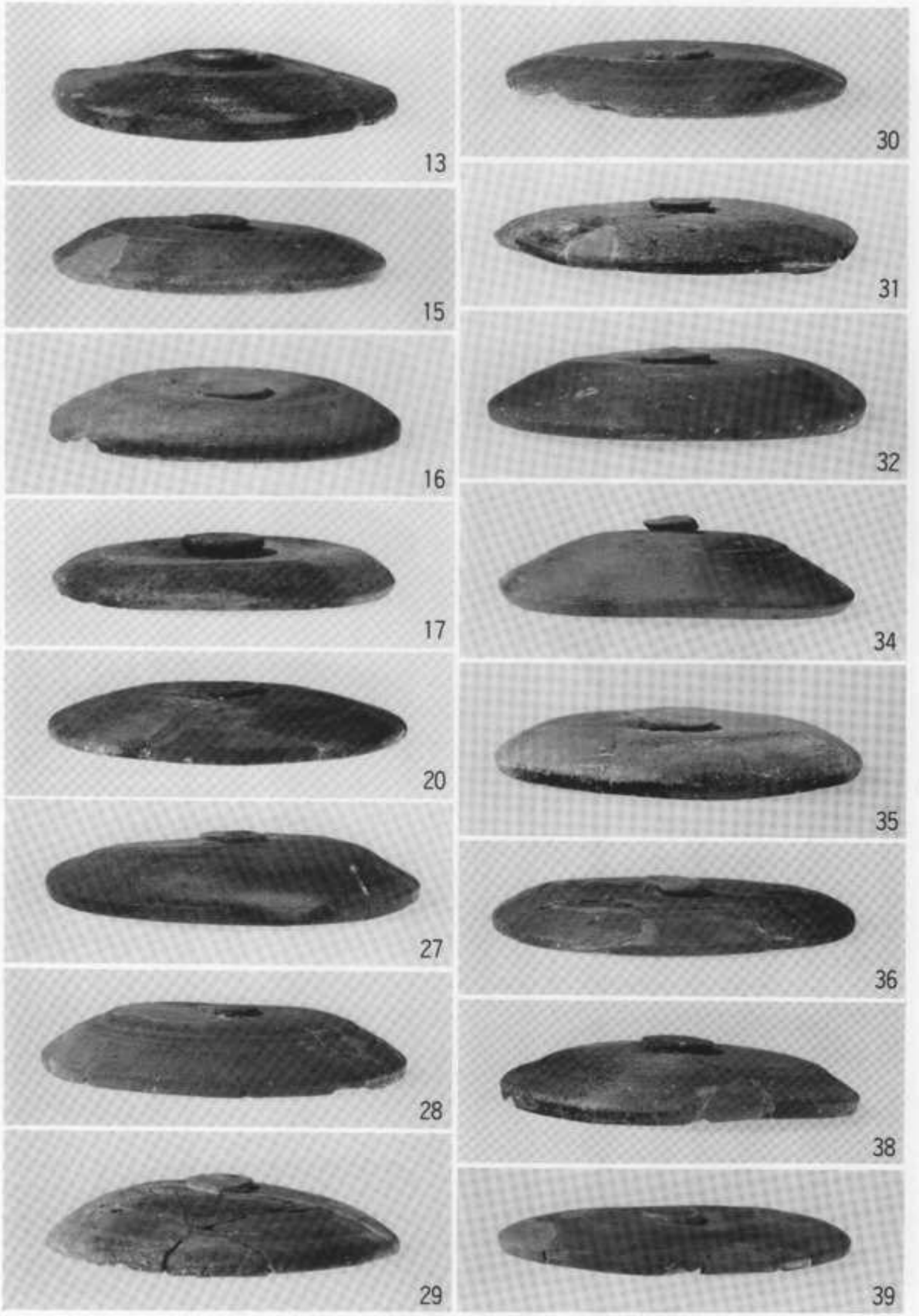
第157次調査　出土丸瓦



第159次調査　SK4132、SX4133・4140、黄茶色土層出土土器・陶磁器・文字瓦・石製品



第160次調査　SB4160、SK4142・4156出土土器



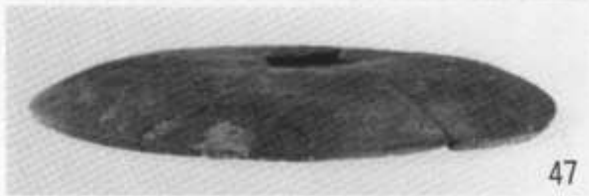
第160次調査　SK4141出土土器

41

43

45

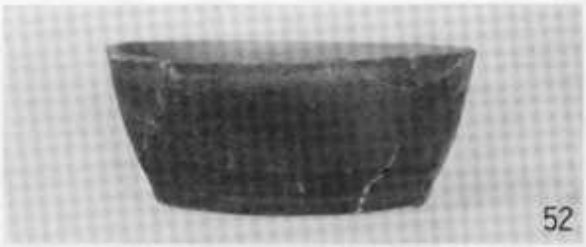
46


47

49

50

51


52

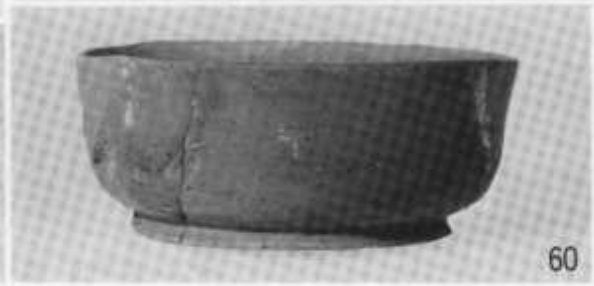
54

55

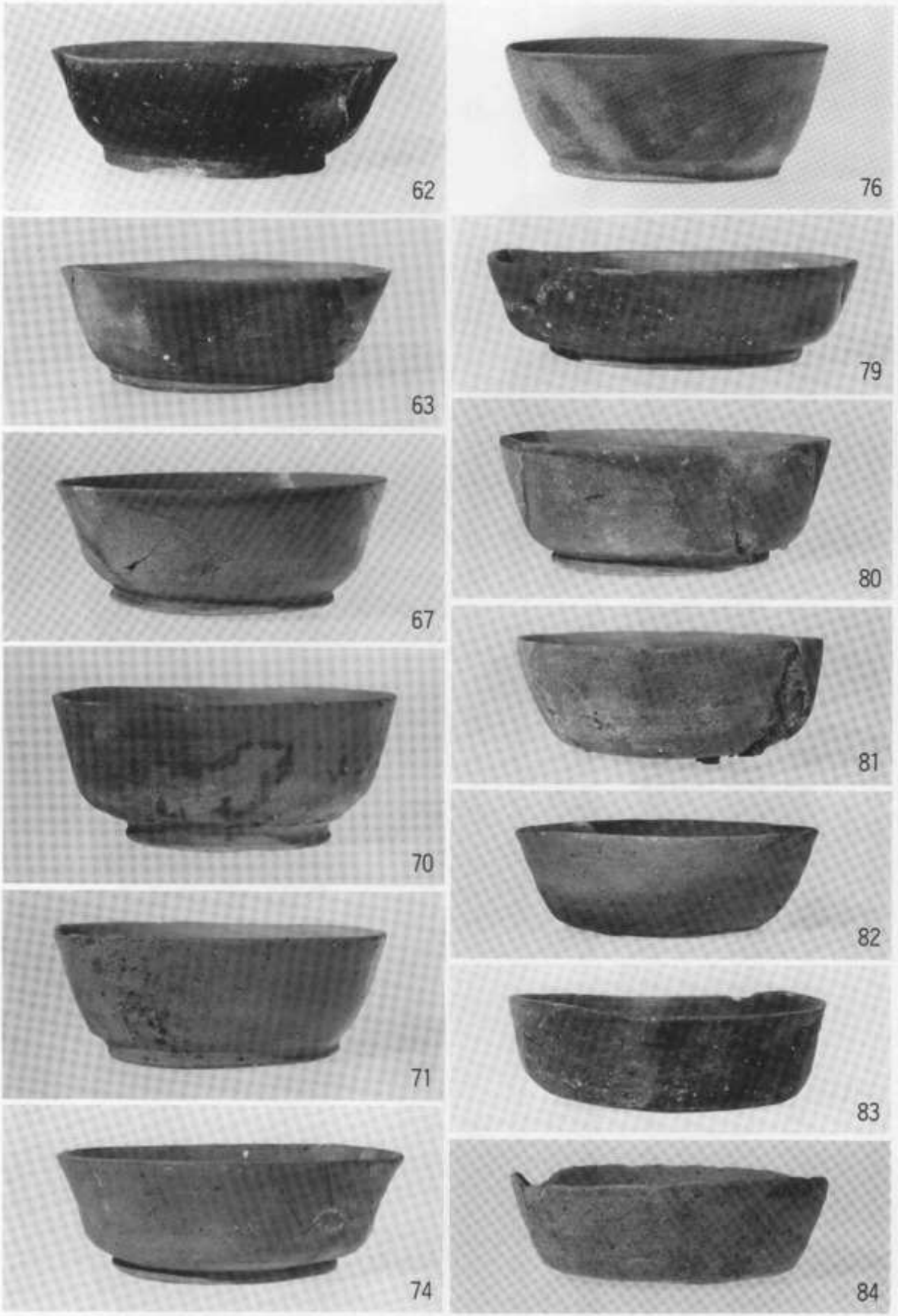
56

57

59


60

第160次調査　SK4141出土土器



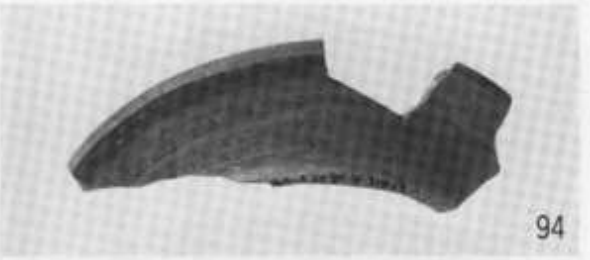
第160次調査　SK4141出土土器

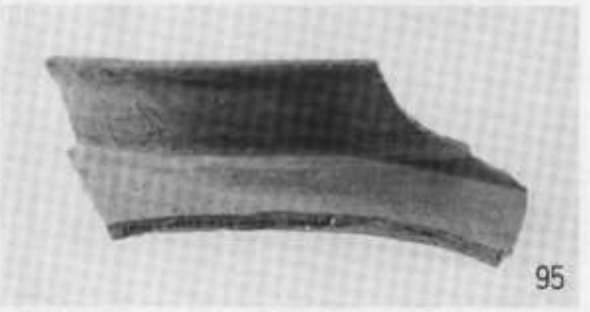
87

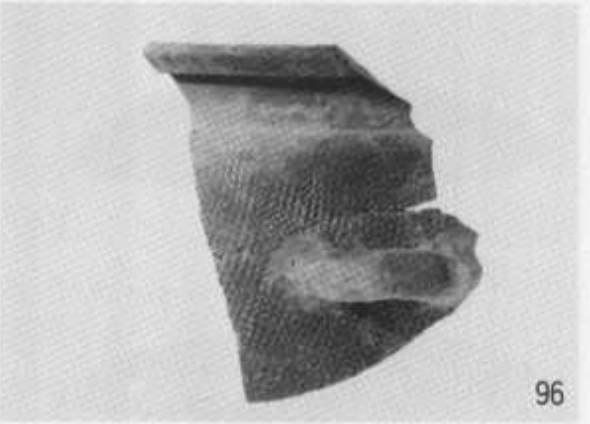
90

92

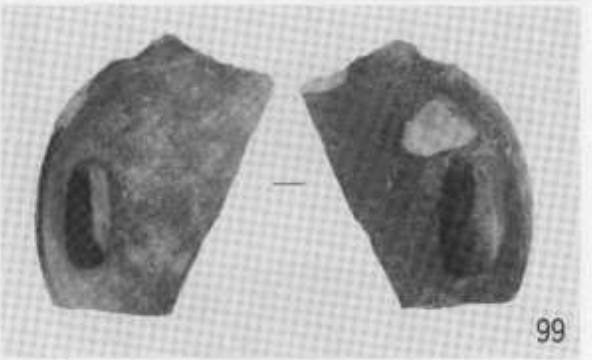
93


94

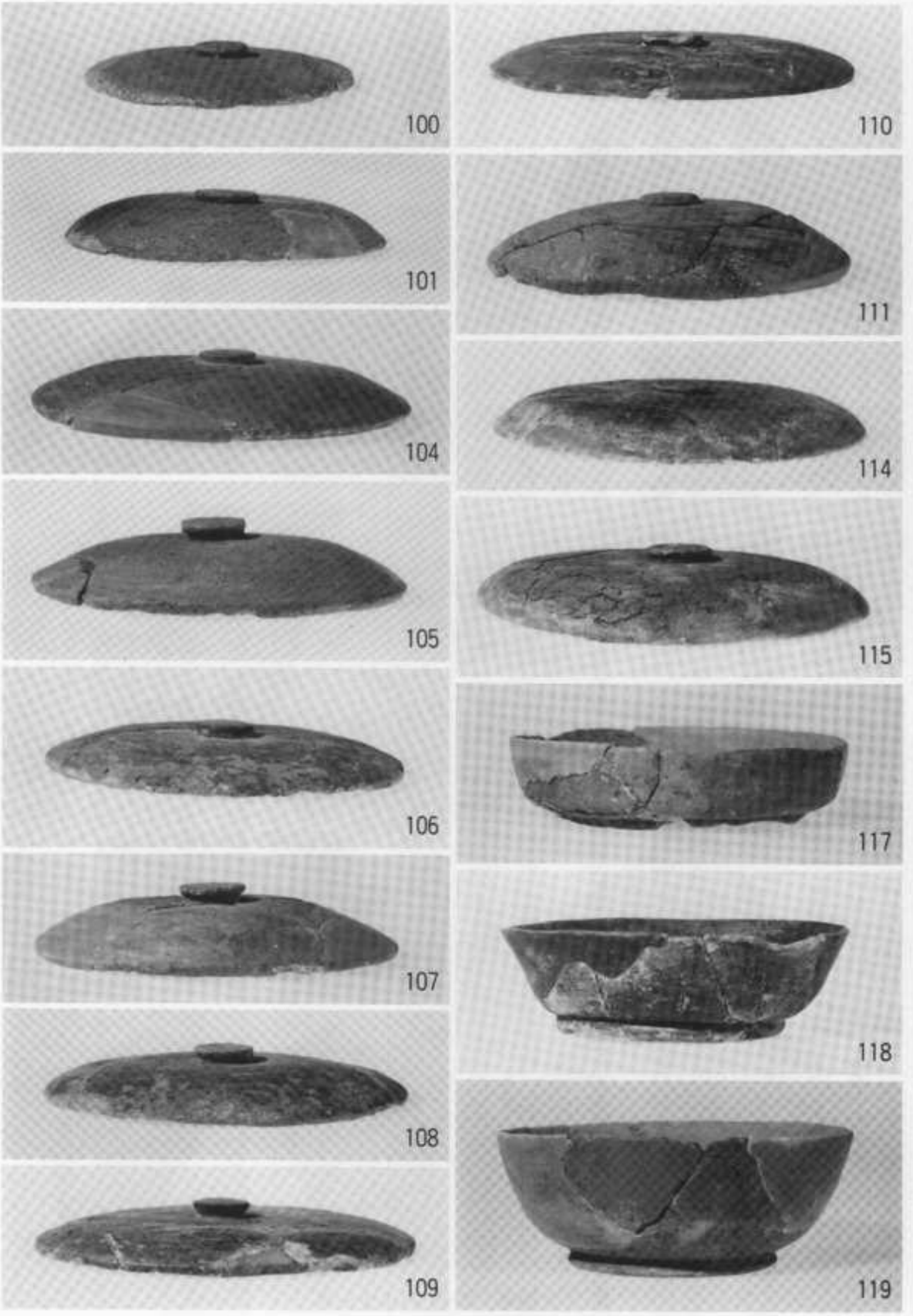

95


96

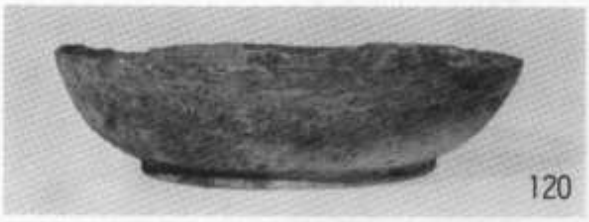
98

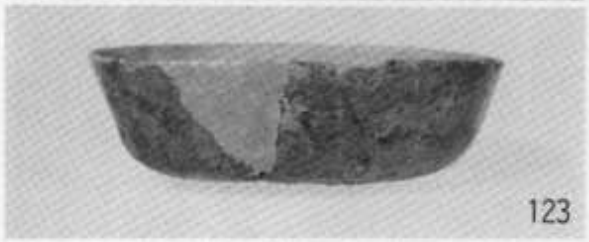

99

第160次調査　SK4141出土土器

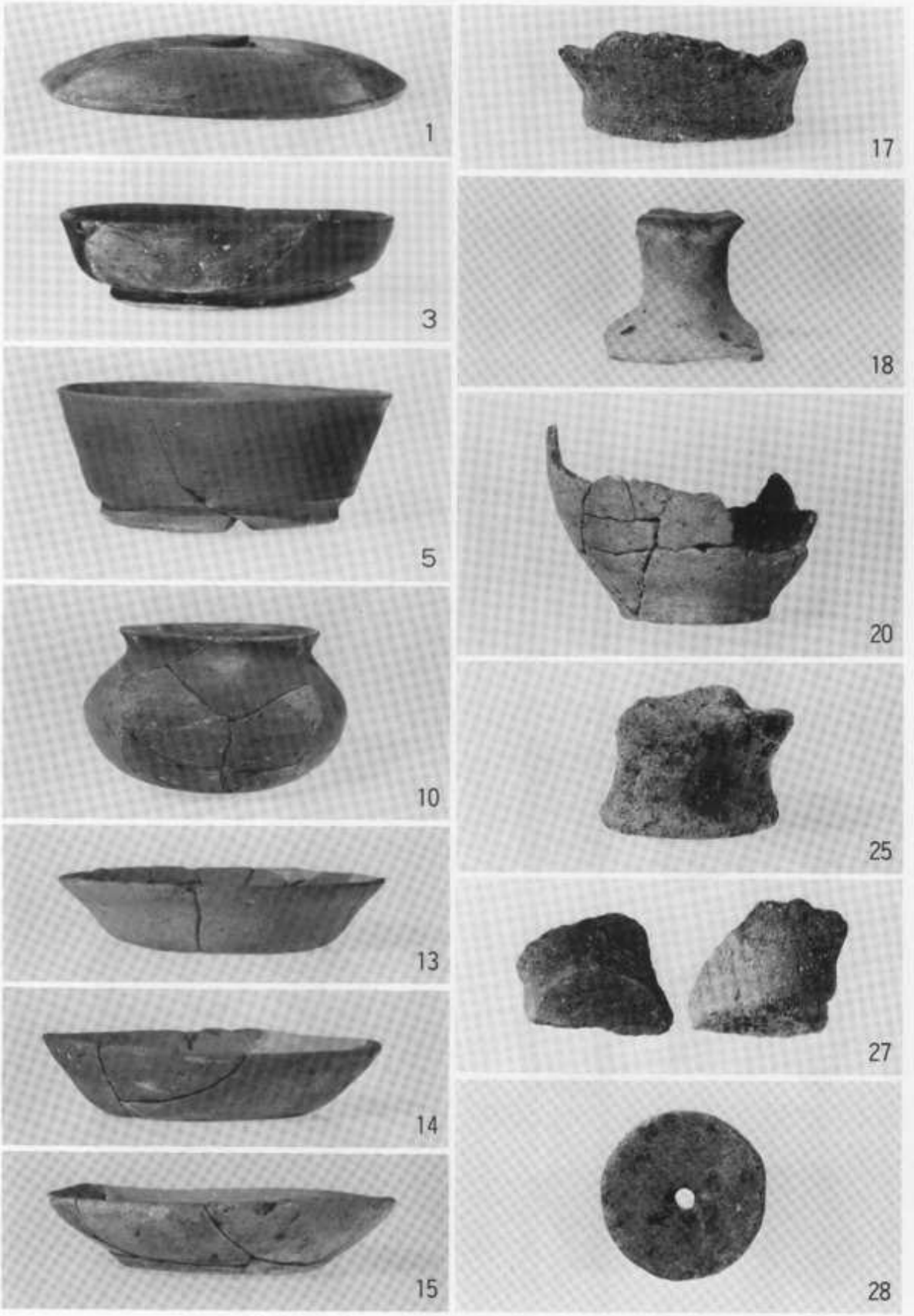


第160次調査　SK4141出土土器

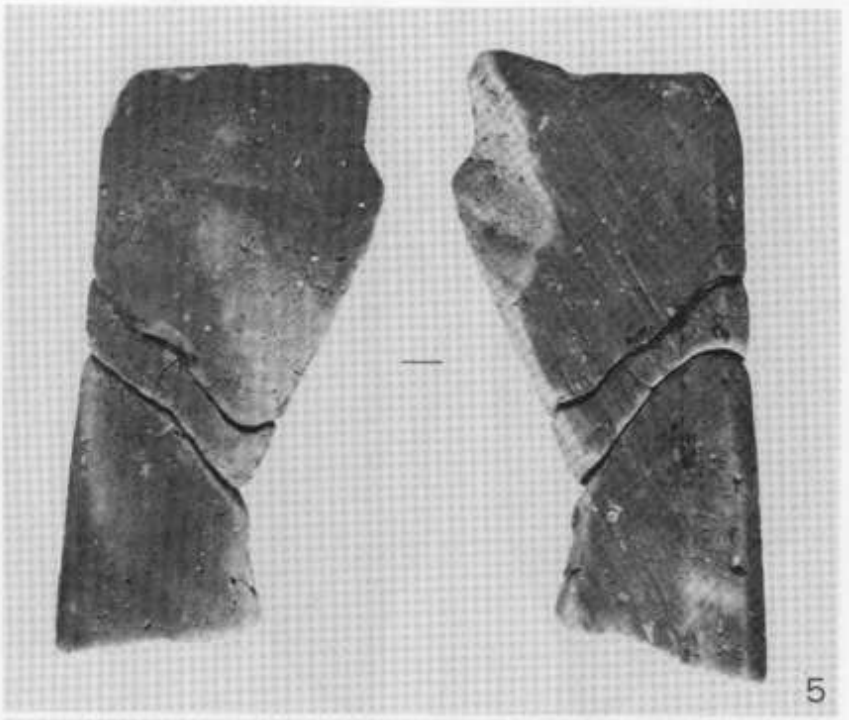


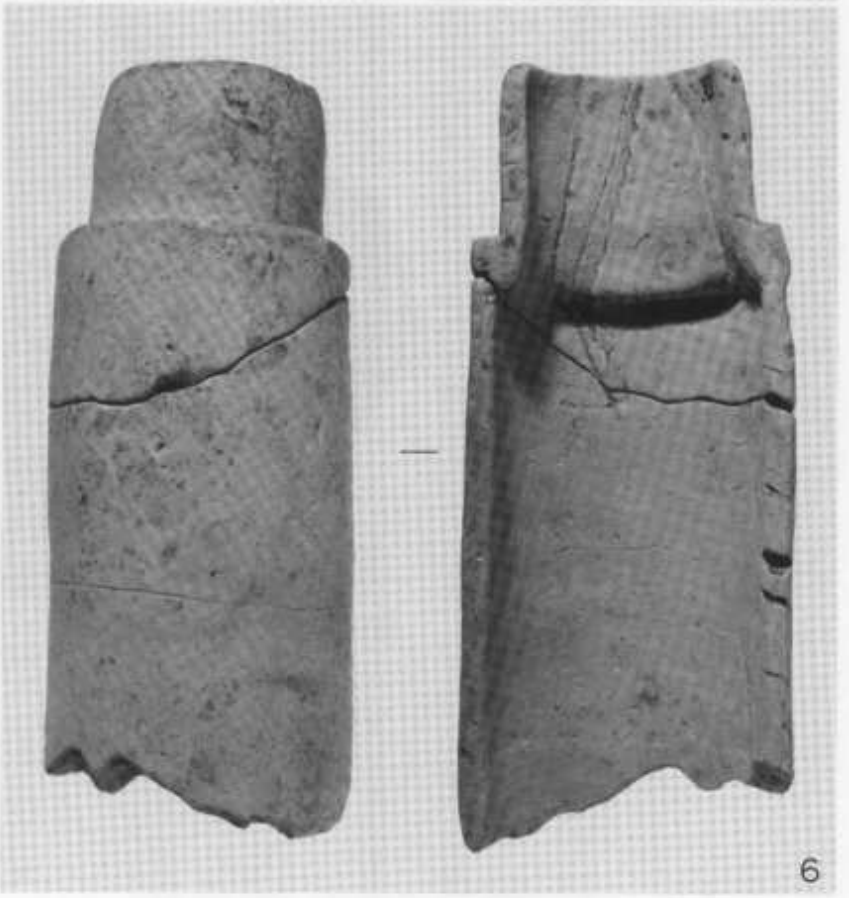


第160次調査　SK4141、SK4142出土土器

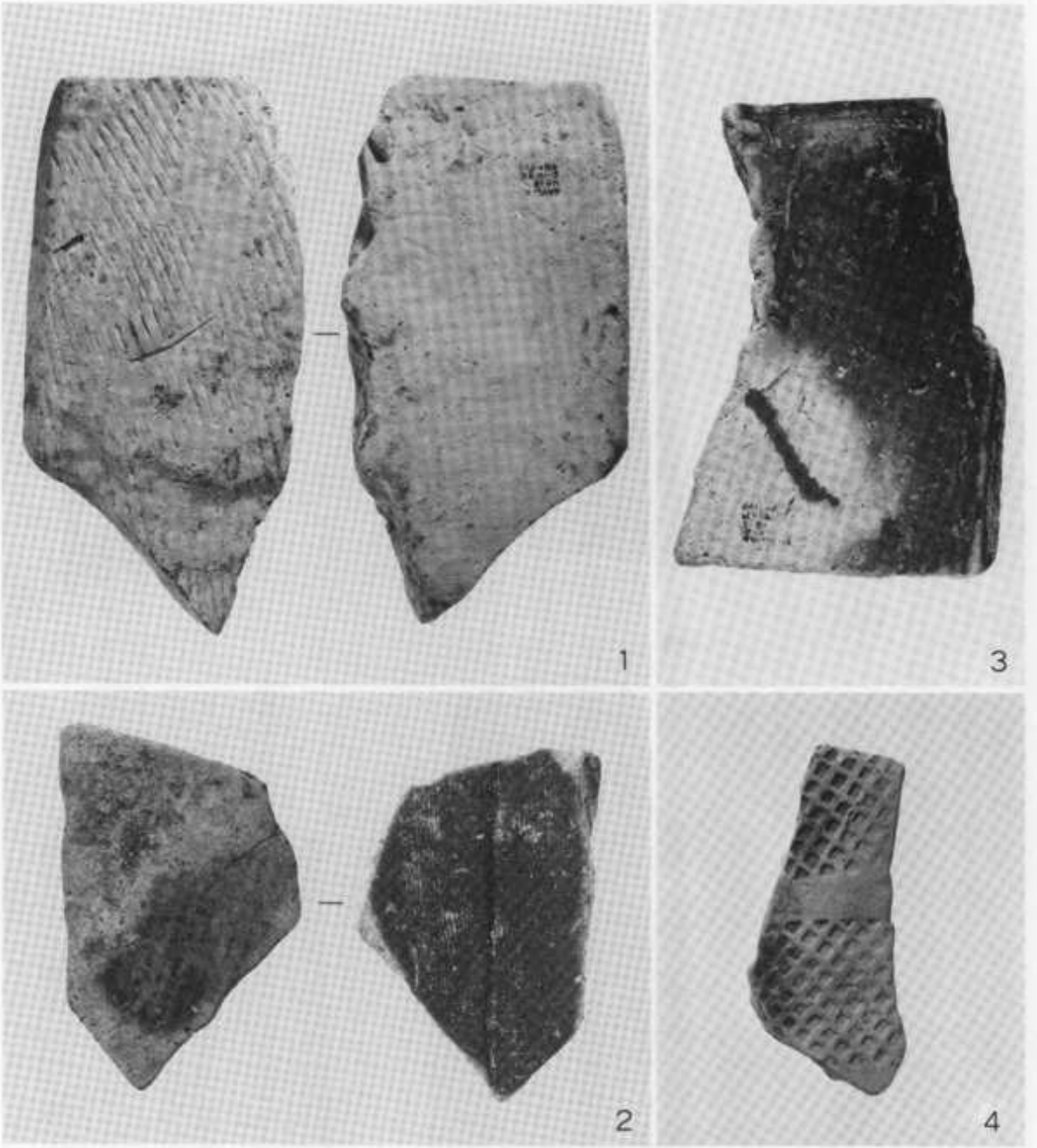


第160次調査　茶褐色土層出土土器・土製品

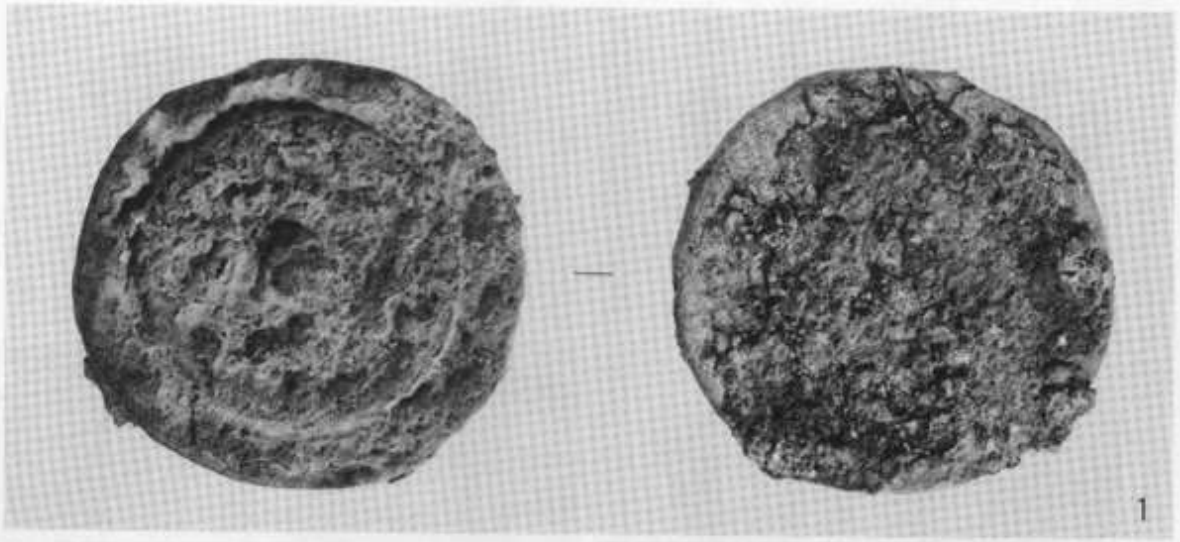


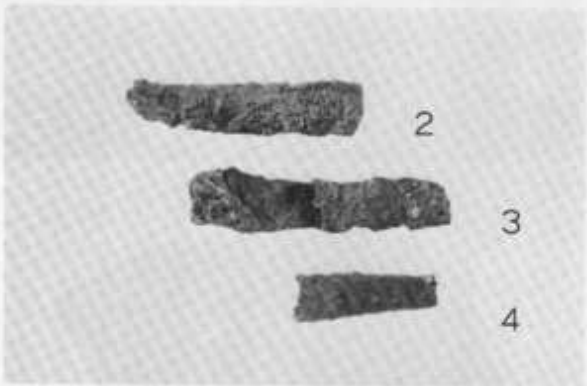


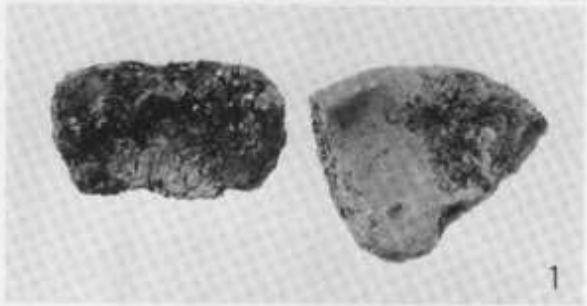
第160次調査　出土丸瓦

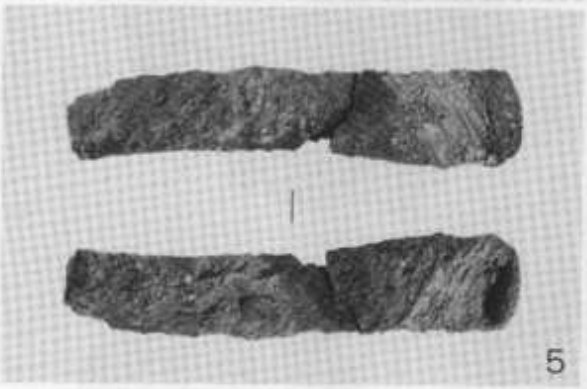


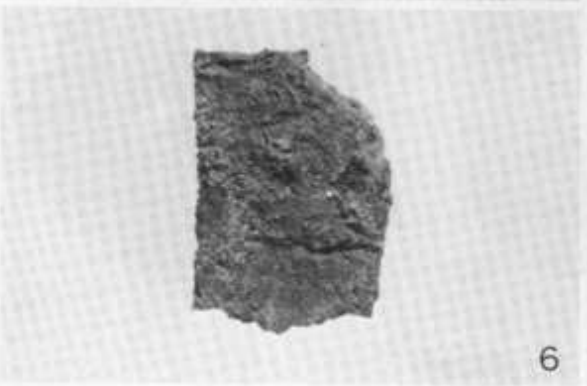
第160次調査　出土平瓦



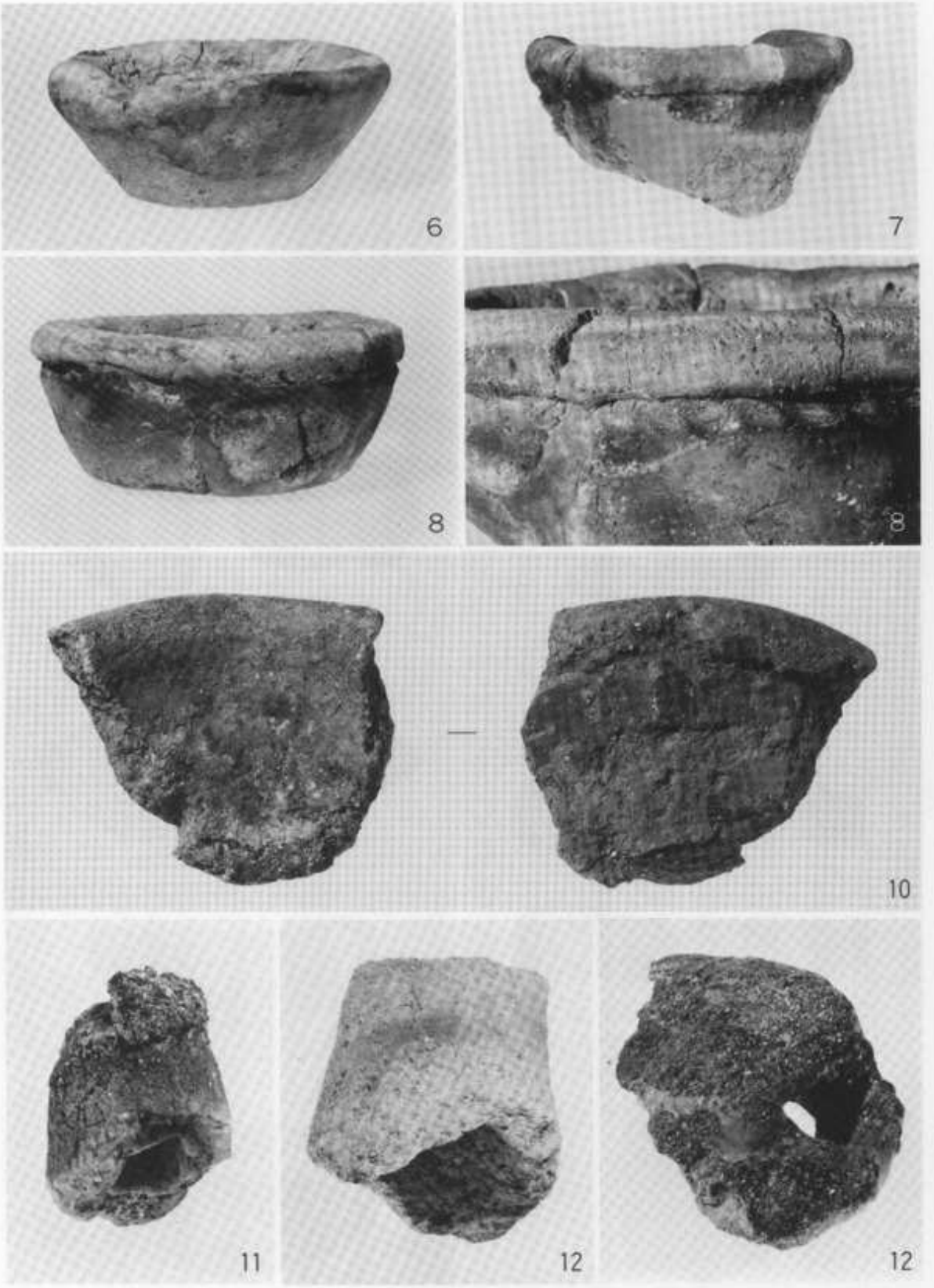








第160次調査　金属製品・鋳造関係遺物



第160次調査　鋳造関係遺物

ふりがな	だざいふしせき
書名	大宰府史跡
副書名	平成6年度　発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	栗原和彦、横田賢次郎、小田和利、吉村靖徳、小川泰樹
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒818－01　福岡県太宰府市石坂4丁目7番1号
発行年月日	1995年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
大宰府史跡第153次調査	太宰府市大字観世音寺字日吉260番地		33°30′34″	130°31′07″	931108～931228	270㎡	住宅建設
〃 第154次調査	〃 字堂畑175－1番地		33°30′38″	130°31′22″	940117～940125	22㎡	史跡観世音寺境内の現状変更
〃 第156次調査	〃 字不丁272－9番地		33°30′31″	130°31′02″	940124～940221	450㎡	住宅建設
〃 第157次調査	〃 字広丸355－10番地		33°30′32″	130°30′47″	940322～940419	337㎡	〃
〃 第159次調査	〃 字学業214番地		33°30′40″	130°31′15″	940513～940614	24㎡	史跡大宰府学校院跡の現状変更
〃 第160次調査	〃 字蔵司431－1番地		33°30′38″	130°30′49″	940621～941019	573㎡	住宅建設
〃 第162次調査	〃 字不丁248－2番地		33°30′32″	130°31′00″	941013～941019	8㎡	〃

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宰府史跡第153次調査	官衙	奈良時代	掘立柱建物 2棟 柵 1条 溝 2条 土壙 3条	須恵器 土師器 陶磁器	
		鎌倉時代	採土遺構	瓦	
〃 第154次調査		鎌倉時代	溝 1条 土壙 2基	土師器、瓦、石製品 陶磁器	
〃 第156次調査	官衙	奈良時代	鋳造遺構 1基	須恵器、瓦、鋳型	採土遺構は鎌倉時代と判明
		鎌倉時代	採土遺構		
〃 第157次調査	居宅跡	奈良時代	溝 3条 土壙 3基 暗渠 1条	土師器、緑釉陶器、陶磁器、瓦	
〃 第159次調査	官衙	奈良時代	建物跡 1棟	須恵器、緑釉陶器、陶磁器、瓦	
〃 第160次調査	工房	奈良時代	建物跡 5棟 土壙 3基 竪穴 1基 炉跡 1基	須恵器、土師器、瓦、銅鋺、鉄製品、坩堝、フイゴ羽口	大宰府組織の「匠司」に関連するか
〃 第162次調査					

大　宰　府　史　跡
平成6年度発掘調査概報
平成7年3月

発行　九州歴史資料館
太宰府市石坂4丁目7番1号

印刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8－34